

# イチョウ

## 原始高木と薬用植物-神話と文学と芸術-

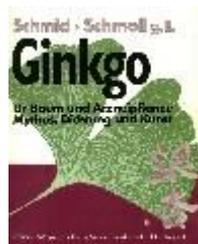
編集責任者

マリーア・シュミート Maria Schmid

ヘルガ・シュモル・ゲナント・アイゼンヴェルト博士 Dr. Helga Schmoll gen. Eisenwerth

カラー図版 24 点および図解 108 点収録

学術出版有限会社シュトゥットガルト、1994 年刊



## はしがき

広島に投下された原子爆弾にも堪えてよみがえった、まさに「生きている化石」と呼ぶにふさわしいイチョウを、各章ごとに異なる論者が、ゲーテの「一にして二」をライトモチーフに、薬学または植物学を基準としながら、2億8千万年前の古生代から現代にいたるまで、神話、文学、美術工芸など、さまざまな専門分野から文字どおり学際的に「イチョウの魅惑」を追究する点に本書の特色がある。さらに、108点にのぼるカラーの図版がいつもの魅力を添えている。

本の構成はおおよそ次のとおりである。第1章 「イチョウ」の魅惑（序論）、第2章 イチョウの古植物学、第3章 イチョウ—植物界での生き残り戦略—、第4章 イチョウの治癒力、第5章 日本のイチョウ、第6章 エンゲルベルト・ケンペル—イチョウ樹の発見者—、第7章 ゲーテと当時のイチョウ樹。第8章 「わたしは一にして<sup>ふたえ</sup>二重なのだ」—ゲーテの詩《ギンゴ ビローバ Gingo biloba》について—、第9章 図版、第10章 加藤温子にみるイチョウのモチーフについて：東西の統合、第11章 東アジアとヨーロッパの美術工芸にみるイチョウ、第12章 モダニズムの文学と造形芸術にみるイチョウ。

本書は„Ginkgo. Ur-Baum und Arzneipflanze — Mythos, Dichtung und Kunst “ (mit 24 Farbtafel und 108 Abbildungen), Hrsg.von Maria Schmid; Helga Schmoll gen. Eisenwrth, Wissenschaftliche Verlagsgesellschaft mbH, Stuttgart 1994.を底本とし、訳者による注釈ないし補足は、1) 脚注（ページ内文字列の直後）または2) 割注（本文中の〔 〕内）に表示した。なお、縮小画像（サムネイル）はクリックすれば、拡大画像がみられるように、リンクスイッチを作成してある。また周知のとおり、書籍の目次にあたる Acrobat の「しおり」から項目を選び、それらをクリックすれば、すばやく目的地へ移動することもできます。

2013年春 訳者

## 1 「イチョウ」の魅惑（序論）

マリーア・シュミート

### 1-1 イチョウの町イエーナ

本書は「イチョウ」をテーマにした展覧会の準備をととのえているさなかに産声をあげた。さまざまな学問分野と関心領域を内包する、イチョウの諸相に取り組む起爆剤となったのは、芸術である。その一つは、ミュンヘンの女性美術史家ヘルガ・シュモル・ゲナント・アイゼンヴェルト Helga Schmoll gen. Eisenwerth による、ユーゲントシュティール<sup>1</sup>に見いだされるイチョウのモチーフに関する研究であり、いま一つは、フュルトに住む日本女性の芸術家、加藤温子の象徴的なイチョウ画であった。

展覧会場としてイエーナを選んだとき、いくつかの理由から、当初の構想を拡大する計画が自然に思い浮かんだ。イエーナにおけるゲーテの自然科学の研究、1794年の植物園新設によせたゲーテの積極的な関与、ゲーテ時代に由来する宮廷堀端<sup>ほりばた</sup>の堂々たるイチョウ樹、ついにはゲーテの論文『植物変態論』（1790年作）さえも想起された。

この『植物変態論』に発表された考えが、1794年7月にイエーナで開かれた自然研究学会のあと、ゲーテとシラーとのあいだで交わされた対話の基礎をなしている。両詩人の友情で結ばれた当時の出会いから二百周年を迎え、《ギンゴ ビローバ》<sup>2</sup>（1815年作／1819年刊行）と題する詩のなかで簡潔に表現されている、「一にして二」なる意味は、2人の友情にも比喩的に当てはまるのである。

そのうえイエーナには、旧東ドイツ銀杏愛好家の最長老エラスムス・フルチュ Erasmus Hultsch が数10年前に建て、テーマに即応し有効に活用されている、イチョウ文化史のための文書館がある。フルチュは、1981年にドイツ民主共和国（旧東独）で自然・環境協会の作業班として文化同盟<sup>3</sup>に統合された、「イチョウ友の会」の共同設立者のひとりである。イチョウ友の会は、現存樹木の把握と育成および新たなイチョウの栽培に取り組んできた。ゲーテ自然博物館を根城にしてすでに1970年代以降ゲーテとのかかわりからイチョウをテーマにした催し物や研究活動が繰り広げられていた、ヴァイマルで1984年に第一回作業集

<sup>1</sup> Jugendstil：ユーゲントシュティール（青春様式）。1900年前後ヨーロッパで流行した工芸・建築を中心にした芸術様式で、特に植物の形態に基づく装飾が特徴。

<sup>2</sup> ギンゴ ビローバ(Gingo Biloba)―正しくはギンコ ビローバ(Ginkgo biloba)―は、現生のイチョウ種。

<sup>3</sup> 旧東独の代表的大衆組織の一つ。

会が開催された。1986年のイエーナ集会のあと、締めくくりとして1989年、イチョウ並木の都市ドレスデンに集うことになった。19世紀の終わりごろ、ドレスデンにはすでにかなり多くのイチョウが街路樹として植えられていたからである。

ロマンティーク<sup>4</sup>記念館や美術コレクションが散在するイエーナにおける「ロマンティークハウス」さながらの特性が、要するに初期ロマン派の精神にのっとり、人間と自然、芸術と科学を引き合わせることになり、多様な世界を融和的な象徴のもとで結び合わせる、学際的な展示構想を思いつかせたのである。

私たちはどうすれば「イチョウの魅惑」に近づけるかを問題にした。広範囲にわたる学術的な研究と認識にもかかわらず、依然としてなにか神秘的なものが「イチョウ」をつんでいると思われるからである。

## 1-2 驚異の樹木—神話と現実

中国医学は、イチョウの種子から抽出したエキスとかイチョウの葉からつくった膏薬<sup>こうやく</sup>やお茶など、多種多様な適用法を数千年前から知っている。しかし、イチョウが薬用植物として全世界に凱旋<sup>がいせん</sup>行進をはじめたのは、やっと20世紀の60年代にはいつてからのことである。その後、さまざまなイチョウの調合薬品が西洋諸国でも広く治療に用いられ、これは効くかもしれないぞ、と多くの人びとがイチョウ葉に期待をつないでいる。イチョウ樹のたぐいまれな生命力だけでも信頼を呼び起こすからである。この「生きている化石」は、恐竜ティノサウルスが生息していた時代に早くも私たちの惑星に生育し、氷河時代には生きのびるためのすみかを極東に見いだした。極東各地で数千年の時がたつうちに、人類はイチョウの特別な性質を知るようになったのである。

たとえば、大火のあとにもふたたび芽吹いた、イチョウの木々が存在すること。それどころか、幹にたくわえていた水をまき散らし、火を防いだとさえも報じられている。このような報告は科学的にあとづけられないとしても、最近のイチョウの奇跡はまぎれもなく多数の目撃者によって全世界に認められている。すなわち、広島に原子爆弾が投下された1年後には、壊滅的な炎上にもかかわらず、イチョウの木々がふたたびよみがえった、という知らせが現地から届いているのである。

荒涼とした廢墟<sup>はいきよ</sup>のなかにあつて、まさしく破局の影を背負った人びとの心にも、新たな希望が芽ばえたのであった。

---

<sup>4</sup> Romantiker : ロマン派の芸術家。

加藤<sup>あつこ</sup>温子、加藤邦彦夫妻は、日本全国の境内や城中に散在する太古の高木<sup>5</sup>ならびに広島  
のイチョウをたずねて、古木の神話や故事の記録と写真を携えてこられた。東京でも諸国  
の大都市でも、イチョウは並外れた適応力と抵抗力によって大気汚染にも堪えることから、  
いつしか理想的な街路樹としての実を示すようになっていく。もちろん、現代の環境問題  
がこれで万事解決されるわけではないが、この奇跡の高木が、過去に別の木々が枯死して  
いった並木道のすき間を埋めるという形で、ここの住民によってうまく植樹できるものか  
どうか、私たちはよく考えてみなければならない。

### 1-3 愛しあう人たちの葉—象徴と詩文学

ヨーロッパでも化石種(fossil)は検出されるが、極東原産のをはなつイチョウは、ここでは  
あくまでも外来種である。ヨーロッパの公園や庭園で見かける、孤高のたたずまいは、と  
りわけ秋、イチョウが黄金色の豪華たる葉をまとい、あらゆる隣木からきわだって見える  
とき、散策者たちに感嘆の念を呼び起こさずにはいない。そうした折に、ふと目をひく落  
ち葉をしゃがんで拾いたくなり、ちょうど持ち歩いていた手紙や手帳の紙面のあいだに、  
落ち葉をお守りのようにはさむものである。イチョウ葉が「しおり」として有害生物の撃  
退に利用されていたという事実は、拾う瞬間にはさほど興味をひかない。おそらく落ち葉  
を拾う人たちにはゲーテの崇拜者が多いのではないか。マリアンネ・ヴィレマーにささげ  
られた、かの有名な詩がなんといってもイチョウ葉に詩的光輝を与えているのだから。イ  
チョウ葉はつまり愛する人たちの一体化、あるいは友情、あるいは個人生活と民族間の平  
和な共生への希望を<sup>ひゆ</sup>比喩的に象徴しているのである。

当時はまだ若木しか知りえなかった、ゲーテの愛着が、なканずくイチョウ葉の象徴ゆ  
たかな形態に向けられたのに対し、中国や日本で古来より敬愛されているのは、太古の高  
木そのものであった。

イチョウの<sup>6</sup>は、東洋の陰と陽、男性原理と女性原理、最大と最小、喜びと悲しみ、生と  
死の弁証法的象徴に対応している。

太古の老木は保護されている。幾世紀にもわたって人びとはそれらの老木に慰めや助言  
や助けを求めてきた。

葉形にちなんだ庶民の用語—「鴨脚」—が、あまりに俗悪すぎると思われるようにな  
ると、東洋人はイチョウのことを「銀・」と呼び、また、象耳樹、扁桃果、有情卵、ある

<sup>5</sup> Baum : 高木、<sup>きようぼく</sup>喬木ともいい、低木(<sup>かんぼく</sup>灌木)以外の木本を指す。ふつう人間の背丈より高いものをいうが、  
喬木という場合は、語感上、高さ10mを超える木を意味することが多い。

<sup>6</sup> Zueihäusigkeit : 同種の植物で、雌花だけを生ずる雌株と雄花だけを生ずる雄株との区別があるもの。

いは種子をつける時期が遅いことを当てこすり、「公孫樹」<sup>7</sup>とも名づけた。

ドイツ語の“Ginkgo”（ギンコ）という名称は、17世紀の日本で一般に用いられていた呼称“ginkyo”（銀杏）の不完全な書き換えに基づいている。日本語には文法上の性が存在せず、個々のイチョウは雌か雄かのいずれかであるから、ドイツ語では女性定冠詞の“die”または男性定冠詞の“der”を Ginkgo に付すことが許されるはずである。ところが、“Ginkgo”は、種の学名“biloba”（ビローバ）の語尾からも見分けられるように<sup>8</sup>、近世ラテン語の専門用語では女性名詞になっている（したがって、“der” Ginkgo biloba は文法的に誤りである）。イチョウの名称にまつわる混乱は、ゲーテが自作の詩を出版するとき（1819年）に、原因不明の理由から“Gingo”（ギンゴ）という綴り方を選んだために、いちだんと増幅している。

#### 1-4 ユーгентシュティールと現代芸術にみるイチョウのモチーフ

イギリスの古植物学者 A.C.シーワード Seward がいみじくも名づけたように、「はかりしれない過去の秘密をとどめる」、「宇宙樹」のために、ここに一卷の書をささげたい。

イチョウにまつわる現象の種々相が多く、寄稿論文で話題になる。まず、芸術のモチーフである「イチョウ」が比較的大きい枠組みのなかで紹介される。芸術的美学的モチーフとしてのイチョウ葉とともに、現代芸術に広いスペースがさかれるであろう。

調査によって、イチョウの木も葉も、大衆向きの、よく使われる植物モチーフではないことが判明した。歴史的な日本の工芸品には、たしかにイチョウ葉がみられるが、それをひととき頻繁にとりあげるようになったのは、ようやく現代の、それも観光産業であると思われる。

カールスルーエの W.シュヴァーベ製薬によって 80 年代に企画準備された、コンクールと美術展覧会をのぞけば、「イチョウ」のテーマは現代芸術でもおいそれとは見当たらない。

芸術的美学的モチーフとしてのイチョウ葉は、むしろヨーロッパのユーгентシュティールのなかを探し求めるほうが実り多い。優雅な大きい線の葉形は、斬新な様式感覚に迎えられ、幾人かの芸術家がそれを独自の形式レパートリーにとりこんでいる。

イチョウは、薬剤、植林、環境保護、さらにはゲーテの詩にならった工芸装飾などによって、ずいぶんと有名になったが、まだ今日でもほかの在来種の植物に認められるような大衆的人気はない。

「イチョウ」のテーマに取り組んだ経験があるかと質問したところ、これを肯定した芸術家はごく少数であったが、私たちがざっくばらんに芸術上の発言を挑発する、さまざまな視点を報告すると、しだいに興味をつのらせていった。

---

<sup>7</sup> 老木にならないと実らず、孫の代に実る樹という意味。

<sup>8</sup> 語尾-a は女性形。

今回とりあげた作品では、イチョウ葉は表現の担い手としてもはや単一の役割を演じていない。むしろ種々さまざまなジャンルの芸術家たちは、それぞれにまったく異なった構想上のイメージをイチョウ葉の概念にも結びつけている。象徴、形式と内容の諸問題、現象との個人的なかかわりなどが重要な要素である。さらに、愛と友情を暗示する昔ながらの象徴も、希望の木や希望のボートとしてのイチョウ、あるいはイチョウとの<sup>めいそう</sup>瞑想的なかかわりと同様に、不可欠なものである。

イチョウは今日ではとりわけ警告のしるしでもある。この高木は文化的な課題であることが明らかになり、人びとが<sup>めいそう</sup>瞑想する手助けになる一いや、もしかすれば行動するための手助けにもなる…

## 1-5 謝辞

— 展覧会と目録本の温かい援助に私たちは感謝します —

チューリンゲン州科学・芸術省、エアフルト、  
ならびにイエーナ市に

リヒトヴェーア薬品有限会社（ベルリン）  
インテルサン有限会社（エトゥリンゲン）  
ドクター・ヴィルマル・シュヴァーベ製薬有限合資会社（カールスルーエ）  
ヘルヴァート製薬有限合資会社（ゾーベルンハイム）  
コダック株式会社（シュトゥットガルト）に

私たちは次の貸出主に感謝します：

ゲーテ博物館アントン＝カタリーナ＝キッペンベルク財団（デュッセルドルフ）  
ドレーズデン国立民族博物館、ヴァイマル市立博物館内日本館  
フリードリヒ・シラー大学（イエーナ）植物標本管理者  
ミュンヘン市立博物館

作品を自由に使わせていただいた、すべての個人貸出主と芸術家ならびにすべてのイチョウ愛好家に研究資料、情報および助言に対して私たちは謝辞を述べたい。

さらに、著者と写真家—特にハンネ・マーガアシュテット氏（リーメルリング）およびゲールハルト・ヴァイス氏（ミュンヘン）—ならびに写真を用だてていただいた多数の博物館に感謝します。

シュトゥットガルト学術出版有限会社に対し、本書の出版を引き受け、写真帳の特性を付与していただくことに、私たちはお礼を申し述べたい。

イエーナ市立博物館  
マリーア・シュミート  
ロマンティカーハウス

## 2 イチョウの古植物学

ルードルフ・ダーバ

### 2-1 種類が多いことは多彩な発展の証拠

化石化したイチョウ葉は 1828 年アドルフ・ブロンニャール<sup>9</sup>によって初めて写真され記載されたが、当の化石はマンスフェルト市の含銅粘板岩から発掘されたものである。ところが奇妙なことに、この著名なフランスの研究者は葉の化石がイチョウ科に属することに気づかなかつた。含銅粘板岩に軟らかく保存されていたために、ブロンニャールはすべての発掘品をの化石と解釈したのである。スピッツベルゲン<sup>10</sup>でジュラ紀<sup>11</sup>の化石植物が調査された 1876 年になってようやく、「イチョウ」のがジュラ紀に誕生していたことがわかり、いまではブロンニャールの種名<sup>12</sup>も原イチョウ属スフェノバイエラ (Sphenobaiera) にふくめられている。その後さらに化石になったイチョウ類が多数知られるようになった。たとえば、バイエラ属(Baiera) 100 種、イチョウ属(Ginkgo) 80 種、ギンゴイトス属(Ginkgoites) 67 種、スフェノバイエラ属(Sphenobaiera)48 種である。イチョウの歴史は約 2 億 8 千万年前にはじまり、イチョウ樹をすべての鑑賞者にとってきわめてエキゾチックで魅力あふれるものにしていく要因は、はるかな太古にさかのぼるなにかが、イチョウの葉や、本来はまるきり「花序」<sup>13</sup>ではない、イチョウの花序のうちに生き生きと私たちの目に見えてくることにある。

絶滅した石炭紀のソテツシダ類、あるいは三畳紀、ジュラ紀、白亜紀のベネチテス類をいまでも生きた姿で私たちの眼前に見ることができれば、このうえもなくすばらしいことであらうが、残念ながらそうはいかない。ただイチョウの場合だけは例外である。<sup>に きざんし</sup>二分枝し、多数の葉脈<sup>14</sup>を浮きあがらせて葉身<sup>15</sup>を形成しているイチョウ葉は、2 本の主脈<sup>16</sup>を葉柄<sup>17</sup>

<sup>9</sup> Adolphe Brongniart 1801. 1. 14—1876. 2. 19. フランスの古植物学者。

<sup>10</sup> 北極海にあるノルウェー諸島。

<sup>11</sup> 中生代の真中の地質時代。約 2 億 1 千万年前から 1 億 4 千万年前まで。シダ類やソテツ・イチョウの類が繁茂し、アンモナイトが全盛。陸上では爬虫類が全盛をきわめ、始祖鳥が出現した。

<sup>12</sup> 種の学名。

<sup>13</sup> Blütenstand。複数の花をつける枝のこと。また、枝上における花の配列様式も花序と呼ばれることが多い。

<sup>14</sup> Blattader。葉に分布する細かいすじ。水分や養分の通路になる。

に送りこんでいるが、主脈は(子葉<sup>しよう</sup><sup>18</sup>の場合を除き)そこでは合流せず、求基的<sup>きゅうき</sup><sup>19</sup>にずれて、皮層<sup>20</sup>でようやく一つになる。このようなイチヨウ葉は、もともと発達した植物のすべてがおんさ<sup>おんさ</sup>音叉状に分岐する葉をつけていた、約1億年間つづいた時代(ほぼ3億6千年から2億6千年前)の風情<sup>ふぜい</sup>を私たちに見せてくれる。厳密に言えば、「葉」という概念からしてすでにためらいを感じなければなるまい。あの遠い時代には、イチヨウの「葉」は、ふたたび軸性を受け入れ、さらに、雄性<sup>ゆうせい</sup>または雌性<sup>しせい</sup>の繁殖力—大きな花粉管<sup>21</sup>とか、種子がおさまっている、多くの穀斗<sup>かくと</sup><sup>22</sup>を有する莖葉軸とか—をまだ発達させるだけの能力がある形成物であったからである。当時、葉の葉腋<sup>ようえき</sup><sup>23</sup>に芽はまだ存在しなかった。石炭紀の終わりに、葉形単純化への進化がはじまり、まぎれもなく葉の生長に実効率向上の過程が認められるようになり、一方ではわずかに基礎だけが生長する、針葉樹(Konifere)のベルトコンベヤーのように伸びる針葉、他方ではイチヨウ葉、つまり、幾重にも分枝する樹木に、二分割された葉—二又扇状葉<sup>にさせんじょうば</sup>(Gabelwedel)が生まれた。もしかすると多重分枝は、短枝と長枝<sup>24</sup>の形成と相まって、三疊紀とジュラ紀にはじめて生じたのかもしれない。

## 2-2 現生イチヨウ種の始祖は実のところ何歳だろう？

---

<sup>15</sup> Blattspreite。葉の主要部で、表皮、葉肉、葉脈から構成される。

<sup>16</sup> Hauptaderstrang。

<sup>17</sup> Blattstiel。葉の一部で葉身を茎に付着させる柄。

<sup>18</sup> Keimblatt。種子植物の個体発生において、最初に形成される葉。

<sup>19</sup> basipetal。先端に向かう「求頂的」(akropetal)と正反対に、基部へ向かう方向を指示する語。

<sup>20</sup> Rinde。植物の基本組織系の主要素で、根および茎において表皮と中心柱との間の部分(生物学辞典)。

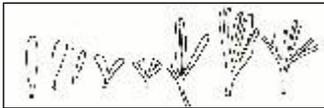
<sup>21</sup> Pollenorgan。

<sup>22</sup> 英仏 Cupule、独 Furchtbecher, Eichelschale。クリ・クヌギ・シイ・コナラなどの雌花苞葉<sup>ほうよう</sup>の多数が癒合して碗形<sup>わん</sup>または球形をなすもので堅果の一部または全部を包む。クリのいが、どんぐりのおわんの類。

<sup>23</sup> Achsel。植物の葉が茎と接続している部分。葉のつけ根。

<sup>24</sup> 短枝(Kurztrieb)：節間成長が起こらないため、葉が短い茎のうえに押しつまってつくシュート(脚注32参照)。これに対し、節間が伸びて葉が茎上に散在する普通のシュートを長枝(Langtrieb)と呼ぶ(辞典)。

イチョウ葉最古の発掘物は、赤底統<sup>25</sup>と含銅粘板岩時代(Kupferschieferzeit)のもので、図解1が証明するように、当時の原イチョウ（スフェノバイエラ デイギタタ *Sphenobaiera digitata*）は、葉に驚くべき変異性—後代にはもはや認められないような、新しい発生<sup>26</sup>の発端となる変異性—があった。また、原イチョウと類似の発生がほかにも多数あった。その一つ、二畳紀<sup>27</sup>の植物トリコピティス<sup>28</sup>は、<sup>29</sup>をつけた葉と軸によって知られている。胚珠は現代のイチョウのように直立（atrop 直生）しておらず、下向きに倒生（anatrop）していた。この点がおそらく本質的な違いであろう。しかし、1965年に南米で、同じように倒生した胚珠—それも今日のように少数ではなく、100個以上の胚珠—をつけている、下部白亜紀のギンゴイテス種（ギンゴイテス ティグレンシス *Ginkgoites tigrensis*、図解2参照）が見つかり、人びとは思案に沈み、三畳紀、ジュラ紀および白亜紀の化石になって見つかった属・種がほんとうに現生のイチョウ（ギンコ ビローバ）と対比できるものかどうか、もしかすれば死滅した分類階級に属していたのではないかと疑問をいだいた。



**図解 1:** 含銅粘板岩期の原イチョウ葉の驚くべき変異性：スフェノバイエラ デイギタタ。舌状ないし針状葉のほかに、2つに分かれた葉、4つに分かれた葉とそれ以上に分かれた葉、同様に大きさもまちまちの葉。気孔装置<sup>30</sup>は葉の表面にも裏面にも認められる。発見された材<sup>31</sup>は年輪をきざみ、含銅粘板岩期の季節の気候変化を証明している。

<sup>25</sup> Rotliegendzeit。中・西部ヨーロッパの二畳系の下部。

<sup>26</sup> Entwicklung。受精卵または単為発生卵あるいは無性的に生じた芽や孢子などを出発点とし、それらが成体に達する過程。

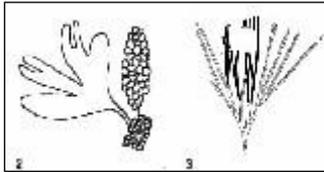
<sup>27</sup> 古生代二畳紀（ペルム紀）：2億9千年から2億5千年前まで。

<sup>28</sup> Trichopitys：イチョウ門ディクラノフィルム目に属した。

<sup>29</sup> Samenanlage。種子植物の雌性生殖器官。胚嚢<sup>はいのう</sup>とそれを包む珠心・珠皮とからなる。のちに種子となる器官。

<sup>30</sup> 気孔 [Spaltöffnung] とは、高等陸生植物の表皮に特有な構造で、狭義には孔辺細胞の間に生ずるレンズ状の小隙。孔辺細胞に隣接して2~4個の助細胞を伴う場合もある。これら諸細胞をも含めて気孔装置 [Spaltöffnungsapparat] という。気孔の直下には広い細胞間隙（呼吸腔）がある。気孔は炭酸同化・呼吸・蒸散作用などのガス代謝にあたって空気や水蒸気の通路となるが、その通過量は孔辺細胞の開閉作用により調整される。（辞典）

<sup>31</sup> Holz。木本植物の茎における木質部。形成層の活動によってつくられる二次木部がその主体であり、道管・仮道管・木部柔組織・木部繊維などから構成され、その細胞壁は大部分が木化する。寒帯・温帯に生育する樹木では概して年輪が明瞭である。



**図解 2:** S. アルハンゲルスキー Archangelsky 教授は 1965 年に、イチョウのような葉（ギンゴイテス ティグレンシス）と、約 100 個の倒生した胚珠を有する、雌性の受精能力がある若いシュート<sup>32</sup>をつけた、下部白亜紀の短枝を公表した。

**図解 3:** 下部ジュラ紀の原イチョウ、スフェノバイエラ スペクタビリス (Sphenobaiera spectabilis) の線条葉で、東グリーンランドおよびフランクフルト・アン・デア・オーダー近郊の地質ボーリングによって発見された。

きわめて細かく分岐した興味深いイチョウ葉を、イギリスの研究者ドクター T.M. ハリス Harris が 1935 年にグリーンランドから発掘し記載しているが、1980 年には、フランクフルト・アン・デア・オーダー近郊で地質図作製のためのボーリング調査によって掘削した、下部ジュラ系粘土岩 (Unterjuratonstein) からグリーンランド産とまったく同種のものが出土している (図解 3)。このような原イチョウ種がすでに絶滅していることは、実に残念である。

現生種のギンゴ ビローバをふくむイチョウ属<sup>33</sup>が、ようやく新生代に、たとえば約 6 千万年前の第三紀に発生したのか、それともすでにジュラ紀に、つまりイチョウ類や恐竜類の全盛期に、世界のどこかで発生したのかという問題は、1989 年まで懸案になっていた。第三紀にいたるまで、イチョウ葉は全大陸、そうしてドイツからも出土している。氷河期直前の鮮新世にさえ、イチョウはフランクフルト・アム・マイン地帯で—もちろんヨーロッパ全域で最後のものとして—一存在していた。ところが、イチョウ種のいわば本隊は、白亜紀以降、東アジアへ退却してしまう。現生種ギンゴ ビローバも、更新世の氷河時代を東アジアで、それも限られた浙江省や安徽省の辺境地帯でどうにか切り抜けたのである。

さらに、中国がジュラ紀におけるイチョウ属の原産地であろうとは、ほとんど考えられもしなかった。そのころ中国の広大な地域が、赤土と造塩と、乾燥した暑い気候に支配されていたからである。しかしいつのまにか、ジュラ紀に泥炭化現象が起り、それについて石炭層が生じる地域もあらわれた。このような地帯—<sup>かなん</sup>河南州—から、1989 年にジョウ・

<sup>32</sup> シュート (独 Spross、英 shoot) とは、「茎とそれについた葉との総体。維管束植物の孢子体はふつう茎・葉・根の 3 器官からなるが、茎と葉は共通の分裂組織から生まれて根を除く植物体を構成する単位をなすので、それを指す語」(辞典)。苗条、枝条、芽条ともいう。要するに、茎と葉の総称。

<sup>33</sup> 属 (Gattung) とは、生物分類のリンネ式階層分類体系において、科 (Familie) の次下位、種 (Art) の上位におかれる基本的階級。

ジイエン Zhou Zhiyan 博士とジャーグ・ボーレ Zhang Bole 博士が、直生している胚珠をつけた、イチョウの葉と花の発掘物を記載している。両博士は、3 胚珠が直立（直生）している葉柄を描き、さらに、葉形と葉の気孔装置を記載して、中部ジュラ紀の最初のイチョウ種をギンコ イマエンシス(Ginkyo yimaensis)と命名した。この原初の種でも、今日のイチョウ（ギンコ ピローバ）よりも、葉形は著しく変化に富んでいる。

## 2-3 イチョウ（ギンコ ピローバ）は相変わらず驚きを呼ぶ

日本の研究者は、現生イチョウ樹の異常な葉形を模写することで、いまなお古代の能力、たとえば二又扇状葉に胚珠を形成する能力が保持されている、という事実<sup>34</sup>に注意をうながした功績がある（「お葉つき」、本書 49 ページ参照）。とどのつまり、葉縁に胚珠が形成されたのかもしれないが、現世のイチョウ（ギンコ ピローバ）は通常 2 胚珠を有する小さい葉柄をそなえ、つねにそのうちの 1 胚珠だけが種子を結ぶ機会に恵まれるのである。ちなみに、この結実<sup>お葉つき</sup>は、「花」<sup>34</sup>という名称にはまるでそぐわない。なぜなら、それは種子を結ぶ、かつて又状に分かれていた一つの軸(Achse)にすぎないからである。ただし、5 月に古い大きな雌性のイチョウ樹のもとで胚珠のある「花軸」<sup>35</sup>を拾い集めれば、かなりの割合で 3 ないし 4 胚珠あるいは 5 胚珠の軸、いわば太古のなごりも見いだされるであろう。日本の研究者は丸い袋状に癒合した葉、つまり、軸の決定<sup>36</sup>が葉の決定と入り交じったイチョウ葉も記載している。ときには、網の目になっている葉脈もいくつか見つけられる。このように現存のイチョウにはまだまだ発見すべき事項があり、現代の気候では、気ままに浮遊する精細胞による卵細胞の受精率も、ごく低いと思われるが、時折まれな例外が認められるのは、規則のある証拠であろう。イチョウは私たちの時代に進化の終点を迎えているのか、それとも中国や日本から遠く離れたさまざまな国における栽培がもう一度、新種を形成し、以前のようにヨーロッパ、アジア、北アメリカや南アメリカなどの広範な地域で自生するようにうながすことができるのかどうか、だれにも断言できないが、これを否定したくはない。

（『ドイツ園芸家新報 Deutsche Gärtnerpost』1991 年第 32 号、17 ページ所収：『イチョウの

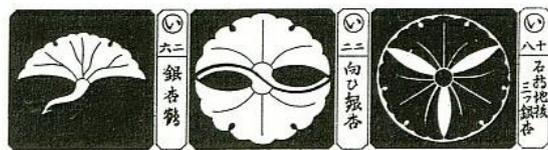
---

<sup>34</sup> 花(Blüte)：種子植物の有性生殖に関与する器官の集合。茎に相当する花軸と葉に相当する花葉とからなると考えられる。すなわち、一つの花は一つのシュート（苗条）またはその先端の一部分に相当する（辞典）。

<sup>35</sup> 特にある程度の長さがある花床をいう（辞典）。

<sup>36</sup> 決定(Determination)とは、発生運命が決まること。

太古の歴史に関するニュース』の複製)



### 3 イチョウ—植物界での生き残り戦略—

ヘルガ・ディートリヒ

たとえば「ギンコ Ginkgo」、「ヤーチャオ ya chio」、「イエシエン yin hsing」、「メイドゥンヘア・トゥリー maidenhair tree」、「ゲーテ・バウム Goethe-Baum」など、数ある名称のいくつかがさまざまな文化圏から聞こえてくるように、イチョウほど現在うわさの種になる植物種も珍しい。

イチョウは記録破りの高木であるが、少なくとも次のような注目すべき成果をあげている。

イチョウは火や放射線に堪える。イチョウは植物や動物の病原体に対してみごとに身を守り、3億年もつづく歴史が証明するように、きわめて長い進化期間を経ている。イチョウは個体樹木としても千年をこえる相当な樹齢に達することがあり、10年以上まえから、脳性および末梢性血行不全の治療にきく、特殊な植物薬剤(Phytopharmakon)の開発に主導的な役割を演じている。

さて、何がこのような並外れた性質をうみだすのか？ このような能力をもつ木本植物<sup>37</sup>はどんな特徴や特性をそなえているのであろうか？

イチョウは、30m（最高40m）の高さにまで達することもある、夏場には緑したたるばかりの長枝と短枝の共存する高木である。

イチョウの形態はきわめて変化に富むが、雄性<sup>ゆうせい</sup>ではすらりとした柱状、雌性<sup>しせい</sup>では張り出した冠状が優勢である。ただし、繰り返し多様な偏差が認められる。したがって、生長形態による性の確実な分類は、必ずしも可能ではない。高度な個体の対比率を誇る種苗栽培園では、とりわけ春、葉になる以前の幼種鱗（Knospenschuppe）の形態と大きさに基づく、性の同定<sup>38</sup>に全幅の信頼をよせている。たいてい丸くふくらんだ、淡褐色ないし赤褐色の種鱗<sup>しゅりん</sup>を有する雄木の<sup>39</sup>は、対応する雌木の葉芽よりも厚くて長いことが判明している。しか

し、その際に重要な点は、つねに同種のシュート、すなわち長枝<sup>ちやうし</sup>か短枝<sup>たんし</sup>かいずれか一方の

---

<sup>37</sup> 草本植物に対する語。

<sup>38</sup> Identifikation。一般に生物個体を既知の分類体系のなかに位置づけること。

<sup>39</sup> Blattknospe。栄養葉と茎だけから構成された芽。花葉を形成する花芽<sup>はなめ</sup>（Blütenknospe）に対する用語であり、芽がどの位置に生じたかを問わない。つまり、生殖器官をその茎頂から生じない芽はすべて葉芽である。

葉芽を相互に対比しなければならないことである。

若木の樹皮は暗褐色であるが、かなり古い個体は灰色がかった褐色で、深い裂け目がある。

平行脈系<sup>40</sup>の、特異な、思い出の品として高く評価される扇形の葉は、長枝と若枝(Schöbling)に互生<sup>41</sup>しているか、さもなければ短枝に数個(2~6個)ずつ束になって発生している。二

又脈系の<sup>ようしん</sup>葉身は、しばしばまたは幾重にも深く切れこんでいる。これが、種名をあらわす

形容詞「ビローバ biloba」=「二分葉の zweilappig」のもとになった、形質<sup>42</sup>である。

イチヨウ葉はあざやかな緑色で、表も裏側も裸出し、薄く皮膜され、長い(約2~9cm)の柄がつき、長さ14cm、幅13cmにまでなる。幹の基部から出ている若枝は、しばしば樹木の主枝(Hauptast)よりも2倍ほど大きい葉をつける。特に葉の裏側にある見分けにくい葉脈は、二またに分枝している。

秋になると、葉は光輝あざやかに淡黄色に色づく。イチヨウは単性、すなわち、<sup>おぼな</sup>雄花または純粹に雌性の花があらわれる。雄花と<sup>めぼな</sup>雌花は通常それぞれ別の木に分散配置されるので、(Diöcie)といわれる。ただし、かなり古い雄株には、突如として雌花と精子が生じる例も、ごくまれに見られる(Monöcie)。

雌雄同株の華々しい例外は、たとえば1993年の夏から初冬にかけてと翌年の1994年にも、イェーナ植物園で、明らかに接ぎ木されていない、樹齢約170年の古い雄性個体に観察された。

それというのも、養樹園あるいは公園や庭園では、別な性の枝を接ぎ木することによって、人工的な雌雄同株がきわめて頻繁に演出されるからである。



図解1：検査官官舎わきのイェーナ植物園にある、いわゆるゲーテのイチヨウ。

花は鱗片状の低出葉<sup>りんぺん</sup><sup>43</sup>もしくは普通葉<sup>44</sup>の<sup>ようえき</sup>葉腋<sup>45</sup>から生じる。

<sup>40</sup> Nervatur：「脈系」(もしくは「脈理」)とは、葉身における維管束の配列様式。つまり葉脈の走り方。種によっていちじるしく特異性があり、葉を、したがって植物を識別するのによい標識となる。

<sup>41</sup> 交互すなわち節ごとに一枚ずつ方向を異にして葉が生ずること。

<sup>42</sup> Merkmal はもともと生物の分類の指標となる形態的要素をさす。特徴、標徴ともよばれる。

<sup>43</sup> Niederblatt。シュート形成の初期(すなわち茎の基部に近いところ)に生ずる。普通葉と異なる、異形

尾状の雄花は、1本の伸びた葉腋に、それぞれ2個の室(Pollensack)<sup>46</sup>がある、雄ずい<sup>47</sup>を多数つけている。雌花は、長い花柄状部分の先端に通常2個の(珍しい例では3個ないし数個の)胚珠<sup>はいしゅ</sup>をつけ、胚珠は基底が「軸のふくらみ Achsenwucherung」(つまり殻斗<sup>かくと</sup>Cupula)にかこまれている(図版2参照)。この殻斗は、多くの植物学者によって、退化し変形した心皮<sup>しんぴ</sup><sup>48</sup>であると解釈されている。ほとんどの場合、ただ1個の胚珠だけがさらに種子へと発達するである。

イチョウは欧米では5月に花が咲く。受粉は風を介しておこなわれる。風によって胚珠へ運ばれた花粉は、特別に形成された小孔(珠孔 Mikropyle)を経て、ごく小さい受粉液で満たされた室(=花粉室 Pollenkammer)に引きこまれ、そこで花粉は発芽するまで休眠するのである。

裸出している胚珠内における卵細胞の受精は、1個の螺旋状の鞭毛帯<sup>べんもうたい</sup>(Geißelband)をもつ、運動性精子との合体によっておこなわれる。この鞭毛は、最新の調査が明らかにするところによれば、典型的な92+2の基本構造が認められる。また、それらの精子(Spermatozoiden)は、発芽している花粉粒(Pollenkorn)の内部で形成され、同じく原初のソテツ類(Cycadatae、図解5参照)の精子に似ている。ただ、イチョウの精細胞(Spermazelle)は、ソテツ類の場合にこれまで実証することができなかった、多数の色素体<sup>49</sup>とゴルジ体<sup>50</sup>をふくんでいる。これらがソテツ類一般に存在しないとすれば、当の有無が分類学上の2大グループ[ソテツ門とイチョウ門]の重大な相違点であるということになる。

---

葉の一種。茎上の位置で規定された概念で、高出葉に対応する用語。

<sup>44</sup> Laubblatt. 尋常葉。扁平な葉身に葉緑体を含み活発な同化作用をいとなむ普通の葉。

<sup>45</sup> Achsel. 植物の葉が茎と接続している基部。葉のつけ根。

<sup>46</sup> とは、小孢子葉にあたる雄ずいの一部で、花粉(未熟な雄性配偶体に相当する)をつくる袋状の部分。裸子植物および一部の被子植物では小孢子葉の面上に直接つく。多くの被子植物では雄ずい的一端、すなわち花糸の先端に生じ、葯隔(connective)によって左右の半葯(theca)に二分され、一個の半葯に二つの室(loculus)がある(辞典)。

<sup>47</sup> Staubblatt. おしべ、種子植物の雄性生殖器官。

<sup>48</sup> Fruchtblatt: シダ植物の大孢子葉に相当する。

<sup>49</sup> Plastid. 植物の細胞内に含まれ、色素を含有する小体。葉緑体、および類縁の白色体・有色体などの総称(広辞苑)。

<sup>50</sup> Golgi-Körper. 動植物の細胞質中に見られる、扁平な囊・小胞・液胞からなる構造体。イタリアの細胞学者・組織学者カミロ・ゴルジ Camillo Golgi (1844-1926)が発見した。

興味深いのは、イチヨウに関する基礎的な受粉生物学上の特性が、すでに 19 世紀最後の 10 年間のうちに、日本の平瀬<sup>51</sup>によって発見されたことである。走査型電子顕微鏡で検査された、花粉体(Pollenkörper) (図解 2~4 参照) は、長方形型であり、大きさは縦 35 ミクロンから 38 ミクロンまで、横 17 ミクロンから 20 ミクロンまでさまざまなものがある。花粉体は遠位<sup>52</sup>側面に長口型<sup>53</sup> (ないし単溝型または遠心面有溝型<sup>54</sup>) 発芽口<sup>55</sup> (=花粉管<sup>56</sup>のための開口部) を有する。

花粉壁(Aperturenrand)は墨壁状になっている。発芽部(Keimöffnung)の外層模様は、縞模様(striat)ものやら、イボ状の(verrucat)ものから規則的な(rugulat)模様まで、一様でないようにみえる。

近位花粉側面上の外膜模様(Skulpturierung der Ectexine) も、同じく平滑型(psilat)またはかすかにしわ模様型(schwach rugulat)のものから、著しく不規則に微細孔のある(foveolat)模様まで多様性に富む。

この進化の古い分類群の染色体基数は  $x = 8$  と驚くほど低い。

いたるところで毎年たわわに、ミラベル<sup>57</sup>に似た、直径約 2~3cm に達する「種子」が、雌木に成熟するわけではなく、明らかに受精の起こらない年もある。原因はまだ究明できて

いない。ただ、胚珠<sup>はいしゅ</sup>がふくらみ、黄色く色づいたとしても、その時点ではまだ、当該形成物が単に大きくなった胚珠にすぎないのか、それともすでに発育した胚<sup>58</sup>をやどす成熟した種子なのか、受粉と受精との間に数ヵ月かかるため、最終的に断定することはできない。受精はしばしば落下後に、いやそれどころか、当該「形成物」が土壌のうえ、もしくは地中に到達してやっとおこなわれる場合も多い。胚珠を包む唯一の皮膜 (=珠皮 Integument) は、<sup>【やがて種子の】</sup> 外側の厚くて柔らかい外種皮(Sarcotesta)と、内側の硬化した、つまり、多くの細胞(Steinzelle)で構成された内種皮(Sclerotesta)へと発達する。外種皮は酪酸、酸、カプロン酸を多くふくむために、腐敗時に激しい不快な悪臭を発散する。それゆえ、雌性の個体は、

---

<sup>51</sup> 平瀬作五郎：安政 3(1856). 1. 7~1925. 1. 4 植物学者。福井生まれ。東京帝国大学理科大学植物学教室に画工として雇われ、1893 年助手となる。イチヨウの花粉管内に精子らしいものが泳ぐことを確認して東京植物学会に発表(1896)。(辞典)

<sup>52</sup> 遠位(distal)：中枢から遠い意。近位(proximal)：中枢に近い意。

<sup>53</sup> 長口型：sulcate。

<sup>54</sup> 単溝型または遠心面有溝型：mono- oder anacolpate。

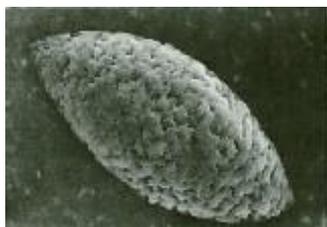
<sup>55</sup> 発芽口：Apertur

<sup>56</sup> 花粉管(Pollenschlauch)：花粉が発芽してつくる細管状構造。発芽にあたって、花粉はまず水分を吸収して膨潤し、原形質流動が始まると、発芽口から花粉の内膜がはみだして管状に伸び始める(辞典)。

<sup>57</sup> 黄色いセイヨウスモモの一品種。

<sup>58</sup> Embryo。多細胞生物で、受精後に発生を始めた卵細胞・幼生物(広辞苑)。植物では、受精卵がある程度発達した若い胞子体(辞典)。

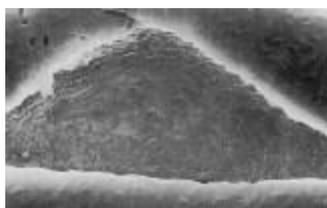
特にヨーロッパでは、たいてい並木や街路樹としては好まれない。外種皮にかこまれた胚は、「堅果 Nuss」あるいは「核 Kern」と呼ばれ、多くのアジア諸国、特に中国や日本で、豪華な美食と認められている。イチヨウの胚は抜群に貯蔵物質<sup>59</sup>に富んでいるのである（下記参照）。



図解 2：近位花粉側面の表面模様。画像幅は約 35 ミクロンに相当する。



図解 3：遠位花粉側面上の発芽口。画像幅は約 35 ミクロンに相当する。



図解 4：長口型の発芽口模様。画像幅は約 15 ミクロンに相当する。

図解 2-4：ギンコ ビローバの花粉。H. ディートリヒ Dietrich による走査型電子顕微鏡撮影。

イチヨウの芽ばえ<sup>60</sup>は、数枚ないし多数の子葉<sup>61</sup>をもつ針葉樹 Konifere（針葉樹林 Nadelgehölz）とは対照的に、わずかに 2 枚の子葉を一多くの顕花植物<sup>62</sup>と同じように一形成

<sup>59</sup> Reservestoff. おもにエネルギー源として動植物の体内にたくわえられる物質の総称。

<sup>60</sup> Keimling. 実生<sup>みしよう</sup>ともいう。種子植物の種子から発芽した幼植物。つまり、種子が発芽すれば、胚といわず、芽生えと呼ばれることになる。

<sup>61</sup> Kotyledon、Keimblatt。種子植物の個体発生で最初に形成される葉。子葉の概念は体制的な位置、いいかえると胚発生における第一節に生ずる葉ということだけで規定されたものであるから、数・構造・機能などは種によって多様（辞典）。

<sup>62</sup> Blütenpflanzen. 植物を花の有無で二大別したとき、花を形成する植物。すなわち裸子植物と被子植物

する。発芽率は、特にアジア以外の地域では、かなり不安定である（約 60%~0%）。同じく発芽結果も、中央ヨーロッパではつねに不確定なままであるが、イチョウはおおむね生殖によって、つまり、種子から増殖されているのである。種まきは収穫年の秋または翌年の春におこなうことができる。ほとんどの場合、悪臭を放つ外種皮をむいた種子を、湿った培養基<sup>63</sup>のはいった、陶器製シャーレかプラスチック容器に蒔きつけている。

土壌 pH 値の最適値は、中性の範囲内に、すなわち数値 7 前後であるが、長年の経験によれば、pH4.5 から 7.7 のあいだなら許容されることもわかっている。氷点下の厳寒にさらされない気候条件のもとでは、種子の発芽はたいてい 3 週間もすればはじまり、春までつづく。

発芽率を向上させるためには、開花能力のある雄性イチョウが間近に存在している、雌木の種子を用いるとよい。この場合は当然のこととして受粉の蓋然性がきわめて高い。

割りに古いイチョウ樹は、たえず浸透していく土壌の凍結に対して、驚くほどの抵抗力をそなえているが、若木は春の遅霜<sup>おそしも</sup>から、特に荒れた土壌では保護する必要がある。

イチョウは、春に切りとった挿木<sup>さしき</sup><sup>64</sup>を、無性生殖によって繁殖させることもできる。もちろん、挿木には豊富な経験と繊細な感覚が必要とされ、根づきの成功率は挿木の巧拙によって雲泥の差がつく。

最初の数ヶ月間、イチョウは急生長する。たいていの場合ただ 1 本の若枝を伸ばし、その軸に数本の短枝がつく。短枝はのちに側方分枝に生長する。ほぼ 5 年後に、イチョウは 2~3m ほどの高さに達しているかもしれない。その後はいろいろな木本植物と比べると一成長が遅い。園芸では、樹齢約 50 年でイチョウはようやく最終的な形態を示し、立派な高木と見なすことができると考えてよい。

公園や並木道によく好んで用いられるようになったイチョウ樹には、突然変異や淘汰<sup>とうた</sup>によって、一部が商品の品種としても市場に出された、いくつかの形態がある。たとえば、「ラキニアタ」(Laciniata)という品種の場合、幾重にも切れ込みがあり、特に、羽毛状の縮れた扇のようにみえる葉縁がめだつ。

品種「ペンドウラ」(Pendula)は、おおいかぶさるような傘状によって、人気を博しやすい。

品種「ファスティギアタ」(Fastigiata)は、格別すらりとした、ほとんど柱状イトスギ

---

との総称名。隠花植物の対語。

<sup>63</sup> Substrat。培地ともいう。微生物・動植物あるいはその組織・細胞の培養に使用する液体ないし固形の物質（広辞苑）。

<sup>64</sup> Steckling。植物の無性繁殖（栄養繁殖）法の一つで、母植物の一部を母体から切り離して、これを砂または土壌中に挿し、不定根を発生させ独立の植物体とする方法（辞典）。

(Säulenzypresse)を思わせる生長に特徴がある。

「アウレア」(Aurea)はごく珍しい品種で、葉はつねに、つまり木の葉が色づく季節に限らず、美しく金色に染まっている。

「ヴァリエガタ」(Variegata)と呼ばれる品種も、形態は似ているが、葉が黄と緑の縞模様である。

さらに、イチョウが盆栽の苗木としてきわめて重宝されていることについても、ここでふれておきたい。

イチョウの特殊な形質<sup>メルクマール</sup>を論じる場合には、老木のさらに別な特性にも言及しなければならない。たとえば、樹齢180~200年ともなると、幹や太い側枝(Seitenast)に、いわゆる「チチ」(=「胸」、「乳首」)、つまり鍾乳石<sup>しょうにゅうせき</sup>もどきの突起が生じるのである。

このような突起の材を調査したところ、構造は一般の側枝の構造と類似していることが判明した。ただ、年輪(Wuchsring)はひととき<sup>ちみつ</sup>緻密に配列し、中心部に黒ずんだ髓<sup>はんでん</sup>斑点

(Markfleck)が見られる。軸性<sup>66</sup>部(axialer Bereich)では、個々の区分帯に<sup>67</sup>が、リグニンの沈着した細胞壁(Zellwand)のある、死んだ、細長い有管細胞(Röhrenzelle)となって、不規則に分布しているか、または渦状に配列している場合さえもあった。

さらに、多数の結晶晶洞(Kristalldruse)が発見された。このような晶洞は、最近の調査によれば、ほかの材<sup>68</sup>でも発見されている。ただし、針葉樹類とは対照的に、異型細胞(Ideoblast)ごとに1個の晶洞しかあらわれない。

「乳」<sup>ちち</sup>をつけたもっとも有名なイチョウの個体が日本の仙台にある。樹齢約1,250年と推定すれば、本樹はおよそ現生するもっとも古い代表のなかに数えられるばかりでなく、しばしば1mはあろうかという乳房を多数つけている。一部は土壤にふれて根づき、側幹を形成する(なかんづくイチョウにみられる、無性生殖の一形態でもある!)。仙台にあるイチョウの枝葉は、ちょうど250m<sup>2</sup>の面積を占めている(加藤温子の寄稿論文、本書53ページ以下参照)。

ちなみに、イェーナ植物園にみられる、樹齢200年の「ゲーテのイチョウ」は、宮廷堀

<sup>65</sup> 髓(Mark)：植物体の軸性器官において、管状に配列した維管束にとり囲まれた内側の部分(辞典)。

<sup>66</sup> 生物体において種々の方向への極性がある場合、それぞれの方向に仮想的な軸を想定しうる状態にあることを「軸性をもつ」という。また極性があらわれ、軸を想定しうる状態になることを軸設定(axiation)という(辞典)。

<sup>67</sup> Tracheide。高等植物の木部に広く分布する。通水および支持機能をもつ組織(辞典)。

<sup>68</sup> 「材」(Holz)とは、木本植物の形成層の活動によってつくられる二次木部をいう。

端に対向する幹側面の目通りに1個の小さい、長さ約20 cmほどの「チチ」がある。

雌性の枝が検査官官舎の方向に接ぎ木されている、この雄性樹の高さは、樹幹の直径が1.25mのところでは18mに達し、高さ1mのところでは幹囲が3.93mある(図解1)。当のイチョウはドイツにおける同種のもっとも古い高木に数えられる。「ゲーテのイチョウ」と人口に膾炙している呼称は、1792年から1794年までのあいだに、つまり、ゲーテが集中的に大学問題にかかわり、繰り返しシェーナに滞在していた時期に、ゲーテの行動力と財政力もかねそなえた支援によって、不況時代のあと、積極的に参加した植物学教授バツチュ Batsch と緊密に連携しながら、植物園が「植物学の施設」へ拡充されたときに植樹された、という事情に基づいている。ゲーテが手ずからイチョウを植えたことと繰り返し述べられている見解は、いかなる文書によっても立証されず、肯定も否定もできない。

ほかに2本のイチョウが、高山植物を配した岩石庭園施設と生態群<sup>69</sup>とのあいだに位置する、植物園のいわゆる「中山 Mittelberg」にある。一方はピラミッド形の樹冠をした「雄」(樹齢100年以上、高さ24m、直径1.05m、幹囲3.14m)で、他方はぐんと幅の広い、枝を張った樹冠をいただく、接ぎ木をした「雌」(樹齢約70年、高さ13m、幹囲1.41mのところでは直径0.45m)である。<sup>70</sup>についていえば、イチョウは深く根を張るというよりも、むしろ根が浅いと一般にみなされている。

とりわけイタリアの学者たちの調査によって、イチョウにはVA<sup>71</sup>がグロムス菌(*Pilz Glomus epigaeum*)とともに存在することが判明した。ひときわ目立つ点は、細胞間菌糸(*intercelluäre Hyphe*)<sup>72</sup>がきわめてまれにしか存在しないのと裏腹に、細胞内菌糸(*intracelluläre Hyphe*)がきわめて多いことである。

イチョウは、アジアで材木としても高く評価されている。わりあいに硬質な、非常に明

---

<sup>69</sup> Ökologische Gruppe。類似した生態行動を示す植物の種群。

<sup>70</sup> Wurzelsystem。一つの系としての植物の地下部全体。固着器官であると同時に、水分および栄養塩類の吸収を行う(辞典)。

<sup>71</sup> vesikulär-arbuskuläre Mycorrhiza。菌根(Mycorrhiza)：植物の根に菌類が侵入して形成される構造。ほとんどの植物の根に普遍的に認められる。菌根を形成する菌類を菌根類とよぶ。次の三つの形態がある。(1) 外生菌根…おもに樹木の根と担子菌類が形成。…(2) 内生菌根…根の皮層細胞内に菌糸が侵入する。(a) コイル型菌根…(b) VA菌根(VA mycorrhiza, vesicular-arbuscule mycorrhiza)。多くの広範囲にわたる植物の根とおもにアツギケカビ目(Endogonales)菌類とのあいだに形成。侵入した菌糸は嚢状体(vesicule)とよばれる養分貯蔵器官を皮層細胞間隙などに、および樹枝状体(arbuscule)とよばれる養分授受器官を形成する。根の外部の土中にのばした菌糸に厚膜・大形のVA胞子を形成する。VA菌類は人工培養が不可能なため、その分類はVA胞子の形態を標徴として行われる。(3) 内外生菌類…(辞典)

<sup>72</sup> 菌糸(Hyphe)：菌類の体を構成する本体で、繊細な糸状の細胞または細胞列(広辞苑)。

るい、繊細な木目のはいった木材を供給し、リグニン含有量がで 35.8%と非常に高い。

材全体が概して特殊な有害生物に襲われない。それゆえ、イチヨウ材は特にこの性質を生かす製品に加工されている。

イチヨウ材は建築用木材ならびに家具、木彫品のほか、漆器、彫像、将棋の駒<sup>こま</sup>のような芸術作品の制作に適している<sup>73</sup>。仏教寺院にもイチヨウ材は好んで用いられる。

寺院の境内はむろんのこと、住宅建造物の近くに植樹されるのも、イチヨウが火災や災難から近隣の建物を守る、との風評があるからである。耐水、耐熱性のある樹皮はコルクの製造にも一部利用されている。

中国では、紙くい虫を寄せつけないう、本のページにイチヨウ葉をはさむ慣習がある。

また、イチヨウはあらゆる種類の葉の有害生物に対して完全な免疫がある、と繰り返し主張される。有効な防除には異論の余地があるとしても、少なくとも相当数の菌類(子囊菌<sup>しのう</sup>

類<sup>74</sup>も担子菌類<sup>たんし</sup><sup>75</sup>も)がイチヨウ葉のうえに検出できることは確認されている。たとえば、

アクレモニウム属(*Acremonium spec.*)、アルテルナリア属(*Alternaria spec.*)、フザリウム属(*Fusarium spec.*)、ペスタロッチア属(*Pestalotia spec.*)、スポリデスミン(*Pithomyces cf. Chartarum*)、*Harzia acremonioides*、*Epicoccum nigrum*、*Phyllactinia ginkgo*、子囊菌(*Glomerella cingulata*)、*Xylaria longiana*、*Irpelex lacteus*、シロサルノコシカケ属の一種(*Oxyporus populinus*)、シロアマタケ属(*Trametes hirsuta*、*Trametes versicolor*)、*Tyromyces chioneus*、*Cercospora spec.* ならびに *Phymatotrichopsis omnivorum* などである。

アジア、とりわけ日本、それに最近では欧米でも、イチヨウ葉を金や銀や銅の合金で堅牢<sup>けんろう</sup>にし、流行の服飾品として身につけることが一般におこなわれている。

昔の中国では一時期イチヨウ葉が通貨として使用されたことさえある。

種子にもいろんな用途がある。„pa-kewo“ ないし „bai-guo“ (=「」<sup>76</sup>) という商品名で、あぶった胚<sup>はい</sup> [いわゆる<sup>い</sup>ギンナン]が珍味ともくされている。澱粉<sup>デンプン</sup>67%以下、蛋白質<sup>タンパク</sup>約 15%、脂肪約 3%、ペントサン 1~2%および繊維素 1%をふくみ、したがって、栄養に富み、消化をも促進する。イチヨウの胚 [ギン] は、あぶらないでも食べられる。わがドイツでなじみのないギンナンの

<sup>73</sup> 日本では高級まな板に使われ、古くは洗濯板にも使われていた (加藤温子談)。

<sup>74</sup> Ascomyceten。有性生殖で子囊<sup>しのう</sup>中に子囊胞子を生じる菌類 (辞典)。

<sup>75</sup> Basidiomyceten。有性世代として担子器を生じ、そのうえに担子胞子を外生する菌類。

<sup>76</sup> 中国語では①イチヨウ②ギンナンの意。

風味は、樹脂をふくんだ味がするジャガイモかピスタシヨ<sup>77</sup>にたとえられる。

また、着色した胚は、さまざまな儀式や民族祭礼で賞味される。特に婚礼のでは、重要な儀礼上の役割をはたすのである。

種子の周囲をおおう果肉質の外種皮は、民間療法で広く用いられる。過度の粘液形成に、あるいは、過敏などの症状に、あるいは腸内に寄生する、減退した精子生成やアルコール乱用にも効能があるといわれている。さらに、タンニン酸含有量が多いことから、皮革加工にも使用される。

中国の女性は、<sup>ぎんなん</sup>銀杏をき砕いて洗剤としても重宝している。胚も外種皮も、美容の分野で多様な調合剤に、とりわけ、しわを防ぐために加工される。このほか、胚もまた葉に劣らず植物薬剤の製造に使用されている。

これらの調合薬剤は、激しい<sup>せき</sup>咳の発作に、あるいは虫下しとして、さらには老廃物除去治療のために投薬される。近ごろ中国の研究者たちは、残念ながらふたたび緊急課題となってきた、結核の治療にも間違いなく効果があると断言している。

イチョウへの関心が高まるにつれて、関連の出版物もうなぎ登りになるとともに、繰り返しひとつの問題が顔をのぞかせる。すなわち、学名の正書法である。正しい„Ginkgo“のほか、再三再四„Ginko“、„Ginko“あるいは„Gingo“が用いられてきた。ゲーテさえもイチョウの呼び名をさまざまにつづっているのである。

„Ginkgo“ (ギンコ) という<sup>つづ</sup>綴り方は、ケンペル Kaempfer の著書『諸国奇談 Amoenitates exoticae』(1712年刊)に端を発するが、それじたいが誤植に基づくものである。リンネ Linne<sup>78</sup>がこの不正確な用語を1771年に属名として借用したことから、命名規約(Nomenklaturregel)<sup>79</sup>にしたがい、„Ginkgo“が一般に通用するようになってしまった(W.ツェーザアの寄稿論文、本書64ページ以下参照)。

かつて日本で慣用されていた発音「ギンキョウ」の「ギン」は銀(Silber)を、「キョウ」は<sup>あんず</sup>杏(Aprikose)を意味している。種をあらわす形容詞である「ビローバ」(biloba)は、ラテン語で「二分葉の」(zweilappig)を意味する。したがって、ドイツ語化した学名としては、„Zweilappige Silberaprikose“(二分葉<sup>ぎんきょう</sup>銀杏)が原名にもっとも近いであろう。

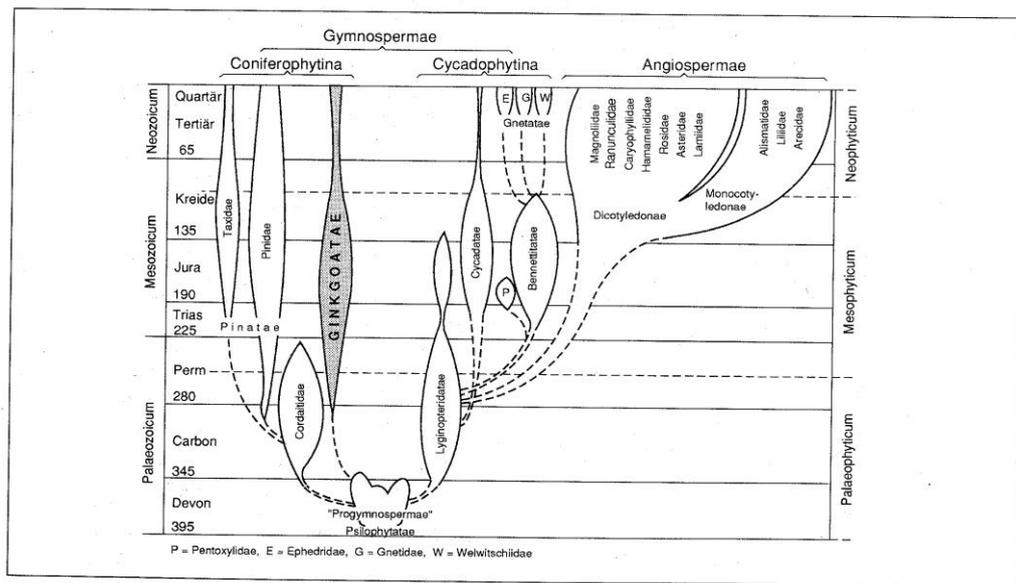
---

<sup>77</sup> ウルシ科の木。

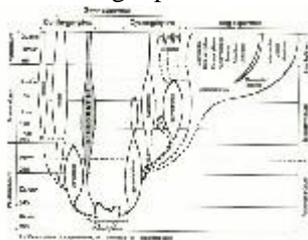
<sup>78</sup> Linné, Carl von [Linnaeus, Carolus]1707.5.23~1778.1.10 スウェーデンの博物学者。

<sup>79</sup> 生物のタクソンに学名をつけ、また、それらの学名を維持、管理するためのとりきめ、リンネの分類を発祥とし、動物・植物(化石を含む)、細菌などごとに独自に作られ用いられている。基準法、先取権の原則、二命名法による種の学名の使用などを規範とするもので、主たる目的は学名の安定である(辞典)。

さらに別な俗称は—すでに本書でもいくつか挙げられているが一次のとおりである。扇高木(Fächerbaum)、扇状葉樹(Fächerblattbaum)、処女髪高木(Mädchenhaarbaum)、鴨脚樹(Entenfußbaum)、日本国木(Japanbaum)、和製クルミ(Japanischer Nußbaum)、日本寺院樹(Japanischer Tempelbaum)、象耳樹(Elefantenohrbaum)、40ターラー樹(Vierzigtalerbaum)<sup>80</sup>、公孫樹(Großvater-Enkel-Baum)など。



イチヨウの研究で論議されている別の問題は、体系的な分類である。現時点では、イチヨウ(ギンコ ビローバ)は多数の分類学者によって、「針葉樹亜門 Coniferophytina、イチヨウ綱 Ginkgoopsida (二又もしくは針状葉の裸子植物)」に分類されている<sup>81</sup>(図解5)。



図解 5 : イチヨウ科(Ginkgoatae)の体系的な位置。植物界では、イチヨウ科はすでに 3 億

<sup>80</sup> ターラー : 16 世紀から 18 世紀まで通用したドイツ銀貨。

<sup>81</sup> 階級(Rang) : 生物のリンネ式階層分類におけるタクソンの階層的な位置(辞典)。上位から、界・門・綱・目・科・属・種に大別、必要に応じてそれぞれの下に亜門・亜綱などをおく。動物と植物とで名称に若干の違いがあり、細菌・ウイルスの分類はこれと異なるのが普通。分類階級(広辞苑)。

年以上前に、針葉樹(Pinatae、左側)とかソテツ類(Cycadatae)のような他の裸子植物(Gymnosperma)から分離していた。

現在のような分類学上の見解は、一方では典型的な針葉樹と数多くの相違点があり、他方ではソテツ亜門(Cycadophytina)―羽状複葉の裸子植物―と同じく数多くの一致点があることから、おそらく堅持しえないであろう。

むしろ、進化レベルにおいて原始的なグループの複雑な、一部は中間的な形質の組み合わせを、独自の亜門―すなわち Ginkgophytina (二又状裸子植物)―として、他の2つの亜門―すなわち針葉樹亜門(Coniferophytina)およびソテツ亜門(Cycadophytina)―と同階級に並列すれば、一番てっとりばやく対応しうるのではあるまいか。こうしたグループわけの提案も幾人かの分類学者に支持されている。

イチョウにもっとも近い類縁植物は、下部二畳紀に存在していたという事実が化石によって証明されているが、おそらくは上部デボン紀にまでさかのぼると考えられる。もっとも華やかな形態の充溢は、中生代の三畳紀から白亜紀にかけて展開していた(図解4)。そのころイチョウ類はほぼ全地球上に分布し、扇形の葉に限らず、顕著に分裂し、深く切れこんだ葉とか帯状の葉などをもっているものもあった。それらはとりわけ、もっぱら化石で有名になった属―ギンゴイトス(Ginkgoites)、バリエラ(Baiera)、スフェノバリエラ(Sphenobaiera)、アルクトバリエラ(Arctobaiera)、エレットモフィラム(Eretmophyllum)、ギンゴイディウム(Ginkgoidium)、フォエニコプシス(Phoenicopsis)あるいはトリコピティス(Trichopitys)―に分類されるが、イチョウ属(たとえばギンコ アディアントイデス Ginkgo adiantoides)にも組みこまれる。イチョウ類縁植物には約20種類の化石属があった、と推定される。

ギンコ ビローバは、たしかに現世<sup>82</sup>では、上記の広範囲に区分された分類群のなかで、いまでも現生する唯一の種である。しかし、不確実な点は、今日でもまだイチョウの自然な生息が可能なのか、それとも、現生種はヒトによって保護される公園の木として生きのびられるだけなのかということである。自然な現生種の小分布圏にはほかならない、と折にふ

れて主張される発見地は、中国南東部、特に広東省と広西省<sup>カントン こうせい</sup>に位置している。野生生息ら

しい別の発掘物が安徽省と浙江省<sup>あんき せつこう</sup>からも報告された。ところが、こうした見解は異論の余地があり、一部の専門家によって認められていない。イチョウを「知恵の木」とか哲学的な「陰陽」原理(二元論)の象徴的担い手としてあがめ、寺院、墓地、並木道、家屋や鎮守<sup>ちんじゅ</sup>

---

<sup>82</sup> 現世(Rezente Zeit)は完新世に同じ。新生代第4紀の大部分である更新世につづく第4紀末期の約1万年間で、現在までの時代。

の杜<sup>もり</sup>などに植えて保護した、数百年来の東アジア的伝統がイチョウを死滅から救ったにすぎない、と反対論者は推測しているのである。

純粋な野生生息だという確証がそのうち現実に得られるものかどうか、現在すすめられているどのようなイチョウの研究がもっとも有意義なのか、あるいは現生種はもっぱら人手をくわえて生きのびたかどうかなどの疑問にかかわらず、ギンコ ビローバは、ダーウインのいう意味で「生きている化石」の範例と認められる。

イチョウは中国中央部からすでに 11 世紀には中国北部と日本へ伝わり、そこで崇拜され増殖された。1730 年ごろ最初の種子がオランダでまかれ、数年後に成長した若木が移植されている。18 世紀の 80 年代に、イチョウははじめて北アメリカへ持ち込まれた。

凱<sup>がいせん</sup>旋行進はとりわけ北半球ではじまった！ 今日ではイチョウ樹がニューヨークからベルリン、ドレーズデン、ケルン、バーゼル、ソウル、ブラジルまで各地の道路を縁どっている。

自然愛好家や樹木学者はいうにおよばず、芸術家もイチョウの大衆化と普及に貢献し、多くの国の政治家たちも記念栽培をおこなってきた。イチョウは、すでに絶滅した動植物の昔仲間として、人びとの空想をかりたて、美意識に訴えるとともに科学のうえでも興味深い木であることから、植物愛好家の心も、木<sup>もくほん</sup>本植物の専門家<sup>とりこ</sup>の心をも等しく虜<sup>とりこ</sup>にしているのである！



**図解 6：**クルト・ライン Kurt Lein 著『ヴェルトリッツ公園の高木と低木』（第 5 版、1983 年）の口絵、部分図。下方に、葉と種子をつけているイチョウの枝が見える。ヴェルトリッツ城（デッサウとヴィッテンベルク間のエルベ川岸にある）の地方公園は、1765 年以降につくられた。すでに 1798 年にはイチョウ樹が公園内に生育していたが、今日まで生きのびなかった。

#### 参考文献

Arnold, G. : Mündliche Informationen zu Pilzbefall auf Ginkgo-biloba-Blättern (1993) .  
Daber R. : 280 Millionen Jahre Ginkgo — Belegstücke zur Geschichte des Taxons Ginkgo

- L. aus den Sammlungen und Anlagen der Humboldt-Universität. In: 100 Jahre Arboretum Berlin (1879-1979), S. 259-279. Berlin 1980.
- Dietrich, H.: Zur fakultativen Monöcie bei *Ginkgo biloba*. — Botanikertagung, Bayreuth 1994, Tagungsband u. Poster.
- Dietrich, H.: *Ginkgo biloba* — Silberaprikose. Ratschläge zur Anzucht und Vermehrung. Volkswacht Jena vom 29.1.1987, S.8.
- Favre-Duchartre, M.: *Ginkgo* an oviparous plant. *Phytomorphology* 8, 377-390 (1958).
- Fontana, A.: Vesicular-arbuscular mycorrhizas of *Ginkgo biloba* L. in natural and controlled conditions. *New Phytol.* 99, 441-447 (1985).
- Gothan, W., H. Weyland: Lehrbuch der Paläobotanik. 3. Aufl. Berlin 1973.
- Hirase, S.: Etude sur la *Ginkgo biloba*. Note préliminaire. *Bot. Mag. Tokyo* 9, 239 (1895).
- Hirase, S.: Sur le spermatozoïde de *Ginkgo*. *Bot. Mag. Tokyo* 10, 325-328 (1896).
- Karstens, W. K. H.: Variability in the female reproductive organs of *Ginkgo biloba* L. *Blumea* 5, 532-553 (1945).
- Kiermeier, P.: Zur Problematik stadtfester Gehölze: *Ginkgo biloba*. *Das Gartenamt* 33, Heft 4 (1984).
- Klotz, G.: lebende Fossilien im Botanischen Garten der Friedrich-Schiller Universität. Reichtümer und Raritäten, Teil II, S.44-56. Jena 1981.
- Knaak, A.: *Ginkgo* — ein Baum, der allen Stürmen trotzt. *Natur* 2/92 (1992).
- Krüssmarr, G.: Handbuch der Nadelgehölze. Berlin/ Hamburg 1972.
- Michel, P.-F.: Ein Baum besiegt die Zeit. 4. Aufl. der deutschen Ausgabe. Ettlingen 1991.
- Newcomer, E. H.: Pollen longevity of *Ginkgo*. *Bull. Torrey Bot. Cl.* 66, 121-125 (1939).
- Newcomer, E. H.: The karyotype and possible sex chromosomes of *Ginkgo biloba*. *Am. J. Bot.* 41, 542-545 (1954) .
- Pulle, A. A.: Over de *Ginkgo* alias *Ginkyo*. *Jb. Nederl. Dendrol. Vereenig.* 15, 25-35 (1946).
- Sahashi, N., J. Ueno: Pollen morphology of *Ginkgo biloba* and *Cycas revoluta*. *Can. J. Bot.* 64, 3075-3078 (1986).
- Strasburger, E.: Lehrbuch der Botanik. 33. Aufl. Stuttgart/ Jena/ New York 1991.
- Schultze-Motel, J.: *Gymnospermae*, in: *Urania Pflanzenreich*. Moose, Farne, Nacktsamer. 1. Aufl. Jena/Berlin 1992.
- Yamazaki, T., M. Takeoka: Elektron-microscope investigations of the fine details of the pollen grain surface in Japanese gymnosperms. — *Grana Palynol.* 3, 3-12 (1962) .



## 4 イチョウの治癒力

ヴォルフガング・ツェーザル

### 4-1 歴史的展望

イチョウがわが国ドイツで薬用植物と認められたのは、それほど昔のことではなく、また原産地の東アジアでも、イチョウは薬剤というよりも、つねに食品の供給源であった。今日までイチョウの種子、いわゆる「<sup>ぎんなん</sup>銀杏」は、東アジアで珍味ともくされている。銀杏とは、秋に熟し、通常は土壤に落ちたあとで収穫される、悪臭をはなつ果肉質の外層を取り除いた<sup>はいしゆ</sup>胚珠のことである。「<sup>けんか</sup>堅果の殻」(Nußschale)にくるった<sup>なま</sup>実は生のまま、あるいは火を通して食べられるが、たいてい食前にあぶり、その際に特有の香りをはなつ。

銀杏は、殻につつまれ、食用に適した<sup>さね</sup>実がある点で、「<sup>こ</sup>木の<sup>み</sup>実」(Nuß)と呼ばれる食品に似ているが、脂肪分が少ない(3%)点に違いがある。おもな成分は<sup>でんぷん</sup>澱粉(68%)と<sup>たんぱく</sup>蛋白質(13%)である。

東洋医学(chinesische Medizin)は数世紀以前から銀杏にさまざまな薬用効果があることを知っている。とりわけ<sup>せき</sup>咳や<sup>ぜんそく</sup>喘息にきくが、夜尿症、神経衰弱、寄生虫疾患、さらには天然痘にさえも効能がある。ただし、銀杏が「特効薬」として使用されることはめったになく、薬用資源としてはむしろ副次的な役割をはたしてきた。西洋医学(naturwissenschaftlich orientierte Medizin)は伝統的な各臨床分野で、銀杏の治療効果をこれまで証明することができなかった。しかし、インヴィトロ<sup>83</sup>の実験によって、胚珠からの<sup>エキス</sup>抽出物が結核菌の繁殖を阻止する事実が明らかにされている。

イチョウの種子(銀杏)は、中華人民共和国の公的な<sup>ほう</sup>薬局方に記載されていないが、いわゆる<sup>Barfußarzt</sup>医師によって中国では今日も利用されている。同様のことがイチョウ葉にも当てはまる。イチョウ葉からつくられる、<sup>ほんそうこう</sup>絆創膏や茶は、<sup>ぜんそく</sup>喘息、高血圧症、耳鳴り、狭心症の薬として中国で用いられている。

---

<sup>83</sup> In vitro: 「ガラス容器(vitrum)のなかで」という意味のラテン語で、生物学用語としては種々の研究目的のために生体の一部分が「生体外に」摘出・遊離されている状態をさす。これに対し、「生体内に」自然のまま置かれた状態は、「生体(vivum)のなかで」という意味のインヴィヴォ(in vivo)という(辞典)。

すでにかかなり古くから、イチヨウ葉の調合薬がフランスでは静脈機能不全(venöse Insuffizienz)の治療に投与されている。しかし、ここでも同様に、当該民間療法の効能を裏づける、臨床研究はない。

ホメオパシー<sup>84</sup>にも、イチヨウ葉は利用される。チンキ<sup>85</sup>の原液ないし希釈剤は、同種療法をおこなう医者が認める薬物像(Arzneimittelbild)に応じて、特定の状況下で扁桃腺<sup>へんとうせん</sup>や頭痛の場合に投与されることがある〔文献9〕。

イチヨウが薬用植物として全世界に「凱旋行進<sup>がいせん</sup>」をはじめたのは、ようやく第二次世界大戦後のことである。60年代に、ドイツの一研究グループは、一定の処理によって得られたイチヨウ葉のエキスが血行促進性をもつ事実をつきとめた。それ以来、もともとイチヨウが処方されていなかった、次のような肉体的病苦の治療に、イチヨウ葉のエキスが投与されている。

- 大脳の血行不全ないし脳機能障害および
- 末梢<sup>まっしょう</sup>の血行不全（特に脚の）。

イチヨウ葉エキスはこれらの適応によってたちまち市場に広くうけいれられた。そうこうするうちにドイツ市場にでまわる、多種多様なイチヨウの調合薬品は、1992年になると3億7千万マルクの売り上げ（最終売価）をあげたが、これは全血行促進剤の1/3に相当する。

#### 4-2 イチヨウ葉の含有成分

イチヨウ葉の薬剤としての利用は、葉に含有されている、とりわけ二種類の成分型に基づく（表1）〔文献5〕：

- フラボノイド<sup>86</sup>および
- テルペノイド<sup>87</sup>（テルペンラクトン Terpenlactone）。

---

<sup>84</sup> Homöopathie。類似療法、同種治療法などともいう。健康体に与えると病症に似た症状を起こす薬品を、患者にごく少量与えて治療する方法。たとえば下痢に下剤を処方するなど。

<sup>85</sup> Tinktur：生薬をアルコールで浸出した液。

<sup>86</sup> Flavonoid。C<sub>6</sub>—C<sub>3</sub>—C<sub>6</sub>の炭素骨格をもった一群の植物色素の総称（辞典）。

<sup>87</sup> Terpenoid。イソプレノイドともよばれる。イソプレンを構成単位とする一群の天然有機化合物の総称（生

フラボノイドは、フラボン Flavon (フェニルクロモン Phenylchromon) —すなわち 3 個のリングからなる単純な化合物—から誘導される (図解 1)。フラボノイドは形態がきわめて多様であり、なんらかの形でおそらくすべての緑色植物に存在するが、一般には薬用植物と野菜用植物に格別豊富にふくまれている。

表 1：植物療法のなかで公認されているイチョウ葉の作用物質：フラボノイドとテルペノイド。

Substanz	Substanz
<b>Flavonoide</b>	
Flavonolglykoside	Epigallocatechin-3-O-gallat (EGCG) Epigallocatechin (EGC) Epigallocatechin gallate (EGCG) Epigallocatechin gallate (EGCG)
Flavonolglykoside	Epigallocatechin-3-O-gallat (EGCG) Epigallocatechin (EGC) Epigallocatechin gallate (EGCG) Epigallocatechin gallate (EGCG)
Flavonolglykoside	Epigallocatechin-3-O-gallat (EGCG) Epigallocatechin (EGC) Epigallocatechin gallate (EGCG) Epigallocatechin gallate (EGCG)
Flavonolglykoside	Epigallocatechin-3-O-gallat (EGCG) Epigallocatechin (EGC) Epigallocatechin gallate (EGCG) Epigallocatechin gallate (EGCG)
<b>Terpenoide</b>	
Terpenoide	Ginkgolide A, B, C, D, E, F, G, H, I, J, K, L, M, N, O, P, Q, R, S, T, U, V, W, X, Y, Z

通常フラボノイドは健康を増進させるが、例外もある。たとえば、イチョウ葉は、少量ながらも望ましくないビフラボン (Biflavan すなわち 2 個のフラボン基で構成される化合物) —ギンゲチン (Ginkgetin) とビロベチン (Bilobetin) —を含有するが、大部分は特殊エキス製造時に除去される (図解 1)。



図解 1：フラボノイドの主成分であるフラボンならびにビフラボン (ギンゲチンとビロベチン)。

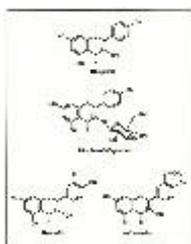
イチョウ葉にふくまれるフラボノイド型のなかでは、治療に格別有効なフラボノールグリコシド (Flavonolglykoside) —よく誤って「フラボングリコシド」 (Flavonglykoside) と呼ばれる—が、量のうえで他を圧している。フラボノールグリコシドはそのつど 1 個のフラボノールと 1~2 個の、ときには 3 個の糖成分 (Mono-, Di-, Triglykoside) <sup>88</sup>によって構成される。

フラボノールがフラボンと異なる点は、第 3 炭素原子 (C3) に水素原子ではなく、水酸基 (OH) が結びついていることである。ギンコーフラボノールグリコシド (Ginkgo-Flavonolglykoside) では、フラボノール誘導体の代表的なものはなかんずくケンフェロール (Kämpferol)、クエ

化学辞典)。

<sup>88</sup> Glykoside：「グリコシド」あるいは「配糖体」という。

ルセチン(Quercetin)およびイソラムネチン(Isorhamnetin) である(図解2)。(ちなみに、「ケンフェロール」とは、イチヨウの発見者であるエンゲルベルト・ケンペル<sup>89</sup>にちなんで名づけられたが、この命名はすでに19世紀半ばに、イチヨウではなく、別な植物の生薬学的研究との関連で生まれたものである。)このような化合物のもっともよく見られる糖成分は、グルコース(ブドウ糖)、ラムノース、それにルチノース(Rutinose)—つまりグルコース残基とラムノース残基からなる二糖(Disaccharid aus Glucose und Rhamnose)—であり、これら糖成分はふつう上に挙げたフラボノールのC3原子に結合した酸素原子と結びついている(3-O-Glykoside)。



図解2：フラボノール類：ケンフェロール、ケルセチンとイソラムネチンならびにフラボノールグリコシド：ケンフェロール-3-O グルコシド。

このような結合は、加水分解によって簡単に分離できることから、分析化学の分野で利用される。つまり、糖を切り離したフラボノールは、高速液体クロマトグラフィー(HPLC<sup>90</sup>)によって計測され、得られた数値が対応量のフラボノールグリコシドに「換算される」のである。

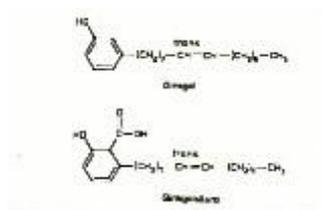
さらに別種のフラボノイド群として、植物界では広く分布しているが、治療の観点からさほど重要でない、プロアントシアニジン(Proanthocyanidin)をここに挙げておく。イチヨウ葉にふくまれるプロアントシアニジンの濃度は、8~12%、特殊エキスでは約5%である。

イチヨウ葉が含有しているテルペノイド類 Terpenoide に数えられるものは、5種類のギンコリド(A、B、C、J、M)とピロバリドであり、これまでただイチヨウ樹にだけ見いだされ、植物界ではほかに存在しないと思われる物質である。ギンコリド(Ginkgolid)は、数カ所で相互に結びつき、このようにして空洞を包囲する、6個の5環リング(sechs fünfgliedrige Ringe)から成り立っている。いわば「<sup>おり</sup>檻状の」構造となっているために、ギンコリドはきわめて安定している。ギンコリドの天然の代謝産物がピロバリドであり、ピロバリドは—5種類すべてのギンコリド全体と同じくらいに—わずか0.02%の濃度でイチヨウ葉に含有されている(図解3)。アメリカのE.J.コーリ Coreyは、なかならずギンコリドの合成で1990年にノ

<sup>89</sup> Engelbert Kaempfer 1651. 9. 16—1716. 11. 2。ドイツの博物学者、医者。

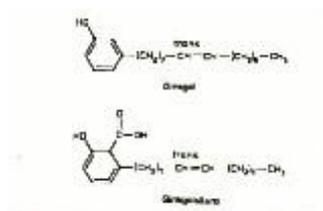
<sup>90</sup> HPLC = high-speed liquid chromatography

ーベル化学賞を受賞した [文献 1]。



図解 3 : ギンコリドとビロバリドは、イチョウにしか見られない物質である。

上記以外のイチョウ葉の成分は、表 2 から読みとれる。治療上望ましくない成分として、さらにギンコール酸(Ginkgolsäure)をここに特記しておきたい (図解 4)。ギンコール酸は、アルキルフェノール ギンコール(Alkylphenol Ginkgol)から誘導され、これと近い類縁関係にある物質ビロボル(Bilobol)、ギンノール(Ginnol)ならびにギンノン(Ginnon)—語源は日本語の「」=イチョウの種子—とともに、イチョウ葉よりもはるかに高い濃度で銀杏の外層に生じる。これらの物質は、毒性によって、病原微生物(pathogene Mikroorganismus)や昆虫に対するイチョウの驚くべき抵抗力に役立っているらしい。ヒトの場合には、特にギンコール酸が著しく皮膚を刺激するため、銀杏に触れるだけで炎症を引き起こすことがある。ちなみに、ギンコール酸は、ラックバウム Lackbaum(日本語でいう「ウルシ」、学名 *Rhus vernix*) や悪名高いギフトズマツハ Giftsumach (ツタウルシ *Rhus taxicodendran*)にふくまれる、ウルシオール (Urshiol) と構造が近い。



図解 4 : ギンコール(Ginkgol) とギンコール酸(Ginkgolsäure)

Gruppe	Substanzen
<b>Flavonoide</b>	
Biflavone	Amentoflavon, Bilabetin, 5-Methoxybilabetin, Ginkgetin, Isoginkgetin, Sciadopitysin
Proanthocyanidine	Prodelphinidine, Procyanidine
<b>Terpenoide</b>	
Polyprenoide	(zahlreiche, aus 14 bis 22 Isopren-Einheiten bestehende Stoffe)
Steroide	Sitosterol(-glucosid)
<b>Derivate von Kohlenwasserstoffen</b>	
Alkohol	Ginnol
Keton	Ginnon
Aldehyd	2-Hexenal (Blätteraldehyd)
Phenole	Ginkgol, Bilabol
Organische Säuren	(Hydro-)Ginkgolsäure, Shikimisäure, 6-Hydroxykynurensäure, Chinasäure, Ascorbinsäure (Vitamin C)

表 2：イチョウ葉のさらに別な含有成分（抜粋）

最後にイチョウ葉の含有成分について、約 2%の濃度で存在する、シキミ酸を追記しておく。シキミ酸は、多くの植物の生合成<sup>91</sup>で生じる重要な中間体<sup>92</sup>であるため、植物界では頻々と見られる。「シキミ」という名称も同じく日本語に由来し、ドイツ語のシュテルンアニスバウム(Sternanisbaum) —学名 *Illicium anisatum*—を意味している。

#### 4-3 イチョウ調合剤の薬学的性質

植物生薬(Phytopharmakon)は、化学的視点からみれば、純粋物質ではなく、多種混合物質であるが、現行の薬事法に基づけば、植物からの抽出物は、法律上一種の薬剤原料とみなされる。したがって、製造業者は、薬剤として許可を得るためには、エキスの効能と無害を証明しなければならないが、個々の含有成分に関する証明は不要である。

調合剤は、たとえ同一の植物からつくられたにしても、使用原料の性質に基づいて、いや、原料の調合過程で製法が違って、相互に著しく異なることがある。この点で、適用される抽出方法がきわめて重要である。

医薬品として用いられるイチョウ製剤の調合に関する公の規定は、ドイツには現存しないが、連邦保健庁(BGA)のE委員会(Kommission E)によって作成され、近ごろ公表された、2冊の個別論文は、<sup>モノグラフ</sup>薬剤製造業者が将来指針にしなければならない、新たな基準を設けている。連邦保健庁の植物生薬を所轄する部局は、当該論文のなかで、一方では一段と綿密に特徴づけた特殊エキスの効能を認めながら、他方ではイチョウ葉を原料にした別様の調合効果に疑問を投げかけている [文献 10]。現時点 (1994 年) では、連邦保健庁の意向にそわない、多数のイチョウ製剤がまだドイツでは市場にでまわっている。

<sup>91</sup> Biosynthese。 生体によっておこなわれる同化的反応の総称、代謝の一部をなす。人工による化学合成に対する語。

<sup>92</sup> 詳しくは、「芳香族化合物の生合成経路の中間体」(生化学辞典)。

イチョウ葉の場合には明確な含有物質の治療効果を検証することができ、したがって含有物質が作用物質であると確認されるので、イチョウ製剤の薬学上ならびに治療上の性質を保証するために有効な作用物質含有量を定める、規格統一が提案可能である。こうした根拠に基づてはじめて、推奨される製剤の配量が合理的に理解される。イチョウ葉には有毒物質の存在も確認されているため、完成医薬品に有毒成分がふくまれていないこと（ないしは危険のない低濃度）が、新たに重要な品質基準となる。

あらゆる植物薬と同じように、イチョウの抽出物も、単独では薬効がないか、あるいはわずかに効くにすぎないが、本来の作用物質と共鳴して製剤全体の効能に応分の寄与をすると考えられる（つまり付加効果のある）、いわゆる随伴物質をふくんでいる。科学は、植物製剤をもっぱら合理的基準にしたがって判定しうるほど、まだ進歩していない。その限りでは実践経験に、いわゆる経験医術が特に高く評価する、一定の位置価値がいまなお与えられてしかるべきである。

イチョウ抽出物が治療薬として製造されるようになって以来、その含有成分のパターンを治療要件に応じて変更する試みがなされてきた。こうした努力に長足の進歩をもたらしたのが、カールスルーエの W.シュヴァーベ社の EGb 761 とベルリンのリヒトヴェーア社の LI 1370 という特殊エキスである。純粋エキスを基礎にした調合薬剤は、フラボノールグリコシドの含有量が通常は 2% にすぎないのに対して、両社の特殊エキスは、24~25% に規格化されている。さらに、テルペンラクトン(ギンコリドとピロバリド)6%、ギンコール酸 0.005% 以下と含有量が保証されている。

連邦保健庁は、両特殊エキスを念頭におき、積極的に薬効を認めるイチョウエキスを、次のような含有成分によって特徴づけている。

- フラボングリコシド (フラボノールグリコシド) 22~27%
- テルペンラクトン 5~7%、そのうち約 2.8~3.4% はギンコリド (A, B, C)、2.6~3.2% はピロバリド
- ギンコール酸 5ppm (0.005%) 以下。

イチョウ特殊エキスの生産工程で水、アセトン（およびこれに類するメチルエチルケトン）、アルコール（エタノールまたはブタノール）、トルエン、ジ塩化メタンのようなさまざまな溶媒が一定の順序で投入される。その際、アセトンと水の混合液は一次抽出物の産出に不可欠であり、その他の化学物質は浄化と価値の引き上げ（作用物質の濃縮）に役立つ。およそ 20 工程を経ると、もはや出発物質の 50% にしか当たらない（薬とエキスの割合 = 50:1）、乾燥エキスが得られる。患者が早く服用できるように、乾燥エキスは適当な形

にして提供する必要がある。格好な形状としてカプセルや<sup>93</sup>が実績をあげている。

#### 4-4 イチョウ特殊エキスの適用

高齢になると頻繁に大脳（脳性）や四肢（末梢性）に発症する、血行不全には、植物療法主義の見地からみれば、イチョウの特殊エキスが適正である（図解5参照）。

- 脳性血行不全は物質代謝<sup>94</sup>の減退、ついには神経細胞の原因となり、そのたびかさなる反復は、いわゆる多発性・につながる。
- 末梢性血行不全はとりわけ脚を襲う。血行の低下は苦痛をとめない、患者を歩行中にしばしば立ちどまらせる（「ショーウィンドー病 Schaufensterkrankheit」）。このような血行不全が高じると、組織の壊死（）につながり、それによって特に重症の場合には切断が必要となる。
- 脳の諸部分（たとえば前庭<sup>ぜんてい</sup>Vestibulum＝内耳迷路の前庭 Vorhof des Ohrlabyrinths）

における血行不全は、めまいや個人的に知覚される笛とか風とかベルのような耳鳴（Tinnitus）の（一つの）原因となる。

最初に挙げた二例の適用では、個人の治療効果を判定するために、少なくとも6~8週間の長期治療が必要であり、その後も場合によっては同一の治療法をつづけなければならないが、最後に挙げた苦痛に対するイチョウ特殊エキスの加療は、6~8週間をこえないほうがよさそうである。

イチョウの治癒力でもっとも注目すべきものは、神経保護（神経細胞を守る）作用であり、またその限りでnootropな（脳機能を維持ないし改善する）作用である。それゆえ、イチョウ特殊エキスは向精神薬(Nootropika)<sup>95</sup>の薬物群に仕分けられる。同エキスは、老年期に頻繁に発症する病苦をやわらげることから、非科学的な通り言葉で、「老人病治療薬 Geriatrikum」とも呼ばれている。

---

<sup>93</sup> Tropfen. 微量で効果をあげるために、調剤の際の用量を滴数で示す薬液。

<sup>94</sup> Stoffwechsell. 生体内でおこなわれる物質の変転全般をいう。

<sup>95</sup> 中枢神経系に作用して精神状態に影響を与える薬剤の総称。鎮静剤・睡眠剤・精神安定剤・抑鬱治療財・覚醒剤・幻覚剤など。



図解 5 : 連邦保健庁E委員会の視点からみたイチョウ特殊エキスの適用領域 [文献 10]

#### 4-5 イチョウ特殊エキスに関する薬理的研究

上述のイチョウ特殊エキス EGb761 や LI 1370 の血行増進作用は、細胞培養（<sup>イン・ヴィトロ</sup>体外の）もしくは実験用動物によっておこなった、種々の薬理研究で明らかに実証されている [文献 6、8、9]。この血行増進作用は、一部は血管の拡張によって、また一部は血液の流動性の改善によって実現される。詳細にふれるなら、エキスの作用はなかならず下記の諸点にあらわれる（表 3 参照）

表 3 : イチョウ特殊エキスの薬理作用一覧。（文献 [8]、25 ページによる）

- |   |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"><li>□ 下記の低下<ul style="list-style-type: none"><li>—全血もしくはの粘性</li><li>—赤血球の凝集</li><li>—血小板の凝集</li><li>—フィブリノゲン<sup>96</sup>値</li></ul></li><li>□ 下記の向上<ul style="list-style-type: none"><li>—赤血球の柔軟性</li><li>—白血球の柔軟性</li></ul></li></ul> |
|---|

#### 酸素基(Sauerstoffradikal)の不活性化

- 下記の抑止
  - 脂質<sup>97</sup>過酸化(Lipidperoxidation)
  - 球のラジカル産生(Radikalproduktion von Granulozyten)
- プロスタサイクリン合成の向上
- 虚血後の修復過程促進

<sup>96</sup> Fibrinogen: 繊維素原ともいう。血液凝固因子の一つで、血漿中にある分子量約 34 万の糖蛋白質(辞典)。

<sup>97</sup> 糖質や蛋白質とともに生体を構成している主要な有機物質群(辞典)。

---

## 血小板活性化因子(PAF)の作用

- 血小板活性化因子によって誘発されるものの抑止
  - 血小板凝集
  - Ca<sup>2+</sup>集積
  - 細胞に有毒な
  - 虚血後の細胞損傷
  - 白血球活性化

### 神経保護(Neuroprotektion)

- 細胞に有毒な水腫の抑止
- 低酸素耐性の向上
- 低酸素と虚血状態における神経細胞の物質代謝改善

- 上記特殊エキスは、多くの慢性疾患—特に血管系疾患もふくむ—の<sup>98</sup>として知られている、いわゆる遊離基を不活性化させる。(遊離基は、たとえば一定のホルモン機能障害を経て血管のを引き起こすと同時に、栓球=血小板の凝集をうながす結果、血流が減速する。) イチョウ製剤において、いわゆる遊離基の捕獲者として作用するのは、とりわけフラボノイドである。
- 特殊エキスは、同じく血小板凝集とその健康障害作用に対して責任がある、血小板活性化因子(PAF)<sup>99</sup>を抑止する。イチョウ製剤のいわゆる PAF (PAF の役) としては、特にギンコリド B が挙げられる。
- 特殊エキスは赤血球の凝集を下降させ、同時に赤血球の柔軟性を高める。

さまざまな効能の相互作用は、特に虚血<sup>100</sup>—しばしば一時的で範囲も狭く局限された血流中断—の場合に明らかになる。このような一時的虚血性の発作は、かなり年をとった人びとの場合には脳に発症することが多く、閉塞された血管から通常は血液の補給をうけている神経細胞に、わずか数瞬間で絶命しかねない、低酸素症(酸素欠乏)をひきおこすのである。ところが、イチョウの特殊エキスは、次のことによって、細胞の低酸素に対する耐性を向上させる—

---

<sup>98</sup> Auslöser。動物のもつ、同種他個体の特定の行動的反応を解発するような機能をもった特性。その特性には形態・色彩・音・におい・身振り・行動などが含まれる(辞典)。

<sup>99</sup> (独) Plättchen-aktivierender Faktor、(英) platelet activating factor

<sup>100</sup> 虚血(Ischämie)とは要するに局所の貧血のこと。

- エネルギー代謝を低酸素のもとでも相当長時間維持し、
- 低酸素の場合に食塩の流入によって細胞内にひきおこされる、細胞に有害な水腫<sup>すいしゅ</sup>の発生を妨げるか、もしくは水腫の退化を加速させ、
- 閉塞<sup>へいそく</sup>した血管の再血行 Wiederdurchblutung (再 Reperfusion) の際に特に数多く形成される、遊離基を「捕らえて取り除く」か、もしくは不活性化させる。

ただし、イチョウ特殊エキスは、当面の危険時に生きのびる可能性を高めるばかりではない。規則的に服用すれば、低酸素の危険な状態も一血管の血液灌流<sup>かんりゅう</sup>を改善するために一以前よりもまれにしかあらわれなくなる。

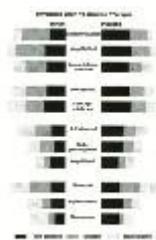
#### 4-6 臨床研究と適用の観察

薬理研究だけではなく、臨床研究、すなわち患者を相手に実施した調査でも、脳の機能低下がイチョウ製剤の服用によって効果的に治療されることを裏づけている [文献 2-4、7-9]。1992 年に 40 例の臨床研究がまとめられ、ただ 1 例の例外を除き、すべて良好な結果をだしているが、研究方法について有効な質が求められる厳格な基準にかなったものは、そのうちの 8 例だけである。いずれにせよ、相当厳密な<sup>質</sup> 選択においても、イチョウエキスのすばらしい治療成果が、おおよそ精神遅滞(Hirnleistungsschwäche)の症候にはつきりみてとれる。

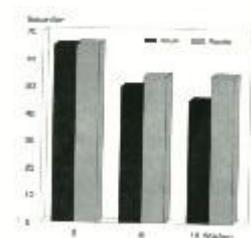
たとえば、ドイツ一般医専門同盟のプラシーボ<sup>101</sup>を用いて検査する、複合系の(Doppelblindstudie)によって、脳器質性精神症候群の患者に対して 12 週間の治療期間にイチョウ特殊エキスを毎日 150 mg 投与した場合の薬効が検証された (文献 [2]、9-14 ページ)。さまざまな症候の変化は図解 6 に示してある。

---

<sup>101</sup> Plazebo、偽薬。臨床医薬の効果検定の際に対照として投与される、薬理的にはまったく無効、もしくはやや似た薬効をもつ物質。薬剤投与の心理的な効果を排除する目的で用いられる。薬剤投与のもたらす暗示効果 (プラシーボ効果) の影響が大きいことが判明して以来、医薬の人体投与検定には、試験者と被験者双方に薬剤と対照としての偽薬の区別を知らせずに投与し、第三者の判定者だけがそれを知る二重盲検法 (ダブルブラインドテスト double blind test) が採用されている (辞典)。



図解 6：精神遅滞の典型的な症状と、イチョウ特殊エキス治療（左側）ないしプラシーボ投与（右側）12 週間後の症状変化（文献 [2]、11 ページによる）。



図解 7：イチョウ特殊エキスで治療された精神遅滞患者(Verum)と、プラシーボを服用した精神遅滞患者(Placebo)にみる数字結合テストの結果。参考：健常者は課題の解決に約 30 秒を要する（文献 [2]、12 ページによる）。

記憶力の向上は、特に数字結合テストによって立証された。つまり、イチョウ特殊エキスを摂取した者は、紙のうえに不規則に配置された 30 個の数字を算術級数順に線をつなぐという課題を、対照グループよりもすばやく解くことができた（図解 7）。

血行障害が病因であるために、イチョウ葉の作用物質に反応を示す、多発性症 (Multiinfarktdemenz)に限らず、イチョウ特殊エキスは、まったく別の原因（いわゆる「脳内ケーブルの火災」）によるアルツハイマー型痴呆症の場合にも効果をあらわすことが注目される。その作用過程はまだ完全に解明されていないが、酸素の不活性化（「ラジカル Radikalfang」）が決定的な意味をもっているものと推測される（表 4 の調査結果）。

表 4：アルツハイマー型痴呆、多発梗塞性痴呆ないし混合型患者のイチョウ特殊エキスによる 12 週間後の治療成果。評価はそのつど治療医によっておこなわれた（文献 [2]、42 ページによる）。

痴呆の種類	治療成果				
	非常によい	よい	あまりよくない	悪い	合計
変性痴呆	867 30%	1424 48%	524 18%	120 4%	2935 100%
混合型	895 26%	1735 50%	679 20%	147 4%	3456 100%
多発梗塞性	1036	2068	890	193	4187

痴呆	27%	49%	21%	5%	100%
全患者	2798	5227	2093	460	10578
	27%	49%	20%	4%	100%

連邦保健庁によって承認された適応症、「末梢<sup>まっしょう</sup>動脈症」（いわゆる「ショーウィンドー病」）または「めまい」と「耳鳴<sup>じめい</sup>」に対しても同様に多数の臨床研究があり、それらの論文はなかならず参考文献 [9] に引用されている。

イチョウ特殊エキスを使用した場合の利点は、不都合な作用（「副作用」）がめったにあらわれないことである。たとえば、特殊エキス「LI 1370」を摂取した患者 10,815 名に対する適用観察例で副作用を起こした割合は、わずか 1.69% にすぎないが、対照グループに投与された、さまざまな別の向精神剤は、5.42% の比率を示している（文献 [2]、42 ページ）。

#### 4-7 ほかにもまだ役立つものが…

イチョウ製剤の治療価値に疑問の余地がないとしても、上に挙げた体痛の治療にはイチョウ製剤の薬効だけにたよらず、他の措置も「治療計画」に組み込むべきであろう。たとえば脚の血行不全症には、集中的な歩行訓練もおおいに重要である。同じく脳機能障害の場合には、規則正しい記憶訓練（たとえば頭脳ジョギング）がきわめて重要である。そのうえ、特に年輩者は健康増進によい食事、社会的接触の促進と積極的な生活形成にも留意すべきであろう。

要するに、イチョウエキスは万能薬ではなく、高齢でも健康を維持するために役立つ、いろんな手段の一つとみることができる。

#### 4-8 展望

イチョウ葉のはかなり新しい薬剤である。多種多様な変型と調剤の形で、わずかな歳月のうちに大きな市場を「獲得」し、それと平行して、同じく急速に抽出物のもっとも重要な内容成分の化学構造と作用方式が解明された。この事実は、1994 年に植物生薬を所管する連邦保健庁 E 委員会によって効能が認められた、特殊エキスには格別大きな意義がある。

今後の新たな研究は、エキスよりも強力で特殊な効果をもつ、単離したイチョウの作用物質を治療に導入する道を切り開くことができるのではないかと思われる。もしかすると、ギンコリドとピロバリドこそ、まさに合成 PAF（血小板活性化因子）拮抗<sup>きっこう</sup>薬開発のためにも、有用なモデル物質であるかもしれない。

#### 4-9 参考文献

- [1] Sticher, O., A. Hasler, B. Meier: Ginkgo biloba — eine Standortbestimmung. Deutsche Apotheker Zeitung 131, 1827—1835 (1991).
- [2] Hartmann, A., V. Schulz (Hrsg.): Ginkgo biloba: Aktuelle Forschungsergebnisse 1990/91. Münchener Medizinische Wochenschrift 133, Suppl. 1 (1991).
- [3] Schulz, V., H. Schilcher: Schulmedizin bestätigt die Wirksamkeit eines Ginkgo-biloba-Spezialextraktes. Ärztezeitschrift für Naturheilverfahren 10, 789—801 (1991).
- [4] Schulz, V., C. Fassold, W.-D. Hübner, D. Laudahn: Altersdemenz — Ginkgo-Spezialextrakte führend in der Therapie. Der Allgemeinartz 14, 590—596(1992).
- [5] Hölzl, J.: Inhaltsstoffe von Ginkgo biloba. Pharmazie in unserer Zeit 21, 215—223 (1992).
- [6] Oberpichler-Schwenk, H., J. Krieglstein: Pharmakologische Wirkungen von Ginkgo biloba-Extrakt und -Inhaltsstoffen. Pharmazie in unserer Zeit 21, 224—235 (1992).
- [7] Herrschaft, H.: Zur klinischen Anwendung von Ginkgo biloba bei dementiellen Syndromen. Pharmazie in unserer Zeit 21, 266—275 (1992).
- [8] Reuter, H. D.: Spektrum Ginkgo biloba. Aesopus Verlag, Basel 1993.
- [9] Hänsel, R., H. Koller, H. Rimpler, G. Schneider (Hrsg.): Hagers Handbuch der Pharmazeutischen Praxis, 5. Aufl., Bd. 5: Drogen, E0, S.269—292. Springer-Verlag, Berlin u. a. 1993.
- [10] Bundesgesundheitsamt, Kommission E (Phytotherapeutische Therapierichtung und Stoffgruppe): Monographie: Trockenextrakt (35-67:1) aus Ginkgo-biloba-Blättern, extrahiert mit Aceton-Wasser. — Monographie: Ginkgofolium (Ginkgo-biloba-Blätter). Bundesanzeiger S.7361 vom 19. Juli 1994.



## 5 日本のイチヨウ

加藤温子

日本では北から南まで津々浦々にイチヨウの古木が多数存在する。多くは県の天然記念物に指定され、特別の保護下におかれているが、日本じゅうを旅して眺めれば、これまでリストアップされていなかった、巨大な高木も見かけられた。



イチヨウ樹はよく寺院や墓地近辺の高台にあり、あるいは集落のうえに、あたかも象徴のように、そびえたつものもある。イチヨウの生命力と奇跡の約束のために、精霊の住みかとして崇拝され、同時に恐れられてもいる。

昔から高い山や岩、大きい木々や滝などが民間信仰に根づいていたように、イチヨウもまた人びとの奇跡によせる信仰とかかわりがあった。

自然の願望がイチヨウと結びつき、女性は赤ん坊のために母乳を授かりたいと願い、農夫は稲作のために<sup>あまご</sup>雨乞いをした。イチヨウ樹は日本の神話、史書、民話、伝説などに入りこんでいる。太古の高木は数々の天災、大火、さらには原子爆弾の炸裂<sup>きくれつ</sup>にさえ堪えて生きのび、無言のうちに悲惨な人類の歴史を伝え、将来にむかって私たち人類が忘れてはならない重要なことについて注意をうながしているのである。

日本の最西端に位置する<sup>つしま</sup>対馬と呼ばれる島の村落—<sup>かみあがた</sup>上 県郡—の<sup>きん</sup>琴に、樹齢 1,500 年以上といわれる、イチヨウの大木がある。1798 年の落雷と火災、1950 年の台風や幾多の自然災害を乗り越え、今日まで生きのびている。それゆえ、この木のことを「対馬の親木」(対馬の老木)と呼び、古い民謡にも「琴の銀杏の木、対馬の親木と呼び、胴の周りが 30 と 5<sup>ひろ</sup>尋」(1 尋とは両手を横に広げた長さ、6 尺、約 1.8m)とうたわれている。幹は落雷に見舞われ、焦げて空洞になっているが、樹勢はいまなお旺盛である(図版 6 参照)。

九州は熊本城の前に、武将の加藤清正公(1562-1611)がみずから植えたとされるイチヨウの木がある。当樹にちなんで熊本城は「<sup>ぎんなんじょう</sup>銀杏城」(<sup>ちばじょう</sup>千葉城)とも呼ばれる。270 年後に城は西南戦争(1877 年)で炎上し、イチヨウ樹も焼けうせてしまった。ところが、その後 100 年以上の歳月を経て、古い樹幹から新芽が吹きだし、いまや幹囲 2.7 尺、樹高約 20 尺の高木に成長している(図解 1)。



図解 1:熊本城ほとりの雄性イチョウ樹。加藤清正公によって 1600 年に植樹されたという。

熊本県鹿本郡植木町滴水のイチョウ樹は、平家（平の姓を名乗る一族）最後の落人たちのために墓標として植えられた（1200 年前後）、と語りつがれている。高さ 42 尺に達し、当地を見おろすように、かつての寺院「竜雲庵」の境内にそびえている。イチョウの下手には、朽ちて傾いた一体の仏陀像が鎮座する、阿弥陀厨子があり、幹の根元ぎわには天分 2 年（1533 年）に刻まれた小佐井掃部頭の板碑と五重塔が建っている。伝説によれば、イチョウ樹の運命は次のとおりである：—

「今から 200 年位昔のこと、増田門三郎という人がいて、ある日村の若者達と、この樹を切って薪にしようと相談していました。その夜のことで、彼はうつらうつらとまどろみ、夢の中でいつしか昼間話していた銀杏の樹の前に立っていました。すると掃部頭の板碑の陰から、透きとおるように美しい女の人が現われました。不思議な顔をしている青年に、その女は『この樹を切らないで下さい。これは私の住家です。どうぞお願い…』。すがる様な瞳をした女は、またふんわりと樹の中に消えて行きました。ハッと眼がさめた門三郎は夜明けが待ち遠しく、銀杏のところへ駆けつけました。不思議な夢！ 門三郎が佇みながら樹を見上げていると、真白い小さな蛇がするすると樹の間に現われて、ジーッと青年を見つめていました。女性は白蛇の化身だったのです。その後、銀杏は切り倒されずに生き残りました」

熊本県阿蘇郡小国町下城の小さい丘に、樹齢 1,000 年を超えると見積もられる、イチョウの雌性樹がある。樹高約 25 尺。樹下には、城主上総介経賢の母〔妙〕の墓所ともいわれる、五輪の古塔がある。イチョウ樹はさしずめ墓標として植えられたと考えられるが、伝説の伝えるところによれば、追放された恋びとを尋ねて国をさまよう、高貴な女人が、道中で亡くなった乳母の墓のかたわらにイチョウを植えたという。村人は本樹に「チコブサン」という愛称をつけたが、由来は石状の異常な増殖物による（「チ」ないし「チチ」＝「乳」、「女性の乳房」；「コブ」＝「腫瘍」、「瘤」）。乳の出が悪い女性は、この「下条の大イチョウ」に祈り、イチョウの「乳房」を少し削りとり、煎じて飲めば、母乳

の出がよくなるという。運よく願いがかなった婦人たちは、お礼参りに織物で形づくった乳房を木にかけるのが土地の習わしであった。

上川端町かみかわぼたちょうの櫛田神社境内にあるイチヨウは、樹齢 1,000 年を超えると思われる、福岡県博多市最古の樹木である<sup>102</sup>。樹高 30 ㍎、幹囲は 16 ㍎ある。幾多の災難や台風に堪え、人びとは不老長寿の神木としてうやまい、文字どおり見あげている。民謡もイチヨウを詩でたたえる—「さても見事な櫛田のぎなん、枝も栄ゆりや葉も繁る」。本樹の自然霊を慰め、木の長寿を祈るために、毎年 3 月 12 日に盛大なイチヨウ祭りが催されている。

福岡県遠賀郡水巻町大字立屋敷おんが みずまきまち たてやしき〔字丸内〕に鎮座する八劔大明神やつらぎのイチヨウは、樹齢 1,800 年以上と推定される。〔現在は〕、遠賀川の近く〔土〕にあり、22 ㍎の樹高と 9.7 ㍎の幹囲をもつ。このイチヨウ樹は、戦で武勲をたてた神話上の英雄、日本武尊ヤマトタケルノミコトが 砧姫きぬたとの〔別れを〕恋のしるしに〔一枝を地に挿し〕たものであるといわれている<sup>103</sup>。

さて、私たちは九州地方を去り、豊後水道を隔てた東隣に横たわる、数多い巡礼地で有名な島—四国—へ渡ることしよう。四国には、きわめて多くの神社仏閣と数多くの堂々たるイチヨウ樹が存在するが、ここでは東部の徳島県だけにとどめたい。最大にして最古のイチヨウ樹は、板野郡上板町かみいたちょう瀬部せべの乳保神社にゅうほにある。樹齢約 900 年から 1,000 年と推定され、樹高 30 ㍎、根まわりはおおよそ 20 ㍎に達する。無数の「乳」(気根)が垂下し、そのいくつかは地面にまでとどいている(図版 6 参照)。当宮はもと「檜山」神社と称したが、約 200 年前から(寛政年間以降)、「乳保」(「母乳を保ちつづけること」)神社と呼ばれる<sup>104</sup>。神聖なイチヨウ樹は昔から、乳の出が悪くて悩む婦人が、だれにもさとられずに短冊たんざくを「乳房」の一つに結びつけると、御利益ごりやくがあると信じられている。

その昔、また別の信仰も広まった。神社と隣り合った「銀杏庵」いちようあんの庵主に頼み、本尊の「観音さん」かんのんに祈願してもらって、供え物の紙をイチヨウの「乳房」にくくりつければ、祈りは聞き届けられるという。こうして今世紀の 30 年代までは、多数の短冊がイチヨウにびっしり並んでつるされていた<sup>105</sup>。

<sup>102</sup> 通称「櫛田の銀杏」の「樹齢は不明だが、本樹木保存記念碑には樹齢 1000 年以上と記されている」(福岡市教育委員会文化財整備課のホームページ参照)。

<sup>103</sup> この節の割注は、八劔神社宮司伊高正和氏の教示に基づく。

<sup>104</sup> 上板観光協会によれば、乳保神社は「おいっちゃん」とも呼ばれている。

<sup>105</sup> 「長曾我部軍焼き討ちの折には水を吹いたという伝説も伝えられている」(『徳島県神社誌』、1981 年発行、276 ページ)。

名<sup>みょうざい</sup>西郡石井町高川<sup>たかがわはら</sup>原字天神の天満神社境内にあるイチヨウも、推定樹齢約 900 年、樹高約 38 ㍎、幹囲 10.5 ㍎で、格別に長い「乳房」のため、大いにあがめられている<sup>106</sup>。

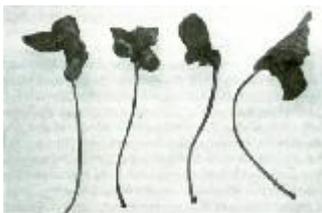
名西郡神山町<sup>107</sup>の地蔵庵に高さ 20 ㍎の木がある。幹囲 5 ㍎、多数の「乳房」を有し、樹齢約 500 年と推定される（図版 6 参照）。このイチヨウは夜になると恐ろしい音を響かせたとか。村人はこわがり、日暮れになれば、「さっさと家に帰りな。そうでないとひどい目にあうでよ」、と言いついていた。ほかにも、長い「乳房」のどれか一つが地面にとどけば、災いが起こるといった古い言い伝えもある。

石井町高川<sup>なかしま</sup>中島の新宮本宮両神社のイチヨウ樹は、落雷で燃えだし、焼けこげたが、いまなお健在である。源義経の家臣、那須与一<sup>なすのよいち</sup>宗高という<sup>鎌倉初期</sup> 武将は、屋島の合戦（1185 年）でみごと扇の的を射抜くことができ、神への感謝の気持からイチヨウを植樹したといわれる<sup>108</sup>。それゆえ、当の神木は「矢神のイチヨウ」と呼ばれる。

県道の中央に、樹高 20 ㍎、幹囲 4.2 ㍎におよぶ東林庵<sup>とうりんあん</sup><sup>109</sup>のイチヨウ樹が立っている。樹齢は 450 年以上である（図版 6 参照）。県道が建設されたとき、村は高額賞金をかけてイチヨウ樹を伐採してくれる者をつのった。しかし、村人たちは猫も杓子も伐木をこわがり、おかげで老木は生きのび、いまも木を避けて往来しなければならない。

東林庵<sup>とうりんあん</sup>には、1,000 個以上の球<sup>たま</sup>でできた、全長 19 ㍎ほどもある、大きい数珠<sup>じゆず</sup>が保存されている。数珠は大きなイチヨウの枝を削ってつくられたという。毎年 2 回の縁日に、村人が寄り集まり、念仏をとえながら、その数珠をまわす習慣がいまも残っている。

勝浦郡坂本の「お葉つき銀杏<sup>ぎんなん</sup>」と呼ばれるイチヨウ樹は、種子が「葉についている」ことから、この名がついた。こうした奇形は一種の隔世遺伝<sup>110</sup>とみられている（図解 2）。



図解 2：勝浦郡坂本の「お葉つき銀杏」の葉。葉にイチヨウの種子が付着する。この種の現

<sup>106</sup> 石井町ホームページにより原文を少し修正した。

<sup>107</sup> 原文では「今山堤」とあるが、ここは「大久保の乳銀杏」を対象にしていると思われる。

<sup>108</sup> 原文には「中島の王子神社」、「壇ノ浦の戦い」とある。

<sup>109</sup> 住所：徳島県勝浦町大字生名字屋敷 73-2。

<sup>110</sup> Atavismus。先祖返りまたはその一種で、通常、子供が祖父または祖母に似ること。F<sub>2</sub>における劣性形質の分離は著明である（辞典）。

象はごく少数のイチョウ樹にかぎって起こる。

阿波北嶺薬師第 19 番霊場長谷寺（鳴門市撫養木津）には手入れのよく行き届いた雌性高木が華麗な大枝を広げている。そのために、円形の「三ツ銀杏葉紋」が寺院の入口の梁（「幕板」）に透かし彫りとしてほどこされているばかりか（図版 9 参照）、屋根瓦の飾りにもなっている。寺院は約 500 年前に建立されたが、そのときすでに「長谷寺の銀杏」は存在していた。

次は、四国から日本の内海（瀬戸内海）を経て、本島（本州）へ渡るとしよう。まず、広島には、幹が燃え、火力で空洞になりながらも、投下された原爆に堪えぬいたことで、天下に名高いイチョウが何本かある。

〔広島大学原爆死没者慰霊行事委員会による〕<sup>111</sup>調査報告書、『原爆と広島大学〈生死の火〉学術編』には次のような報告がある。「イチョウは被爆した樹木の中でも再生力が強く、新芽を盛んに生じた。被爆後 1 カ月の間は、この付近の焼けた樹木は neurospora 菌〔アカビ菌〕が多数発生して、紅赤色に彩られた。爆心地から 2000m~3000m では枝の枯死するものもあったが、幹からは秋または翌春に新芽の形成が旺盛であった…」

このようなイチョウ樹が、爆心地からわずか 800 m しか離れていない、寺町の報専坊境内にある。幹の上部は被爆側が空洞になりながらも、樹木は原爆に堪えて生き残った（図版 7 参照）。そればかりか、イチョウは寺院までも守り、当寺は区域〔広島市中区〕で焼け落ちなかった唯一の神社仏閣だといわれている。

広島県で最も太いイチョウ樹（幹囲 9.6 m、樹高 18 m）は、比婆郡高野町上高野にみられる。長い瘤にちなんで、「乳さがりのイチョウ」（「乳房—気根—の垂れ下がっているイチョウ」）といわれる。幹囲の第 2 位には、山県郡筒賀村のイチョウ—幹囲 7.8 m、樹高 48 m、樹齢 1,100 年以上—がつづく。言い伝えによれば、ある元旦の朝早く、一羽の鶴が飛来し、高木のでっぺんにとまった。鶴はくちばしから何かを地面に落として飛び去った。春になると、イチョウ樹の下に稲の苗が生えそろうていた。やがて幾人かの村人が沼地を稲田に開拓し、村は次第に大きく豊かになっていった。数年後、鶴はふたたび飛来し、大銀杏の頂にとまり、喜々として鳴き声をあげた。以来、「鶴の賀の村」（「鶴の祝賀を受けた村」）と呼ばれ、音韻がつまって「筒賀村」になったとか。

京都の東本願寺と西本願寺のイチョウ樹のなかで特に興味深いのは、「逆さ銀杏」（「さかさまのイチョウ」）である（図解 3）。樹齢は不明だが、西本願寺本堂建立の年、すなわち 1635 年以降のものであると推定されている。つまり、この「大銀杏」は、1788 年と 1864 年の大火を二度までも生き抜いているのである。

<sup>111</sup>（ ）内は著者自身の補注。



**図解 3:** 京都西本願寺境内のイチョウ樹は、枝を広く張っているため、「逆さ銀杏」（「さかさまのイチョウ」）といわれ、二回の大火を切り抜けた。

亀川正史<sup>かめがわまさし</sup>著『本願寺おもしろ散歩』には、「逆さイチョウ 天然の消火栓、水を吹いて両堂守る」との見出しでこうしている<sup>112</sup>。「昔から恐ろしいものとして、地震・雷・親父と共に挙げられるのが火事。…本願寺は紀伊<sup>さきもり</sup>鷺森、泉貝塚、大阪天満と寺基を移し、結局豊臣秀吉（1536—1598）の寄進で 1591 年に現在地に移転しました。しかし記録によると 1617 年 12 月 20 日浴室から出火し、両堂をはじめ対面所など大部分を焼失してしまいました。さらに 1788 年 1 月、京都に大火が起こり、火の手は本山を襲ったのですが、阿弥陀堂門、接待所など一部を焼いただけで、再建された現在ある両堂は危うく難を逃れました。どうしてでしょうか？

御影堂門を入ると、横に広がる大木が目に入ります。これはイチョウなのですが、普通は天に高くそびえるのに対してまるで反対なので、古くから『逆さイチョウ』の名で親しまれています。苗木の時に逆さに植えられたから、横に広がる状態になった、という説がいられています。イチョウには耐寒耐暑性があり、所によっては、防風・防火林として用いられています。さらには水分を多く含んでいることから、天明火災（1788）の時、高温にさらされて一気に水を噴き出したのです。樹齢 300 年といわれているのを信用すれば、現在地に移った後に植えられたということでしょうが、元和<sup>げんな</sup>の火災（1617）の時はまだ若木のため水を出す能力がなかったのでしょうか。しかし天明の時（1788）には立派に成長していたため、水を噴いて火をくい止め、両堂を守ったのです。実はそういう理由で異称『水噴きのイチョウ』として『本山七不思議』の 1 つに数えられてきました。まさかイチョウが勢いよく水を噴くわけがないのですから、あくまで伝説として古老たちは語り継いできました。しかし、元和の火災後、先達の苦勞で再建された文化財であるこの両堂を災害から守り、後世の人にみ教えと共に伝えていかなければならないことを、このイチョウを借りて古老は言いたかったのではないのでしょうか。」<sup>113</sup>

<sup>112</sup> 著者の補注にしたがって一部を増補改訂した。

<sup>113</sup> なお、本願寺のホームページによれば、「御影堂の前にある大銀杏は、根っ子が上に伸びているように

岐阜県高山市<sup>そうわまち</sup>総和町、飛弾国分寺の「大イチョウ」<sup>おお</sup>について、民話はこう伝えている。

天平時代<sup>てんぴやう</sup>（729－749）に塔の建築を命じられた、飛驒一と誉れ高い工<sup>たくみ</sup>は、棟梁<sup>とうりやう</sup>として精

魂を傾けるが、あるとき、弟子たちが柱を誤って短く切ってしまった。この窮状を救ったのが娘の八重菊<sup>やえぎく</sup>である。「お父さま、短い分だけの桁組を造ってのせたらどうですろ」。「七重の塔」はみごとに完成し、特に美しい桁組の評判は日増しに高まった。棟梁はおのれの名があがるにつれて、なんとしても秘密を守りとおそうと思うようになる。あげくのはてに、棟梁は娘を殺して死体を塔の近くにうずめ、その目印にイチョウを植えた。本樹はおよそ1,200年まえに生をうけ、夭折<sup>ようせつ</sup>した八重菊に代わって天にそびえている。さらに、このイチョウもまた母乳の足りない婦女をたすける、といった授乳信仰がうまれ、「乳イチョウ」（「乳房の銀杏」）とも呼ばれる。樹高は約37<sup>メートル</sup>、目通り幹周囲10.2m、枝張り東10.1m、西11.0m、南13.3m、北9.1mの雄株<sup>14</sup>。根幹に置かれた大小の「親子地蔵」（母子の守り神）はいまも敬慕されている。寺院の本堂には銀杏葉<sup>イチョウ</sup>と牡丹花<sup>ボタン</sup>の装飾文様<sup>もんよう</sup>をつけた大きな提灯<sup>ちようちん</sup>がかかっている（図版9参照）。

イチョウは神奈川県を象徴する県木である。なかでも有名なのは、鎌倉市雪ノ下、鶴岡八幡宮<sup>つるがおか</sup>の樹齢1,000年を誇る「隠れイチョウ」である。樹高30<sup>メートル</sup>、幹囲7<sup>メートル</sup>。樹木が人びとの語るところによればすでに20<sup>メートル</sup>に達していたとき、鎌倉幕府三代将軍、源実朝<sup>みなもと</sup>

（1192－1219）が当所で暗殺された。同事件は次のように伝えられている。1219年1月27日、実朝は右大臣拝賀の儀に出た。前夜は大雪であった。式典もようやく終わり、家路についたとき、実朝は公暁<sup>くぎやう</sup>—【真相をいえば、北条氏の手によって】あやめられた実兄源頼家<sup>みなもとのよりい</sup>の子—に襲われる。公

暁は女人<sup>にょにん</sup>に扮<sup>ふん</sup>してイチョウの蔭に隠れていた。さて、【実朝が真つ白に化粧した石段に差し掛かったそのとき】、「父の仇<sup>あだ</sup>を討つ！」

と呼ばわりながら、実朝を刺し殺したのである。こうして「隠れイチョウ」は、源<sup>みなもと</sup>から北条への実権移譲に力をかした、といわれるようになった。

東京はすでに何度となく天災や大火や戦乱に見舞われた。ところが、大火のあとときまって、イチョウ樹はふたたび芽を吹いた。車の排気ガスや大気汚染に対する耐久力によって、イチョウは真つ先に東京で街路樹として植えられた。イチョウはいまでは東京都のたたまいをつくりあげているばかりか、イチョウ葉はアイドルマークとして（たとえばごみ収集車に）も利用されている。

---

見えることから『逆さ銀杏』とも呼ばれ、「天明8年（1788）京都大火の折、御影堂へ水を噴きかけて、危うく類焼を免れた」との伝承が紹介されている。

<sup>14</sup> 高山市教育委員会文化財保護課より入手した、詳細な資料をもとに、民話および大イチョウの現状について加筆した。なお、高山では、「国分寺のイチョウの葉が落ちれば雪が降る」、とも言いならわされている由。

大都市の住民は木陰でいこい、イチョウとともに四季の移り変わりを感じとる。「武蔵野に 公孫樹ともみじ かがやくと おもひすなわち 冬は来にけり」、と峯村国一（1888—1977）はうたっている。

東京都内で最大最古の樹木は、港区元麻布の善福寺境内にみられるイチョウである。樹高約 20m、幹囲約 9m。寺伝によると、麻布山善福寺は〔平安初〕僧、弘法大師によって 806 年に創建された。仮にイチョウが開基のはじめから存在したとすれば、樹齢は 1,160 年をこえる<sup>115</sup>。別の伝承によれば、木は〔鎌倉時〕僧、親鸞上人の杖に由来する。すなわち、親鸞上人が 1229 年に善福寺を去るとき、法杖を地に突きたて、「念仏の、求法凡夫の往生もまたかくのときか」<sup>116</sup>、と述べられた。やがて杖は根を下ろし〔逆さに〕根づき、芽を出し、枝葉を広げていったという。

1945 年 5 月の東京空襲で辺りは一面の焼け野原となり、上人のイチョウ樹も火の手の犠牲になった。戦後、焼けこげた木はまだしばらくそのまま残されていたが、文化財保護委員会は、木は死んだものと判定し、官報で史跡保護の終結を予告した。ところが、本樹〔「逆さ公孫樹」〕は奇跡のようによみがえり、それ以来ふたたび国によって保護されている〔国指定の天然記念物〕。

栃木県小山市城山公園の「実なし銀杏」（「果実<sup>117</sup>のないイチョウ樹」）について、次のような伝説がある。豊臣秀吉が手勢を率いて小田原の北条家を攻めたとき、小山一族は北条方に加勢したが、敗北する。見捨てた小山の城も敵軍の手に落ちたため、浮き世をはかなんだ城主の姫君は井戸に身を投げる。後刻、老いた乳母が井戸のなかに姫君を見つけ、同じ運命をわかちあおうと、みずからも身を投じる。姫が目印に井戸の脇にさしておいた、イチョウの小枝は根づき、生長するが、痛ましくも投身自殺を遂げた姫の霊がやどり、ついに実をつけることがない。おまけに、黒い小石が岩盤からでてくる。小石は乳母の「お歯黒」（歯の染料）で染められたのだ、と人はいう。

宮城県仙台市大崎八幡宮神社の高くそびえる「苦竹のイチョウ」は、遠目にもよく見える<sup>118</sup>。樹高約 30 ㍎、幹囲は約 8 ㍎ある。伝説によれば、聖武天皇（701—756）の乳母紅白尼は、自分の墓にイチョウを植えてほしいと言い残した。願いどおり、死後に木は植えられ、途方もなく大きく成長し、「乳イチョウ」とも「姥イチョウ」ともあがめられ、雌性で、

<sup>115</sup> 善福寺は 842 年に開かれ、いまでは樹齢 750 年以上の雄株というのが通説らしい。

<sup>116</sup> 「念仏をとさえれば、法を求める人々は、凡夫なればとてなんと速やかに悟りを開けることか！」、というほどの意。

<sup>117</sup> 植物学上は種子。

<sup>118</sup> 「仙台市苦竹」は町名変更により、現在は「宮城野区銀杏町」となり、「宮城野原の乳銀杏」として天然記念物の指定をうけ、本樹はいまも健在ながら、周辺が住宅街となって、遠くからは見えない（大崎八幡宮社務所による）。

「乳柱」と呼ばれる巨大な「乳房」をもつ。もっとも大きい「乳房」の周囲は1.6メートル、長さは3メートル余に達している。

岩手県久慈市の長泉寺境内に、日本最大のイチョウ樹 [「大公孫樹 (おおいちョウ) 」] がある。雄性で、根元まわり 15m、幹周 14.5m、樹高 33m である。樹齢は 1,100 年と推定される (図解 4) <sup>119</sup>。同寺院について下記の伝説が言い伝えられている。

「長泉寺はもと長久寺と称していました。長久寺の第二世密傳長參和尚 (在職期間 1630-1662。当時は将軍の徳川家光と家綱が天下を支配していた) は、智徳の高い人で、修業を熱心に努めた高僧でした。

ある夜、密傳長參和尚の夢に異装の霊が現われ、和尚に『余は公孫樹の精霊です。この老樹がいたずらに切られることがないように祈ってやみません。当代有徳の高僧である和尚によって樹を永遠に守ってほしい。できれば、寺を公孫樹のそばに建て、佛徳を永劫に伝えてほしい』と語りました。それを聞き終わった和尚は精霊に問いかけようとしたのですが、たちまちにして精霊は消えてしまいました。

それ以来和尚はその樹の所在を探そうと思いました。ある日小道を歩いていたところ、怪しげな鳥が大樹の梢にとまり、異様な声で鳴きました。和尚は怪訝に思い、樹の下に立ち止まりましたが、鳥の鳴き声はすれども、その姿は見えませんでした。和尚はその樹の根元にすわり、少しの間だんまりとしました。その時、過日夢に現われた樹の精霊のお告げを思いだし、この樹こそあの精霊の宿る大公孫樹であることに気付きました。和尚は、精霊のお告げのとおり、寺を現在の場所に移転し、山号を銀杏山と称し、寺号もその山に泉があることから長久寺から長泉寺と改めました」



図解 4：日本の東北に位置する小さい港町「久慈」に、この巨大なイチョウ樹は育つ。木の蔭にキツネの神を祭る小さい「稲荷」神社が建っている。

青森県上北郡十和田町 [現十和田市法量字銀杏木] に、樹高約 30 メートル、幹周約 13 メートルの

<sup>119</sup>図解 4 は平成 3 年 9 月 28 日、台風 19 号により大枝など直径 1m 近い枝を折る損傷をうける以前の大銀杏である (著者)。なお、現在は樹齢 1,140 年、枝間に大小 100 余の棒状「乳房」があり、樹下で婦人が合掌すると乳の病気が治るといわれている。

チョウ樹があり、アイヌの神にちなんで「法量ほうりょうのイチョウ」と呼ばれる。樹齢は1,000年と推定される。かつてこの地にあった善正寺ぜんしょうじの完成を記念し、平安時代に植えられたという<sup>120</sup>。いまや寺院の名残はなにもないが、根幹のまぢかにある、「社やしろ竜王大神りゅうおうだいじん」（社の竜神）に捧げられた厨子ずしが、昔日せきじつをしのぼせる（図解5）。人びとは「乳房」に似た気根のために「子安めの銀杏」（「子らを慰めるイチョウ樹」）とも呼び、「法量ほうりょうのイチョウ」に祈りを捧げている。



図解5：とうの昔に消滅した寺の境内に「法量のイチョウ」がある。社やしろの竜神を祭る小さい厨子が聖地の伝統を継承している。

隣郷りんごうの七戸町しちのへまちにも「子安めの銀杏」がある。僧侶ほっしんの法身国師こくし（1189—1273）が植えたことされ、「五庵河原ごあんがわら」（または「御庵川原」）の伝説はこう伝えている。

法身ほっしん（俗名平四郎）は18歳のとき真壁城主まかべの草履取そうりとりであった。ある寒い日、主あるじの草履を懐に入れてあたためていたが、城主は下僕げぼくが草履のうえにすわっていたと思い、顔をなぐった。しもべは主人の下足を拾ってその場を去る。

中国に渡り、平四郎は臨濟禅りんざいぜんの大徳と敬われるまでになる。法身国師ほっしんこくしの法号を賜り、帰郷のあと、仏陀の教えを広めるために寺院を建立する。年齢よわい75を重ねたとき、かつての主君が【供を連れて】倉岡川上流くらおかの庵いおりを訪れ、【主従4名が】国師の門弟になった。つい最近まで礎石【矢井戸など】が残っていた、5人の庵は、イチョウも同時に手植てうえしたと伝えられ、法身国師の輝かしい

<sup>120</sup> 『みんなで見つける自然通信』2000年2月19日号（176号）などにしたがって、原文を少し改めた。

偉功を物語るよすがともなっている。樹齢はしたがって710余年と推定される。樹高26メートル、幹囲12メートル余である。

四季おりおりに、七戸の「大銀南の木」はすばらしい景観を呈する。多数の「乳房」が垂れ、大枝が伸び、いくつかの枝は土壤にふれて根を張り、子樹が育っている。イチヨウ樹はまことに生々無限である（図解6）。



図解6：この七戸のイチヨウは樹齢710年を超えると推定される。

ここ、日本本島つまり「本州」の北端をもって、寺と社と城の周辺に残る、イチヨウの古木を訪ねる、私たちの旅は幕を閉じる。樹木の異常な大きさ、珍しい外観、さらには種々の破局を切りぬけてきた頑強な抵抗力も、民衆の空想をそそり、こうした巨木に崇拜と信仰にも似た信頼の感情を呼びさましてきた。そればかりか、下記の17文字の短詩（俳句）や三十一文字の短歌（和歌）が示すように、文芸にもイチヨウは多彩な刺激をあたえたきたのである—

い  
ち  
や  
う  
ふ  
み  
て  
し  
ず  
か  
に  
あ  
ご  
の  
げ  
ざ  
ん  
か  
な  
与  
謝  
野  
蕪  
村

いちやうふみ 銀杏踏て しづか 静に 吾子の あごの げざんかな 下山哉（与謝野蕪村、1716—1783）

こ  
ん  
じ  
き  
の  
ち  
ひ  
さ  
き  
の  
か  
た  
ち  
し  
て  
い  
ち  
や  
う  
ち  
る  
な  
り  
や  
う  
ひ  
の  
お  
か  
に  
与  
謝  
野  
晶  
子

金色の ちひさき鳥の かたちして 銀杏ちるなり 夕日の丘に（与謝野晶子、1878—1942）

とある日の 銀杏もみぢの 遠眺め (久保田万太郎、1889—1963)

會<sup>ゑげ</sup>下の友 想<sup>いてふ</sup>へば銀杏 黄落<sup>か</sup>す<sup>わ</sup>121 (河東碧梧桐、1873—1963)

有りし代の 供奉の扇や ちる銀杏 (榎本<sup>きかく</sup>其角、1661—1707)

銀杏散る 遠くに風の 音すれば (富安<sup>とみやすふうせい</sup>風生、1885—1979)

銀杏が 落ちたる後の 風の音 (中村<sup>ていじよ</sup>汀女、1900—1988)

ぎんなんも 落ちるや神の 旅支度 (桃隣、1639—1719)



---

<sup>121</sup> 會<sup>ゑげ</sup>下：禅宗・浄土宗で、一人の師僧のもとに集まって修行する所。「會<sup>ゑげ</sup>下の友」は同志というほどの意味。銀杏黄落<sup>いてふ</sup>：友の死を暗示。

## 6 エンゲルベルト・ケンペル—イチヨウ樹の発見者— ヴォルフガング・ツェーザル

あゲーテがいま一度「ライン・マイン地方」<sup>122</sup>を旅して（1815）イチヨウ葉の「秘密の意味」を「味わい」、愛の象徴として詩情豊かに賛美する一年ほど前に、ジュネーブの植物学者アウグスティン・ピラムス・ド＝カンドル Augustin Pyramus de Candolle (1778—1841) は、イチヨウ樹の赤裸々な「性生活」について重大な発見をしていた。つまり、ド＝カンドルは、まぎれもなくの植物であるイチヨウの雌花を見て、ずばりそれと見抜いた最初の人物なのである [文献 1、2]。たしかに、イチヨウはすでに 1730 年以降ヨーロッパで栽培されていたが、もっぱら無性生殖によって増殖されていたにすぎない。イチヨウ樹は樹齢 20~30 年にしてやっと開花するために、それまでは雄性的<sup>びじょうかじよ</sup>の尾状花序だけが観察されていたのである。

ド＝カンドルの発見は、ヨーロッパではじめて出版されたイチヨウの記載 [文献 3] とロンドンに保管されていた同著者の植物標本 [文献 4、5] とに、ふたたび専門学者らの注意をむけた。さらに、ゲーテが詩《ギンゴ ビローバ》をした同じ年に、ウィーンの植物学者ヨーゼフ・フランツ・フォン・ジャカン Josef Franz von Jacquin (1766—1839) は、いわば詩と対をなす散文の作品ともいえる、最初の詳細な論文『イチヨウについて』 [文献 6] を発表している。

以後イチヨウの評判はうなぎのぼりになり、自然にその余光がイチヨウの発見者—もつと適切に言い換えれば最初の記述者—である、日本へ渡ったエンゲルベルト・ケンペル Engelbert Kaempfer のうえにもはね返った。ケンペルが生まれてはじめてイチヨウを目にとめたのは、おそらく 1691 年 2 月のことであり、また日本ではイチヨウがとりわけ珍しい木ではない状況からみて、記念すべきその出会いの地は、当時ケンペルが居住していた長崎と特定してさしつかえない。詳しい事情は以下のとおりである。

### 6-1 医師養成専門教育

エンゲルベルト・ケンペル (1651—1716) は、ヴェストファーレンのハンザ同盟都市レムゴに生まれ、16 歳まで福音牧師館の教育熱心な境遇のなかで育ち、その後リューベック、ダンツィヒ、トルンのギムナジウムなどで一般の学校教育をつみ、1674 年クラカウ大学で医学を学びはじめ、1677 年ケーニヒスベルク大学で医学研修をつみかさねた。

当時は植物学も医学部の必修科目であった。植物ならびに植物製品は薬物資源、いわゆ

---

<sup>122</sup> 雑誌『ライン・マイン地方の芸術と古代』1813 年 6 月発刊、不定期刊行。1816 年以降は誌名を『芸術と古代』と改めた。

る「医薬原料」(Materia medica)の主力をなしていたからである。植物学の授業は植物形態学、植物解剖学および慣用の薬用植物とその薬理学上の性質や応用治療の知識に重点を置き、実験に基づく研究はまだなんらの役割も演じていなかった。植物学はつまり一種の記載自然科学であり、この分野でひとかどのことをなしとげようとする者は、すぐれた観察眼をもち、みずからの観察を厳密に伝えられるために、専門用語に精通していなければならなかった。

## 6-2 見知らぬ国々

ケンペルはケーニヒスベルク大学で博士号を取得しながら研究課程を修了しなかった。そのころ義務づけられていた学位授与式典の法外な出費のために、いわばどうしようもない経済状態にあったのである。詳しくはわからない理由から、ケンペルは1681年スウェーデンに渡り、そこで外交官仲間の集いに出入りし、あるスウェーデン公使に、ロシアを経てペルシアに赴く海外旅行の秘書として随行してほしい、と誘われる。ケンペルはこの思いがけない仕事を、窮状からか、冒険心からか、それともなんらかの合理的な動機から引き受ける決心をしたのか—われわれには知るよしもない。いずれにせよ、彼はゆだねられた任務—たとえば旅行経路を地図に記録しなければならなかった—をきわめて熱心に、それもたくみにこなし、旅の体験と教養の価値をじゅうぶん味わいつくしたことだけは疑う余地がない。ケンペルによる日記ふうの手記がそれを雄弁に物語っている〔文献7〕。

見知らぬ諸国と民族探訪への渴望は、ケンペルの場合には、まもなく熱狂的な様相を呈しはじめる。スウェーデン使節の目的地、当時のペルシアの首都イスファハーンに到着するや、ケンペルはさらにインドへ出てみたくなる。アジアに広く張りめぐらせた支店網をもつ、オランダ東インド会社(VOC<sup>123</sup>)と接触し、彼は外科医として同社に雇われる。以来8年が経過し、ケンペルは—自筆の手記といたるところで集めた珍品をびっしり詰めた手荷物をかかえて—ヨーロッパにまいもどる。彼の資料整備と研究への抑えがたい衝動は、アジアの旅先で見聞できる、ほとんどすべてのものに広がっていた。博物学上の多種多様な現象は、たとえば農業と食物、歴史と政治、神話と宗教とか、旅してまわる国々の—医師には当然予想されることだが—地方病などと同じように、ケンペルに興味をいだかせたのである。

## 6-3 愛する植物

ケンペルは医学部在籍中に、アジアで独自の植物研究をおこなうために欠かせない、知識をも修得していた。そこで繰り返し余暇を利用し、好機をみのがさずに植物を採集し、

---

<sup>123</sup> Vereinigte Ostindische Kompanie

標本にし、写生をして、形<sup>メルクマール</sup>質を記載するとともに、一忘れてはならないのは一土着民から植物の利用法について詳細を聞きとった。アジアで構想をねっていた、2冊の著作によって、ケンペルはついに植物学史上に名をとどめるにいたったのである。

ナツメヤシの木（Dattelpalme）は聖書にも古典文献にもあられ、イコノグラフィーで一役買っているばかりではなく、ヨーロッパの土壤でも一として、あるいはアラビア人たちの仲介で持ちこまれてスペイン、南アフリカ、イタリアなど、気候が特に恵まれているいくつかの場所に生育していたが、ヨーロッパ人にとってまだまだなぞめいていた、本樹の個別論文は、ケンペルの最初の成功作となった。

ケンペルは『ナツメヤシの歴史』（Geschichte der Dattelpalme）を1687年から1689年にかけてペルシア湾岸の港町バンダル・アッバースで執筆した。この抜本的改訂版が、ケンペルの存命中に刊行された唯一の書物、すなわち『廻国奇観』（Amoenitates exoticae）の第4部になっている（図解1）〔文献3、8〕。



図解1：エンゲルベルト・ケンペル著『廻国奇観』（1712年刊）の表紙。

『異国の珍しい事物』と改題してもよいと思われる、同書最後の第5部も、他に劣らず高く評価される先駆的業績、つまり、ヨーロッパの著者による最初の日本植物誌である〔文献9〕。第5部は名人芸のうえに、植物学者としてのケンペルの進歩も歴然と示している。

日本の土を1690年9月に踏むまえに、ケンペルは植物研究の重心を少し移動させていた。なるほど医者として、彼は薬用植物に引き続き特別な関心があった—日本でお茶に関する詳細な論文も書いている—が、いまや植物誌の研究が優先されていた。転向原因は間違いなく『ホルトゥス・マラバリクス Hortus Malabaricus』の知識である。1678年以降ほぼ毎年あらたな巻が発行され—全体として12巻になった—ぜいたくにし絵を入れた、大判の同書は、アジアの一定地域、すなわちインド南部のケーララ州の植物誌をはじめて対象にしたものであった〔文献10〕。ケンペルは『ホルトゥス・マラバリクス』にいたく感動し、その編集者であるオランダの政府委員A.ヴァン・レーデ・トート・ドラケステイン van R(h)eede tot Drake(n)stein（1636—1691）に、ケンペル自身の著書『ナツメヤシ』の写しを1689年に献上している〔文献8〕。さらに、当時オランダ東インド会社(VOC)の職員エーバハルト・

リュンフ Eberhard Rumph<sup>124</sup> (ルムフィウス Rumphius 1627–1691) がモルッカ諸島<sup>125</sup>の一つ、アンボイナ島の植物誌を綿密に踏査研究していることもケンペルは承知していた。これらがケンペルにとって熱心に見習うべき手本になったのである。

#### 6-4 日本にて

ケンペルは日本に到着すると、ただちに植物界の研究をはじめたわけにはいかなかったことはいうまでもない<sup>126</sup>。オランダ東インド会社(VOC)の日本営業所は、わずか1.5<sup>27</sup>しかない長崎<sup>でじま</sup>の出島にあり、ヨーロッパ人は出島をごくまれにしか離れることを許されなかった。

ケンペルは1690年11月にはすでに若干の植物をスケッチしているが、VOCの商館長とともに、厳しく監視された護送部隊で江戸(東京)の徳川将軍の居城に赴き<sup>127</sup>、そこからふたたび長崎へもどる、1691年の2月から5月にかけてようやく、後年の『日本植物誌』に結実する、主要な作業をおこなうことができた。

一般に日本の人びとは外国人にいったい土地柄の情報をもらさないが、道端で植物を採集してもいったい異議を唱えないので、ケンペルは旅の道すがら心おきなく『日本植物目録 Catalogus Plantarum Japonicarum』を書くことができた[文献11]。さらに、先にも触れた植物標本をとりまとめ[文献4]、植物の全体図と部分図のスケッチを作成して[文献12]、適切な記載をそえた[文献13]。こうした作業を長崎で、彼は手記を点検し、たとえば、春に目にしなかった果実に関する報告などについて補足しながら、先へと進めた。研究に必要な植物資料は、日本の当局から割りふられた、従僕兼通訳にとりそろえてもらった。この付き人はさらに、植物研究の語学面で重要な書物、『訓蒙図彙』もケンペルに提供した。儒者、中村(1629—1702)によってされ、どの見出し語にも小判型木版刷りの挿し絵がつけられている、1666年初刊の同参考図書は、300点以上の植物を一そのなかにイチョウも(図解2)一載せている[文献4]。



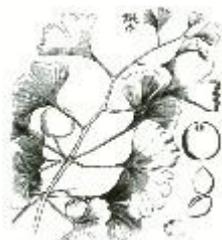
<sup>124</sup> 原文は Rumpf となっているが、岩波『西洋人名辞典』によれば Rumph の誤り。

<sup>125</sup> インドネシア東部の諸島で、古来香辛料の産地として名高く、「香料群島」の名がある。

<sup>126</sup> 当時の日本は鎖国中であった。

<sup>127</sup> 商館長の江戸参府に1691年と翌年の2度にわたって随行し、時の将軍綱吉に謁見した。

図解 2: 種子をつけ、種のなかに核（左下）をふくむ、イチョウの枝。日本の図説百科事典『』(1666 年刊) 所収の木版画 [文献 14]。大きい 2 文字は「ぎんきょう」「ぎんあん」または「ぎんなん」 (=Silberaprikose) と読まれる。同義語として「白果」 (=weiße Frucht) と「鴨脚樹」もしくは「」 (=Entenfuß[baum]) が挙げられている。



図解 3: 種子をつけ、なかに核（右下）をふくむ、イチョウの枝。『廻国奇観』(1712 年刊) に収録されている E. ケンペルのスケッチに基づく銅版画。

#### ギンコもしくはギンアン、俗称イチョウ

に似た葉を出し、堅果<sup>128</sup>をつける高木。

イチョウはクルミの木のような堂々とした高さに達し、多数の枝を張る、長いまっすぐな太い樹幹と、灰色の、長い歳月のうちに木目の粗い、裂け目のある樹皮をもつ。材は軽く、柔らかで弱い。髓<sup>129</sup>は繊細で海綿状。

葉は小枝にかわるがわる、しかも一個所に 1 枚単独に、あるいは数枚 (3~4 枚) 側生する。は 1 ツオルないし 1 手幅 [約 2.5~7.5cm] ほどで、上側がちぢまって葉[]に移行する。葉は初めのうち狭いが、しばらくすると幅が 3~4 ツオル 【ツオルは一  
般に 2.54cm】 ほどになり、に似てくる。外縁は弓形で、不規則にくぼみ、中央が深く切れこんでいる。葉は薄く、平たく無毛で、暗褐色であるが、秋には黄色くなり、少し赤褐色を帯びてくる。また、繊細な葉脈の隆起が帯状に走っているが、ほかに繊維とか葉脈はない。葉は等顔面である [二つの表面がそっくりに形成されている] が、上の発芽部はくぼんでいる。

晩春になると、樹冠の小枝に、花粉をつけた、かなり長い、垂れさがった<sup>130</sup>があらわれ

<sup>128</sup> Nuß. 殻果ともいう。乾燥して果皮が堅く、裂開せず、通常は 1 個、ときに数個の種子を含み 2 個以上の心皮からなる果実 (辞典)。

<sup>129</sup> Mark. 植物の茎の中心部で、柔組織からなるもの (国語辞典)。植物体の軸性器官において、管状に配列した維管束にとり囲まれた内側の部分。維管束間にある基本組織により皮層と互いに連絡する。ふつう柔組織からなるが、厚壁木化する場合 (ワラビ) もあり、細胞間隙に富み、分泌細胞・異型細胞・乳管・髓走状などが存在する場合もある (辞典)。

<sup>130</sup> 花被がないか、または目立たない単性花の密集した花序、とくに雄花序が動物の尾に似るのでその名が

る。

葉柄と同じ「母胎」から出てくる、果肉質で発育のよい、長さ 1 ツオルほどの軸に、果実が垂れる。当該果実は、円形か楕円形で、西洋スモモ[プラム]のような形状と大きさをしており、表面はでこぼこ状で、時とともに黄ばむ。果皮は、果肉質で果汁多く、白色で相当に渋く、内に包みこむ堅果にすこぶる固く付着しているため、たとえばビンロウジュの果実などにもおこなうように、果皮を水に浸して腐らせたのち、木の実を押し出さないかぎり、イチョウの堅果をはがしとることはできない。

堅果そのものは[Ginnaù] [誤植！、正しくは「Ginnan」]と呼ばれ、ピスタチオの種子（特に、ペルシア人が„Bergjès Pistài“と呼ぶもの）に似ているが、ほぼ 2 倍の大きさがある。

「」はアンズの実のような外観を呈し、薄くて脆弱<sup>ぜいじやく</sup>な、白っぽい木質の殻をもつ。殻のなかには、白い区分のない<sup>131</sup>がゆったりと収まり、仁はアーモンドの甘みと渋味をあわせもち、かなり堅い。

食後に食べると、銀杏は消化を促進し、食事でふくらんだ胃腸をさせるといわれる。したがって、豪華な食事のデザートには決して欠かせない。銀杏は煮たりあぶったりして渋味を除去したあと、さまざまな料理の添加物としても用いられる。銀杏はなかなか手ごろな値段である。1 オランダ・ポンド[約 480 グラ]の銀杏が約 2 ドラハメ[ほぼ 7.5 グラ]である。

(E. ケンペル著、1712 年、W. ツェーザル訳)

## 6-5 遅い収穫

12 年間滞在後、ケンペルは日本を去り、ライデン<sup>132</sup>を経由し—ライデン大学で遅ればせながら医学博士の学位を取得したあと—1694 年に故郷へ帰った。けれども田舎の領地に居を定めず、4 年後にリッペ<sup>133</sup>伯の侍医となる。海外で書きとめた記録の概観を出版するために、ケンペルはついに『廻国奇観』を構想し、上に引用した日本植物目録を一ただし 200 種の詳細な植物記載のうちわずか 30 種を—それぞれの挿し絵とともに収録した。

1712 年に出版された『廻国奇観』は、学識ある同時代人の多大な注目をひいた。このほか特に『日本植物誌』も同じく脚光をあび、専門家にも門外漢にも熱狂的な反響をよんだ。たとえば、フランスのイエズス会士、ピエル・フランソア・シャヴィエル・ド・シャルルヴォア Pierre François-Xavier (1682—1761) は、当時広く読まれていた日本に関する自身の

モノグラフ  
個別論文に、ことごとくケンペルに依拠しながら、日本の植物について 1 章を書きくわえ

---

あるが、厳密に定義されたものではない。雄花序は花後にまとまって脱落する（辞典）。

<sup>131</sup> Kern。果実の核、さね、たねのこと。

<sup>132</sup> オランダ西部の都市で、オランダ最古の大学がある。

[文献 15]、また同じフランス人の A. F. プレヴォー・デグジル Prévost d'Exiles (1679—1763) も自著の『旅の一般史 Histoire générale des voyages』でしかるべき章を改訂した。1754 年、プレヴォーのドイツ語版に、ただし原典に比べると多少縮約されているが、筆者の知るところでは、ケンペルのイチョウ記載に関する最初の翻訳がでている。導入文は次のとおりである。「ギンゴもしくはギンアン、一般にイチョウは、スギゴケに似た葉をもつクルミ属の木である」 [文献 16]。

ケンペルが 30 種の植物記載という限られた選択にもかかわらずイチョウ樹も顧慮したことは、幸運な偶然とみななければなるまい。独特な葉が著者の注意をひき、また「」の食養生法にかなった効用が興味を呼び覚ましていたとしても（これについてはケンペル原文の翻訳書 46 ページを参照せよ）、イチョウがいつか世界的な人気を博するとは、さすがのケンペルも予見することができなかつたはずだからである。

## 6-6 どうしようもない誤り

同様に、ケンペルは、不条理ながらも一般に有効な「」という綴り字の元祖に自分自身になることもまた、予期しなかつたであろう。『ホルトゥス・マラバリクス』(Hortus Malabaricus)の先例にならって、ケンペルはあらゆる植物についてそれぞれの土地固有の慣用名を書きとめることに重点を置いていた。イチョウの場合は—今日の発音表記によれば—「」、<sup>つづ</sup>「」、<sup>い</sup>「」であり、語源はすべて中国語に由来する、つまり中国語系日本語で、前二者は「銀アンズ」(Silberaprikose)を意味している。「ginkyo」はいつのまにか日本語の語彙から消え失せ、また「ginnan」は（ケンペルの場合、一度誤って„Ginnau“と印刷されたが）単に種子をあらわす名称にしか用いられないのに対し、『icho』[文字どおりにとれば、暗に葉を指して、「鴨脚」を意味する)<sup>134</sup>が、現在では本来の植物名になっている。ところが『』からもわかるように（図解 2 参照）、17 世紀には「ginkyo」がいろんな名称のなかでもっとも有力であったことから、ケンペルもそれを一番目に挙げているが、その際に誤りがまぎれこんでしまった。なぜなら、ケンペルの発音表記どおり、その言葉は「Ginkjoo」と聞こえたにちがいないと思われるからである。

不案内な者が「Ginkgo」という綴<sup>スベリグ</sup>字をみればとっさに、「g」と「k」の順序が取り違えられている、と推測するであろう。たとえば、標準語の植物名をすすんで植物学体系にと

<sup>133</sup> Lippe。ヴェーザー川上流の両岸域に位置したドイツの旧領邦。

<sup>134</sup> イテフの仮名を慣用するのは「一葉」にあてたからで、語源的には「鴨脚」の近世中国音ヤーチャオより転訛したもの。一説に、「銀杏」の唐音の転（広辞苑）。

り入れた、フランスの植物学者、ミシェル・アダソン<sup>135</sup> (1727—1806) も、「Ginkgo」と書いている [文献 17]。これに反して、カール・フォン・リンネ Carl v. Linnè (1707—1778) は、ケンペルの印刷された綴り方を規範とみなすとともに、それを公認した [文献 18]。

リンネは特に自分が母国語以外にラテン語しか話さないからなおさらのこと、自然界の分類に標準語の名称を使用するのを極度にきらったことは、周知の事実である。リンネがよりにもよってイチョウの場合に自己の原則を曲げたのは不思議であるが、筆者の考えでは、ひとえにリンネの一別の箇所で明白に表明しているように—ケンペルに対する尊敬のあらわれだと解釈することができる。

リンネ以来、幾人かの植物学者は、このおそらくもっとも奇妙な植物の学名をふたたび無効にするか、少なくとも訂正することに賛意を表明している。たとえば、ジェームズ・エドワード・スミス James Edward Smith (1759—1828)、「リンネ協会」の初代会長は、—ケンペルの植物標本を有効に活用したリチャード・アンソニ・ソールズベリ Richard Anthony Salisbury (1761—1829) に敬意を表して [文献 5] —イチョウを「サリスブリア・アディアントフォリア」(Salisburia adiantifolia)と名づけた [文献 19]。1942 年にも、カール・メークデフラウ Karl Mägdefrau は、著書『古生物学』のなかで「誤った」綴り字の「訂正」を要求した。つまり、メークデフラウは独断で「」と修正したが、植物命名法に関する国際規約を無視したとして激しい反論を巻き起こし、結局はふたたび従来どおりの綴り方にもどすが、脚注に不満を表明せずにはいられなかった—「誤りの凍結はいかなる学問にもありえないが、どうやら植物学の命名法規約にはあるらしい」 [文献 20]。

## 6-7 参考文献

- [1] Michel, P. F.: Ein Baum besiegt die Zeit — Ginkgo biloba, 3. Aufl. Ettlingen 1989.
- [2] Müller, Irmgard: Zur Einführung des Ginkgo biloba in die europäische Botanik und Pharmazie. Pharmazie in unserer Zeit 21, 201—205 (1992).
- [3] Kaempfer, Engelbert: Amoenitatum exoticarum politico-physico-mediciarum fasciculi V. Lemgo 1712. — Ginkgo: S. 811—813.
- [4] Volumen Plantarum in Japonia collectarum ab Engelberto Kempfero M.D. British Museum (Natural History), London, Sloane Herbarium 211. Ginkgo auf Bl. 91 und 103.

---

<sup>135</sup> Michel Adanson。すべての形質を分け隔てなく比較し、多くの形質を共有する群を「科」にまとめて分類すべきことを主張し、『植物諸科 Familles naturelles des plantes』(1763、64)を刊行、現在の数量分類学 numerical taxonomy の先駆けとなった。

- [5] Salisbury, R. A. : On the Coniferous Plants of Kaempfer. *Quarterly Journal of Science, Literature and Arts* 2, 309 — 314 (1817).
- [6] Jacquin, Joseph Franz v. : Ueber den Ginkgo. Wien 1819.
- [7] Meier-Lemgo, Karl: Die Reisetagebücher Engelbert Kaempfers. Wiesbaden 1968.
- [8] Kaempfer, Engelbert: *Phoenix persicus* — die Geschichte der Dattelpalme. Hrsg. v. W. Muntschick. Marburg 1987.
- [9] Kaempfer, Engelbert: *Flora Japonica* (1712). Hrsg. v. W. Muntschick. Wiesbaden 1983.
- [10] Heniger, Johannes: *Hendrik Adriaan van Reede tot Drakestein (1631—1691) and Hortus Malabaricus*. Rotterdam/Boston 1986.
- [11] British Library, London, Sloane Ms. 74.
- [12] *Plantarum Japonicarum Delineationes*. British Library, Sloane Ms. 2914.
- [13] *Descriptio Plantarum Japonicarum*. British Library, Sloane Ms. 2915. Ginkgo auf Bl. 43.
- [14] Nakamura, Tekisai: *Kinmo-zui*. Reprint, Tokyo 1976. — Das von Kaempfer benutztes Buch steht heute in der British Library: Or. 75. ff. 1.
- [15] Charlevoix, Pierre François-Xavier de: *Histoire et Description Générale du Japon*. 2. Aufl. Paris 1736.
- [16] Prévost d'Exiles, Antoine François: *Allgemeine Historie der Reisen zu Wasser und zu Lande*, 12. Bd. Leipzig 1754, S. 719.
- [17] Adanson, Michel: *Familles des plantes*. Paris 1763, S. 510.
- [18] Linné, Carl v. : *Mantissa plantarum altera*. Stockholm 1771, S. 313 f.
- [19] Smith, James Edward: *Characters of a new genus of plants named Salisburia*. *Transactions of the Linnean Society* 3, 330 — 332 (1797).
- [20] Mägdefrau, Karl: *Paläobiologie der Pflanzen*, 4. Aufl. Jena 1968, S. 235.

## 7 ゲーテと当時のイチョウ樹

エラスムス・フルチュ

### 7-1 イチョウ樹の再移植

異境の植物をヨーロッパで栽培してみたいとの欲求が、18世紀になると急激にふくらんできた。化石としてヨーロッパに痕跡をとどめている、イチョウ樹の再移植は、おそらくによってユトレヒト<sup>136</sup>で実現し、苗木は1730年から20年間ほどとして育てられ、冬場はオレンジ栽培温室<sup>137</sup>に入れて保護されたらしい [注1]。イギリス式庭園様式好みと外来植物への偏愛があいまって、イチョウはますます盛んにヨーロッパの庭園に受け入れられるようになった。

ゲーテと彼の植物学に興味をもつ仲間たちは、すでに樹高4mばかりの木々をみることができた。イチョウは当時すでにヨーロッパを横断して輸送されていた。たとえば、植物学者F. C.メディクス Medicus によって1780年にマンハイムの植物園に調達されたイチョウとか、カッセル<sup>138</sup>近郊のヴァイセンシュタイン（ヴィルヘルムスヘーエ城）に搬入された何本かのイチョウなども、ヘルムシュテット近郊ハルプケのフェルトハイム伯農園にある同年代のイチョウ樹と同様に、オランダ産であると思われる [注2]。

さらに、ドレーズデンから1本のイチョウがウィーンへ届けられたこと [注3]、それも、当時ドイツ随一の庭師と誉れの高かった、ドレーズデンの宮廷庭師、ヨハン・ハインリヒ・ザイデル Johann Heinrich Seidel の「種苗栽培園」から発送されたらしいことも知られている。ザイデルは若き園芸家としてフランスやイギリスで働き、ロンドン近郊のキュー国立植物園で1754年ないし1758年ごろに植えられたイチョウ樹をはじめで知った。ブリュールシェ・テラッセ<sup>139</sup>下手の2本の高木と同じく、ドレーズデン＝フリードリヒシュタットにある旧マルコリーニ・パレスの庭にみられる、今日ではおそらく最古のイチョウを植樹したのも、1778年からドレーズデンの宮廷庭師になった、ザイデルなのかもしれない。

園芸と植物学は1780年ごろからゲーテとザクセン＝ヴァイマル＝アイゼナハの領主カール・アウグスト<sup>140</sup>共通の関心領域となった。ゲーテが自宅の庭に内外の植物を1794年に、

<sup>136</sup> オランダ中部の都市。

<sup>137</sup> Orangerie : 17-18世の庭園に造られたオレンジなど南国産植物の越冬用温室。

<sup>138</sup> Kassel : 現在はドイツ中部ヘッセン州の工業都市。

<sup>139</sup> 18世紀の政治家ブリュール(Brühl)がドレーズデンに造らせた。

<sup>140</sup> Carl August : 1757-1828年。1774年、フランクフルト・アム・マインでゲーテに会い、ヴァイマル宮殿に招いて以来、ゲーテはもっとも信頼のおける臣下となり、友人ともなった。アウグストは1815年大公

フランスの植物学者 A. L. ド・ジュシュー<sup>141</sup>による時代の先端をゆく植物体系にしたがって配列し、いくつかの「適切な花壇」に植えたように [注 4]、カール・アウグスト公の宮廷庭師たちも、主君の積極的な関与のもとに、ヨーロッパの植物学者らと理論ならびに実践両面にまたがる情報交換をおこなっていた。

1794 年、ゲーテは自身の論文『植物の変態を説明しようとする試み』 [注 5] について議論をかわすために、ザイデルを訪ねた。ザイデルの『ガラス張りの家と温室の植物ならびにその高木、低木<sup>142</sup>、多年生および夏季植物一覧表』(1794)は、ギンコ ビローバも記載し、いまなおヴァイマルのゲーテ家庭図書室に保管されている (図解 1)。



図解 1: ヨハン・ハインリヒ・ザイデルの表題紙: ガラス張りの家と温室植物…一覧表、ドレースデン 1794 年刊、ヴァイマル古典財団。

## 7-2 ヴァイマルとイエーナのイチヨウ樹

1796 年、カール・アウグスト公はさらに宮廷庭師 F. G. ディートリヒ Dietrich を修業させるためにキューへ派遣した。ディートリヒはのちに論文『ヴァイマルの植物誌または公爵領庭園にある高木、低木および多年生草本目録』(アイゼナハ 1800 年刊) でキューのイチヨウについても報告している。「このすばらしい樹種について、キュー王立庭園の高木に、長さ半ツオル<sup>143</sup>ほどの、ちょうどクルミ属のものに似た、いくつかの雄性尾状花序」が見られたとのこと。論文の締めくくりに、ディートリヒはベルヴェデーレ<sup>144</sup>でおこなった根になる。

<sup>141</sup> Antoine Laurent de Jussieu: 1748. 4. 12~1836. 9. 17. 植物を分かつのに形質の価値をとらえ、第一に子葉で分類し、次に雄ずいの子房との相対的位置をとり、15 科 100 属を設けて自然分類の確立に寄与した。この体系はフランスにおいて長く用いられ、イギリスでもジョン・リンドリ (John Lindley) (1799-1865) の体系にとりいれられて、リンネの体系に代わるものとなった (辞典参照)。

<sup>142</sup> Strauch. 従来は「」と呼んだ。樹木のうち、普通は 2m 以下のもの。高木と対置されるが、その区別は便宜的。ふつう根本ないし地下部で数本の幹に分かれて枝分かれした幹 (deliquescent) の形式をとり、各々の幹の寿命は比較的短く、枯れては根本から新しい幹が立つことが多い (辞典)。

<sup>143</sup> Zoll: 古い長さの単位: 1/12 または 1/10 フィート、地方により異なるが一般に 2.54 cm。

<sup>144</sup> Belvedere: 見晴らしのよい場所にある宮殿などの名。もともと「望楼」「展望閣」といった意味があ

節(Wurzelknoten)からの増殖実験に言及し、陽春に根節を切り取り、植木鉢でほどよい暖気流入と湿度保持をほどこせば1か月後に早くも発芽しはじめたとしている。ディートリヒはいっそう詳細に、『決定版園芸と植物学事典 Vollständiges Lexikon der Gärtnerei und Botanik』(ベルリン 1808年刊)において、ここでは主として「サリスブリア・アディアンティフォリア」と呼ばれる高木〔つまりイチョウ〕とや(Wurzelteil)による増殖の可能性を論述している。

ヴァイマルの園芸家たちがベルヴェデーレで成功したイチョウの栄養栽培(vegetative Züchtung)のおかげで、1800年ごろにはすでに1ターラー<sup>145</sup>支払えば、ベルヴェデーレの「公爵オレンジ園」で挿木を購入することができた〔注6〕。1804年にはヴァイマル宮廷庭師ヨハン・フリードリヒ・ライヘルト Johann Friedrich Reichert が「ギングコ Gingko」(原文のまま)を2ライヒスターラー<sup>146</sup>で提供している事実が、本人の一覧表『ライヘルト庭園または野菜栽培業者と園芸愛好家のための完全総目録』からわかる(図解2)。



図解2：ヨハン・フリードリヒ・ライヘルト：『ライヘルト庭園...』ヴァイマル 1804年刊、ヴァイマル古典財団。

1813年、コンラート Conrad もしくはクリスティアン・スケル Christian Sckell がヴァイマル王家(フランツ・リスト音楽大学)のほとりに1本のイチョウを植樹した。これが今日ではヴァイマル最古のイチョウ樹である。

宮廷庭師 F. G.ディートリヒと J.コンラート・スケル、庭園監督官 J.クリスティアン・スケル、植物育種家兼野菜栽培業者の J. F.ライヘルト、のちには植物学者 A. W.デンシュテット Dennstedt も、イチョウに関する情報が問題となれば、ヴァイマルでゲーテの手足となって働いた。彼らの植物目録はゲーテの家庭図書室に所蔵されている。

イエーナでは、王侯遊歩庭園の敷地に1794年に新設された植物園と、その初代園長(1794—1802)であった J. K. A. バッチュ Batsch のもとに、ゲーテは足しげく通った。1795年刊行の『イエーナ公の植物園景観 Conspectus horti botanici Ducalis Jenensis』のなかで、バッチュもイチョウのことを「ギングコ Gingko」(原文のまま)と呼んでいる。バッチュがどこからをイエーナ植物園に取り寄せたかは、知られていない。

---

るが、ここではヴァイマルの南にある公爵の別邸のことを指していると思われる。

<sup>145</sup> Taler : 16世紀から18世紀まで通用したドイツ銀貨。のちに3マルク銀貨。

<sup>146</sup> Reichstaler : 1566年から18世紀まで主としてドイツで用いられた銀貨。

バッチュの跡を継いだイエーナ植物園長—F. J. シェルヴァー—Schelver や特に F. S. フォークト Voigt—とも、ゲーテは親交を結び、植物学の諸問題で園長の言葉に耳を傾けた。フォークトによって作成された『イエーナ公庭園とベルヴェデーレ城庭園で栽培されている植物目録 Catalogus Plantarum, quae in hortis Ducalibus Jenensi et Belvederensi coluntur』(イエーナ 1812 年刊)の表題は、まさしくバッチュ著『イエーナ公の植物園景觀』の影響を気づかせる。ただし、フォークトの目録では「サリスブリア・アディアンティフォリア」(イチョウ)が、「類<sup>147</sup>」の項にあげられている。フォークト著『ヴァイマル近郊ベルヴェデーレの大公領オレンジ園にみられる国内および国外産植物目録

Verzeichnis von in- und ausländischen Pflanzen im Großherzoglichen Orangengarten zu Belvedere bey Weimar』(イエーナ 1816 年刊)には、価格表示として「サリスブリア・アディアンティフォリア (ギンコ ビローバ)の露地栽培植物 2 ターラー」との記載がある。

ゲーテは 1808 年から 1818 年にかけてイエーナで、珍しい植物もあつかう、野菜栽培業者の K. ハラス Harras や W. ヴェーデル Wedel (造園家兼ナデシコ属栽培者)の店を頻繁に訪れている。ハラスは「苗木栽培者」と自称し、ザーレ川<sup>148</sup>中州の広大な私有緑地で鑑賞木本植物と高木の栽培に取り組んでいた。

### 7-3 ハルプケとカッセルの公園

イチョウの栽培と育種<sup>149</sup>は、販売目的もからみ、すでに 1780 年ごろフェルトハイム伯のハルプケ農園と温室でおこなわれていた。この間の事情は、法律顧問官 C. C. L. ヒルシュフェルト Hirschfeld によって執筆された『園芸愛好家のためのポケットブック』第 2 版 (1783)から読みとれる [注 2]。同書には「ハルプケの栽培地で販売される高木、低木、状植物の目録」が掲載され、なかに第 78 番として「ギンコ ビローバ、日本のイチョウ」も収録されている。

この目録がすでに 1800 年以前にベルヴェデーレの宮廷庭師たちによって彼らの充実した植物文庫用に入手されていたことは、まず間違いない。同様に、イギリス式庭園様式がフランス様式にまさる長所が認められ、もてはやされていた時代につくられた、医師であり木本専門家でもある、D.J. Ph. ド・ルワ De Roi の手になる『ハルプケの野生樹木栽培』(1771)もすでに所蔵されていたはずである。J. F. ポット Pott (ド・ルワの友人)が編集した第 2 版には、「イチョウ、処女髪高木」(Ginkgo biloba, Maidenhair Tree)が採録されている [注 2]。

---

<sup>147</sup> Coniferae. 針葉樹類に同じ。ただし柏はカシワの意味でなく、ビャクシン (柏槇) またはコノテガシワのこと (辞典)。

<sup>148</sup> Die Saale : エルベ川 (die Elbe) の支流。

<sup>149</sup> Züchtung : 有用生物の遺伝的性質を人間が希望するように改良すること。多くの場合は既存の品種の不都合な形質を改良していくため、品種改良ともよばれる (辞典)。

植物学者コンラート・メンヒ **Conrad Moench** は、『カッセル近郊ヴァイセンシュタイン遊歩庭園にみられる異国の高木と多年生草本目録』〔注2〕を作成し、1781年に「ヴァイセンシュタイン」（カッセル近郊ヴィルヘルムスヘーエ）に植樹されたイチョウにもふれている〔図解3〕。同年、フェルトハイム伯のハルプケ農園にイチョウが植えつけられ、1795年には、ポットによれば「樹齢14年にして下部の太さ10cm、高さ3.3m」に達していたとある〔注2〕。ドイツでいま現存するもっとも古いイチョウ樹と思われるが、樹高は10mあるかないかといったところである。

ゲーテは1805年8月19日にただ一度ハルプケを訪れたときの模様を、カール・アウグスト公にあてた1805年8月28日付の手紙で次のように報告している。

「ヘルムシュテットから私たちはハルプケへ旅行し、旅先で若いフェルトハイム伯爵に温かい歓待にあずかり、いろんな見なれぬ樹種のに感嘆させられました」〔注7〕。

レトガー・フォン・フェルトハイム **Röttger von Veltheim** 伯爵も、その後イチョウとその栽培にいたく興味をいだき、1828年にこう記している。

「…実を結ぶ珍しい木々について、私はあえて下記の覚え書を伝えたい：…第46番、ギンコ ビローバ：ここに現存するもっとも古い個体は、樹齢70年（原文のまま）で、6年まえにはじめて開花したが、ばかりをつけていた。木は直径わずか1フィート<sup>150</sup>余り、高さ約20フィートにすぎない。イチョウをによって増殖しようとする、幾多の試みは失敗したが、これまでに数本の若い個体（3年もの）が現生している」〔注8〕。



**図解3**：コンラート・メンヒ著『カッセル近郊のヴァイセンシュタイン遊歩庭園にみられる異国の高木と多年生草本目録』（フランクフルト／ライプツィヒ 1785年発行）より。

#### 7-4 フランクフルトのイチョウ樹

1815年9月15日から数日間、ゲーテはヴィレマー<sup>151</sup>家の別荘—フランクフルト・アム・

<sup>150</sup> 1フィート：30.48cm。

<sup>151</sup> Marianne von Willemer：旧姓 Jung 1784.11.20 -1860.12.6.ゲーテの女友達。フランクフルト（マイン河畔の）銀行家（Johann Jakob von W.）と結婚した（1814）。ゲーテはそのころ彼女と知り合い、『西東詩集』のなかで、彼女のことをズライカ（Sulaika）として歌っている。

マイン近郊のゲルバーミュラーに客人として逗留<sup>とくりゅう</sup>していた。「ボアスレー<sup>152</sup>と連れだつてミュラー<sup>153</sup>へ」でかけたことは、ゲーテ自身の日記からうかがい知ることができる。ゲーテは友情のしるしとしてイチョウ葉を持ち帰り、夕方、仲間うちで観賞した。この集いには、ヴィレマー一家のほかにも、ゲーテと親交があり、1810年以來ハイデルベルクに住んでいた、美術品収集家で作家のズルピーツ・ボアスレーも参加していたが、同人の日記録こそ、ゲーテの詩《ギンゴ ビローバ》成立史の重要な情報源になっている [注9]。

たとえば、ボアスレーは1815年9月15日付の日記にこうしている。

「うららかな夕べ。Gはヴィレマー嬢に<sup>いちよう</sup>一葉の<sup>ギンクホ</sup>Ginkho（原文のまま）を友情の象徴として町から送っていた。それは2枚に分かれる1葉なのか、それとも一つに結ばれる二つの存在なのかわからない。まあ、詩の内容はそういったものだった。」

ここで興味のある点は、ゲーテがフランクフルトのどの木から1815年にイチョウ葉を摘むことができたかである。もっとも古いイチョウは、S. M. フォン・ベートマン Bethmann 領事の庭園（フリートベルガー・アンラーゲ）に、1785年ごろかそれ以前に植樹されていた。マイン川の左岸にも、当時樹齢約23年のイチョウ樹がある、薬剤師ペーター・ザルツヴェーデル Peter Saltzwedel の庭園があった。

ゲーテはザルツヴェーデルとすでに数年来の知己であり、1814年にはフランクフルトで彼を最後に訪問している。その折に、あるいは1815年にも、もしかすると高さ5mほどのイチョウ樹がある、手入れの行き届いた、外来植物が多い、ザルツヴェーデルの庭園を見学したのかもしれない。ゲーテは1815年9月の8日から15日まで、ザルツヴェーデル邸の向かい側に位置する、ヴィレマーの町家「赤小人館」(Zum Roten Männchen)に宿泊していただいけに、あらためて訪問しようとするれば前回よりもはるかに近かったといえる。

フランクフルト・アム・マインでは1800年以前に幾人かの庭園や植物の愛好家たちがすでに外来植物を入手していた。そのような外来植物でにぎわう庭園を、フランクフルト・オーバーラートの商人であり、商業顧問官にもなった、J. F.メツラーMetzlerも、1800年以前に建てた豪邸わきのマイン川左斜面ぞいに所有していた。ゲーテは青春時代以来なじみのメツラーをゲルバーミュラー滞在中に訪れているのである。

フランクフルト近郊のレーデルハイムには、商人P.A.ブレンターノ Brentano 一家が、マインの支流ニダ河畔にこじんまりとしたサマーハウスとともに庭園をかまえていた。いまもニダ堰<sup>ぜき</sup>(Nidda-Wehr)ぞいに広がる自然景観保護区域「ニダ」(Niddatal)のブレンターノ庭園

---

<sup>152</sup> Boisserée. 兄 Sulpitz (1783. 8. 2–1854. 5. 2)、弟 Melchior (1786. 4. 23–1851. 5. 14)。両者ともにドイツの美術学者。兄弟でケルンとボンでドイツの中世美術を研究し、ドイツおよびオランダの古画を収集。

<sup>153</sup> ミュラー (Mühle) には「水車小屋」（またゲルバーミュラー Gerbermühle には「製革工場」）というほ

内に、1本の堂々とした古いイチヨウが現存するが、当時はまだ小さい個体としてあるいはゲーテの目にふれたかもしれない。そうだとすれば、ゲーテは1815年9月15日に当所でもイチヨウ葉を摘むことができたであろう。昼にボアスレーとともにレーデルハイムのゲオルク・ブレンターノ Georg Brentano と C. F.フォン・グアイタ von Guaita の家に招かれているからである。

## 7-5 ゲーテのハイデルベルクとカールスルーエ滞在

1795年ごろハイデルベルクのシュロスガルテン（城の庭園）に植樹されたイチヨウは、いまはもう存在しない。しかし、1928年にはまだ、「非常に古い巨木で、多大の注目を集める、ハイデルベルクのシュロスガルテンにそばだつ、このイチヨウ樹は」、「ゲーテがかの美しい詩作への<sup>モチベーション</sup>刺激を授かった木と、どうやら同一のものである」らしい、と J. シッフ Schiff は報告している [注 10]。おそらく本樹は1936年にもなお健在であった。ツィック Zick 博士の刊行物のなかに、こう述べられているからである。「…さらに別の個体が…ハイデルベルク近郊のハントシュースハイム公園とハイデルベルク市内の宮殿西側の<sup>テラス</sup>段庭にある。後者の一葉をゲーテは1815年にマリアンネ・フォン・ヴィレマーあてに送りとどけた…」 [注 11]。

ゲーテは1815年9月に何度もこのイチヨウ樹の葉を友人や知人といっしょに眺めていた。たとえば、哲学者で神話研究家の G. F.クロイツァー-Creuzer と、ゲーテは古代ギリシャ神話の象徴的な意味について話しあった。パルタイ Parthey によれば [注 12]、あらゆる古代神話には二重の意味が内在している、とクロイツァーはゲーテに説明しようとした。ちょうど二人がイチヨウのそばで立ちどまったとき、ゲーテはこのうえもなく生き生きと熱中して相手の論究に耳を傾けながら、葉を1枚摘みとって言った、「では、おおよそこの葉のように、一にして二なのだね。」

<sup>オリエント</sup>東方学者にして神学者の H. E.パウルス Paulus がハイデルベルク城の大庭園（シュロスガルテン）でゲーテと出会った模様について、K. A.ライヒリン＝メルデック Reichlin-Meldegg は次のように伝えている [注 13]。

「わが詩人によせるパウルス家の尊敬はすこぶる大きく、美しいへ向かう散策中（1815年）に、ゲーテが珍しいと目にとめた葉を、家族のひとりが自宅に持ち帰るほどであった。当の葉は紙にはさんで大切に保管されたらしい。いまも、『ゲーテに注意をうながした一葉』と付箋をつけて、パウルス家の遺品に収められている」。

---

どの意味があるが、ここでは地名ゲルバーミュレを指す。

しかし、このうえもなく鮮やかに心のうちにとどめられ、いまもなお失われていないものといえば、1815年9月ゲーテとマリアンネ・フォン・ヴィレマーがハイデルベルク城大庭園で出会った、あのにまつわる思い出であろう。そこには下の城塞<sup>じょうさい</sup>入口付近に1795年に植えられたイチョウ樹が当時も立っていた！ かつての「小庭園」(Stückgarten)近くに、マリアンネ・フォン・ヴィレマーの詩《ハイデルベルク城》の第1節から第3節までをきざむ、記念銘板が1921年にとりつけられた。マリアンネがゲーテ75歳の誕生日(1824年)にヴァイマルへ送りとどけた詩である。銘板にくわえて、1921年、大庭園に石のベンチがすえられ、ベンチのひじ掛けには様式化されたイチョウ葉模様の飾りがほどこされている(図解4)。



図解4：イチョウのレリーフをあしらったハイデルベルク城の庭園ベンチ。

イチョウ樹とイチョウ葉によせるゲーテらしい植物学上の興味は、詩人が1815年9月ライン・マイン地方(フランクフルト、マンハイム、ハイデルベルク、カールスルーエ)での繁忙をきわめる数週間の滞在にもかかわらず、1815年10月4日にカールスルーエの植物園を、それも同園長のK. C.グメーリン Gmelin、作家のヨハン・ペーター・ヘーベル Johann Peter Hebel<sup>154</sup> および美術愛好家ズルピーツ・ボアスレーとつれだつて訪れていることに如実に示されている。植物園にはすでにそのころ樹齢約20年、したがって少なくとも樹高4m(上記の4都市に存在した同じ樹齢のイチョウも同様)に生長している、イチョウ樹が2本あった。ボアスレーは1815年10月4日付の日記に樹高を「おそらく24フィート」とさえ記入している。今日ではシュロスガルテン内のオレンジ栽培温室の裏手にあるシダの窪地<sup>くぼち</sup>にそびえる高木が、中部ヨーロッパではおそらく一番高いイチョウ樹である。

カールスルーエ植物園のオレンジ栽培温室のまえにある、もう1本のイチョウは、もっとも低く斜めに傾いている大枝に、現在ではチチの奇形が認められる。ゲーテは当時イチョウの葉を、おそらく連れのところ、紙きれにさっとスケッチまでした。このスケッチは1枚の葉と茎、それに「奇妙な」葉の中央の切れ込みと4本のおぼろに浮かぶ葉脈を示している。紙きれの縁に書きとめられた言葉—「ハリエンジュ(ニセアカシア)」(Robinia inermis)—によって、制作日は1815年10月4日と特定することができる。当日にこの樹木

<sup>154</sup> 1815年10月21日、クネーベルにあてたゲーテの書簡に、「ヘーベルはまったくすばらしい男です」とある。詳しくは、ヘーベル著/有内嘉宏訳：ドイツ暦物語(鳥影社、1992年刊)参照。

も観察されているからである [注 14]。

## 7-6 ジャカンの文通

ウィーンの植物学者ヨーゼフ・フランツ・フォン・ジャカン Joseph Franz v. Jacquin は、1819年に刊行した著書『イチョウについて』をヴァイマル大公カール・アウグストにあてて、1820年3月に発送した。その小包を受け取った、ゲーテは、添え書きをつけてカール・アウグスト公に取り次いだ（ヴァイマル、1820年3月10日）。

「殿下、予告のあったウィーンからの発送物を同封いたします： 1)…、2)フォン・ジャカン男爵のイチョウについて。このような植物はすでにベルヴェデーレの音楽学校にもあるのではないのでしょうか。あそこの日あたりのよい場所で、みごとに生長し、何年かすれば花もきっと咲くでしょうね—私にはよくわかりませんが。イチョウの葉は、の場合にはジャカンが写生させているような形態をみせ、扇形に切れ込む兆しをほとんどみせない特性があります。しかし、イチョウ葉の切れ込みは、それによって触発された詩のなかの2枚葉からもわかるように、ついには一葉が2枚の葉と見えるほどに、<sup>ふるえ</sup>古枝になると深まってきます。」

消息に通じていたカール・アウグスト大公は即日こう意見を述べている。「イチョウに関する論文については、わたし自身がジャカンに返事をしよう。この種の植物でヨーロッパ大陸に現存する、最大の個体は、イギリスのキュー王立植物園にあり、さながらビグノニア<sup>155</sup>・ラディカンス(Bignonia radicans)のように、壁ぎわに生育しようとする植物であることが、同植物園ではじめて発見された…ベルヴェデーレに存在するのは、すでに数年まえから国内に生育している、小型のさえない個体だ…この植物は気候に非常に敏感である。イチョウは決して珍しいものではなく、おそらくイェーナにもある…」

カール・アウグストは1820年3月10日のうちか、そのすぐあとに礼状をJ.F.フォン・ジャカンに書き送ったと思われるが、証拠は残存しない。意外なのは、カール・アウグストが、1820年3月10日付の上記書状で明らかのように、イチョウ樹についてゲーテよりも精通し、多くの生育場所を知り、よい個体と悪い個体を識別できることである。

ジャカンは論文の専門的な植物学の結末部でリンネの命名法によって拘束力をもつ学名—「ギンコ ビローバ」—を用いているが、イギリスの植物学者J.E.スミスが1797年に提唱した名称「サリスブリア・アディアンティフォリア」も併用している。「サリスブリア・アディアンティフォリア」は、まずイギリスで好んで使われ、およそ1800年以来わがドイツでも、特に1880年ごろまではしばしば用いられた（図版2参照）。

---

<sup>155</sup> ノウゼンカズラ科のつる性低木。

## 7-7 謝辞

幾多の助言に対して筆者はゲーテ国立博物館（ヴァイマル）のマリー＝ルイーゼ・カーラーMarie-Luise Kahler 夫人に感謝したい。

## 7-8 注

- [1] Joseph Franz von Jacquin: Über den Ginkgo. Medizinische Jahrbücher des Kaiserlich-Königlichen Österreichischen Staates. Wien 1819. — J. Tolsma: Der Ginkgo des Universitätsgartens in Utrecht. Allgemeine Forst-Zeitschrift 36, 1211 (1981).
- [2] C. C. L. Hirschfeld: Theorie der Gartenkunst, Bd. 4. Leipzig 1782 (Beschreibung von Harbke auf S. 240–246) . — Ders.: Taschenbuch für Gartenfreunde. 2. Auflage 1783. — F. C. Medicus: Erfahrungen vom Ginkgo Biloba. Forst-Archiv 30, 211–219 (1807). — C. Moench: Verzeichniß ausländischer Bäume und Stauden des Lustschlosses Weissenstein bei Cassel. Frankfurt und Leipzig 1785. — D. J. Ph. Du Roi: Harbkesche wilde Baumzucht. 2. Auflage. Hrsg. von J. F. Pott. 1. Band. Braunschweig 1795, S. 407–410. — Kilian: Naturhistorische Mitteilungen. 7. Jahresbericht des Mannheimer Kreises für Naturkunde. Mannheim 1840, S. 20–24. — A. C. Seward u. J. Gowan: The Maidenhair Tree (Ginkgo biloba L.). Annals of Botany 14 (53), 109–154 (1900).
- [3] J. F. v. Jacquin berichtet 1819 in [1]: „Nach Wien kam meines Wissens 1781 das erste lebende Individuum durch den Handelsgärtner Loddiges aus London nach Schönbrunn. Außerdem war der Baum, der sich vor wenigen Jahren im Park in Erlaa befand, und auf eine andere Besetzung des Fürsten Starhemberg versetzt worden sein soll, der älteste in Österreich; dann folgte im Alter ein ehemals dem Hofsamenhändler Baumann gehöriges, aus Dresden gekommenes Bäumchen, welches später in den gräflich Harrachischen Park überging, und noch lebt ...“
- [4] Friedrich Gottlieb Dietrich schreibt in seinen „Lebenserinnerungen“ (etwa 1828): „In dem Garten des Herrn von Göthe wurden schickliche Beete abgeteilt.“
- [5] J. W. von Goethe: Versuch, die Metamorphose der Pflanzen zu erklären. Gotha 1790. — Ders.: Schicksal der Druckschrift 1817. Morphologische Hefte 1 (1817). — Ders.: Der Verfasser teilt die Geschichte seiner botanischen Studien mit. 1831.
- [6] J. C. Sckell: Verzeichnis von exotischen Pflanzen im Herzoglichen Orangengarten in Belvedere. Weimar 1800.
- [7] Briefwechsel des Herzogs-Großherzogs Carl August mit Goethe. Hrsg. Hans Wahl. Berlin 1916.
- [8] Röttger v. Veltheim: Notizen über Zustand, Umfang etc. der Plantagen des Grafen

- v. Veltheim zu Harbke. Verhandlungen des Vereins zur Beförderung des Gartenbaus in Preußen. Bd. 4. Berlin 1828, S. 131.
- [9] Günther Debon: Das Blatt von Osten. Gedanken zum Ginkgo biloba-Gedicht. Euphorion 73, 227–236 (1979). — Ders.: Goethes Begegnung mit Heidelberg. 23 Studien und Miniaturen. Heidelberg 1992.
- [10] J. Schiff: Der Ginkgobaum, seine Bedeutung für Pflanzenkunde und Pflanzensymbolik. Die Bergstadt 16 (7), S. 76. Bergstadt-Verlag, Breslau 1928.
- [11] Dr. Zick: Weibliche Ginkgos in Westdeutschland. Mitt. Deutsche Dendrologische Gesellschaft. 48, S. 266 (1936).
- [12] Jugenderinnerungen von Gustav Parthey. Handschrift für Freunde. Neu herausgegeben ... von Ernst Friedel, 2 Bde. Berlin 1907.
- [13] K. A. v. Reichlin-Meldegg: Heinrich Eberhard Gottlob Paulus und seine Zeit. Stuttgart 1853. Bd.2, S. 290.
- [14] Corpus der Goethezeichnungen. Bd. Vb, Nr. 140. Hrsg. von den Nationalen Forschungs- und Gedenkstätten der klassischen deutschen Literatur Weimar. Leipzig 1958 – 73.



8 「わたしは一にして二重<sup>ふたえ</sup>なのだ」  
—ゲーテの詩《ギンゴ ビローバ Gingo biloba》について—  
ハイデ・アイラート

### 8-1 成立について

ゲーテがのちに『西東詩集』<sup>せいとう</sup>（1819/20年刊<sup>156</sup>）の「ズライカの巻」に収めた、日本の扇状葉高木— [注1] —にささげる詩の最初の清書は、1815年9月27日、詩人自身がハイデルベルクからフランクフルトの銀行家ヨハン・ヤーコプ・フォン・ヴィレマーJohann Jakob von Willemerの娘、ロジーネ・シュテューデルRosine Städelにあてて送ったとみられる。ロジーネは、実父ヤーコプの3度目の妻マリアンネMarianneときわめて仲がよく、ヴィレマー夫妻が9月23日から26日までハイデルベルクに滞在するあいだも二人に付き添っていた<sup>157</sup>。ゲーテは送り状のなかで共通の話題を引き合いにだしながら、イチョウの「あのよく知られた奇妙な葉」に触発された、いわば「散文的な解釈」の「な翻訳」として、詩を予告している [注2]。したがって、問題の詩《ギンゴ ビローバ》は、詩人がマリアンネ・フォン・ヴィレマー、つまり西東詩集に登場する「ズライカ」[注3]にもっとも激しく執心していた時点であると同時に、東方の文学や哲学をもっとも実り豊かに修得していた時期に生まれたものである。すでに1814年の夏、ゲーテはペルシア詩人モハメド・シェムスエディン・ハーフィスMahomed Schemseddin Hafis（1326—1390年）の『ディーヴァーンDivan』（すなわち〔ペルシア語で「集」、特「詩集」を意味する）を、発行者コッタから贈呈されたヨーゼフ・フォン・ハマーJoseph von Hammerの訳本で読んでいた。折しも、斬新なもの、エキゾチックで異種なものを摂取しようとの気概にとりわけ燃えていた、ゲーテは、ペルシアの巨匠ハーフィスのみごとなガゼール<sup>158</sup>のうちに、自分のものが同時に、言い換えれば、この「西と東」の出会いを強調するための根本条件が反映されていることに気づいたのである [注4]。エリッヒ・トルンツErich Trunzは、これほどに生産的な驚くべき受容の現象を、簡明に説得力をもってこう理由づけている。「ここに、ゲーテが自分自身を再発見することになる、ひとりの詩人が、遠い時代、別の文化圏にいたのである<sup>159</sup>。生きる喜びにあふれ、にありながらも、つまりは深いなれにみち、俗事から永遠なるものを推しはかり、神秘的に物性を

<sup>156</sup> 1819年に初版、1827年に決定版刊行。

<sup>157</sup> ヤーコプ・ヴィレマー（1760—1838年）は、二度の結婚にいずれも妻に先立たれ、6人の子とともにやもめ暮らしをしていたとき、ふと踊り子のマリアンネを見そめて養女にする。1800年、ヤーコプ40歳、マリアンネ16歳のときのことである。両人はおそらく内縁関係を経て、1814年9月27日に結婚。

<sup>158</sup> ガゼール(Ghasel, Gasel, Gasele)：中近東におこなわれる叙情詩形（反復する同音韻をもつ）の一つ。

<sup>159</sup> ゲーテはハーフィスを自分の<sup>ドッベルゲンガー</sup>分身と考えたともいえよう。

のりこえる詩人が一。恋、酒、サヨナキドリやバラの。情熱にあふれながらも、同時に情熱を自覚させる、いや、情熱と戯れる（…）朗らかな俗間の神秘家は、折にふれて鋭く尊大に答えるために、狭量な狂信者らに誤解され攻撃をうけた（…）類似点はじゅうぶんある、なかんずく内容、客観性と象徴性の混合という点で」 [注5]。ゲーテは広範囲にわたるオリエント研究を—ハーフィス作品のほか、サーディーSaadi、ニザーミーNisami、ルーミーRumiなどの詩とか、権威ある学術論文、たとえばジョーンズ Jones、ド・サーキーde Sacy、ディーツ Diez の著書などに取り組みながら—みずからは眼前の現代史、とりわけナポレオン戦争の渦中からの旅立ち、または（「ヘジラ」<sup>160</sup>）であり、同時に精神的・肉体的な回春過程とも感じていた [注6]。現に西東詩集の冒頭をかざる詩《》はいう—「北も西も南も砕け散り／玉座は裂け諸国は震える／逃れよ 清純な東方で／族長の精気を味わうため／愛し 飲み 歌いつつ／キーゼル<sup>161</sup>の泉で若返るのだ」 [注7]。ゲーテは1815年5月末、青少年時代をすごした地方—ライン・マイン・ネッカル—へふたたび旅立つとき、すでにほぼ100編近い詩を西東詩集の文体で書きあげていたばかりでなく、あらかじめ先取りする形で、西東詩集に「ハーテム」(Hatem)と名乗ってあらわれる、詩人の「わたし」に、「模範的な」恋の相手—「ズライカ」(Suleika)—を割り当ててさえた [注9]。

昔からの友人であるヴィレマー家の招待をうけ、ゲーテはマイン河畔の「ゲルバーミューレ」で、前年に20歳以上も年下のマリアンネ・ユング Marianne Jung—元女優で踊り子—と結婚していた、銀行家ヨハン・ヤーコプ・ヴィレマーの別荘で1815年8月12日から数週間をすごしている。ゲーテの日記と旅の道づれ—ズルピーツ・ボアスレーSulpiz Boisserée—の手記とが、社交の高揚した雰囲気や逗留<sup>とうりゅう</sup>中の数週間に催された多種多様な芸術的出し物を証言している。

ゲーテがマリアンネ・フォン・ヴィレマーに『ハーフィス詩集』を一部贈呈するやいなや、芸術の才能に恵まれ、心を開いた多芸多才な招待者の夫人は、詩の基本要素、つまり、たえず繰り返されるモチーフと定まった形式に、驚くほどすばやく習熟した。それ以来、ハーフィスに見いだされる形象のレパートリーは、内証話でも、社交上の会話やおどけた仮装でも、ある種危険な役割を演じるようになる。たとえば、日と月、サヨナキドリとバラ、ターバンと護符、「巻き毛の蛇」<sup>162</sup>と「の矢」<sup>163</sup>、あるいは恋の使者としてのヤツガシラ「フトフト」<sup>164</sup>などの形象である。マリアンネ・フォン・ヴィレマーは、二人のためにハ

<sup>160</sup> 「ヘジラ Hedschra」とは元来「聖遷」（モハメットのメッカからメディナへの移動。イスラム紀元、西暦622年）を指す。

<sup>161</sup> Chiser：生命・回春の泉の守護者。

<sup>162</sup> Lockenschlange。『ハーテム』と題する詩にみられる、いかにもハーフィスらしい<sup>ひづ</sup>比喻で「蛇なす髪」の意。

<sup>163</sup> Wimpernpfeil。

<sup>164</sup> ヤツガシラ科の鳥。全長約27cm。頭部に黄褐色で先端の黒い羽冠があり、扇状に立てる。背は褐色で、

ーフイス詩集ドイツ語訳<sup>165</sup>のページ数と行数をベースにした暗号作成術を案出し[注 10<sup>166</sup>]、またあつというまに、自分に向けられたゲーテの詩に対して、西東詩集ふうの文体と<sup>もんごん</sup>文言でみずからも応答することができるようになった。フランクフルトから送りどけられた、「がをつくるにあらず／機会こそ最大の盗人なり…」<sup>167</sup>という詩に呼応して、マリアンネは率直な、しかも機知に富んだ告白でこう返している—

あなたの愛に酔いしれて

わたしは<sup>チャンス</sup>機会をしかりなぞいたしません

たとえ機会がああなたのせいで変わろうと  
そんな盗みならどんなにうれしいことでしょう！  
(…)

冗談を言わないで！ 落ちぶれるだなんて！  
愛はわたしたちを豊かにしてくれないかしら？  
あなたをこの腕にいただけば  
わたしの幸せにまさるものなぞありゃしない [注 11]

マリアンネの格別にできばえのよい幾つかの詩、たとえばハイデルベルクに向かう旅路でつくられた「東風」と「西風」に寄せる歌などは、ゲーテがささいな修正をくわえたいえ、まるで自作の詩のように、のちの西東詩集に忍びこませている。その結果、1869年になってようやく、本当の作者がだれなのか、真相がヘルマン・グリム Herman Grimm によって知れわたるようになったほどである [注 12]。ハイデルベルク滞在中に、ゲーテは宮殿の大庭園で1本のイチョウを発見した。当時のヨーロッパでは、イチョウ樹はまだ珍しい

---

翼は黒く白色の横帯があり、腹面は白い。なお、「フトフト」(Hudhud)、ことヤツガシラは、ハーフィスの詩で、ソロモンとシバの女王の愛の便りを運んだとされ、西東詩集でも「愛の書」《挨拶》などで歌われている。

<sup>165</sup> ハンマー＝ブルクシュタル訳

<sup>166</sup> 注 10：「この暗号案出について、ゲーテは、西東詩集に関する『注解と論考』の「暗号」の章で、次のようにみずから注釈をくわえている。『愛しあう二人は、ハーフィスの詩を感情交換の道具とすることで合意する。二人が互いの現状をあらわすページと行を書きしるせば、寄せ集めのこよなく美しい表現もった歌が生まれるであろうし、この計り知れない詩人の随所にまき散らされたすばらしい詩句が、情熱と感情によって結び合わされ、好みと選択が全体に一個の内的な生命をあたえましょう。二人はたとえ遠く離れていても、悲しみをハーフィスの珠玉の言葉で飾ることによって、慰めの体験を見いだすであろう。』」(HA 2, S. 194)

<sup>167</sup> 「盗みは出来心」というドイツの格言が下敷きになっている。

植物とみられ、どうやら以前にもフランクフルトで同様なことがあったようだが、イチョウが会話の引き金となり、「奇妙な葉」の「散文的な解釈」へとい、ついには「な翻訳」のきっかけをつくるもとにもなった。ちなみに、マリアンネ・フォン・ヴィレマーは高齢になってふたたびハイデルベルク城を訪れたとき、ある若い身内の女性にこう打ち明けたという。「あの方がその昔1枚の葉を<sup>た</sup>手折<sup>お</sup>ってお贈りくださり、その後わたしのために詩をつくって送りとどけてくれた、木がこれだよ」 [注 13]。



ゲーテがハイデルベルクからフランクフルトのロジーネ・シュテーデルあてに送った 1815年9月27日付の手紙に書かれている詩《ギンゴ ビローバ》。ヴァイマル古典財団所蔵。

## 8-2 手紙と叙情詩集との脈絡からみた詩

長年にわたる植物研究と「変態論」(Metamorphosenlehre)との執筆は、多種多様な葉群系(Blattformation)とその「形成」(Bildung)や「転成」(Umbildung)に対するゲーテの鑑識眼を鋭くしていった。中央で深く切れ込む、<sup>ふたまた</sup>二又脈系のイチョウ葉は、あらゆる原型あるいは類型的なものに寄せる詩人の関心を格別に刺激したことであろう。イチョウ葉は、分離しようとするものの結合、または統一のなかの二面性をはっきりと見せるために、ゲーテにとってわかりやすい<sup>アイコン</sup>絵文字となり、詩人が当時いちばん激しく献身的にかかわっていた二つの体験と主題領域—片や西・東詩集、片や愛しながらもゲーテと別れざるをえなかったマリアンネ・フォン・ヴィレマーとの関係—を象徴的に示すことができた。奇妙な形態をしたイチョウ葉を眺めるうちに、このような絵文字の意味が雷光のごとくひらめき、<sup>なぞと</sup>謎解きの試みを「律動的な翻訳」に変換することによって、西東詩集のもっとも典型的な詩の一編が形をととのえ、まさしく《ギンゴ ビローバ》が、連作を構成するすべての詩に「全体の意味」を染み込ませたいと考える、作者の創作意図 [注 14] をとりわけ首尾よく「移植」したとしても、不思議ではないと思われる。



フランクフルト・アム・マイン河畔のゲルバーミュレ、ヴィレマー家の夏の別荘。A.ラードル Radl の鉛筆画、1816 年作、ヴァイマル古典財団。

《ギンゴ ビローバ》

東方からわたしの庭にゆだねられた  
このイチョウの葉は  
秘密の意味を味わわせ  
知者の心を高めもする。

みずからのなかで二またに分かれた  
この葉は一個の生き物なのか  
それとも 一心同体と認められるほど  
互いにりすぐった二つのものなのか

このようなを解こうとして  
正しい意味が見つかった—  
わが歌集にふれてきみは感じないか  
わたしは一にしてなのだ [注 15]。

西東詩集での最終配置に比べると、ゲーテの一表向きは義理の娘あてになっているが、実はマリアンネ・フォン・ヴィレマーにさしだそうと思っていた—送り状の文脈では、詩の意味にさらに微妙なニュアンスがくわわる。



マリアンネ・フォン・ヴィレマーの肖像。A.ラードルのパステル画、1819 年作、ヴァイマル古典財団。



ヨハン・ヴォルフガング・ゲーテの肖像。パステル画、白く際立たせてある、F. C. Ch. ヤーゲマン Jagemann の作品、1817 年、ヴァイマル古典財団。

西欧の庭に根をおろすことになった、「東方から」きたイチョウ樹は、第一に、先行する数カ月のあいだに成立してマリアンネ・フォン・ヴィレマーとのきわめて活発な意見交換の対象になっていた、ディーヴァーン・ポエジーの「西・東」精神をあらわしている。扇形、いや、ハート形のイチョウ葉は一具象例であるにせよ、「テキスト化されて」いるにせよ—受け取り手の婦人に対して、騎士道にかなった忠誠をいわば運命づけられているようにみえる。したがって、すでにゲルバーミュレで西と東の<sup>コミュニケーション</sup>情報伝達に付随していた、あらゆる護符やと同列に論じられることになる。こよなく親密な時期の追憶として、イチョウ葉とその詩は、過去をせさせず、現在に生かしつづける機能を担っている—これも詩集・連作の基本モチーフである [注 16<sup>168</sup>] —が、なかんずくゲーテとマリアンネ・フォン・ヴィレマーとのあいだで<sup>コミュニケーション</sup>交わされる未来の情報伝達全体には、すなわち、以後はもっぱら回顧に依存し、ただ過去からたえずあらたな精神的緊張をくみとるにすぎない関係には、めの基調が根強いのである。まさにハイデルベルクでの出会いに視線を投げかけながら、マリアンネはつづく幾年月のあいだ、過去のものを「現在の」ものにするために好適であったという出来事を逐一慎重に思い描くようになり [注 17]、ゲーテの側から、たとえば夫君にあてた 1824 年 12 月付の手紙で、「わたしが彼女のことを思い出すように、彼女もわたしのことを忘れないでほしい、そうすれば過去と現在の違いも感じられないでしょう」 [注 18]、と書いてよこせば、マリアンネの回顧癖はいっそう強まった。このように、文通相手のひそかな了解それ自体がすでに、東方のの葉に「秘密の意味」を付与しているのである。この種の了解は、二人のならぬ恋が頼らざるをえないばかりでなく、西東詩集もまた繰り返し主題にしている、例の暗号用語につながってゆく。こうしたあいまいな表現についても、「われわれはとかくうわべの意味で理解できるものを楽しみがちだが、この楽しみの背後にはさらにいっそう深い意味がひそんでいる、と同時に主張する」、「きわめて博学な人びと」との交遊に言及しながら、そのあと皮肉に書きそえる形で、ゲ

<sup>168</sup> 注 16: 「たとえば『うたびとの書』のなかにも、『現在のなかの過去』と題される一編の詩がある (HA 2, S. 15)」。

一テは〔イチョウ葉に添えた〕送り状のなかでこう論じている。「このことから、わたしはもしかするとあまりにも性急すぎるのかもしれませんが、まず友人や愛している人たちが、自在に本当の意味を読みとる、完全な自由をもつように、まるっきり不可解なことを書くのが最善ではないかと考えております（…）」〔注 19〕。

イチョウ葉がしかし「秘密の意味を味わわせて」くれるのは、なによりも、象徴的な解釈にふさわしい葉の特別な適合性のためである。その視覚存在によって、イチョウ葉は「うわべの意味で理解可能」であるが、同時に、表層の外見をとおして伝えられながら、当の外観を超える「意味」をも透過させている。したがって、この葉を手がかりにすれば、東方神秘主義の特性、いや、なかんずくゲーテが西東詩集に関する『注解と論考』のなかで特徴づけているような、象徴表現に対するゲーテ自身の理解するところが明確になる：—「才気に富む人間は、具現されているもので満足せず、もろもろの感覚にあらわれる、いっさいのものを一種の覆面とみなし、背後に一段高い精神生活が、わたしたちを引きつけ、いっそう崇高な領域へ誘うために、いたずらっぽく気ままに隠れていると思うものである」〔注 20〕。

ゲーテが当時このような問題を論じあっていた、「きわめて博学な人びと」のひとりに、古代学者フリードリヒ・クロイツァーFriedrich Creuzer がいるが、これまたハイデルベルク城の庭園で、ゲーテはこのクロイツァーにもイチョウの「奇妙な」葉形に注意をうながした。その数年後、古代学者は学生らにギリシャ神話の特色にかかわる歓談を次のように伝えている。「（…）古代ギリシャのどのゲシュタルト形態も、単なる事実のかげに一段と高い象徴が秘められているから、二通りの見方をすべきである、とわたしはゲーテに説明しようとした（…）こうした二重の意味は、必ずしも容易に探り当てられないとしても、すべての古代神話に内在しています。信者は厳格な言語理解で満足し、知者にはひとときわ高い意味がひそかな献身のうちに開かれるのです、と。わたしたち二人がちょうどイチョウのそばで立ちどまったとき、ゲーテはこのうえもなく生き生きと熱中してこの論究に耳を傾け、葉を1枚摘みとって言った、『では、おおよそこの葉のように——にしてなんだね！』」〔注 21〕。要するに、このような「二重の意味」が「知者」の心を高めるということにほかならない。本詩は取りも直さずこうした思考の流れをとりいれ、二重葉の奇妙な形態に関する、第二連の問いで、その意味をつきとめようとしているのである：—

みずからのなかで二またに分かれた／この葉は一個の生き物なのか／それとも 一  
心同体と認められるほど／互いにりすぐった二つのものなのか

「一段と高い意味」が、ここの問いかけの過程で、言語実現のうちにおのずから確立される。つまり、外見上は葉の奇妙な形態をありありと思い浮かべながら、分離と統合の主題化、さらには「生きている」自律的な存在の暗示が、引き裂かれていながらも統一体の

役割を演じるイチョウ葉を、愛しあう連帯の象徴として浮き彫りにするのである。

「みずからのなかで分かれた」一個の「生きている存在」（「生き物」）というがすでに、プラトンの『』で小アリストパネスに語らせる、の古代神話を参照するように指示するのも偶然ではない。「ともあれ、ぼくらは、のように、一つのを半分に断ち切られたのだから、一人一人が人間の<sup>わりふ</sup>割符というわけだ。だから、だれもが自分の割符を探し求めるのは、当然なのである」<sup>169</sup> [注 22]。したがって、とは、作為的に切り離されているが、もともと一体であるべきもの同士がいただく合一へのれのように思われる<sup>170</sup>。

このような半身同士の求めあいを、ゲーテは《ギンゴ ビローバ》より少しまえに《再会》と題する詩で、愛する女性との思いがけない再会の印象をもとにしつつ、同じく創造神話の枠内でとしている。天地創造とともに生じた、光と闇のような根源的両極性<sup>171</sup>への分離は、ここでは一色彩論の認識に呼応して一恋さながらに切り離されたものをめぐりあわせる、<sup>しよこう</sup>曙光の織りなす「色彩の戯れ」によって橋渡しされる [注 23<sup>172</sup>] <sup>173</sup>。これに応じ

て、愛しあう者らは契り、個々の立場で新たな生命をつくり、ひとつの「世界」を創造することによって、神の創造行為を完結するのである。「アラーはもう創造しなくてよい／ぼくらがかれの世界をつくるのだ」。個人の情熱はこうして宇宙の壮大な出来事としてとらえられることになる：—

こうして<sup>ぎょうこう</sup>暁紅に染まる翼とともに  
ぼくはきみの唇にひきよせられ  
夜がきら星の封印をもって  
ぼくらの契りを固める。

<sup>169</sup> 『世界の名著 6—プラトン I—』、中央公論社、昭和 41 年刊、133 ページ、鈴木照雄訳引用。

<sup>170</sup> 人間どもの傍若無人なふるまいをおさめようと、ゼウスが人体を二つに切ったため、人びとはみな自分の半身を求めるといふ。

<sup>171</sup> 両極性(Polarität)：磁石の両極のように、一つのものが二つの極に分れる性質。両極は互いに排斥しあいながら、同時に相互に相手を自己の存在条件とする関係にある（広辞苑）。

<sup>172</sup> 注 23：「光が現れた！ と／闇がおどおどと離れていった／にわかには地水火風の四大は<sup>しだい</sup>／ちりぢりになって逃げまどう／（…）万有が黙し静まりとしていた／はじめて孤独をなめた神は／朝焼けをつくりあげる—／朝焼けは苦悩をあわれみ／天地の濁りから／響きそめる色彩の戯れを織りなした／見よ ばらばらになっていたものが／いまやふたたび愛しあえる」

<sup>173</sup> ゲーテの『色彩論』によれば、光に一番近い「黄」と、闇に一番近い「青」とが高昇し、合一するとき、「赤」という全色彩現象のなかで最高の現象が生じる。つまり、<sup>しよこう</sup>曙光の赤（「<sup>ぎょうこう</sup>暁紅」）は光と闇の出会いであり、「再会」をあらわすとみられる。

二人は地上にあり  
ともに苦樂の模範。  
神がいま一度「成れ！」と叫べど  
ぼくらを二度と裂くことはない [注 24]。

イチョウ葉の複合性と視覚的な光の屈折現象に例証される、ごく自然な法則性またはそうした関係の「模範的なもの」は、愛しあう者たちの相互帰属性または運命的な相互の規定関係を裏づけるものである。このこともまた、ズライカは「久しく待ちこがれていた」女性であるとか、詩人にずっと以前から「予言されていた」女性であるとか、樂園でも詩人に「授けられる」であろう女性などという、いわば西東詩集全編にまたがるの一つである [注 25]。

《ギンゴ ビローバ》の第三節は、図形記号でつきとめられた「二重の意味」を、人称上の対立という現実の世界に移行させている。すなわち、恋するハーテムは、叙情詩の「わたし」としていまや自己自身の立場で、第二節の「正しい意味」を求める問いに答えることが許される。ハーテムは、わが身もイチョウと同じように、「一にして二重」なのだとか、わが歌集にふれてきみは感じないか／わたしは一にしてなのだ」という。

ただし、ハーテムが呼びかけの形式を選び、答えを新たな問いに変えることによって、つきとめるべき「一段と高い意味」は、恋の語らいから直接に芽生え、ズライカとの対話に結びつけられたままで終わる。したがって、本詩は、主題としているものを、同時にまた語りの動きのなかにもどしているのである [注 26]。

叙情詩の自我 [作中の「わ<sup>アイデンティティー</sup>たし」] の同一性と自意識が、ようやく恋の相互性で、いわば「愛する対抗者」としてのズライカとともに、どの程度確立され証明されるか、これこそが西東詩集の核心モチーフの一つである。連作はたえず新たな <sup>ヴァリエーション</sup> 変奏によってギブーアンドーテイク、問いと答えの基本形を、つまり愛情のに結ばれた自己放棄と自己利得との弁証法をめぐって離れることがない：—

ズライカがすべてを注いでくれるとき  
ぼくは価値ある自我に思える  
もしも彼女がそっぽを向けば  
瞬時にぼくはわれを失うだろう [注 27<sup>174</sup>]。

<sup>174</sup> 注 27：「HA 2, S. 72—少し前の 9 月 21 日にできた、愛による人生の改善をたたえる詩は、まさにギブーアンドーテイクのやりとりを、キャッチボールにたとえて印象深く <sup>ほうふつ</sup> 彷彿させる：『生きている喜びは大きい／その喜びはもっと大きくなる／もしもズライカよ きみが／ぼくを限りなく幸せにし／きみの情

呼びかけられたズライカは、ハーテムの「歌集」にふれて、それが互いのを対象にしていることから、恋人が「一にして」なることを悟ることができる。しかし、西東詩集はこのようないにして二なる複合性をさらに別の手法で、すなわちズライカ自身の立場から「秘密の意味」を「味わわ」させるふうにして証言している。というのも、この恋人は自分自身の声で相聞歌をかわし、詩人にとってこの点でも愛する「対抗者」となることができ、彼女の口から「みずからつくった歌」が「きいで」、「みずから感じた歌」〔注 28〕によって、ズライカは愛の戯れのやりとりでも均衡状態をつくりだせるからである。こうした「秘密」が「明らかに」なり、ハーテム＝ゲーテが、歌うズライカ＝マリアンネを自慢し〔注 29<sup>175</sup>〕、共通の恋の対話〔相聞〕を一ササン朝ペルシアの詩人ベーラムグールの愛人ディラーラムによる韻律詩の案出を題材にした一ペルシア伝説<sup>176</sup>になぞらえることができるのも、ディーヴァーン詩集言語の弁証法のひとつに数えられる。

押韻の愛らしい利用に気づくため  
恋人よ ぼくにもきみが授けられた  
もうササン朝の王ベーラムグールを  
うらやまなくてよい ぼくも同じ身になったから

この書はきみに呼び覚まされ きみから授かった  
ぼくが心の底から喜び語った言葉が  
きみの愛らしいのちからとなって返ってくる  
が眸に 韻が韻にこたえるように〔注 30〕。

韻の響きあう協和音で、さながら交互歌唱のように、恋人同士の連帯—「一にして二重」—が証言されるばかりか、兩人によって連作全体の対話式構造そのものが主題として扱われている。

このような個々の詩と連作全体との多様な相関関係は、とどのつまり、《ギンゴ ビロ

---

熱を／ボールのように投げてくれば／ぼくはそれを捕らえ／さっそく投げ返す／きみにささげたわたしを—／これもすばらしい一瞬のとき！』（同書 70 ページ）。

<sup>175</sup> 「ハーテムは嫉妬深い『少女たち』をこうとがめる—『きみたち詩人のうち／だれひとりズライカにかなうものはない／あの方はわたしの心になおおうと歌うが／きみたちは自分を愛して歌うばかり』（HA 2, S. 74）」。

<sup>176</sup> ベーラムグール(Behrangur)が女奴隷のディラーラム(Dilaram)に求愛の言葉を語り、ディラーラムが同じ押韻で応じたことから、最初の韻律詩が生まれたとする伝説。

一バ》の西東詩集内における配置とこの詩がテキスト理解におよぼす帰結を尋ねさせることになる。

《ギンゴ ビローバ》は、「ズライカの書」のなかにあり、「ハーテム」と「ズライカ」のあいだでかわされる才気な対話詩にかこまれている。この配置によって、本詩でもハーテムとズライカが対話者であると確認される。《ギンゴ ビローバ》詩節の間接的な愛の告白は、まわりの詩がいつそうおどけた調子で補強し、さらに多くの声のまじりあったボリフォニー<sup>ボリフォニー</sup>で歌いあげる。周囲の詩も、まさに愛の宿縁にも似た希有な特異性をめぐるものばかりである。たとえば、先行する詩（「殿方のまなざしはよく存じています…」）は、ズライカの衆に抜きんでた立場を、「このはぼくの心になつた／世の中にたえてないほどに」〔注31〕、と忠誠の誓いをこめて強調するが、《ギンゴ ビローバ》の直後につづく対話詩は、あまたの恋人にまつわる前歴を尋ねた、ズライカのこびるような深い問いかけ—「おっしゃって おそらくあなたはたくさん詩をつくり…」—に対して、「でも考えてごらん どれほど昔から／ズライカが予言されていたことか」〔注32〕、と自信のある総括的な締めくくりで応答している。連作内部におけるテキストの緊密な絡み合い、の変化、そこで話題になる恋の相手の役割めいたものや模範的なものの強調などで、個人的な体験に対して距離が築かれ、相互恋歌の陰鬱な謎めいた強勢<sup>いんうつ なぞ アクセント</sup>が「止揚され」、少なくとも相対化されているのである。

『西東詩集』の多くの詩は「超<sup>メタポエーティッシュ</sup>詩<sup>的</sup>」であり、うわべの対象を超えてたえず叙情詩全体の前提や成立条件をも主題とし、反映している。短い《ギンゴ ビローバ》の詩といえども、単純であると同時に見きわめがたく複雑であり、フリードリヒ・クロイツァーがゲーテに説明した古代象徴学の見方と同じように、「二通りの意味のある」ことが明らかになる。



いわゆる小庭園からハイデルベルク城の南西部を見晴らす光景。E.フリース Fries<sup>リトグラフ</sup>の石版画、1820年。

### 8-3 「遠く隔たった女性とのたえまない会話」—ハイデルベルクにおける出会いの余韻

相聞歌の才気な恋の相手、マリアンネ＝ズライカは、1819年、西東詩集の初稿が印刷にまわされているあいだにはじめて、詩という「鏡」のなかで割り当てられた自己の立場を知った。1819年5月26日、ゲーテは彼女に最初の印刷全紙を送りとどけ、同年11月に「全体」が「遠く隔たった女性とのたえまない会話のとして」追送される〔注33〕。情愛のこもった献呈の詩が小包にそえられ〔注34〕、マリアンネは、感動と感謝の念にふるえながら、『西東詩集』のなかに—「黄金のバラのと／色の縁にかこまれて」〔注35〕—自分自身の「美化され」、「高められた」写し絵を見いだすことができた〔注36〕。

二人はハイデルベルクで出会ったあと、もはや二度と会うことはなかった。けれども、数々の文面は、と分別を強いられながらも、互いに寄せる慕情の激しさを如実に物語っている。たとえば、ゲーテの心にかきたてられた情動<sup>177</sup>は、ロジーネ・シュテーデルあてのすでに何度か引用した手紙でも、ゲーテが次のようにしたためているくだりを読めば、ひどくおどけた言葉遊びの蔭からまぎれもなく伝わってくる。「友人たちがわたしたちのもとを去ったあと、それまで目前にさし迫っていた災いが、文字どおり突発しはじめました。胸部に痛みが生じ、あやうく心痛に変わるところでしたが、この異変は、ハイデルベルクのすきま風と変わりやすい城の温度のしごく自然な結末なのでしょう」〔注37〕。さらに日記のなかにも、ゲーテは同一の日付で「熱烈な恋」をあらわすアラビア・ペルシア文字を書きくわえている〔注38〕。他方、再会の夢がいつも期待はずれに終わることを思い知らされた、マリアンネ・ヴィレマーの熱烈な感情は、当時の暗号書簡からうかがわれ、その一通をゲーテはただわずかに変えだけで『注解と論考』におさめている：—

わが命すべてをただ  
かの人の愛に捧げむ

常にきみを思っていたえず  
深くわが胸張り裂けたり

ひそかにかの人を愛するほか  
われに力なし  
かの人をくことかなわざれば  
わが身はいかになるらむ

---

<sup>177</sup> 「情動」(Emotion)：怒り、悲しみ、恐怖、喜びなどの感情で、激しく強いものをいう。「感情」(Affekt)は「感」の意味に力点が置かれるのに対し、「情動」は「動」の意味が強調され、動機としての意味が強調される。

かの友の語らいをとおし  
わが心きみがいとおしくなりて  
いまや余人に  
耳もかさず口もきかぬほど  
(…)  
たえずわが心きみの唇を慕う [注 39]。

<sup>げんせ</sup>現世の出会いに代わるものは、ゲーテの死まで、恋の連続性をとりわけ「変わらぬ」、

「変わっていない」、「心変わりしないでいる」などのような、たえず繰り返される手紙の慣用句で知らせる、対話書簡である。ハイデルベルク滞在、特にもっとも腹藏なく愛の告白をした時点とみられる 9 月 25 日は、双方の回顧でひときわめだつ役割を演じている [注 40]。マリアンネは繰り返しネッカル河畔のハイデルベルクへ旅をし、「とてもさまざまな時間と気分<sup>とうりゅう</sup>で」逗留したという、「かの地へ再三再四」でかけることを、生涯の「大事件」に数え、「永遠に忘れられない」場所とも語っている [注 41]。1824 年 8 月 25 日、ついにマリアンネはハイデルベルク城にささげる自作の詩をゲーテに送り、「わたしにとってハイデルベルクよりすばらしい（地方）がどこに見いだせるでしょう！」、と注釈をほどこしている [注 42] —

ハイデルベルク城  
7 月 28 日午後 7 時  
(…)  
段庭の高い山の欄干に  
いっときあの方の往来  
いろんなしるし 変わらぬ愛のがあった…  
いま探し求めど わたしには見つけだせぬ—

東方から西東の庭にゆだねられた  
あそこのあのイチョウ葉は  
わたしに秘密の意味を味わわせ  
恋する女性はな気持になる  
(…)  
さあ疲れたを閉じてごらん  
あのすばらしい時の薄明につつまれて  
友の高尚な歌がわたしのまわりに響き

過去が現在になる

(…)

わたしを囲う目に見えないを閉じてごらん  
しくわたしを取りまく魔法の輪につつまれ  
快く沈潜してごらん お前たち感覚と思考よ  
ここでわたしは幸せでした 愛し愛されて [注 43]。

出会いの至福にからむ追憶は、このように遠く隔たった者たちのあいだで交わされる会話ほんらいの刺激剤を意識にのぼせること、つまり、想像力によって過去をありありと思ひ浮かべることなのである。恋愛中の回顧ならびに言語構成—過去形から現在形への綿密に計算された転換—によって、過去が、上記の詩でいわれているように、字義どおり「現在に」なることができる。この詩行は、「誠実な女友達」に数年まえ、「そうこうするうちに過去が現在になり、友人がすぐ近くにあらわれますように！」 [注 44] という所見をそえて、詩集の仮とじ本を一部送りどけていた、ゲーテとの叙情詩の対話を再活性化することにもなる。いまやマリアンネは再度みずからが自律的に答える対話の相手であること

を実証する。このように現在化させる模作には、詩集の根本モチーフの再受容と <sup>バリエーション</sup> 変奏が欠かせない。たとえば、イチョウ葉が担う「西東の」意味への参照指示とか、肯定的な、いわばハイデルベルクの出会いを総括する告白で絶頂に達する、と相聞との相互関係の強調—「ここでわたしは幸せでした 愛し愛されて」—などが必要なのである。

「この数週間ハイデルベルクから離れる」こともならず、「あの再興されたの庭がいつさいの義務感、ありとあらゆる仕事や気散じの背景として」「いつまでも変わることなく」わたしの眼前にありありと浮かんできます、とゲーテはマリアンネの《ハイデルベルクにささげる詩》に対して詩人の側から「再度感謝の念をこめて」答えている [注 45]。さらに、ゲーテが没する数週間まえの 1831 年 12 月 17 日にも、マリアンネは、「な女性巡礼者」にふさわしく、ハイデルベルクとすべての「喜びと悲しみにはらい清められた地方」をあらためて訪問した模様を、ゲーテに伝えている。そのおりに、16 年間にわたって日本の扇状葉高木と分かちがたく結びあわされていた、数々の多彩な連想を最後に呼びさますことも、マリアンネは怠ってはいない：—

「とりわけ (…) なじみのギンゴ ビローバをわが懐におさめたことをお知らせしたいと存じます」 [注 46]。

#### 8-4 注

- [1] Vgl. zur unterschiedlichen Orthographie wie zum grammatischen Geschlecht des botanischen Terminus: Herbert Albrecht: Über den Fächerblattbaum (Ginkgo biloba). In: Jahrbuch der Sammlung Kippenberg. Neue Folge. Bd. 3. Düsseldorf 1974, S. 32–40, sowie:

Günther Debon: Das Blatt von Osten. Gedanken zum Gingo-biloba-Gedicht. In: Euphorion 73. 1979, S. 227–236, hier: S. 228f.

- [2] Einem Tagebucheintrag von Sulpiz Boisserée zufolge wäre ein Teil des Gedichts, die zweite Strophe, bereits am 15. September im Kreis Willemer auf der Gerbermühle vorgetragen worden. Das Tagebuch vermerkt unter diesem Datum: „Heitrer Abend. Goethe hatte der Willemer ein Blatt des Gingo biloba als Sinnbild der Freundschaft geschickt aus der Stadt. Man weiß nicht, ob es eins, das sich in 2 teilt, oder zwei, die sich in eins verbinden. So war der Inhalt des Verses. — Wir saßen in der schönen warmen Abendluft auf dem Balkon.“ (Zitiert nach den Anmerkungen zu: Marianne und Johann Jakob Willemer. Briefwechsel mit Goethe. Hrsg. von Hans-J. Weitz. Frankfurt a. M. 1965, S. 319, künftig zitiert mit der Sigle: BrW.) — Gegen diese frühe Datierung hat Günther Debon vor allem zwei Argumente vorgebracht: Goethes Ankündigung einer „rhythmischen Übertragung“ im Begleitbrief vom 27. September, die es wenig wahrscheinlich mache, daß ein Teil des Gedichts im Willemer-Kreis bereits vorgetragen worden sei, sowie die wiederholten späteren Aussagen Marianne von Willemer, die die Entstehung des Gedichts immer mit Heidelberg, nicht mit Frankfurt assoziiert. Will man dieser in mancher Hinsicht zwingenden und scharfsinnigen Beweisführung folgen, müßte man freilich die Hypothesen einer ungenauen Rückdatierung in Boisserées Tagebuch sowie einer absichtlichen Verknüpfung des Gedichts mit dem Abend auf der Gerbermühle in einer Handschrift Goethes in Kauf nehmen: Debon (Anm. 1), v. a. S. 230ff. — Vgl. zu diesem Themenkreis auch: Günter Steiger: Diesem Geschöpfe leidenschaftlich zugetan. Bryophyllum calycinum. Goethes „pantheistische Pflanze“. Weimar 1986, v. a. S. 56ff.
- [3] Über diese Beziehung hat am ausführlichsten, aber auch am ausschweifendsten gehandelt: Hans Pyritz: Goethe und Marianne von Willemer. Eine biographische Studie. Stuttgart 1948.
- [4] Die Modalitäten dieser Hafis-Rezeption hat Konrad Burdach schon 1905 in seiner Einleitung zu Goethes Divan dargelegt: Die Kunst und der dichterisch-religiöse Gehalt des west-östlichen Divans. In: Ders.: Goethe und sein Zeitalter. Halle/Saale 1926, S. 333–374, v. a. S. 367ff.
- [5] Erich Trunz: Nachwort zum „West-östlichen Divan“. In: Johann Wolfgang von Goethe: Werke. Hamburger Ausgabe in 14. Bänden: Bd. 2. (12., neubearb. Aufl.). München 1981, S. 551, künftig zitiert mit der Sigle: HA 2.
- [6] Vgl. zu den Entstehungsbedingungen: Konrad Burdach: Goethes west-östlicher Divan in biographischer und zeitgeschichtlicher Beleuchtung (1896). In: Ders.: Goethe und sein Zeitalter (Anm. 4), S. 282–332, hier: S. 293 ff., sowie Trunz (Anm. 5), S. 555 f.
- [7] HA 2, S. 7.

- [8] Im Sommer zuvor war er bereits zur Badekur nach Wiesbaden gereist und dort, sowie im Oktober auch in Frankfurt, mit Johann Jakob Willemer und dessen Gefährtin Marianne zusammengetroffen.
- [9] In den Gedichten Daß Suleika von Jussuph entzückt war und Da du nun Suleika heißest aus dem Buch Suleika: HA 2, S. 62 f. — Suleika ist in der orientalischen Dichtung dem jugendschönen Joseph zugeordnet, mit der Namensgebung Hatem bezieht der Dichter des Divan sich auf zwei verschiedene Gestalten der arabischen Literatur: Hatem Thai und Hatem Zograi (vermutlich Hassan Thograi): Vgl. den Kommentar von Erich Trunz: HA 2, S. 626.
- [10] Diese Erfindung hat Goethe in den Noten und Abhandlungen zum West-östlichen Divan in dem Abschnitt Chiffer eigens kommentiert: „Liebende werden einig, Hafisens Gedichte zum Werkzeug ihres Gefühlwechsels zu legen; sie bezeichnen Seite und Zeile, die ihren gegenwärtigen Zustand ausdrückt, und so entstehen zusammengeschiedene Lieder vom schönsten Ausdruck; herrliche zerstreute Stellen des unschätzbaren Dichters werden durch Leidenschaft und Gefühl verbunden, Neigung und Wahl verleihen dem Ganzen ein inneres Leben, und die Entfernten finden ein tröstliches Ergebnis, indem sie ihre Trauer mit Perlen seiner Worte schmücken.“ (HA 2, S. 194)
- [11] HA 2, S. 63 f.
- [12] Grimm veröffentlichte seinen Bericht unter dem Titel Goethe und Suleika erstmals 1869 in den Preußischen Jahrbüchern. Jg. 24.
- [13] So steht es in der romanhaften Erzählung von Emilie Kellner: Vgl. Ernst Beutler: Die Boissérée-Gespräche von 1815 und die Entstehung des Gingo-biloba-Gedichtes. In: Goethe-Kalender auf das Jahr 1940. Hrsg. vom Frankfurter Goethe-Museum. Leipzig 1939, S. 114–162, hier: S. 162.
- [14] So Goethe selbst in einem Brief an den Freund Karl Friedrich Zelter vom 17.5. 1815 (Briefwechsel zwischen Goethe und Zelter. Hrsg. von Max Hecker. 3 Bde. Leipzig 1913–1918.)
- [15] HA 2, S. 66.
- [16] So trägt schon ein Gedicht aus dem Buch des Sängers den Titel: Im Gegenwärtigen Vergangenes: HA 2, S. 15.
- [17] So etwa in den Briefäußerungen vom 23. Juli 1817 (BrW, S. 64), August 1819 (ebd., S. 87) oder 25. August 1821 (ebd., S. 119).
- [18] Ebd., S. 162.
- [19] Ebd., S. 26 f.
- [20] HA 2, S. 197.
- [21] So bei Beutler (Anm. 13), S. 147 f.

- [22] Platon: Sämtliche Werke. In der Übersetzung von Friedrich Schleiermacher hrsg. von Walter F. Otto und Ernesto Grassi. Bd. 2. Reinbek bei Hamburg 1957, S. 222.
- [23] „Auf tat sich das Licht! So trennte/ Scheu sich Finsternis von ihm, / Und sogleich die Elemente/ Scheidend auseinanderfliehn. / (...) Stumm war alles, still und öde, / Einsam Gott zum erstenmal! / Da erschuf er Morgenröte, / Die erbarmte sich der Qual; / Sie entwickelte dem Trüben/ Ein erklingend Farbenspiel, / Und nun konnte wieder lieben/ Was erst auseinander fiel.“ (HA 2, S. 83)
- [24] HA2, S. 84.
- [25] Vgl. HA 2, S. 62, S. 67, S. 112.
- [26] Entsprechend bemerkte Paul Böckmann über die in der zweiten Strophe aufgeworfene Frage nach der Beschaffenheit der im Blatt versinnlichten Doppeleinheit, sie gelte „nicht nur für das Blatt, sondern auch für die Art des Gesprächs und damit für das Verhältnis der Liebenden. (...) Es geht auch hier darum, 'die Frage zu erwidern' und sich durch die Antwort mit Suleika zu vereinen.“ (P.B.: Die Liebessprache der Heidelberger Divan-Gedichte. (1949). In: Ders.: Formensprache. Studien zur Literarästhetik und Dichtungsinterpretation. Darmstadt 1969, S. 167–192, hier: S. 181.)
- [27] HA 2, S. 72. — Das Hin und Her von Geben und Nehmen führt ein kurz vorher, am 21. September, entstandenes Gedicht, das die Daseinssteigerung durch die Liebe preist, am Ball-Gleichnis eindrucksvoll vor Augen: „Freude des Daseins ist groß, / Größer die Freud' am Dasein, / Wenn du, Suleika, / Mich überschwenglich beglückst, / Deine Leidenschaft mir zuwirfst, / Als wär' s ein Ball, / Daß ich ihn fange, / Dir zurückwerfe/ Mein gewidmetes Ich; / Das ist ein Augenblick!“ (Ebd., S. 70)
- [28] HA 2, S. 74.
- [29] So hält Hatem den eifersüchtigen „Mädchen“ vor: „Von euch Dichterinnen allen/ Ist ihr eben keine gleich:/ Denn sie singt, mir zu gefallen, / Und ihr singt und liebt nur euch.“ (HA 2, S. 74)
- [30] HA 2, S. 79.
- [31] HA 2, S. 66.
- [32] HA 2, S. 67.
- [33] BrW, S. 79.
- [34] Mit den Jahreszahlen 1815 — 1819 versehen: „Liebchen ach! im starren Bande/ Zwängen sich die freien Lieder, / Die im reinen Himmels-Lande/ Munter flogen hin und wider. / Allem ist die Zeit verderblich, / Sie erhalten sich allein. / Jede Zeile soll unsterblich, / Ewig, wie die Liebe sein.“ (BrW, S. 93)
- [35] So formuliert es das Gedicht Abglanz aus dem Buch Suleika: HA 2, S. 86.
- [36] Im Oktober 1819 schreibt sie an Goethe: „ich habe den Divan wieder und immer wieder

gelesen; ich kann das Gefühl weder beschreiben noch auch mir selbst erklären, das mich bei jedem verwandten Ton (ergriff); (. . .) Sie fühlen und wissen genau, was in mir vorging, (...)“ ff. (BrW, S.92).

- [37] Ebd., S. 26.
- [38] Ebd., S. 330.
- [39] Zweite Oktoberhälfte 1815 (BrW, S. 346 f.). — Goethes Umformulierung in den Noten und Abhandlungen: HA 2, S. 194.
- [40] Weitere Daten, derer immer wieder gedacht wird, sind der 18. Oktober 1814, der Tag, an dem man vom Mühlberg bei Frankfurt aus gemeinsam die Freudenfeuer zum Gedenken des Siegs über Napoleon betrachtet hatte, und der 28. August 1815, die Feier von Goethes Geburtstag auf der Gerbermühle. Auch bei jedem neuen Vollmonde wollten beide einander gedenken, wie es noch 1828 Goethes Dornburger Gedicht Dem aufgehenden Vollmonde! bezeugt: BrW, S. 199.
- [41] Briefe vom 2. November 1828 (BrW, S.202) und 19. Juli 1825 (ebd., S.168). — Andere Erwähnungen u. a.: BrW, S. 78, S. 154, S.217, S.263.
- [42] BrW, S. 157.
- [43] Ebd., S. 157.
- [44] So am 22. August 1819 (BrW, S. 86).
- [45] So im Brief vom 6. Oktober 1824 (BrW, S. 159).
- [46] Brief vom 17. Dezember 1831 (BrW, S. 263).



## 9 図版



1. ジュラ紀にヨーロッパから東アジアまで分布していた、おそらくギンコ デイギタタ (Ginkgo digitata) の化石イチョウ葉。



2. (I) 雌花、すなわち有柄の胚珠をつけた、イチョウの枝。(II) 雄性の尾状花序。フィリップ・フランツ・フォン・ジーボルト Philipp Franz von Siebold/ヨージェフ・ゲアハルト・ツッカリニ Joseph Gerhard Zuccarini 共著：『日本植物誌』、ライデン 1835-1842 年。



3. ゲーテがマリアンネ・フォン・ヴィレマーにささげた詩、《ギンゴ ビローバ》の自筆の清書。葉には思い出の日付「1815年9月15日」が付けてある。ゲーテ博物館 アントン&カタリーナ・キッペンベルク財団、デュッセルドルフ。



4. (上) イェーナ植物園の雄性イチョウで、雌性の大枝と種子を有する (通性 fakultative Monöcie)。写真: G. ヴィンクラー Winkler。 (中央左) 雌花。写真: G. ヴィンクラー。 (下左) 雄花。写真: G. ヴィンクラー。 (中央右) 短枝と葉の散在する長枝。写真: H. ディートリヒ Dietrich。



5. 徳島県板野郡上板町の乳保神社。県内最大最古のイチョウ樹、樹齢約 1000 年、樹高約 30m<sup>178</sup>、多数の瘤 (突起) を有するため、「乳の木」 (「乳銀杏」) と呼ばれる。写真: 矢野英成<sup>179</sup>。

---

<sup>178</sup> 徳島県ホームページよれば、現在 22m、周囲 14 メートル、樹齢約 1200 年。

<sup>179</sup> 加藤温子氏の弟君、徳島県板野在住。



6. (上左) きづたが「対馬の親爺<sup>おやじ</sup>」の幹にからみついている。樹齢約 1500 年、雄性。(上右) 徳島県板野町、地藏庵ほとりのイチヨウ樹の瘤<sup>こぶ</sup>【<sup>気</sup>瘤】。樹齢約 500 年、雌性。(下左) 東林庵(徳島県勝浦町)のイチヨウ枝にかけられている、聖なるしるし(稲のわらと紙とをよりあわせてつくった縄)。本樹は樹齢約 450 年、雌性。(下右) イチヨウの大枝にかかる奉献物。東京都目黒区大鳥神社。写真: 加藤温子。



7. 広島県報<sup>ほう</sup>専<sup>せん</sup>坊<sup>ぼう</sup>境内にある「原爆のイチヨウ」。左の図版は上部を、右の図版は下部を撮影したもの。本樹は原爆投下(1945年)の中心地から 800m 隔たる。写真: 加藤温子。



8. (上左) 胴着、伝統的な日本の婦人用仕事着。イチヨウ葉柄の青い木綿。(上右) 茨城県水戸市、井上壽博の陶器花瓶。(中央左) タオル、木綿、日本、現代。(中央右) 錦光山花瓶、金襴手・七宝焼きの磁器、1900年頃。(下左) 平皿一組、漆塗り。輪島。日本、現代。(下右) 茶碗、皿、箸。漆塗り。イチヨウ葉の形をした箸立て、清水焼磁器、京都、現代。



9. (上左) 三ツ銀杏葉紋、木製、長谷寺門口の梁、徳島県。写真：加藤。(中央上左) 皿。伊万里焼。日本、1870年頃、φ14cm。(中央上右) 鏡、藤原光長の作者銘、青銅、約1860年。φ11cm。(中央下左) イ

チョウ葉とシャクヤクの花をあしらったちょうちん。<sup>たかやま</sup>高山。φ200cm。(中央下右) 刀の<sup>つば</sup>鍔。日本、1800年頃。(上右) 首飾り。金銀の象眼細工。熊本。



10. 装身具一式、金、ブリリアント形ダイヤモンド、エーインガー&シュヴァルツ商会、ミュンヘン、1992/3年。(素描はこの装身具一式と無関係。)



11. 首輪、<sup>ざくろいし</sup>金、石榴石、<sup>てつばんざくろいし</sup>鉄鑿石榴石、プラハ、1904年以前。



12. (上左) ブローチ、金、石榴石、緑玉髓、ツルナウ専門学校/ボヘミア、1900年以後。(上右) ブローチ、金、石榴石、<sup>てつばんざくろいし</sup>鉄鑿石榴石、ツルナウ専門学校/ボヘミア、1900年頃。(下左) 結婚指輪と<sup>すず</sup>錫の<sup>モデル</sup>原型、金、ルビー、石榴石。フランタ・アニユツ Franta Anyz <sup>デザイン</sup>考案、1900年頃(アントニーン・リッター/プラハ完成)。(下右) 小瓶ペンダント、金、<sup>けむりすいし</sup>煙水晶、ルビー、ツルナウ専門学校、1900年以後。



13. (上左) 動物の頭をかたどったブローチ、金、<sup>かんらんせき</sup>橄欖石。メゾン・ブシェロン、パリ、1907年。(上右) ブローチ、金、真珠、ブリリアント形ダイヤモンド。パリ、1900年頃。(下左) 飾り櫛、金、<sup>べっこう</sup>鼈甲、真珠、トルコ石、F. ツェレナー、プフォルツハイム、1900-1902年。(下中央上) ブローチ、金、真珠、<sup>ほうろう</sup>珉瑯。F. ツェレナー、プフォルツハイム、1900-1902年頃。(下中央下) 裝飾櫛とペーパーナイフ、<sup>つ</sup>角。パリ、1900年頃。(下右) たれ飾り、金メッキをした銀、<sup>べん</sup>瑛瑯、模造宝石、真珠。フリードリヒ・シュパイデル社、プフォルツハイム、1900年前後。



14. (上左) たれ飾り、銀と模造宝石。フランス、1900年頃。(上中央) ブローチ、金。フランツ・ヴィレック、エアフルト、1930年頃。(上右) ブローチ、金、真珠、準宝石。ドイツ、ユージェントシュティール。(中左) 小瓶、銀製<sup>アセンブリ</sup>組み立て部品つき無色透明ガラス。パリ、1900年頃。(中中央) 印章、銀メッキ。パリ、1900年頃。(中右) ブローチ、銀に真珠。G. A. シャイト、ウィーン、1900年頃。(下3図)

ブローチ、銀をきせて酸化させた金属、スカラベないし幻のコガネムシの形象、<sup>ほうろう</sup>琺瑯加工、1900年以後。



15. (上左) 花瓶、色きせガラス。ドーム兄弟、ナンシー、1905年。(上中央) 小瓶、色きせガラスに金属組み立て部品と象牙。「ド・ヴェズ」、パンタン、1910年頃。(下) 蓋つき小容器、ガラス溶塊。G. アルジールソー、パリ、1920-1925年。(上右) 蓋つき花瓶、磁器。グナル・ヴェネルベリ、ストックホルム近郊グスタフスベリ、1901年。



16. (上左) 4灯式シャンデリア、錬鉄、華麗なガラスの<sup>かさ</sup>笠。パリ、1920年頃。(上中央) 天井灯、錬鉄。パリ、1920年頃。(上右) 天井灯、錬鉄、大理石模様がついたガラスの笠つき。パリ、1920年頃。(中左) 卓上電気スタンド、錬鉄、ガラス笠。ドーム、ナンシー／パリ、1900年頃。(中中央) 卓上

電気スタンド、錬鉄、ガラス笠。ドーム、ナンシー／パリ、1920年頃。（中右）卓上電気スタンド、錬鉄、ガラス笠。ドーム、ナンシー／パリ、1910-1920年頃。（下左）卓上電気スタンド、錬鉄、ガラス笠。ドーム、ナンシー／パリ、1920年頃。（下中央）卓上電気スタンド、錬鉄、ガラス笠。ドーム、ナンシー／パリ、1920年頃。（下右）卓上電気スタンド、錬鉄、様式化された花柄の食刻文様入りガラス笠、1920年頃。



17. （左）取っ手つきの壺、金をきせた陶器、「パリ 1900年」の日付記入。（中央）M. デュフレヌ／P. A. ダルペイラ、花瓶、釉うわぐすりをかけた炆器せつき。パリ、1899年。（右）ガラス彩色画（窓）、ジャック・グルーベルの色きせガラス、ナンシー、1910年頃。



18. （上左）加藤温子：シリーズ・四元素から。『地の中で』、1989年、油絵、67×73 cm。（上右）『風の中で』、1991年、油絵、67×73 cm。（下左）『火の中で』、1990年、油絵、67×73 cm。（下右）『水の中で』、1993年、油絵、67×73 cm。



19. (左上) 加藤温子：『イチョウ山で風上げ』、油絵、48×47 cm。(左下) 『イチョウ』、1988年、油絵、100×70 cm。(右上) 『シュプール 1』、1990年、油絵、48×47 cm。(右下) 『シュプール 2』、1990年、油絵、48×47 cm。



20. ユタ・シュヴァルパッハ。1953年。ベルリン在住。『葉・イチョウ・板』。1985年。コラージュ、紙、木材。160×120cm。ドクター・ヴィルマル・シュヴァーベ有限会社、カールスルーエ。



21. (左上) アルフレート・トラウゴット・メルシュテット。1925年。エアフルト在住。イチョウ樹の葉。1979年。コラージュ、墨、水彩絵筆。10.2×14.8 cm。(上中央) ゲルト・マッケンゼン。1949年。ノルトハ

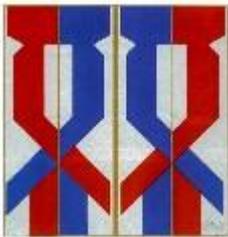
ウゼン在住。ジョーカー。1994年。ドライポイント<sup>180</sup>、油絵、44.5×29.5cm。(上右) エルンスト・アウグスト・ツィンマーマン。1939年。エアフルト在住。賢いイチョウ。1933年。手すき紙のうえに石版画と自然そのものの捺染<sup>なっせん</sup>。60.5×70.5cm。(下左) ギーゼラ・リヒター。1940年。エアフルト在住。『ねえ、あんたなの?』、1993/4年。グアッシュで上塗りした独自の石版画。54×70cm。(下右) ロジェ・ボナール。1947年。ヴァイマルとドレーズデンに住む。白い裸体。1994年。画布上の混合技法<sup>キャンバス</sup>。50×70cm。



22. カタリーナ・プラントル。1958年。ウィーン在住。『冥想』<sup>めいそう</sup>。1987年。フィリピン紙に描かれた水彩画。



23. (左) シュテファニー・ウンルー。1959年。ミュンヒェン在住。1945年8月6日。1994年。鉛筆、金色、文書、紙。約250×200cm。  
(右) ドロテア・リース=ハイム。1943年。ミュンヒェンとバーダボルンに住む。『包被の原理。外被—自然の鏡像』。1992年。手すき紙。インスタレーションの高さ：2.75m。



24. オットー・ヘルベルト・ハイエク。1927年。シュトゥットガルト在住。カップル。1975年。4色刷りシルクスクリーン印刷物。21×20.5cm。

<sup>180</sup> 銅版画の一種。鋭利な鉄筆で銅版に線をひいて版をつくるもので、腐食液は用いない。繊細な線をだすのに好適だが、耐刷力がない。

## 10 加藤温子にみるイチョウのモチーフについて：東西の統合

ヘルガ・シュモル・ゲナント・アイゼンヴェルト

加藤温子はまず日本の大学で学び（愛知県立芸術大学、1970—1976）、ひきつづきニュルンベルク造形芸術大学に在籍して（1976—1983）、「マイスター・クラス」<sup>181</sup>を修了したあとも、ドイツにとどまった（図解 1）。温子は夫君の彫刻家加藤邦彦とともに 1983 年以降フルトに移り住んでいる。その画法は、まずなによりも「幻想的写実主義」に分類できる、独特な超現実派<sup>シュルレアリスム</sup>の表現様式を代表するものであると思われる。温子は一風景画のほか—特に、植物学上も精確に、したがって自然主義ふう再現することができるとともに、当の効果を一段と高めて象徴主義的な意味関係のなかにとりこむ、草木や草花の描写に全身全霊をあげてうちこんだ。日本古来の伝統的な筆による繊細な線描で植物個体、木々、風景などを、一方では非常な精密さと正確さをもって描写し、他方ではロマンチックな幻想として再現する能力がある。しかも、加藤温子は独自の特徴ある手法で、日本式自然描写の伝統を、ニュルンベルクの大学時代にアルブレヒト・デューラー Albrecht Dürer など 15、16 世紀巨匠の作品研究を通して学び評価するにいたった、「古いドイツの」伝統と融合させている。絵画にかぎらず、線描画、グラフィック・アート（石版画と腐食銅版画）でも、この「東西融合」は、な仕上げと着想<sup>アイディア</sup>の豊かさによって人びとをひきつけてやまない。これを端的に証明する事実、国の内外で成功した個展や展覧会出品に対する積極的反響（1976 年から 1994 年までの間だけで 47 回の単独ないし夫君との共同展示会、ならびに 124 回にのぼる展覧会出品）、さらには温子に授与された表彰（1979 年と 1980 年にはニュルンベルク・アカデミー賞、1988 年米国ワシントン第 55 回国際年次展覧会の 1 等賞、1993 年「フルト市文化賞」、1994 年ニュルンベルク・ゲルマン国立博物館の「マックスベルク芸術賞（ゾルンホーフエン<sup>182</sup>）」）などである。



図解 1：石版にスケッチする加藤温子、1993 年。石版画『タイムスペクトル』に対して、画家温子は 1994 年にニュルンベルク・ゲルマン国立博物館の「マックスベルク／ゾルンホ

<sup>181</sup> 日本の大学院に相当する。

<sup>182</sup> 中部フランケン村落で、付近より石板石を産出すること有名。

「フエン石版画芸術賞」を受賞した。

加藤温子本人がアトリエ内とフルト市のはずれにあるささやかな庭園で栽培している、珍種の植物とか香辛料植物に対していわゆる「緑の手」<sup>183</sup>をもつ、天分豊かな女流園芸家であることは、自然を精確に観察する性向やさまざまな植物現象の描写法に合致している。まさに花をはじめとする温子の植物画は、都市風景の銅板画集で有名な大マテーウス・メリアン Matthäus Merian d.Ä. のいまなお世に知られている娘、すなわち、一時ニュルンベルクにも住み、故郷や異郷の花、植物、果実、昆虫などの銅版画や水彩画の制作で名を得た、マリーア・ズィビュラ・メリアン Maria Sibylla Merian (1647—1717) の継承とももくされているのである。

また、パリで活躍し、「花のラファエロ」(Raphael des fleurs)と呼ばれた、フラマン生まれの植物画工ピエール＝ジョゼフ・ルドゥーテ Pierre-Joseph Redouté (1759—1840) も想起されてよい。ルドゥーテも草花、特に、フランスの宮廷でなかんづく王妃マリー・アントアネットと皇后ジョゼフィーヌに好まれた、バラを種々の技法をこらして描いた。ズィビュラ・メリアン Sibylla Merian の死後 100 年を経て、ルドゥーテの石版画シリーズ『バラ les roses』(1817) が発表されたが、それは草花画法の芸術史に残る新たな画期的事件であった。草花画法の偉大な先駆者には、もちろんデューラー<sup>184</sup>とか、「花のブリュゲル」<sup>185</sup>とか、花を専門に扱ったオランダの静物画家たちのモチーフ上比較できる描写がある。

過去の、いや現在のものも、こうした花の絵には通常二通りの意味が響きあっている。多彩な花々は、一方ではごく一般に自然の模範であり、自然のこよなく貴重などみなされるが、他方では人生のほかならず、一段高い立場から見れば、人生は花のように生長し、花を咲かせるが、またしぼみ、枯れてゆく。たとえばヨブ記(14:2)に、「人は花のように出てきては、切り取られ」とあり、詩編(103:15—16)でも、「人の花のごとく、その栄えは野の花のごとし。ただ風がそのうえを過ぎゆけば、もはや跡形もなし」と考えられている。

いかなる高木あるいは草木や草花によって、加藤温子が「一年の経過」を象徴化するかをもっともよく示しているのは、手した石版画集『12枚の—葉草シリーズ』(1987/88年刊行)である[注1]。温子はここで一年を「菩提樹」からはじめている。樹齢1,000年の菩提樹は、ヨーロッパではアジアの神聖な寺院樹、すなわちイチョウと同じような位置価値をもつ。画集の菩提樹は、要するに、象徴の木、象徴の葉として、地面に舞い落ちる、と

<sup>183</sup> 「植物栽培の好きな人のこと」(加藤温子)。

<sup>184</sup> Albrecht Dürer 1471—1528。ドイツのニュルンベルクに生まれた画家、版画家、美術理論家。

<sup>185</sup> フランドルの画家一族で、「農民のブリュゲル」と呼ばれたピーター・ブリュゲルの子ヤン・ブリュゲル(Jan Bruegel) (1568—1625) のこと。

りわけ独特な(geflügelter Samen)によって、真夏のふくよかな花と香りへの発展を先取りする形で提示されているのである。

4月を代表するものは、一春の草原を黄色の絨毯<sup>じゅうたん</sup>に変える―「タンポポ」の太陽のように輝くと、いかなる風にも吹き飛ばされる羽毛状の球種(Samenkugel)である。鋸齒<sup>のこぎりばじょう</sup>状の5枚の小葉<sup>しょうよう</sup>から成る葉(fünflappiges Blatt)や鈍角に配列するをつけたカエデも、加藤温子お気に入りのモチーフに数えられる。5月になると、ふたたび目覚めた自然のめくるめく喜びを具象的に示しながら、自然界の飛行物体を明るく軽やかな輪舞で、いやそれどころか、ほとんど渦巻くロゼット<sup>186</sup>状に踊らせている。

「バラ、チューリップ、ナデシコ」といった花を、加藤温子の絵に探し求めてもむだである。7、8月という夏の月には、むしろ目だたない「キクニガナ」(Wegwarte)と、高くそびえ立っている「モウズイカ」(Königskerze)を彼女は選ぶ。バラの低木は晩秋になるとようやく果実を、それも野バラの実をつけて姿をみせる。

「イチョウ」の場合、10月のページには―イチョウ樹がに色づき、一夜にしてたわわな葉を一気にことごとく脱ぎ捨てる、10月には(秋のと針葉の喪失は、イチョウと類縁関係にある針葉樹でも、カラマツにしか観察されない[注2])―アンズ色をしたサクランボ大の実が垂れさがっている、した枝の上方で、イチョウ葉がふたたび気流の渦をつくりだす[注3]。12枚目の12月画を、加藤温子は、常緑の幸福をもたらす「ヤドリギ」(Mistel)の象徴のもとに、フランス語の年賀„au gui l’an neuf“あるいは英語の年賀„no mistletoe, no luck!“の意味をこめて置いている<sup>187</sup>。

1985/6年以来、画家温子はますます象徴的植物「ヤドリギ」と「イチョウ」にのめりこんでゆく。たとえば、ハイデルベルク大学創立600年記念祭を機にハイデルベルク城内のドイツ薬事博物館で催された展覧会「ヤドリギ―ユーゲントシュティールにみる芸術モチーフ」[注4]に、とりわけ「ヤドリギの呪い」と題する、ヤドリギ材でつくられた、矢をうたれた神、バルドル<sup>188</sup>の死にまつわる円形の絵を出展している[注5]。さらに1987/8年にも、フランスはサルクミーヌ博物館の「ヤドリギ」展に、ヤドリギ画の続編、なかんづく木の神であるデメーテルを扱った絵画を展示した[注6]。

ヤドリギとイチョウに関する神話や習俗はいたく加藤温子の関心をひき、それ以来、あ

<sup>186</sup> Rosette : 生物学では、一般に生物体や組織・細胞などの示すバラの花冠状の配列をいう(辞典)。

<sup>187</sup> Gui、mistletoe はともに「ヤドリギ」のこと。したがって「ヤドリギで元旦」、「ヤドリギなければ、幸せなし」というほどの意。

<sup>188</sup> 北欧神話の最高神オーディンとフリッグスの息子で、光・春の神。矢で射殺されたあと、生きかえると  
いう北欧神話がある。

りとあらゆる手法を用いた制作活動のすべては、特にイチョウの<sup>バリエーション</sup>変形とともに生みだされる。伝統と祭式が具現されるを、画家はいわば故国日本を思い起こさせるものとしても、外形的なものとしても、つまり二またに分かれたイチョウ葉の形態によせる興味からも、終始離れることがない。1987/8年の「月次シンボル」では、のイチョウが、木の姿をした男女であらわされ、知恵の木の両側に人類最初の夫婦「アダムとイヴ」をあしらったアルブレヒト・デューラーの銅版画を思い出させるが、同時に、オヴィディウス<sup>189</sup>がいう<sup>メタモルフォーゼ</sup>変身の意味で木性であることも示している（図解2）。画面の前景に、葉と種子をつけたイチョウの小枝を1本たらし、すべての事例と同様、加藤温子は円形画の下にをあげて、月の象徴として選んだ植物の手した典型的な単独葉を1枚配置している。イチョウは、被子広葉樹の葉（その葉脈は中央のから分岐している）とは異なり、ほぼ平行な葉脈と、やや扇状の葉をもつ（東アジアでは基本葉形の具象的として<sup>ヤーチアオシュー</sup>「鴨脚樹」とも呼ばれる）。葉の輪郭は浅いか著しく深い切り口で中央上部に切れ込みがあり、したがってイチョウの種名「ビローバ」（二分葉の）もまた葉形に由来している。



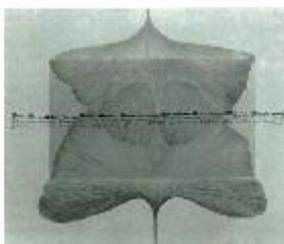
図解2：連作『12枚の—葉草シリーズ—』（1988年作）の10月画。筆でした、50×40 cm。

第一に、イチョウ樹の雌雄両性は極東の弁証法を象徴している。加藤温子はこのことを1994年6月にフルト・ローゼンハウスの庭園で最後のイチョウを植樹する機会にこう簡潔に表現している。「かつてイチョウ樹は全世界にあった…」、「東と西」、「男性的なものと女性的なもの」、「光と影」、「生と死」、「陰と陽」、「過去と未来」をあらゆる象徴であり、これらは「みな共通の起源をもっています」。

イチョウ葉の2分割にまつわる象徴性、すなわちゲーテに靈感をあたえ、1815年にマリアンネ・フォン・ヴィレマーに寄せる《ギンゴ ビローバ》を作詩させた、「2=1」（2は1、「1にして2」）なる公式を、加藤温子は、1989年以来克服された、ドイツ国家の分割に、またベルリンの壁崩壊後には、国家の取り戻された「統一」にも適用した（このシリーズから数例だけを取り出すなら、加藤の『ゲーテを讀んで』、筆で<sup>さいしき</sup>彩色した石版画、さ

<sup>189</sup> 紀元前43年—後17年頃、ローマの詩人で、『転身物語』が主著。

らに、鏡像のようにオーバーラップする2枚のイチヨウ葉と横広りの3行に黒、赤、金色で書きとめたゲーテの詩が結びあわされた、『イチヨウ2』、日本製の墨とパステル、1991年制作などを参照のこと。図解3)。



図解3：イチヨウ2、1991年。日本製の墨とパステル、65×75 cm。

イチヨウ葉の異形<sup>いぎよう</sup>を一徐々にイチヨウ葉の分裂ないし切れ込みを小さくして—加藤温子は1993年に画面を四分割した油絵『森』のなかにつくりだし、作品全体が同時に四季を具体的に示すようにした。まず、咲き乱れる低木の色彩豊かな春景色のまえに、まるで白いベールのように広がり、中央でわきに深く切れ込んだ1枚のイチヨウ葉が見え、葉のうえに色とりどりののがとまっている。2つ目の絵は、2分葉の無色のが全面をおおい、そのイチヨウ葉に、風に運ばれた赤いケシや「青い」キキョウや黄色い花々の花弁が落ちかかる—濃緑色の森林風景である。3番目の絵は、紅葉した秋の森のま前で、1枚の透きとおるような扇形をしたイチヨウ葉のまわりを、風に吹き飛ばされたの葉や種子が踊りくるい、第4の絵には、輪郭のなかにほぼ閉じこめられた透明なイチヨウ葉が、霧氷におおわれる冬景色のまえに立っている。そうして濃紺の大空を背にしながら、花火が光をはなつ。盛夏に（祖先崇拜と関連して）花火を打ち上げる故国日本の習わししか知らなかった、加藤温子は、ヨーロッパなど西側の世界で「平和の時代」に大みそかと新年を祝い、打ち上げ花火とともに空へ向けて「はなつ」歓喜を、地上の冬らしい静寂とに対比させようとしたのであろう。

ただ構造だけで示される、透明なイチヨウ葉の画像要素、それに、自然の覚醒<sup>かくせい</sup>と死滅—空中に舞う葉と花の渦から、それらが宇宙空間にしだいに消えてゆくまで—の四季シリーズは、加藤温子の場合、「自己引用」として多種多様な形で作品に繰り返しあらわれる。W.カンジンスキーKandinskyの場合には、騎手のモチーフが抽象画でもいぜんとして認識または感取できるように、加藤の符号化された絵画や表象の世界でも、画像要素さえ理解すれば、まもなく「読むとる」こつが身につく。問題の画像要素は、頻繁に繰り返されるが、単調になることはない。逆に、彼女の着想の豊かさに、たえず新たに驚かされるばかりである！

イチヨウ樹に関連づけられた四大元素の連作—1989年から1993年にかけて制作された『地の中で』、『風の中で』、『火の中で』および『水の中で』（図版18参照）—を眺め

るとき、4枚の油絵がいずれも鑑賞者を深い物思いに誘い、イチョウの現象に想をめぐらすように呼びかけるのである。最初の絵は一まるで地球儀の断面図みたいに——一種の原初状態にある地球の半球面を示している。褐色の山脈がそのなかで積み重なり、内部から緑色に芽生える生命が微光をはなち、はるかな地平線にうっすらと青味を帯びた雲が山の頂にかかっている。褐色の土壌から、すなわち下の画面周縁から上方の半球に向かって——ソテツ類や針葉樹類のほかに、ヨーロッパでまで（新第三紀、約700万年前まで）生育していた、イチョウ類も所属する、ジュラ紀（約2億8000年前）から地上に見られる裸子植物群（裸子植物亜門 *Gymnospermae*）の代表として——1本のイチョウが若葉をだしている。風の元素〔空〕は主として青と黄に統一された絵で如実に描出されている。鑑賞者の視線は、すでに落葉している幹にそって上方の雲へと誘導される。の空に浮かぶ——眼球のような——まるとい自由空間のまわりを遠くで渦巻き状に、色のイチョウ葉が旋回し、それら無数のイチョウ葉は絵の縁に近づくほど大きくなり、いかにもそれらしく分裂した葉形によっていっそう明確にイチョウ葉と識別されるようになる。3枚目の絵『火の中で』は、天災の切迫した不気味さと、人びとによって引き起こされる人災を表現しようとしている。深紅の空に燃えあがる炎につつまれて、生きとし生けるものはことごとく焼け焦げる。炎に吸い込まれ、イチョウの黄色と赤褐色のが、空間をひらひら飛んでゆく。みずみずしく芽吹く若いイチョウの小さい幹をかたどった、「常緑の希望」は、広島に恐るべき事件の記憶をよみがえらせる。炎々と燃えさかる樹木のなかに、あらゆる植物のうちもっとも早く葉を再出した、イチョウの木々が現実に存在したのである（図版7参照）。

水の元素は、4枚目の絵で、イチョウの<sup>190</sup>——ガラス玉かシャボン玉に似ている——を、それぞれ1個ずつくるむ、露のしずくの形によって象徴化されている。植物の生長に不可欠な水の暗示とみられるが、当の描写は同時に、イチョウ樹が雨量の少ない、ぎりぎりの生存条件でも露滴だけで生きのびられる、といった事実にも向けられている。

加藤温子は、1990年と1991年の『小さなイチョウの夢1+2』ならびに1992年の『光-6』のような一品作で、絵のなかへ伸びてくる1本の青々としたイチョウの芽とともに、青空を背景にした秋らしいイチョウ葉の舞をふたたび取りあげている。

1990年の油絵『露-2』では、巨大なイチョウ葉のデルタ状に分岐した葉の組織構成が、前方に広がる軌道を造形し、同軌道上を、露のしずくにくるまれた、若い小さなイチョウ玉が、絵の前景ですでに生長している1本の高木めざして転がり落ちてゆく。

1992年制作の油絵『光-2』と『光-4』において、加藤温子は生成と消滅の新たな変<sup>バリエーション</sup>形を示している。縦長サイズの油絵『光-2』では、落葉した木々のまえに、無色のイチョウ葉がふわふわと輪舞しながら落ちかかる、一組の真っ先に生長するイチョウ樹がある。横長判の絵『光-4』には、一番手前の前景に描かれている裸の木々のまえで舞う、浅緑色や

<sup>190</sup> Keimling. 「芽生え」ともいう、種子植物の種子から発芽した幼植物。

黄金色に輝くイチョウ葉で構成された一種の天体に似た一白っぽい星雲が見える。

加藤温子が1987/8年に『』の連作でデューラーDürerの銅版画にならって人類最初の夫婦として描きあげた、イチョウの雌雄両性は、1990年、『イチョウ夫婦』と題する、色彩の格別繊細な幻想的油絵の制作へ彼女を駆りたてていった。くすんだ青色の樹木でおおわれた背景のまえに、褐色がかかった土状の構造をもつが、画面全体にわたって大きく扇<sup>せんじょう</sup>状に広

がっている。下端には、あたかも島のうえに浮かぶように、何百万年も昔のイチョウ葉の化石が認められる。(このような出土品は今日では博物館や収集室にある。)これらの化石にふたたび小さいイチョウ樹が生長し、いくつもの黄ばんだ葉を大きなハート形イチョウ樹の側面に突きだしている。左手に見える、樹形が横広がりの木は、のイチョウであり、右手のほっそりと高く生長しているのが、のイチョウである。これら2本の高木は一ペインティングナイフの技法を用いて裂け目だらけの岩石地層を暗示する、いわば太古のままの景観を、画面のひときわ広い層で透視させる—上述の大きいイチョウ葉の切れ込みによって分割された、左右半面の内側で、雌性と雄性の因子を代表しているわけである。1991年以後、日本製の墨やパステルを使って、日本の書体—「」—に関する作品や、様式化されたイチョウ葉をあしらう日本の家紋に関するグラフィック・アートの異形が制作されている。こうした石版画のなかに、太古のイチョウ樹をあがめる、東京都の南に位置する社寺の町、鎌倉の有名なブロンズ製の大仏像も見られる。

重なりあう3層にカラーのイチョウ葉をまるで絨<sup>じゅうたん</sup>毯<sup>ま</sup>に播いたように見せる、1991年の油絵『-2』では、黄色いイチョウ葉がタンポポのようにまき散らされている、草原が広がる(図解4)。「イチョウの草原」上に、さながら切り裂かれたカーテンのごとく、透明な「ベールのような壁」<sup>191</sup>が立ちはだかり、その壁面にはまたや8個の直立した色とりどりのイチョウ葉が並べられている。針葉のようにいくつにも割れた若い扇状葉から、ほとんど平面のように閉じて成熟しきった扇状葉まで、あらゆる葉形がここに展示される。前景の、草原と「ベール」状のカーテンのまえには、石化したイチョウ葉の痕跡<sup>こんせき</sup>を残す—迷子石(捨子石)のような—1個の石塊が横たわる。絵を奥の方から前方へ、あるいは逆に、地球の生成(原始世界の発掘品)から現在までたどって見るかは、鑑賞者にまかされている。

---

<sup>191</sup> 原文は「ガーゼの壁 Gazewand」とあるが、作者自身は、「ベールのような、実は手紙の紙を表現したものの」、と述べている。



図解 4：挨拶-2、1991年、油絵、67×73 cm。

1990年、加藤温子は天窗の大小2個の半円形窓枠(大きい枠は窓のかんぬきまで見える)を利用して奇抜な二重映像を編みだし、画題を『時の眺望』とした(図解5)。しかも、大きい半円枠の内部にも、緑色のイチヨウ葉を描いている。化石から発芽するイチヨウ樹のモチーフは、上の小さい半円にもつづき、そこではトンボが、いや、黄緑のと青いが、こずえの上空にただよっている。同じく1990年に制作された、油絵『二つの世界が一つに』と『ゲートの詩のために』は、とりわけ叙情的、超現実的なイチヨウ解釈とみてよい。両作品は死んでいる自然と生きている自然を、あるいはゲートのいう「死して成れ！」を総体的に象徴化しているのである。



図解 5：時の眺望、1990年、油絵、43×70 と 31×60 cm。

油絵『二つの世界が一つに』：一広大な風景の前面にすえられて、画面全体を占める分裂したイチヨウ葉は、左半分が無色で、ベールのように丸裸の木々をおおい、右半分は黄緑色で、緑色の樹群が生い茂る風景のまえにある。

『ゲートの詩のために』の構成は、さらに超現実的な雰囲気をかもしだす(図解6)。淡青色の半面と紫褐色の半面が、いわば紙のように対称的に引き裂かれている印象を与えるために、下側の暗い平面は、葉をつけていないイチヨウのと落下してゆく1枚のとともに、左へあてもなく折り返されたように見える。逆に、淡青色の大空のまえで発芽する緑の葉をつけた若いイチヨウは、上方のいっそう大きい部分が暗く彩られている、絵の右半面に姿をあらわす。この風変わりな創作画は、日本古来の洗練された折り紙遊びに対応し、1枚の紙が折り畳まれ引きはがされたイメージに由来するものである。ここでは、と交差した逆転とによって、超現実的な効果が生まれている。加藤温子はこの種の対比を好み、同画法を確実にし、形式上に解明したといえる。



図解 6：ゲートの詩のために、1990 年、油絵、67×73 cm。

加藤温子は 1989 年夏にボンメルスフェルデン城で開催された展覧会、「フランケンにおける今日の芸術」に『イチョウ森飛行』を出品した [注 7]。絵は、はてしなく奥へ奥へと伸びてゆく森を鳥瞰<sup>ちょうかん</sup>する、パノラマのような印象を与える。木のを越えて青いイチョウ葉が帆走してゆく。(イチョウ葉の青い色彩は、芸術家協会の綱領に則した呼称、たとえば 1905 年のモスクワにおける「青バラ」とか、1911 年にミュンヘンで結成された「青騎士」<sup>192</sup>とかに用いられているような、夢心地の非現実を意味する。)「青のイチョウ葉」は、一温子のほかの絵でもよく見られるように一空中を旋回せず、「水上の波乗り」のような葉の帆をつけて、ここでは梢の波のうえに直立している。このような薄い木の葉の帆に、小さいがしがみつつか、もしくははねまわっている。それらは肖像画の小型版である。目を凝らせば、絵の前方右手の一番大きいイチョウ葉をつかみながら、彫刻家の加藤邦彦が跳びはねているではないか。手前には、女流画家の小型自画像が認められる。他の小さい人影も、当該人物が—同時になくても—1986 年に日本を訪れていた、と想像上ひとまとめにできる、肖像画である [注 8]。『イチョウ森飛行』は、このような楽しい点景人物によって—象徴的に含蓄に富む他の絵画とは対照的に—きわめて愉快的感じがする (図解 7)。



図解 7：イチョウ森飛行、1989 年、油絵、97×107 cm。

簡素に『イチョウ』と題する大判の絵 (1988 年制作) に、加藤温子は、生長と消滅、普遍な宇宙の諸力、下部の暗い大地から光の領域を経て上部のさんさんと輝く太陽圏にいたるまでの幻想を、多数の木や葉と、まさしく「光のオーラ」のまぶしい光のなかに具現している (図版 19 参照)。

---

<sup>192</sup> 1911 年にミュンヘンで結成された表現主義画家の団体。

筆で彩色した1993年制作の石版画『タイムスペクトル』に対して、画家温子は一はじめに述べたとおり一翌年ニュルンベルク・ゲルマン国立博物館で石版画の1等賞を授かるが、当面の概観によってわずかに選びだした個々のモチーフを組み合わせ、ふたたび「イチョウ」を主題とした（図解8）。4平面に区分された石版画は、中央にイチョウの上部を描いているが、葉は深い切れ込みによって一同時に<sup>メタモルフォーゼ</sup>変態のように一山頂が2つある山岳風景とも見える。前景に裸の木々がのび、それらのまえに12枚の緑や黄のイチョウ葉が林立している。ところが上方に横たわる天空域には、あたかも花火のように、渦巻き状の旋回からはじまり、峡谷かも思われるイチョウ葉の切れ込みを伝って、紙吹雪まがいの渦を巻きながら舞いあがるイチョウ葉の雨が一面にひろがっている。



図解8：タイムスペクトル、1993年、手彩色石版画、40×60cm。

入念に陰影がつけられ、均整がとれている構図は、静態ばかりか、動態までも同時に伝達する。ニュルンベルクのゲルマン国立博物館につとめるヤネック Janeck 博士は、1994年3月31日、石版画の授賞に際して、加藤温子に次のような言葉で的確に賛辞をのべている。「加藤夫人は目下イチョウ樹をテーマとするシリーズを制作されており、そのさいにゲーテの西東詩集から詩を引き合いにだしておられます。すでにこの一事からしても出会いがあり、両極性が取り扱われていますが、さらに、ご存じのとおり日本女性として、夫人の個人的なドイツならびにヨーロッパ体験がくわわっております。イチョウの木はであり、それ自体が両極性を象徴し、加藤夫人にとって対立の象徴なのです…つまり、時の変化、消滅、変色、とにもかくにも一体をなす、葉の分裂を前景に見ておられます。その背後には、生きている自然と死んでいる自然、それでもなお似かよっている、木や山の個別形態—さらには、分裂していながらも一体をなす無数の個々のイチョウ葉を、いっさいの両極性が静態のなかで出会い、もはや名状しがたい一者に止揚される、見知らぬ深い空間の<sup>ふち</sup>淵へと巻き込んでゆく、壮大な宇宙の渦を積み重ねる想像力（心）があります」

締めくくりとして、加藤温子は芸術的な描写や表現法ばかりではなく、象徴言語でもまた日本・極東の思想界とドイツ・ヨーロッパの思想界の融合に成功している、と確言することができる。

## 注

- [1] Vgl. Helga Schmoll gen. Eisenwerth „Gedanken zur graphischen Jahreszeitenfolge von Atsuko Kato. Sinnbilder: Landschaften, Pflanzen, Figuren, Mythos, Brauchtum.“ In: Atsuko Kato Kat.-3-1989, Abb. 51-62.
- [2] Vgl. hierzu bes. Ernst Michael Kranich „Die Formensprache der Pflanze.“ Grundlinien einer kosmologischen Botanik. 2. erw. Aufl. Stuttgart 1979, S. 100ff.
- [3] Atsuko Kato Kat.-3-1989, op. cit. Abb. 60.
- [4] Dank des Engagements von Prof. Dr. Hans Becker, Pharmazeutischer Biologe, damals Universität Heidelberg, und des seinerzeitigen Leiters des Deutschen Apotheken-Museums Dr. Wolfgang Caesar, konnte die über sechs Monate laufende Ausstellung „Mistel“ als eine Art Schatzkammer im Deutschen Apotheken-Museum im Heidelberger Schloß, mit zahlreichen Objekten des internationalen Kunsthandwerks, hauptsächlich des Jugendstils, präsentiert werden. Das die Ausstellung begleitende Buch von Hans Becker und Helga Schmoll gen. Eisenwerth „Mistel-Arzneipflanze, Brauchtum, Mythos, Kunstmotiv im Jugendstil“ erschien in der Wissenschaftlichen Verlagsgesellschaft Stuttgart, 1986.
- [5] Wie bei den Kelten (vgl. Plinius „Historia Naturalis“) kommt der Mistel auch bei den Germanen („Edda“, Baldursage) eine zentrale Bedeutung zu. Baldur, Sohn Odins und Friggs, der Gott des Lichtes, wird durch eine List seines Bruders Loki durch einen aus einem Mistelzweig gefertigten Pfeil getötet, da Frigg, als sie allen Naturwesen den Eid abnahm, Baldur nicht zu schaden, die Mistel vergessen hatte.
- [6] Hans Becker, Helga Schmoll gen. Eisenwerth „Au Gui l'An Neuf“. Ausst. Kat. Le Gui, Musée de Sarreguemines, 1987/88.
- [7] Ausst. Kat. „Zeitgenössische Kunst in Franken“. Schloß Pommersfelden 1989, Farbabb. S. 85.
- [8] In der Bildmitte erkennt man Dr. Helga Schmoll g. E. und Prof. Dr. J. A. Schmoll g. E., weiter hinten links das Ehepaar Dr. med. A. Beyer, Katos älteste deutsche Freunde, mit denen sie auch in Japan reiste.



(1831—1889)。

転倒：蛇を虐待する蛙。英国博物館、ロンドン。日本画所蔵品 1632 番。

この絵は軽業アクロバットまがいの「倒錯した世界」として表現している。綱渡り用の高く張った綱のように、1匹の蛇が、2本の垂直に地面へ打ちこんだのあいだに張りわたされている。図に乗った蛙の群れは、蛇の綱に身をまかせて軽業ふうの芸当をおこない、ぶらんこ遊びをし、綱をつたって無鉄砲にはねまわる。2匹の蛙はバランスをとる扇子のようにイチョウ葉を振って踊り、また頭を逆さまにしてぶらんこ遊びをしている蛙も、イチョウ葉を手にしている。

上掲の絵に基づいてつくられた木版画が、ウィリアム・アンダーソン William Anderson 著『日本の版木—その歴史と技法と特徴—』（ロンドン／ニューヨーク、1895年刊）に複製されて現存する。

このほか、2匹のイチョウ葉を振る絵の蛙は、アルバート・C・シーワード卿 Sir Albert C. Seward の著書『時代をつらぬく植物の生涯—地質学および植物学的回想—』（ケンブリッジ大学出版局 1931年発行）の装丁を飾っている。

（エラスムス・フルチュ Erasmus Hultzsch 博士のイチョウ文庫 [イエーナ所在] より）

## 11 東アジアとヨーロッパの美術工芸にみるイチョウ

ヘルガ・シュモル・ゲナント・アイゼンヴェルト

### 11-1 古い日本の芸術にみるイチョウのモチーフ

イチョウはモチーフとして、中国や日本の絵画に—また日本の生け花にも（盆栽を除いて）—まったく使われていないとあってよい。

古典文学（8～14世紀）にも、イチョウはあらわれない。もしかするとこの事実から、文学の伝統をつねに尊重してきた、画家たちの節制が説明されるかもしれない。ハイデルベルクのディートリヒ・ゼッケル Dietrich Seckel によれば [注1]、イチョウのモチーフは、中国の叙情詩でようやく宗時代（10～13世紀）に見いだされるらしく、その後1123年の出典資料にも同主題の絵画が記録されている。

禅僧たちは、イチョウ樹を愛好し、中国から日本の僧院の中庭へ移植した。1202年、京都に日本最初の教禅<sup>【あ】</sup>道場として建仁寺<sup>けんにん</sup>が建立され、全国各地で多くの僧院が開かれるようになる。禅僧はイチョウ樹を崇拜はしたが、奇妙なことに「その葉形の象徴性」には気づかなかつた（ゼッケル Seckel）。

いかにも装飾的なイチョウ葉があいにく造形芸術では割合まれにしか見当たらない、原因のひとつは、なかんずく、東アジアの人びとがの「悪臭」に対して心情的に反発するためなのかもしれない。

寺院樹のイチョウは、日本各地でとりわけ女性に崇拜されている（加藤温子の寄稿論文参照）。その一因は樹形にありそうである。きわめて古い木々の場合には（しかもそれらに限られる！）—たとえば鎌倉のあちこちの境内で見られるように—、多かれ少なかれ水平の太い枝から、女の乳房に似た、垂下する奇形を形成している点が人目をひくせいか、そのような古木は、母乳不足に悩む婦人たちが代願の祈りに訪れたのである。

美術工芸品、たとえば古い家紋に、もちろんそのすべてが実際に通用しているわけでもないが、役者の衣装などを識別に利用するために、ときおりイチョウのモチーフが見かけられる。もっとも多い円形の家紋図形は、ここでは「イチョウ葉が変形技法のかぎりをつくして考案されている」、というただ一点の理由からしても魅力がある（ゼッケル。数点の例が本書寄稿論文の末尾ごとに複写されている） [注2]。円形家紋の例は古い彩色木版画に見いだすことができる。1716年作、鳥居清倍<sup>とりいきよます</sup>初世の彩色木版画（ハワイ州、ホノルル芸術院所蔵）では、円形に縫いつけられたイチョウの紋章が—さまざまな種類の扇と並んで—「役者中村千彌<sup>せんや</sup>」（<sup>【三巴家】</sup>常夏<sup>とこなつ</sup>の役をつとめた）の左に大きく、目もあざやかに光り

輝いている。鳥居清重<sup>193</sup>の別な初期彩色木版画（1742年頃）では、「役者松本幸四郎」がある役で右袖にイチヨウ葉3枚の様式化された家紋のついた着物を着用している（シカゴ美術研究所）〔注3〕。

徳川または江戸時代（1603–1868）における日本の小工芸は、着想と完成度の高い造形にくめどもつきぬ味わいがあり、国の工芸生産は今日までいわば当時の遺産で食いつないでいる。特に大きな価値が刀剣類の装飾—（小さい刀剣の飾り<sup>194</sup>）と<sup>195</sup>—に置かれた。これらは文字飾りと貴金属類のをほどこしたブロンズでたくみに制作されている〔注4〕。ここでは例証として、金製の小さいイチヨウ葉を象眼した、黒っぽく青さびがつけられている、18世紀のブロンズの鏝をあげておく。鏝の表面全体には、自然大のイチヨウ葉がシルエットのように浮き彫りになっている（私有物、図版9参照）。

東京国立博物館の収集品<sup>コレクション</sup>にもまた同じような模様の別ながある。一個の鏝は、下側に2枚の結びあわされた葉が、上側には1枚のいっそう大きい単独葉が飛びながら浮かんでいるかのように、計3枚のイチヨウ葉を円形の平面いっばいに配置してみせる。同博物館所蔵のさらに別な鏝は、1枚の大きな、だらりと鏝のへりにかぶさるように垂れているイチヨウ葉もある、さまざまな樹木の葉で装飾されている〔注5〕。

19世紀と20世紀のブローチ、帯の留め金、飾りピン、首飾りなどの象眼細工をほどこした装飾は、鏝に起源がある。

同時期のものとして、さらに2点、江戸時代末期（1850年頃）につくられたブロンズ製の手鏡を紹介しておこう。一点は、四つ葉飾りのようなモチーフのまわりに8個の粗くちりばめたイチヨウ葉を示す、私蔵品（図版9参照）。あと一点は、ドレーズデン民族博物館所蔵のひとまわり大きい手鏡（銘の物）。後者はひときわに造形されている—中央部は、翼を広げ、を開いている「鶴」<sup>196</sup>を、円形のなかにぴったりはめ込み、枠には9枚の樹葉が配置されているが、そのうちの6枚はイチヨウ葉である（図解1）。

---

<sup>193</sup> 江戸中期の浮世絵師、初代鳥居清信<sup>きよのぶ</sup>の門人。

<sup>194</sup> にすえる飾りのこと。

<sup>195</sup> 刀剣の柄<sup>つか</sup>と刀身の境目にあり、柄を握る手を防御するもの。

<sup>196</sup> 加藤温子氏の教示に基づき、原文の「フェニックス Phoenix」（不死鳥）を「鶴」に改めた。



図解 1: 「鶴」をあしらった、ブロンズ、1850 年頃の日本製、ドレーズデン民族博物館。

日本の芸術では陶磁器の分野にすばらしく独創的なものがあり、その製陶術はヨーロッパのユーゲントシュティール（青春様式）にまで刺激的な影響を与えた（エミル・ガレ／ナンシーの初期陶器を参照！）。たとえば、東京国立博物館に所蔵されている、江戸時代の絵付香炉。ほぼ正方形の平たい浅彫りの香炉（10.3×10.8 cm）は、結びあわせたひもで

包装された贈り物のように見え、のうえには1枚のイチヨウ葉（浮き彫り）が編みひもでしっかり留められている [注 6]。

明治時代、1880 年前後のものとして、ここではもう一点、皿鏡のなかに、2枚のイチヨウ葉が陰陽のしるしとなるように配列されている、青い伊万里焼の飾り皿（φ14.2 cm）を紹介しておこう。皿のに、茎の長い種子をもつ、3枚一組のイチヨウ葉が、合計4枚見いだされる（私有物、図版 9 参照）。

高さ 18 cm の日本製磁器、「錦光山・花瓶セット」<sup>197</sup>は、様式化されたイチヨウとカエデの落葉を、コバルトブルーにな金襴手<sup>198</sup>で焼きつけ、さらに、これらの葉を描く線状部は、色の<sup>199</sup>で焼成した、19 世紀の日本における暮らしぶりの断面図を縁どっている（ミュンヘンの美術商、図版 8 参照）。

奇妙なつながりでイチヨウ葉が河鍋 暁 斎（1831–1889）の絵に登場する（ロンドン大

---

<sup>197</sup> 原語は Kinkozan-Vasen-Paar。おそらく京都栗田焼の陶工、錦光山の制作した花瓶と思われる。

<sup>198</sup> 金襴手 (Goldbrokatmalerei) : 「金彩色絵磁器のこと。中国江西省景德鎮民窯で 16 世紀中ごろ (明代嘉靖年間) に作られた。上絵付した後、金箔を焼き付けて文様を表したもので、織物の金襴に似ているところから日本でこう呼ばれた。また広義には金泥を用いたものも含み、装飾技法の名称としても用いられる」 (世界百科事典)。ここの原語 Goldbrokatmalerei は装飾技法としての金襴手を意味する。あるいは金襴工芸とってよいかもわからない。

<sup>199</sup> Emailmalerei。金属あるいは磁器などにガラス釉を焼きつける複合工芸。

英博物館、日本画部門、1632 番)。風刺画で有名になった当画家は〔<sup>狂</sup>齋<sup>と</sup>号し〕、一種の「倒錯した世界」を活写している。蛇一蛙の<sup>ふくたいてん</sup>不俱戴天の敵一が、蛙どもにバランスをとるための綱として利用される。蛙は、蛇を頭からの先まで、2本の地面に打ちこんだ杭のあいだに張りわたし、そのうえで軽業のような体操をする。蛙仲間の2匹は平衡補助具としてイチョウ葉を利用する(本書121ページ参照)。このユーモラスな題材から木版画も制作され、版画はイギリスでも普及した〔注7〕。1895年には、日本の木版画をテーマに扱ったロンドンの著作にも、同版画が掲載された〔注8〕。さらに1932年、<sup>きょうさい</sup>暁齋の絵から複製された、2匹のイチョウ葉をふる蛙は、ロンドン発行の植物学術書の装丁を飾ることになった〔注9〕。

19世紀の末葉と20世紀の着物、綿布、服地などに、秋の<sup>こうよう</sup>黄葉したイチョウ葉は、写実的にもまた幾何学的にも様式化されて、装飾模様としてきわめて人気がある。たとえば、江戸時代以降の伝統を保存する日本の文楽・人形芝居で女形の<sup>きつけ</sup>着付をした人形は、大柄のイチョウをちりばめた着物をつけている(『日本の文楽・人形浄瑠璃芝居』、1994年のカレンダー参照)。

繊維製品を対象とするイチョウ文様は、日本にかぎらず、ハインツ・トレーケス Heinz Trökes (1913年生まれ)の1932年制作のプリント布地(ヨハネス・イッテン Johannes Itten <sup>コレクション</sup>から)がクレーフェルト市ドイツ繊維博物館で実証するように、わがドイツ繊維学校の教材プリント地にも採用されている〔注10〕。クレーフェルト市の専門女性デザイナー、ウルズラ・デューブル Ursula Dübel (1941年生まれ)は、1975年に思いがけなく同市のイチョウ並木で見つけた、イチョウ葉に創作意欲をあおられ、まさしく「繊維デザインの花火」を打ち上げたが、ここではそのうちの2例しか複写することができない(図解2と3。本書177ページ以下参照)〔注11〕。



図解2と3: ウルズラ・デューブルのイチョウ葉のモチーフを取り入れた布地の原型、クレーフェルト。手刷り、<sup>さいしき</sup>彩色の絹。

## 11-2 フランスの「ジャポニスム」とアール・ヌーボーにみるイチョウ・モチーフ

## 陶磁器

17/8世紀の建築（「中国風装飾様式」）あるいは工芸（磁器やガラス、装飾や繊維など）の分野で、極東の手本に似せたただの模倣をさしあたり見くだして名づけられた、「ジャポニスム」<sup>200</sup>は、その後ヨーロッパにおいて、なかならずく印象派の芸術家たち（モネ、マネ、ホイッスラー、ヴァン・ゴッホなど）による実り多い対決の流れに沿って、1860年から青春<sup>ユーゲント</sup>様式<sup>シュティール</sup>にいたるまで、ただのスローガン以上のものになった。

1864年ロンドン、1867年、1878年、1889年ならびに1900年パリの万国博覧会以来、特に日本の彩色<sup>さいしき</sup>木版画と小工芸作品への関心が高まり、数多くの分野で新たな創造へと導く純粋な相互作用や刺激になった。いわゆる「ジャポニスム」の（形式、模様、技術的な仕上げの点で）重要な一例として、イチョウの文様をあしらったつきの花瓶（1901年作）を指摘しておきたい〔注12〕（図版15参照）。同イチョウ花瓶の下絵と完成品は、1897年から1908年までストックホルム近郊のグスタフスベリ磁器製造所で芸術主任をつとめていた、グナル・ヴェネルベリ Gunnar Wennerbergのもとにあった。スウェーデンの同製造所は1900年のパリ万博と1902年のトリノ万博で、とりわけスグラフィット技法によるオブジェで、注目すべき成功をおさめた。「イチョウ蓋つき花瓶」もまた同じ技法で仕上げられているが、ここでは淡青色の素地に暗青色の垂下するイチョウの葉と種子を浮き彫りにした文様が、花瓶の内壁を効果的におおっている〔注13〕。

極東の見本を手本として、色彩にいたるまで、ストックホルムのグスタフスベリ Gustafsberg とレールスランド Rörstrand はともに高い水準に達するが、レールスランドはグスタフスベリよりも色彩にいつそう微妙なニュアンスをつけ、浮き彫り<sup>レリリーフ</sup>のようなをユーゲントシュティール期にこのうえもなく洗練されたものに仕上げている。

スウェーデンの、すでに述べた、グスタフスベリ磁器製造所と並んで、スカンジナビア<sup>201</sup>のユーゲントシュティールには、一日本または一般に極東アジアの手本に示唆を得たモチーフを展開させて—1889年にはじめてパリ万博に出品し、おおいに注目をあびた、「コペンハーゲン王立磁器製造所」も、芸術史上ヨーロッパ屈指の存在である。イチョウのモチーフは、ドイツやフランスのユーゲントシュティールと対照的に、スカンジナビアではたしかにときたま見かけられるにすぎない。そのかわりに、レールスランドとコペンハーゲン王立磁器製造所による当代の磁器には、イチョウに酷似していながら、イチョウより

<sup>200</sup> 特に19世紀後半から20世紀初頭にかけてフランスを中心としてみられた「日本趣味」のこと。

<sup>201</sup> ノルウェー、スウェーデン、デンマークを含む地域の総称。

も小さい「ホウライシダ」の葉が、かなり頻繁に見うけられる [注 14]。イギリスでは、イチョウの葉脈がホウライシダ (ちなみに、「ホウライシダ」のドイツ語名 Mädchenhaarfarn または Frauhaarfarn を直訳すれば、「処女髪シダ」または「婦人髪シダ」となる) の葉脈と酷似していることから、このイメージにちなんで、イチョウ樹のことを「Maidenhair Tree」(処女髪高木)とも名づけている<sup>202</sup> [注 15]。

スカンジナビアの師(Porzellanmaler)<sup>203</sup>がユーゲントシュティールで最初の全盛をきわめたが、ヨーロッパの陶工は、19 世末葉に東アジア製磁器の溶融<sup>うわぐすり</sup>釉<sup>204</sup>を継承すること

によって、色彩と構造に斬新な表面効果をだせるようになった。これの典型的な例として、暗赤色の銅還元釉(Kupferreduktionsglasur)をほどこし、容器の首ぎわが浅緑に脱色された<sup>205</sup>製のイチョウ花瓶を紹介しておく。一点はハンブルク美術工芸博物館にあり、いま一点はミュンヘンで私蔵されている [注 16]。彫刻家モーリス・デュフレヌ Maurice Dufrenoy (1876-1955) が 1899 年頃にデザインし、ピエール・アドリアン・ダルペイラ Pierre Adrien Dalpayrat (1844-1910。1893 年のシカゴ万博で金メダル受賞) がパリの「La Maison Moderne」(現代の家)のために制作した、「4 枚のイチョウ葉つき花瓶」は、1900 年にハンブルク博物館によって直接パリで購入された [注 17] (図版 17 参照)。

## エミル・ガレと「ナンシー派」

フランス東部の町ナンシーに、イチョウのモチーフをあざやかにあらかず数々の作品が存在するのは、偶然でない。ナンシーはあらゆる種類の植物文様をモチーフに使うアール・ヌーボー (ユーゲントシュティール)<sup>206</sup>の中心地であり、当の着想を与えたもっとも重要な

---

<sup>202</sup> 詳しくは、Maidenhair はホウライシダ科クジャクシダ属 Adiantum のシダ、Maidenhair tree はイチョウを指す。

<sup>203</sup> 絵付：陶磁器の表面に絵具で彩色を施すこと。<sup>うわぐすり</sup>釉の下に焼きつけるのを下絵付、上に焼きつけるのを上絵付という (広辞苑)。

<sup>204</sup> 溶融<sup>うわぐすり</sup>釉 (Flußglasur)。<sup>うわぐすり</sup>釉 は釉薬とも書き、また釉、釉薬ともいう。

<sup>205</sup> Steinzeug。素地がよく焼き締り、吸水性のない焼物。焼成の火度が磁器よりも弱く、多くは有色で不透明。気孔性のない点で陶器と区別する。土管・瓶・井戸側・火鉢などの大形物に用いる (広辞苑)。

<sup>206</sup> Art Nouveau: 19 世紀末にヨーロッパ各地で興った装飾芸術および建築の様式の総称。フランス語で〈新しい芸術〉を意味し、名称はビング S. Bing [1838-1905] がパリに開いた美術品店名に由来する。英国ではモダン・スタイル modern style、ドイツではユーゲントシュティール Jugendstil (青春様式)、オーストリアではゼツェッション、スペインではモデルニスモ modernismo と呼ばれたものがこれに相当する。モリスのアーツ・アンド・クラフツ運動が発端とされ、19 世紀のアカデミズムを否定し、自然や女性との結びつきが底流に存在した。造形面では植物的モチーフと曲線的フォルムの多用、工業化社会の誕生を

人物がエミル・ガレ Emile Gallé (1846–1904) である。エミルの父シャルル・レネマー＝ガレ Charles Reinemer-Gallé が経営するナンシー近郊のファヤーンスリエ・サン＝クレマン社は、1860 年以後、イエーナ近郊ドルンブルク宮殿のロココの（ゲートもかつて出入りしたことがある）を新ロココ風に改装するために陶芸品を納入した。この父親の取引関係から、エミル・ガレ青年は 1864 年から 1866 年までヴァイマルで研究をおこなうことになった。つまり、ドルンブルク宮殿の室内改装を指揮した、建築家カール・シュテークマン Carl Stegmann 博士の私立美術工芸学校に通い、「イエーデ＝シュテークマン建築・工芸学科」で、スケッチや彫塑の授業をうけると同時に、青年は植物学と鉱物学をさらに学んだ [注 18]。植物学に生涯強い関心をいただいていた、エミル・ガレは、留学中の数年間にヴァイマルやイエーナ植物園でイチョウを知ることになったであろう。1877 年以来—ガレ自身の供述によると—集中的に日本の造園術に取り組み [注 19]、1884 年から 1889 年にかけてナンシー林業大学に遊学していた、日本の高島得三と親交を結んだ。高島は—画家の丸山とともに—すでに 1878 年に、日本の植生<sup>207</sup>と 120 種をこえる植物葉について図版を中心とする本を出版し、1 部はナンシーに残されている [注 20]。さらに、エミル・ガレは、みずからも出席し、出品物の磁器に金メダルを受賞した、1889 年のパリ博の会場で、日本生花展の目録を目にしたにちがいない [注 21]。「ジャポニスム」とともに、東アジアのフロラ<sup>208</sup>もまたヨーロッパにとどいた—日本からはとりわけ、同国で梅、竹、蘭とともに四君子の一つに数えられている、菊をゆずりうけた。エミル・ガレはナンシーの仕事場にあらゆる種類の花、特に外来の植物や高木のために庭園までも造っていたことがわかっている [注 22]。庭には—日本のカエデとウルシのほか—イチョウ樹も数本植わっていた [注 23]。イチョウのモチーフはガレの関心をひいたに相違ない。イチョウ文様のあるガレの

---

反映した装飾と構造の一致が特徴。建築家・デザイナーではマッキントッシュ、オルタ、バン・デ・ベルデ、ガウディ、ギマール、ホフマン、工芸家ではガレ、ラリック、ティファニー、絵画・版画ではピアズリー、クリムト、ミュシャ、ロートレックらが含まれる。日本には 1900 年のパリ万国博を契機として導入され、杉浦非水や雑誌《明星》などに影響を与えた。20 世紀に入るとその過剰な装飾性ゆえアール・デコなどのより機能主義的な傾向に取って代わられたが、近代デザインの先駆となった歴史的意義は大きく、また現代でも人気は高い（マイペディア 97(C)株式会社日立デジタル平凡社）。

<sup>207</sup> Vegetation。ある場所に生育している植物の集団を漠然と指す語。植被ともいう。相観や組成、あるいは大きさ（広がり）の基準はない（辞典参照）。

<sup>208</sup> Flora。《同》植物相。特定の限られた地域に分布し生育する植物の全種類をさす。その地域に生育する植物種の構成を定性的に示す。動物におけるファウナ（動物相）に相当。植生はその地域の代表植物によって特徴を表現するのに対して、フロラはそこに生育する全植物を同定して、その名をリストに表わしたものである（辞典）。

作品は、いまだに知られていないが、「ヤドリギ」の場合と同様 [注 24]、いずれ発見されることが予想される。なぜなら、「ナンシー派」(1901年に展示計画のために連携し、エミル・ガレが初代会長になった、ロートリンゲン<sup>209</sup>の工芸家と芸術家のゆるやかな結社)の制作で、真っ先にエミル・ガレが使わなかった、珍種の植物モチーフはまず存在しないからである。

この事実をかなり高い確度をもって示唆するものは、建築、錬鉄(ルイ・マジョレル Louis Majorelle の手になる格子、ランプ)およびガラス製品(ドーム兄弟 Daum Frères、ジャック・グルーベル Jacques Gruber など)にみられる、「ナンシー派」内のイチョウ文様である。さらに、「ジャポニスム」の波が1889年の万博後パリをはじめとするフランスですすでにおさまり、通俗化したあと、日本芸術の翻案がナンシーで新たな芸術の極致をきわめるのも、やはりガレであった [注 25]。

### 「ナンシー派」の建築、錬鉄とガラス彩色画

えり抜きの木々の葉や果実をつけた枝は、建物の正面、バルコニー、扉や窓枠の飾りとして、個人家屋にも公共建築物にも、ユーгентシュティールで人気があった。ほんの数例をあげるなら、松かさ<sup>210</sup>のついたマツの枝、実のなるクリの枝、あるいはブドウとブドウのほかに、ユーгентシュティール期になって建築用装飾としてはじめてイチョウのモチーフもでてくる。装飾建築の例として、ロートリンゲン地方における花のユーгентシュティールの中心地、ナンシーの代表的建造物を3軒あげておく。豪奢な建築物群として、エミル・アンドレ Emil André と P. シャルボニエ Charbonnier によって建てられ、1910年に完成した、元ルノー銀行(現パリ国立銀行)ーシャンジー通り/サン・ジャン街9番地一には、4個の金属製帯が、交差点沿いに位置している、角<sup>すみやぐら</sup>櫓として構築された建築物の一階にある、出入り自由な表玄関ホールの花崗岩<sup>かこうがん</sup>の柱を飾っている(図解4) [注 26]。これらの幅広い金属帯にはそれぞれ中心に、あたかも指輪の石のように、カルトゥーシュ<sup>211</sup>がみられる。カルトゥーシュから両わきに向かって、いくつか切り込みのあるイチョウ葉をつけた枝が2本でている。フランスではイチョウ樹がいまもなお「40 エキュの木」<sup>212</sup> (40

<sup>209</sup> フランス北東部ある地方「ロレーヌ」のドイツ語形、ドイツとの係争地。

<sup>210</sup> Zapfen: 正式にはむしろはという。すなわち、「木化した鱗片が集まって球形あるいは楕円体となった果実状の構造。マツ類の松傘(まつぼっくり)や他の針葉類のそれに相当するものがこれにあたる」(辞典)。

<sup>211</sup> Kartusche: バロック様式の巻き軸装飾。

<sup>212</sup> „L'Arbre aux quarante écus“. エキュ(écus)とはフランスの古い銀貨または金貨。

ターラー<sup>213</sup>の木) とか「千ターラー樹」などともいった異名をもち、これがまた秋ともなればターラー金貨のように輝くイチョウ葉を示唆しているらしいという点で、イチョウと銀行とのあいだには浅からぬ因縁があると思われる。(興味深いのは一すでに 1776 年に 1 本のイチョウがノルマンディー地方ルアンに存在した事実が立証できるにもかかわらずなぜ最初のイチョウ樹がイギリスからフランスにとどけられたというのか、また、なぜ「40 エキュの木」という別名をもつ事態になったかという故事来歴である。1780 年、パリの植物愛好家 M. ペティグニー Pétigny は、イギリスの種苗栽培園を訪ねたおりに、5 本の若いイチョウ樹—イギリスには当時ほかに若木はなかった—を、1 本あたり 5 ギニー<sup>214</sup>で手に入れることに成功したという。もちろん、商談が成立したのは、ペティグニーが所有者—日本から取り寄せた堅果からイチョウ樹を育てあげた栽培者—に、したたかフランスワインをふるまいながら豪華な<sup>215</sup>をすませ、うまく相手を口説けるようになったあとである。5 ギニーは 40 エキュ [120 スイス・フラン] に相当した。イギリスの栽培者は翌日、イチョウを買い戻すために 1 本につきそれぞれ 5 倍の価格を支払うことさえいとわなかったが、5 本はすべてフランスに到着し、フランスにおけるすべてのイチョウのいわば「系統樹」となった。5 本のうち、2 本はパリ自然誌博物館付属植物園に、1 本はヴェルサイユ宮殿の庭園に運ばれた) [注 27]。



図解 4：イチョウ文様、元ルノー銀行、ナンシー、表玄関ホール、帯、1910 年。

特に主の石造持ち送り<sup>216</sup>の側面と屋根窓<sup>217</sup>に、ひととき豪華なイチョウの枝をきざむ  
フェサード  
正面装飾が、ナンシーのヴィクトル・ユゴー通り 25 番家屋にあり、それゆえ「イチョウ  
の家」という特別な名前がつけられている (図解 5) [注 28]。

<sup>213</sup> Taler：16 世紀から 18 世紀までドイツで通用した銀貨。のちに 3 マルク銀貨。

<sup>214</sup> ギニア (Guinea) 産の金でつくられたところから Gunea (ギニー) という。1663 年から 1813 年まで、アフリカ貿易のために英国で鑄造された金貨。はじめ 20～22 シリングの価格であったが、1717 年以降 21 シリングに一定。現在では用いられない。

<sup>215</sup> 一日のうちいちばん正式で豪華な食事、ドイツでは昼食、フランスでは夕食を指すことが多い。

<sup>216</sup> 持ち送り (Konsole)：壁柱または壁体から突出して、庇・梁・柵・床などを支える構造物、またその構法。鉄・木・石などで造って、実用的なものほかに、単に装飾だけのものもある。ブラケット (広辞苑)。

<sup>217</sup> 屋根の途中に張り出した明かりとり用の窓。



図解 5：持ち送り側面、「イチョウの家」、ナンシー。

ナンシー市サン・ディージェ通り 24 番地に、半ばガラス張りの入口ドアが鉄格子で防護され、格子の狭い枠が、上昇茎<sup>けい</sup>のようなイチョウの葉と種子をつけた枝で飾りつけられているのが目にとまる。この建物は、ナンシー市一流の既製服製造業の<sup>アトリエ</sup>仕事場によって、正確には建築家ルイ・デオン Louis Déon と画家兼デザイナーのジャック・グルーベル Jacques Gruber によって、1909 年と 1913 年のあいだに、以前の家屋がアール・ヌーボー様式に改造されたものである（図解 6 の詳細図） [注 29]。



図解 6：ドア格子、詳細図、ナンシー市サン・ディージェ通り家屋番号 24、1909–1913 年。

ロートリンゲン（ロレーヌ）地方の他の町、たとえばヴェルダンでも、イチョウはモチーフとして人気があった。市役所の向かい側、ポアンカレ通り 16 番地のビルの正面などにも、様式化されたドアやショーウィンドーの木枠として使われている [注 30]。

「ナンシー派」一流のガラス絵師ジャック・グルーベル Jacques Gruber (1870–1936) は、ナンシーで多数のガラス窓をつくるとともに、ナンシー中央駅のはず向かいにある、レストラン「レクセシオール」（マザグランとレモン・ポアンカレ通り 3）の大食堂の大きな窓 8 枚の飾りガラス枠も制作した。その華麗な建物群は、1910 年以降にロートリンゲンのビール醸造コンツェルンのホテル兼レストランとして、リュシアン・ヴァイセンブルガー Lucien Weissenburger とアレクサードル・ミュアンヴィル Alexandre Mienville によって設計されてできあがった。文化財保護法の適用をうける、細長い「食堂」(salle à manger)は、豪華な植物文様でしつらえられている。大きなガラス面はステンドグラスの内枠をもち、そこにシダ、マツ、イチョウのモチーフが交互に見られる。ステンドグラスはきわめて手

のこんだ薄い色ガラス皮膜と腐食の技法を用いて、控え目な黄褐色ので仕上げられている（図版 17 参照）〔注 31〕。

ナンシーはフランスにおける「花のアール・ヌーボー」(florales Art Nouveau)の中心地であるばかりか、それ以上の場でもあったため、旧ロネーヌ公国の主都ナンシーでつくられた建築装飾やガラス彩色画としてここに挙げた例は、おそらく同種モチーフの方々に点在する別の事象をも代表していることであろう。

### ドーム兄弟ナンシー工場

イチョウ文様で彩られたガラス製品や照明器具は、ナンシーから、とりわけガレと並んでもっとも有名なドーム兄弟の<sup>マニユファクチュア</sup>工場からもつくりだされている。兄ジャン＝ルイ＝オーギュスト・ドーム Jean-Louis-Auguste Daum (1854－1909) (経営管理)と弟ジャン＝アントナン・ドーム Jean-Antoin Daum (1864－1930) (芸術的造形)は、1901年にそろって「ナンシー派」の創設に積極的に関与し、弟は副会長をつとめた。植物文様に対するきわだった偏愛は、今日までつづいているドーム社(ナンシー工場)の生産で—1904年エミル・ガレ死去のあとも—1920年代にいたるまで、つまりアール・デコ<sup>218</sup>まで受け継がれる。



図解 7：花瓶、色被せガラス、ドーム兄弟制作、ナンシー、1900－1910年、デュッセルドルフ美術館。

1900年から1910年までに制作された、イチョウ枝の大柄で色調の繊細な文様がはいった、カラフルな色被せガラス<sup>219</sup>花瓶をここで2点ばかり紹介しよう。デュッセルドルフ美術館の

---

<sup>218</sup> 1925年パリで開催された「現代装飾・工業美術国際展」(略して Les Arts Décos)にちなんで名づけられた、パリを中心とする1920-30年代の装飾様式。「1925年様式」ともいう。直線と立体を多用した知的で静的な装飾性が特徴。

<sup>219</sup> Überfangglas：「色被せガラス」あるいは「かぶせガラス」。アール・ヌーボーのガラス工芸は、古代ローマや中国の「乾隆ガラス」、日本の工芸品に触発されたい。なお、清代乾隆帝時代に最高潮に達

高さ 24.4 cmの花瓶（ヘントリヒ収集品）—1900—1910 年頃制作、型吹き成形—は、乳白色のくもりガラスのうえに、<sup>エッチング</sup>食刻した緑色と褐色の色被せガラスに青い粉末をかけて、浅裂の葉をつけたイチョウ樹の枝を表現している（図解 7） [注 32]。2 点目の高さ 34.5 cmのすらりとした、先細りになっている私蔵の花瓶（これまで未公開）では、青い葉の文様（ブレハン博物館／ベルリン所蔵のスウェーデン製磁器のつき花瓶参照）が、いかにも東アジア製の磁器を手本にした思わせる。すでにデュッセルドルフのイチョウ例に見られたように、この花瓶も、無色のガラスに黄、赤、紺色の薄い色ガラスをカラフルな粉末状に溶解した被膜でかぶせてつくられたものである。不透明な粉末状被膜におおわれた内壁は、下部に黄色っぽいがあり、上方へ線條に引き伸ばされている。暗くおさえられた花瓶のから、下向きに垂れさがる青いイチョウの枝が、明るい花瓶の胴体に巻きついている（1905 年頃、図版 15 参照） [注 33]。このようなイチョウ文様の多彩さには、表現主義<sup>220</sup>の反自然主義的な見解が支配しているのである（「青騎士」参照！）。

#### ナンシーとパリのランプを飾る錬鉄のイチョウ文様

錬鉄製のフロアランプ、卓上電気スタンド、壁灯および天井灯で異常な人気があったのは、イチョウ文様であり、とりわけアール・ヌーボー型とアール・デコ期のランプ（両者はときに混じりあうが）は、フランスにおける芸術的な様式傾向の二大中心地である、ナンシーとパリで見いだされる。照明器具の場合、イチョウ文様はつねに金属枠に限定され、付属するガラスの入れ子やランプのかさにイチョウの装飾は見られない。フロアランプでは、「イチョウの」をあしらった装飾模様がしばしば脚、それに<sup>ほや</sup>火屋の留め具に見られる（図版 16 参照）。卓上電気スタンドには、ユージェントシュティールの花・植物路線の自然主義的なやや古い形式（たとえばイチョウの葉と種子でたわむ枝）と、ただ個々に葉だけが、として造形された、ランプの柄に取りつけられている、かなり厳格な形式がある（図版 16 参照）。イチョウの<sup>レリーフ</sup>浮き彫りがある錬鉄製の左右対称に構成された壁灯と、おびただしく枝分かれした樹枝のような天井灯は、イチョウ・モチーフの新たな使用例である（図版 16 参照）。

---

した、「乾隆ガラス」は、「白色不透明または半透明のガラスの上に緑、赤、黄などの色ガラスを厚くかけた後、この色ガラスを玉器の細工のように浮彫りにして草花、人物などを表現したものが特徴的である」（世界大百科事典）。

<sup>220</sup> 印象主義 (Impressionismus) が外界の印象を基礎にするのに対し、表現主義 (Expressionismus) は内面の表出をめざす。

「ナンシー派」、特にエミル・ガレとドーム兄弟のガラス製品—1893年以來ランプの生産で一頭地を抜いていた—では、多種多様なモチーフの食<sup>エッチング</sup>刻した色ガラスの被膜模様をほどこしたランプが、広く普及した。しかしユーゲントシュティール期も終わりに近づくと、花の装飾は組み立て部品に重点がうつり、必要不可欠なガラスの火<sup>ほや</sup>屋もたいていは単色でつや消しガラスか大理石模様のついたものになってしまう。著名なユーゲントシュティールの芸術家ルイ・マジョレル Loui Majorelle (1859–1926) は、ナンシーで家具製作に独自の金属工芸とブロンズ鑄造をつけくわえ、家具補強金具や階段の手すりなどのほかに、花柄模様をあしらった錬鉄製ランプ台もつくりだした。エミル・ガレ没後1年を経た1905年、ドーム社とルイ・マジョレルはランプの分野で協力協定を結んだ。しかし、1900年から1905年にかけて金属工芸を修得し、ナンシーでドーム社と協力して活躍し、20年代にパリで20世紀を代表するもっとも有名な金属細工師のひとりに出世したのは、だれよりもエドガー・ブランド Edgard Brandt である。このブランドもまた植物学に刺激をうけ、下絵で自然研究を流麗な描線に結びつけた。ナンシーのルイ・マジョレルとパリのエドガー・ブランドに倣って生まれた、おびたしいランプの在庫は一特にイチョウのモチーフに変化をつける、ドーム兄弟とミュラー兄弟（リュネヴィル・ミュラー Lunèville Muller とクロスマル・ミュラー Croismare Muller）の火<sup>ほや</sup>屋とともに一あちこちに分散して所有されている（図版16参照）。

## パリにおけるガレ受容

1889年パリ万国博覧会をきっかけにエミル・ガレのガラス工芸品が大成功をおさめたあと、（1892年のパリ展示会と1900年の万博以後、雨後のように、さらにふえるが）、数多くのガラス工場やデザイナーたちがガレの手本にしたがいながらも、ガレの卓越した珍品の高水準に達する作品はついにあらわれなかった。ただ若干の例を挙げると、まずロートリンゲンではマイゼンタール Meisenthal、ドーム兄弟、セントルイス St-Louis、ヴァラレリスタール Vallerysthal、ミュラー兄弟、バックカラ Baccarat などのガラス工場、エルザス<sup>221</sup>にはたとえばガラス工芸家ラスピエール Raspiller とリシャール Richard ならびにユーゲントシュティールの芸術家シャルル・スピンドラー Charles Spindler、パリにはパンタン&サン＝デニ工場、ベルギーではヴァルサンランベール Val-St.-Lambert、いやそれどころかロシア皇室工場（サンクト・ペテルブルグ）までも存在した。

ここに紹介する、「ド・ヴェズ de Vez」と銘を打った高さ22.5cmのブロンズ製イチョウ

<sup>221</sup> フランス北東部、ライン左岸地方、フランス名アルザス

型組み立て部品<sup>アセンブリ</sup>をそなえる小瓶（ミュンヘン市立博物館所蔵）は、パリ近郊のパンタン・クリスタルガラス器製造工場—1878年に創立された会社「スタンプ、トビエール、ヴィオレ&シエ Stumpf, Touvier, Violet et Cie」—の作品である。同社は、すでに1878年のパリ万博に出品し、1883年のアムステルダム万博で名誉賞をうけていたが、ユーゲントシュティール時代になり、特にガラス工芸品『月明かり clair de lune』（すなわち、「氷ガラスのように」腐食させてエナメル塗料を塗った作品と、虹色に輝く新奇な効果）によって、ようやく芸術界に躍りでることができた。1910年、カミュ・テュトレ・ド・ヴァール—Camille Tutré de Varreuxが芸術主任になって以来、「ド・ヴェズ」と主任の雅号を入れてある、とりわけ風景画を刻んだ、食<sup>エッチング</sup>刻ないしカットされた色被せ<sup>き</sup>ガラスがつくられだす。小瓶の『イチョウ』はこの時期のものである。幾重にも色ガラスの薄膜をかぶせたガラスは、浮き彫りエッチングによって、山岳を背景にしてイトスギが生い茂る南国の湖水風景を描いている。ガラスの首からはイチョウ樹の枝が垂れさがる。卵形のガラス本体を支える、金属の組み立て部品<sup>アセンブリ</sup>は、はめ込まれた脚の真上に位置する、曲線状に鍛接<sup>222</sup>したイチョウ葉のあいだに、種子として3個の玉をつけ、さらに、2列に重なりあって浮かびあがるイチョウ葉が、容器の壁の一部をおおっている（図版15参照）。

このような文様には日本の手本が自然に思い浮かぶ。富士山を思わせる山岳風景<sup>かみて</sup>の上手に、イチョウの代わりに、垂れさがるヤドリギの枝をあしらった、ミュンヘン市立博物館所蔵、「ド・ヴェズ」第2作のガラス製品も同様である〔注34〕。

## パリのアール・ヌーボー

イチョウ文様がこまかい日用品にもいかに人気があったかを示す例として、金属製の作品にもう一点ブロンズ製ペーパーナイフをつけくわえておこう。ドイツ人の私有になるこのフランス製ペーパーナイフは、長さ28cmのナイフの形をして、握りは透かし彫りになっている。さらに、握りは形状にぴったりあった枠を形づくり、その枠はナイフの両刃に長い先のとがった形で軸方向に、しかも刀身から1mmばかり浮きあがった層をなしてのびている。このような層と縦長型の握り枠全体に（ほとんどスタジアムの平面図のような輪郭を描いているが、やや狭い上端は半円になって閉じているのに対し、やや広い下端は「ロバの背」のように尖端がナイフの刀身にのびている）、イチョウ葉をそれぞれ4枚ずつつけた二重の小枝のはめこまれている。イチョウ葉はほぼ自然主義ふうにかたどられている。

<sup>222</sup> 接合部を半熔融状態まで加熱し、圧力を加えて二片を接着させる金属接合法。

二重の小枝は、切断面を（高木から切り離されたように—図解 8 参照—）見せる、下方の開口部で曲げられた 1 本の大枝からのびたものである。愛らしいが力強く形づくられたイチョウの小枝は、枝のこぶや葉や種子とともに、全体が重いペーパーナイフの平らな中空の握りに挿入されているために、イチョウ葉がナイフの主要な両面に姿をのぞかせる効果をおさめている。



図解 8：ペーパーナイフ、ブロンズと鉄、パリ、1900 年頃、右：詳細図。

写実的な形象全体が、黒い鉄によって、握りと一体をなす銅色の刀身から、色彩上もきわだって見える。握り、枠、さらに、ナイフの中心線に沿ってのび、輪郭が曲線を描いて進入していく尖端などは、様式化するアール・ヌーボー式と特徴づけることができる。握りのなかにたくみにはめ込まれたイチョウの二重枝は、自然主義らしい造形の点で、脚と柄に自然主義ふうのイチョウ枝をあしらったフランスの卓上電気スタンドを思い出させる（図版 16 参照）。

1900 年頃の高さが 21 cm あるフランス製ガラス小瓶は、イチョウ葉の銀メッキをした組み立て部品に支えられ、下部の無色透明な球形ガラス体の脚まわりに、そそり立つようなイチョウ葉の輪が入れ込まれている。瓶状に引き伸ばされたガラスの首は、銀でかこまれた口をもつ。小瓶の口には、直立する銀メッキのイチョウ一葉<sup>ひとは</sup>を花冠のようにかぶせた、ガラス栓がついている。（脚に「ガリア<sup>223</sup>・メタル」の表示、コックと紋章つき、私有、図版 14 参照）。

高さ 20 cm の取っ手がついた陶器の花瓶（カルトゥーシュに「パリ 1900 年、新燭<sup>しんしよく</sup>」の表示）は、格別豪華なイチョウ文様をつけている。

金をきせた 4 枚の大形イチョウ葉が、屈曲した取っ手から落ちかかり、明るい陶器の壺口<sup>つぼくち</sup>を一部おおっている。また胴のふくらんだ花瓶には、それぞれがぼやけた青い地色<sup>じいろ</sup>に、一段と大きいイチョウ葉が、房状の種子をつけ、はめ込まれた壺の首から垂れさがりながら、控えめな浮き彫り<sup>レリーフ</sup>にして表現されている。これらのイチョウ・モチーフは奇妙に頭につい

<sup>223</sup> Gallia：古代ヨーロッパの、ケルト人（ガリア人）居住地域の呼称。

て離れない。刻印された日付によって、壺が1900年のパリ万博時にシリーズとして製造され、当時はおそらく人気のあったオブジェであることがわかる（私有、図版17参照）。

依然としてアール・ヌーボーの伝統に立脚していながら、すでに20年代のパリに生まれたものとして、ガブリエル・アルジールソーGabriel Argy-Rousseau (1885-1953) 作、高さ4.5 cmの「ガラス溶塊」(Pâte-de-verre)からつくられた蓋つき小容器がある。ガラス溶塊技法の再発見者、G. アンリ・クロ Henri Cros (当時アトリエをセーヴルにもっていた) について、ガブリエル・アルジールソーは、1914年以降、とりわけ20年代のパリで、ユーゲントシュティールふうの装飾模様、のちには擬古的な形式とモチーフをも使った、薄手の小型容器のガラス溶塊モデルを制作する、屈指の芸術家と評価された。

本書に複写されている、ケルン工芸博物館所蔵の蓋つき小容器（ゲルトルート Gertrud とカール・フンケ=カイザー Karl Funke-Kaiser 博士収集品）〔注35〕は、イチヨウ葉文様をつけた半透明のカラフルなガラス溶塊で、これまでに有名になった唯一の作品である。周りを取り巻いている、赤さび色の扇状葉からなるイチヨウのは、アーチ形の蓋ならびに球形容器の黄灰色の内壁を飾っている（図版15参照）。

絢爛豪華なユーゲントシュティールのなかで、イチヨウは、シャベルやほうきとともに、銀メッキをした食卓セットにひろまった（錨形飾りに「パリふう金属」の表示）。シャベルは、7枚の左側へ落ちてゆくイチヨウ葉とサクランボのような種子をつけた、1本の右側から上昇して中央で握りを形づくる大枝の装飾がほどこされている。シャベルに付属する、やや弓形の食卓用小ぼうきも同じく、交互に垂れさがったり立ちあがったりするように配列された、7枚の大きさの異なるイチヨウ葉で装飾されている（私有、図解9）。垂れさがるイチヨウの小枝と「立っている」イチヨウの小枝を配した同様な装飾は、フランス製のナプキンリング（私蔵）に見られる。カルトゥーシュの組み合わせ文字「CC」のまわりに、葉と種子が置かれ、リングのへりをそれぞれイチヨウの葉柄が1本ずつ縁どっている（図解10）。



図解9：食卓セット、銀メッキ、パリ、1900年頃。



図解 10：ナプキンリング、銀、パリ、1900 年頃。

やといった素材は、フランスのアル・ヌーボーで飾り櫛、ブローチ、ベルトの留め金、ペンダントなどの製造に特に人気があった。ここで思い出されるのは、ヴェヴェ兄弟（パリ）のヤドリギ櫛（ベルリンとハンブルクの博物館に所蔵）のような、1900 年前後のきわめて高価な、精巧に加工されたデザインとか、ルネ・ラルリック René Lalique、ファリズ Falize 兄弟、ジョルジュ・フーケ Georges Fouquet の角質材による新たな装飾櫛で、金、オパールあるいは半透明のなどの飾りをつけたものである [注 36]。アンリ・ヴェヴェ Henri Vever の作品（パリ）に近い、フランスの髪飾り—ニュルンベルク・ゲルマン国立博物館所蔵の**鱗甲製ダイヤモンド<sup>224</sup>**—は、6 個の磨きあげられた（「カボション<sup>225</sup>の」）エメラルドをつけた 1 本のイチョウ枝を頭部の飾りにしている。水平に、ゆるやかな曲線を描いて下にたわむ、長さ 8.5 cm のローズ形ダイヤモンド 28 個をちりばめた銀製ヘアクリップは、葉と種子が垂下する、イチョウの小枝なのである。同ヘアクリップは髪飾りやブローチとしても利用できる（図解 11） [注 37]。



図解 11：髪飾り、**鱗甲**、エメラルドとローズ形ダイヤモンド、アンリ・ヴェヴェ、パリ（？）、1900 年頃、ニュルンベルク・ゲルマン国立博物館。

角質材料だけでつくられた、すなわち宝石や貴金属の縁飾りがないが、フランスのユージェントシュティールとそのイチョウ文様への偏重を示す、ひときわ簡素な例は、櫛の歯の上部に装飾として 4 枚の深く切れ込んだ葉をつけたイチョウの小枝をかたどる、高さ 11.4 cm のしである（私有）（図版 13 参照）。

**めいしよく**の色を素材にして、やや黒く染めた 3 枚のイチョウ葉で終わる、長さ 16 cm のペーパー

---

<sup>224</sup> Diadem：宝石入り環状頭飾り。

ーナイフ（1900年頃）もつくられた（私有、図版13参照）。

パリの著名な装飾デザイナーたちのコレクションに、イチョウのモチーフを探してもほぼ徒労に終わる。ただ、メゾン・ブシェロン Maison Boucheron（パリ）の動物の頭をかたどった1907年の金製ブローチ（ブシェロン収集品）は、イチョウ・モチーフを取り入れている。L.ヒルツ Hirtz にデザインされ、エスピナス Espinasse によって仕上げられたブローチは、

2匹の動物の頭がぱっくり開いた口に、磨きぬかれた<sup>かんらんせき</sup>橄欖石をくわえ、石の頂点を3枚のイチョウ葉が飾っている。そのうえ、さらに別な水滴形の橄欖石を1個そなえた2枚のイチョウ葉が、長さ8.4cmのブローチのたれ飾りを形成している（図版13参照）〔注38〕。

さらに、鎖、ブローチ、ベルトの留め金、ハットピン、その後おおむねきわめて装飾的で精密に、いやしばしば、ごく自然主義らしく仕上げられるようになった、女性用ポケットナイフや日用品にも、イチョウ文様が見いだされる。たとえば、銀メッキをしたの握りになっているのも、イチョウ葉のまったく草のような束である（私有、図版14参照）。

中央に近づくほど大きくなる7枚のイチョウ葉をつるした銀製リンクチェーンは、新たな変形である。種子をつけた葉と、種子をつけていない葉が交互に認められる（私有、図解12）。



図解12：ネックレス、銀、パリ、1900年頃。

ドイツの美術市場に近ごろ、緊密に絡みあった30枚を超えるイチョウ葉でをかたどり、イチョウのたれ飾りをつるした、長さ36cmのフランス製銀鎖があらわれた（パリの極印、菱形紋のなかに「EL」という親方印）。さらにもう一点、長さ42cmの銀製リンクチェーンは、イチョウ葉をかたどる2個の中間飾りと、種子をつけた5枚の絡みあったイチョウ葉からなる下部の中央飾りがある（800パーミルの極印、Eberkopfunze および確認されない親方印）。これはパリのアール・ヌーボーの特異な一例である（私有、図解13）。

---

<sup>225</sup> cabochon：頂部を丸く磨いた宝石、またはその磨き方。



図解 13：ネックレス、銀、パリ、1900 年頃。

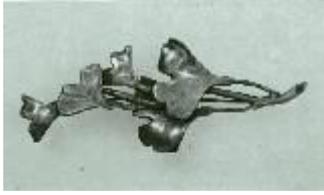
ミュンヘン美術品取引所に登場した、赤い模造宝石をちりばめたフランス式の高さ 5 cm の銀製たれ飾りは、5 枚のイチヨウ葉でおおわれた、下に垂れさがりリラの基本形を示し、5 連の種子が、中央で絡みあった葉柄の頂部を飾っている（図版 14 参照）。銀を圧延加工したブローチ（パリ 1900 年頃）は、デザインがいっそう創造力にあふれ、仕上げもいっそうきめ細やかである。2 枚の大型葉は優雅な曲線を描いてわきに垂れさがっているが、それらの葉柄のあいだに 2 枚の小型葉がすくと立ちあがっている。クローバーの三つ葉形に配列された、真珠と青い模造宝石の小さい種子が、上部の透き間に突きだし、下げ飾りは、もう 1 枚別なイチヨウ葉と真珠で形成されている（私有、図解 14）。



図解 14：ブローチ、銀、真珠と青い模造宝石、パリ、1900 年頃。

中心に 1 個の真珠と、種子に見立てた小粒のブリリアントカットのダイヤモンドをあしらった、格別高価なパリのユーゲントシュティール式金製ブローチ（極印と確認されない親方印が押されている）は、3 枚ずつイチヨウ葉をつけた、3 本の枝でみごとに構成されている（φ 3.5 cm）（私有、図版 13 参照）。

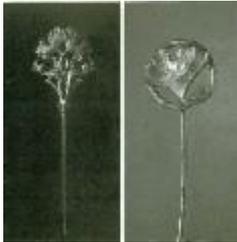
2~5 枚の圧延加工されたイチヨウ葉と種子をそなえ、切り取った小枝のように成形されている、銀製のイチヨウ型ブローチは、特に卑金属のモデル装身具、なかんずく<sup>ストラス</sup>人造宝石をちりばめた装身具よりも頻繁に見うけられる。ハットピン、ベルトの留め金、腕輪なども同様である（私有と美術商、図解 15~20）。



図解 15 : ブローチ、銀、パリ、1900 年頃。



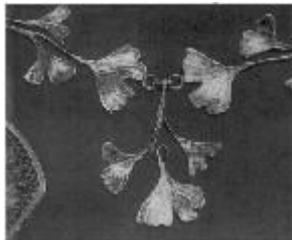
図解 16 : ブローチ、銀メッキ、人造宝石、パリ、1900 年頃。



図解 17 : ハットピン、銀メッキ、パリ、1900 年頃。



図解 18 : ベルトの留め金、銀メッキ、パリ、1900 年頃。



図解 19 : 鎖、銀メッキ、詳細図、パリ、1900 年頃。



図解 20：腕輪、金メッキ、カラーの銘。

フランスで 1930 年代にも装身具にまだイチョウ葉が見られる一例は、3 本の長い葉柄を有し、刻み目を入れた長さの異なるイチョウ葉に、暗褐色の準宝石製の種子（カボション）3 個をつけた、フランス人の私有する、6 cm 大の金ブローチである（図解 21） [注 39]。



図解 21：ブローチ、金と準宝石、パリ、1930 年頃。

#### イチョウ文様のあるドイツのユーゲントシュティール作品

イチョウ・モチーフは、フランスよりもドイツのユーゲントシュティールで、なおいっそう注目された。フリードリヒ・アードラー Friedrich Adler のような著名デザイナーたちや彫刻家のテオドーア・フォン・ゴーゼン Theodor von Gosen も、イチョウにのめりこんでいった。フリードリヒ・アードラー（1878-1942）—ユーゲントシュティールの指導的なドイツ芸術家の一人—は、3 個の取っ手と人工的に青さびを生じさせた製の果物ナイフ用中皿つき果物鉢、高さ 19 cm（φ 27 cm）を、1903 年から翌年にかけて（すなわちミュンヘン美術工芸教育実験画室、ヴィルヘルム・フォン・デプシツ Wilhelm von Debschitz で教職活動をしていた時期に）制作した。同作品は小工芸用金物工場、ニュルンベルクのヴァルター・シェルフ商会で製造された（私有、図解 22） [注 40]。



図解 22：フリードリヒ・アードラー、3 個の取っ手つき果物鉢、<sup>すず</sup>錫、1903/1904 年。

さらにフリードリヒ・アードラーの作品とされる、3 個の取っ手つき錫製果物鉢（9×27

cm) も、1903/4年にニュルンベルクの金物工場ヴァルター・シェルフ商会でつくられ、同様に大きく平らに取り巻くイチョウ文様で飾られている(私有) [注41]。

ケルンのエンゲルベルト・カイザー Engelbert Kayser のアトリエから(仕上げは子息の J. P. カイザー、クレーフェルト=ボクム在住)、厳格に様式化されたイチョウの装飾模様をあしらった2個の取っ手つき<sup>すず</sup>錫製鉢(30.5×25.3cm、ベルリン工芸博物館所蔵)が、1910年前後につくりだされている [注42]。

ヴァイマル市立博物館にあるユーゲントシュティール期の作品、真鍮<sup>しんちゅう</sup>の取っ手と蓋がついている高さ35cmの銅製水差しは、上部と下部にフリーズ<sup>226</sup>のような飾りがある。このフリーズの個別的な構成要素は、交互にあらわれる、様式化されたイチョウ葉と、尖端がイチョウ葉のあいだにくるように、透き間ごとに配列されている、装飾的要素とから成り立っている(図解23)。



図解23：真鍮の取っ手つき銅製水差し、1900年頃、ヴァイマル市立博物館。

リンツコップフ・ゼーネ社(コーゼン)の高さ12.6cmのガラス花瓶(美術品取引所)<sup>227</sup>は、興味深いオブジェである。無色透明の金梨地<sup>きんなしじ</sup>ガラスでつくられた<sup>へんりょうけい</sup>偏菱形の容器本体は、淡紫色の乳白光を発する素地のうえに、カラフルな<sup>じょうこん</sup>条痕のように引き伸ばされた溶融帯を有し、花瓶の首からスタンド面まで、きわめて自然主義的な、まさに華麗なイチョウ枝で構成されている、<sup>アセンブリ</sup>組み立て部品と一部がかさなりあっている(図解24) [注43]。

<sup>226</sup> Fries: 古代建築の小壁、あるいは壁上方の帯状装飾。

<sup>227</sup> ドイツ、バイエルン州パッサウのガラス博物館にも所蔵されている(加藤温子談)。



図解 24：真鍮の組み立て部品つき瑠璃ガラス花瓶、リンツコップフ・ゾエーネ社（コーゼン）、1900 年頃。

ここで、特に、自然主義的な植物装飾をほどこした金属アセンブリーに関して、フランス式アール・ヌーボーがドイツ工芸におよぼした影響をみることにしよう。

ドイツでつくられる小型銀杯のイチヨウ文様も、フランスのユーゲントシュティールに類似しているのである（私有、図解 25）。



図解 25：小型の銀杯、ドイツ、1900 年頃。

グラーツ<sup>228</sup>のイチヨウ愛好家の女性、バルバラ・フィリピチュ Barbara Filipitsch（1992 年没）が収集した品目のうち、ここで少なくともあと数点、ユーゲントシュティール期の作品を収集目録から取りあげてみたい [注 44]。a) フリーズのような大きく平らな配列で様式化された一弓形の葉柄に種子をつけている一イチヨウ葉を何度も反復して見せる、銀メッキをした銅製組み立て部品つきの高い青色ガラス鉢（図解 26）。b) すべての側面にイチヨウ文様がある真鍮製長方形型シガレットケース。c) 取っ手と、それぞれ深裂のイチヨウ

葉が 4 個の垂下する銀杏<sup>ぎんなん</sup>とともに刻み込まれている、2 枚のガラス製中皿をそなえた、金属のデザート皿。当品は、ロプマイル社（ウィーン）のガラス博物館に所蔵されている、ヤドリギ文様が刻まれた、同じくユーゲントシュティール時代の対応オブジェを思い出させる。d) に横たわる弓形のイチヨウ葉 4 枚と種子をあしらった、鑄鉄製の丸い下皿。そのうえさらに目先を変えて萼花類<sup>がくか</sup>があらわれる。e) イチヨウ・モチーフが人気のあることを証

---

<sup>228</sup> Graz：オーストリア南東部の商工業都市。

明するものは、特に、円形につくられた枝に4枚の装飾らしく扇<sup>せんじょう</sup>状にひろげた葉がびったりはめ込まれている一方で、銀杏<sup>ぎんなん</sup>が葉から振り払われてタイルのを満たしている、緑色の釉<sup>うわぐすり</sup>をかけたユーゲントシュティールの暖炉用タイルである（図解 27）。f)同じくイチョウ・モチーフを使った銀製の腕輪とブローチ—女性収集家の依頼で伝統派の画家兼宝石彫刻師、ハンス・ハウケ Hans Hauke（グラーツ・マリアトロスト在住）が制作した—は、依然としてドゴベル・ペシュ Dogobert Peche のウィーン派ユーゲントシュティールの伝統に立脚している [注 45]。マイセン<sup>229</sup>は、ようやく第二次世界大戦後の生産ではあるが、1枚の皿（高さ 10 cm、φ 21 cm）を見てもわかるように、コーヒー・食器セットの装飾模様としてイチョウを取りあげている。食器類複合セット「大カット」は、ルートヴィヒ・ツェプナー Ludwig Zepner によって 1973 年に開発された。「イチョウ」文様は、1984 年、ハインツ・ヴェルナー Heinz Werner 教授が下絵付<sup>したえつけ</sup><sup>230</sup>の装飾として創出したものである（図解 28）。



図解 26：銀メッキをした銅製アSEMBリーつきガラス鉢、ドイツ、ユーゲントシュティール。



図解 27：暖房用タイル、<sup>231</sup>、ドイツ、ユーゲントシュティール。

<sup>229</sup> Meißen：ドイツ東部、エルベ川に沿うザクセン州の工業都市、磁器の産地として有名。

<sup>230</sup> 下絵付<sup>したえつけ</sup> (Unterglasur)：陶磁器の素焼地に直接顔料（下絵具）で彩飾すること。そのうえに釉<sup>うわぐすり</sup>をかけて焼成する。釉のうえに彩飾する「上絵付<sup>うわえつけ</sup>」(Aufglasur)と区別。

<sup>231</sup> 炆器<sup>せつき</sup> (Steinzeug)：素地が焼け締まっていて、吸水性のほとんどない焼物。普通の陶器に比べて気孔性がなく、また、素地が不透明で多く有色である点で磁器とは区別される。茶器・菓子器など、また、土管・

---

井戸側・火鉢などの大形物に用いられる（小学館）。



図解 28 : 皿、緑色にで彩色された磁器、マイセン、1984 年。

上<sup>うわえつけ</sup>絵付法によって 1 本のイチョウ枝と 4 枚の遊離した黄緑色のイチョウ葉を配した飾り

皿（ $\phi$  26 cm）は、30 年代の終わりか 40 年代の初めにドーラ・ゼーリヒミュラー Dora Seligmüller が彩飾した（「S」の署名がある）、ゲーテゆかりのヴァイマルで、イチョウ・モチーフの人気をむしろさりげなく証明している（ブレーメン住民の私有、図解 29）。



図解 29 : 飾り皿、磁器、上絵付法による模様、ドーラ・ゼーリヒミュラー作、ヴァイマル、1935 年頃。

ここ数 10 年間につくられた、比較的新しい実例についてさらに列挙するとすれば、まずニュルンベルクに住む陶芸家、エーリク・シュライバー Erik Schreiber（1957 年ミュンヘン生まれ）の、厳格なイチョウ文様をほどこした、磁器の飾り皿（ $\phi$  39.5 cm）がある。シュライバーは 1982 年から 1983 年まで日本に滞在し、当初は現地在住の有名なドイツ陶芸家ゲルト・クネパー Gerd Knäpper、のちには東京の焼物師桜井みなみのもとで働き、ついに 1984 年、自前の職場を手に入れてニュルンベルクに定住するが、イチョウ・モチーフによせる偏愛を日本から持ち帰った。皿状の旗に、回転ベルトのなかにまるでシルエットのように線描されたイチョウ葉 11 枚が、いずれもサクランボ大の種子を 4 個つけてあらわれる（私有、図解 30）。



図解 30：飾り皿、磁器、エーリク・シュライバー作、ニュルンベルク、1985年。

ベルリンで創作をつづける女性陶芸家ヴィルフリーデ・マース Wilfriede Maas は、80年代以降、イチョウ文様のはいった作品、とりわけイチョウ葉に彩飾をほどこした、形の美しい茶器セット（私有）を制作している。女性陶芸家アンティエ・シャルフェ Antje Scharfe（ベルリン）のイチョウ皿も、80年代初期のものである。これらの作品にはさらに、ごく最近になって制作されたものまで、あらためてつげくわえることができる [注 46]。

印刷表現(Druckgrafik)とリノリウム版画の分野でも、イチョウ・モチーフは、ユージェントシュティールから今日にいたるまで見いだされる。なかんずく 1903 年のライプツィヒ工芸博物館展には、「植物の装飾利用」というテーマに対して生徒たちの作品が「様式化とデザインの習作」としてドレスデン王立工芸学校から出品された。イチョウ・モチーフに対する変形を描いた版画は、P.ナウマン Naumann 教授のクラスに属する生徒、M.ヴァイヒェルト Weichelt の作品である（図解 31） [注 47]。



図解 31：植物習作、M. ヴァイヒェルト、ドレスデン工芸学校、1903年（生徒の作品）。

すでにこの数年前、すなわち 1897/8 年以來、アレクサンダー・コッホ Alexander Koch（ダルムシュタット）の編集する有名な芸術雑誌『ドイツの芸術と装飾』は、葉と種子によって構成された、垂直にのびるイチョウのが雑誌のを飾っていた（下絵ヨーゼフ・ベルヒトルト Josef Berchtold）（図解 32） [注 48]。



図解 32：装丁、下絵 ヨーゼフ・ベルヒトルト、1897年。

ヘルベルト・オスト Herbert Ost については、30年代からオットー・ハイン Otto Hein の蔵書票（手すき紙木版刷り）で世に知られている。斜めに傾斜しながら画面を扇状に広がるイチョウ葉のまわりに、ゲーテの詩の冒頭 2 行—「東方からわたしの庭にゆだねられた／

このイチョウの葉は「一」が記載されている [注 49]。

力強い文字板によって有名なヨーズア・ライヘルト Josua Reichert (1937 年生まれ) は、種々の変形で、ゲーテの詩《ギンゴ ビローバ》を、イチョウ葉と関連づけた文字として、多くは 1 メートルの高さに、絵画らしく形象化した。特にめだつのは、黄金色のイチョウ葉 17 枚を配したリノリウム版であり、3 詩節の文字がイチョウ葉のうえに映しだされている (本書巻末参照) [注 50]。

### ドイツ、オーストリア、ボヘミアの装飾

イチョウ文様をあしらったユーゲントシュティールの装飾品は、通常ドイツとフランスとは、形態が著しく異なる。原因はそれぞれの起源が異なる点にあるのかもしれない。ドイツ語圏では、文学に興味をいだく人びとの場合に限られるにせよ、ゲーテの詩《ギンゴ ビローバ》が根底にあった。フランスでは「ジャポニスム」以来、すでに説明したとおり、ゲーテの詩よりも、東アジアの様式素材がよく知られていた。

1900 年前後、初期ドイツ装飾品の例は、テーオドール・フォン・ゴーゼン Theodor von Gosen (1873-1943) の手になる、長さ 3.5 cm の (独特なリンクチェーンつき) 銀製ペンダント (合字で「TG」の署名と 800 パーミルの「I」) である。7 個の金張りの種子をつけたイチョウ葉 4 枚が、真下に付着する真珠とともに円形のペンダントを形づくっている (図解 33)。テーオドール・フォン・ゴーゼンは彫刻家であり、1900 年からミュンヘンでメダル製作家にもなったが、1905 年にハンス・ペルツィヒ Hans Poelzig を介してブレスラウ美術工芸単科大学から鑄金および金属加工担当の教授として <sup>しょうへい</sup> 招聘された。ミュンヘンに私蔵されている問題の装身具は、ゴーゼンがまだミュンヘンにいた時期の作品であろう。



図解 33 : たれ飾りのついた鎖、テーオドール・フォン・ゴーゼン、銀の金張り。

やや質素ながら、ひときわ顕著に様式化されている作品は、2 枚の葉柄が交差しているイチョウ葉と 2 個の垂下する種子を、三角形のなかに、やや浮き彫りにしてかたどる、小型の銀製ペンダントである (私有、図解 34)。



図解 34 : ペンダント、銀、ドイツ、ユーゲントシュティール。

2 cmサイズの環状型金製ブローチは、中央に、真珠1個の真上を軸方向に上昇しようとするの植物が、2組のまったく相異なる葉をつけておさまっている。上側の1組は、イチヨウ葉とみることができる（私有、図版 14 参照）。

銀色に酸化させたイチヨウ葉のうえに、「スカラベ」<sup>232</sup>ないし幻のコガネムシをのせている、3種類のユーゲントシュティール式ブローチは、正確にはつきとめられないが、そのうち2種類のブローチには、<sup>ほうろう</sup>珐瑯引きの背面甲皮、頭と甲皮のうえに置かれた褐色の脚、それに長く伸ばした触覚をもつ、緑色に輝くコガネムシがそれぞれ1匹とまっている。ここでは同一モチーフの異なる3種の変形が問題になっている（うち1個は私有、他の2個は美術品取引所にある、図版 14 参照）。

イチヨウ装身具の特殊な形態は、ボヘミアのをういたユーゲントシュティール時代の模様である。金製の優雅なイチヨウ葉と、ボヘミアの石榴石でできたギンナンと、3段の下げ飾りからなる、長さ41.5 cmの首飾りは、格別豪華に仕上がっている（図版 11 参照）。石榴石の小球をつなぐ2列の鎖は、両端が黄金のイチヨウ葉になっており、これら2枚のイチヨウ葉は、さらに2個の別なイチヨウ葉とギンナンのついた華麗なたれ飾りの止め具となって、そこにまたもや小さいイチヨウのたれ飾りが取り付けられている。

伝統的な石榴石の装身具は—ユーゲントシュティールでも—たいてい<sup>はながら</sup>花柄を使用しないので、上記装身具は植物要素、この場合には少なくとも合計12枚の金製イチヨウ葉をあしらっている、文字どおり貴重な首飾りの例である。1904年前後に完成し、プラハの銀の極印と親方印「VN」の表示がある（ヴァーツラフ・ニエメツ Václav Nêmec、私有）[注 51]。

ボヘミア地方ツルノフのツルノウ専門学校で、同様にイチヨウ葉をモチーフとする、ブローチが1900年頃とそれ以降に制作された。たとえば、現在プラハ工芸博物館に在職する、アルフレート・ベルクマン Alfred Bergmann の3.8 cm大のブローチで、輪の上部両側に水平に離れようとする深裂の金製イチヨウ葉が見え、それぞれに赤い石榴石が3個ずつ垂れさがっている。そのうえ、卵形の石榴石が全体像を補完しているのである（図版 12 参照）[注

<sup>232</sup> スカラベ(Scarabäus) : タマオシコガネをかたどった、古代エジプトの工芸品。この虫を意味する語が生成の意味にも通ずるので天地創造の神の、また球状にまるめた糞を転がす習性から太陽の神の象徴として神聖視され、印章や首飾りにつける護符として用いられた（広辞苑）。

52]。

ツルナウ専門学校のまた別な金ブローチは、ボヘミア<sup>ざくろいし</sup>石榴石と緑玉髓のついた2枚のイチョウ葉、さらには、真珠層<sup>233</sup>のたれ飾りが1個ついている、1900年以後の作品である。イチョウ葉の葉柄がまるい枠を形成し、枠内で葉が交差しながらのびている（ツルナウ専門学校所有、図版12参照）〔注53〕。

同様に、ルビーの<sup>ぎんなん</sup>銀杏をつけ、研磨した<sup>けむりすいしょう</sup>煙水晶でつくられたアンフォラ<sup>234</sup>形のペンダント2個も、ツルナウ専門学校の作品である。長さ7.3cmの（「TS」とプラハの金極印表示がある）ペンダントは、金製のイチョウ葉からなるアセンブリーに支えられている（ツルナウ専門学校所有）〔注54〕。ツルナウ専門学校の2番目の小瓶ペンダント（1912年、長さ7cm、煙水晶）は、ヨーゼフ・チェッテル Josef Cetttel とエーミール・ホルナ Emil Horna が担当したクラスの作品である。当ペンダントも、小瓶の止め具として、2枚の著しく様式化されたイチョウ葉ならびに真珠と<sup>るり</sup>瑠璃<sup>235</sup>をそなえている（「TS」およびプラハの金極印の表示、図版12参照）〔注55〕。

<sup>ざくろいし</sup>石榴石をちりばめた金の結婚指輪2個と<sup>すず</sup>錫の<sup>モデル</sup>原型—1900年頃にフランタ・アニュツ Franta Anyz によってデザインされた—は、ユーゲントシュティール時代の特性をあらわす作品とみなしてよい。2個の金製指輪（親方印「AR」とプラハの金極印）は、フランタ・アニュツの原型に基づき、1929年によくアントニン・リッター Antonin Ritter によって仕上げられた〔注56〕（プラハ工芸博物館、アニュツ収集品、図版12参照）。ちなみに、近年やっと金細工師たちがふたたびイチョウ葉をあしらった指輪を制作したが、赤い石榴石ではなく、ときおりブリリアントカットのダイヤモンドを用いている（下記のエーインガー&シュヴァルツ商会、ミュンヘンの例参照）。

フランタ・アニュツによって、1900年から1910年にかけて設計された装飾品の彩色をほどこした下絵が、いまも30点以上私蔵されており、それらのなかに様式化されたイチョウ葉とをつけた新たなブローチが2点ある〔注57〕。

イチョウ葉文様の装飾品としてウィーン製のものが有名になった。たとえば、G. A.シャイト Scheid の作品—オパールの種子をもつ、分枝した細かい葉脈のある葉（金をきせた銀）によって構成されている、独特のブローチ（図版14参照）〔注58〕。あるいは、有名なウ

<sup>233</sup> Perlmutter, Perlmutter : 真珠貝の殻の内層。

<sup>234</sup> Amphora : 首が細く両側に取っ手がついた古代のつぼ。

<sup>235</sup> 瑠璃 (Lapislazuli) : ナトリウム、アルミニウムの珪酸塩で塩素や硫黄も含む、複雑な組織の鉱物。藍色、半透明でガラス光沢がある。

ウィーンの宝石商会ロゼット&フィッシュマイスターが制作した、プラチナの葉柄とダイヤモンドを使ったさまざまな大きさのイチヨウ葉とギンナンとからなる、耳飾りつき首飾り。首飾りの中央に近づくにつれてますます大きくなるイチヨウ葉は、それぞれ1枚の葉が1個のギンナンとともに鎖の輪を形成し、輪のなかに次の輪が一さも軽やかに一かけられたように造形されている。首飾りは21枚の葉によって構成され—これらのイチヨウ葉は、対称的な配列で左右相互に対向し、中央部では4枚の葉が集まるとともに、4個のギンナンが垂下し、さらに、垂直な棒につけてあるまた別のギンナン3個と、新たな4枚の葉からなる、おそらくブローチとしても身につけることができる、たれ飾りをそなえている。このブリリアントカット形ダイヤモンド入り首飾りは、素材と造りの点で、これまでに有名になった、イチヨウ文様の装身具のなかで、もっとも高価な事例であろう（図解 35）。W.フレート Fred はこれについて次のように述べている。ダイヤモンドローズ形は、たいてい単純なデザインにしたがい、あるいはたびたびネオルネサンスやバロック様式の模作として、あらゆる時代に利用されてきたが、本来の芸術価値はない。ただ並外れて優秀なデザインだけが芸術的品質を保証するのである。その好例が、W.フレートによれば [注 59]、いま述べたロゼット&フィッシュマイスターの首飾り（耳飾りつき）であり、「高価な石が使用されている、装飾品の最良型の例として（挙げられる）。このような例では、デザインへ発展したモチーフである、元来の自然形態は、ドイツでイチヨウとして知られた、珍しい植物の種子と葉であった。繊細な状の葉柄は、いぶし金でつくられ、<sup>ひとま</sup>一重の葉柄はプラチナでできているが、接合の処理方法も賞賛には欠かせない。本例装身具の魅力と特徴は、とりわけ、ちりばめられている高価な石に帰すべきであるが、本品を価値ある財産となすものは、モチーフを仕上げた技能なのである」

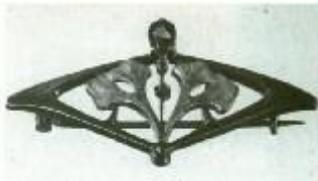


図解 35：ブリリアントカットのダイヤモンド入り首飾り、ウィーン 1900 年頃、ロゼット&フィッシュマイスター。

### プフォルツハイム製ユーゲントシュティールの装飾品

K. A. シトロエン Citroen（アムステルダム）収集のすばらしいユーゲントシュティールの装飾品とともに、工業服飾装飾品（銀または金張り製、彩色石または養殖真珠入り）も、ヘッセン州立博物館（ダルムシュタット）におさめられた。それらのなかには、1945 年以

後〔敗戦後〕にケルンのある宝石店のから見いだされた、プフォルツハイム<sup>236</sup>製のブローチ 11 点がふくまれている。同収集品にはイチヨウ葉文様の入ったブローチが 1 点ある。そこには 2 枚の葉がほぼ<sup>へんりょうけい</sup>偏菱形の枠組みに左右対称にはめ込まれ、きらびやかに枠をうずめている（図解 36）〔注 60〕。



図解 36 : ブローチ、金メッキ、プフォルツハイム、1900 年頃。

プフォルツハイムのフリードリヒ・シュパイデル社製イチヨウ装飾品—1900 年頃、金をきせた銀製品（高さ 4.5 cm）—は、まばゆいばかりの緑金色に<sup>ほうろう</sup>珫瑯をかけたイチヨウ葉が流麗な曲線を描きながら葉柄で交差し、レムニスケート<sup>237</sup>を形成するように細工してある。このレムニスケートは下部に 1 個の青い模造宝石をいだいている。もう 1 本別の短い、つり環から弧を描きつつ下降している、2 枚の小さいイチヨウ葉をつけた葉柄は、真珠の種子を 1 個ずつ結び、また、分枝した葉柄に付着している 3 個の真珠がすそ飾りになっている（図版 13 参照）〔注 61〕。同じ工房で 1900 年から 1902 年にかけて制作された、金、真珠、<sup>ほうろう</sup>珫瑯製のブローチも、緑色の珫瑯引きイチヨウ葉を飾りにしている。ギンナンに似せて 3 個の真珠が垂れさがる葉柄は、横向きの 8 の字を形づくってある（図版 13 参照）〔注 62〕。

F.ツェレナー社（プフォルツハイム）の飾り（4.9 cm 幅）—トルコ玉と真珠をちりばめた、金製、1900—1902 年頃—の場合には、頂部装飾が対称的な配列で金の枝に、2 枚の浅裂形の葉と、それぞれに 4 個の真珠をつけている。葉と「果実」が植物学上正確に再現されていないが、これはイチヨウを表現しているのであろう（図版 13 参照）〔注 63〕。

イチヨウ文様のある 1900 年前後のさらに別なプフォルツハイムの作品（おそらくレーヴィンガー&ビシンガー商会製）は、の種子 2 個（カボション）をつけた金メッキブローチ（900 パーミルの極印）である。葉柄が絡みあった 2 枚の葉は、両側へ扇状に広がっている。このブローチに近いのは、赤い種子が同じく 2 枚の装飾的な葉で縁どられている、ウィーン工芸博物館所蔵のベルトの留め金である（私有、図解 37）。

<sup>236</sup> Pforzheim : ドイツ南西部にあるバーデン＝ヴュルテンベルク州の工業都市。

<sup>237</sup> Lemniskate : アラビア数字の 8 を横にした形の曲線。



図解 37 : ベルトの留め金、プフォルツハイム？

### 1930 年から今日までの装飾品

30年代の作品である、イチヨウ葉をあしらった瓶のコルク栓ホルダーは、その後ブローチにつくりかえられた。同ブローチは、1個の種子を有する、茎の長いイチヨウ葉2枚で構成され、金細工師ルートヴィヒ Ludwig (1885年マクデブルク<sup>238</sup>生まれ)の「L」という親方印がきざまれている。ルートヴィヒは1927/8年にさしあたり生地フランツ・ヴィレック宝石商で働き、1930年頃エアフルト<sup>239</sup>で開業した。そのみごとな金細工は、植物文様に対する著しい偏重を展開させた、ユーゲントシュティール時代のあとも、特にテューリッゲン・ザクセン地方で、長らくイチヨウのモチーフが生きつづけていた事実を裏づける(図版14参照)。

エリーザベト・トレスコフ Elisabeth Treskow (1898年ボーフム<sup>240</sup>生まれ)の手になる戦時中—1943年頃—の金製ブローチが数点保存されているが、その1点—扇状葉にサファイアと1個の真珠からなる3個の「果実」(種子)をあしらったブローチ—は、イチヨウ葉に似ている。これに反して、他のブローチの葉は、むしろシナノキの葉に類似している[注64]。

70年代にヴェーラ・リヒター Vera Richter (1940年デュッセルドルフ生まれ、1970年以降ベルリンで金細工の女性マイスター)は、と黄金で厳密なブローチをつくりだした。象牙の半円板から、4枚の大柄で平たい、それも二枚一組にして前後に配した、中裂のイチヨウ葉をつけた枝がのび、大型葉の一对は直立し、小型葉の一对は横に傾いている。このような簡素に様式化された葉は、象牙でつくった台座の幾何学的な半円形によく調和する。本品は1979年にベルリン州の造形手工業賞をうけ、そのカラーコピーは当該受賞目録のとびらを飾った(図解38)[注65]。

---

<sup>238</sup> Magdeburg : ドイツ東部ザクセン＝アンハルト州のエルベ川に沿う商工業都市。

<sup>239</sup> Erfurt : ドイツ中部の工業都市でテューリッゲン州の州都。

<sup>240</sup> Bochum : ドイツのノルトライン＝ヴェストファーレン州にある工業都市。



図解 38 : ブローチ、金と象牙、ヴェーラ・リヒター作、ベルリン。

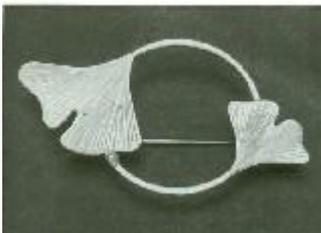
伝統豊かなエアバッハ（オーデンヴァルト）の象牙彫刻派の彫刻家たちによって、近年になってもイチョウ葉がペンダントやブローチとして仕上げられたが（図解 39）、それらは、ヴァイマルで今日まで生産されている、一般に人気のある金銀のイチョウ葉（図解 40 と 41）と似ている。



図解 39 : 象牙のペンダントとブローチ、オーデンヴァルト郡エアバッハ。



図解 40 : ペンダント、ヴァイマル、ほぼ 1990 年。



図解 41 : ブローチ、ヴァイマル、1990 年前後。

ミュンヘンのミヒャエル・テターマン Michael Töttermann（1924 年生まれ）は、ドクター・ヴィルマル・シュヴァーベ社が 1985 年にカールスルーエで開催した、「イチョウ」をテーマとする競技展示会に、すでにイチョウの首飾りを出品している。形状の異なる 8 枚

の銀を鍍金<sup>241</sup>したイチヨウ葉—うち2枚は深裂のイチヨウ葉—が、表側<sup>おもてがわ</sup>に透き間なく並んで、ギンナンに見立てた真珠とともに、首輪の装飾を形成している（銀925パーミルの表示）〔注66〕。

ミュンヘンで数年前に、カーリーン・キュンプフェル Karin Kümpfel もまた金細工工房ニキタ・ヘックナー Nikita Heckner においてイチヨウの装身具、なかんずく3枚の相互に重なりあって垂れているイチヨウ葉をあしらった、銀製の耳飾りを制作した。

イチヨウ葉をあしらう最新の創作装身具に、エーインガー&シュヴァルツ商会（ミュンヘン）、1992/3年作の高価な装身具一式がある。それは首飾り、腕輪および指輪からなる。首飾りは25枚の多様な—中央によるほど大きくなる—自然主義らしくかたどられた、純金のイチヨウ葉で構成されている。腕輪と指輪も、イチヨウ葉の飾りとブリリアントの縁飾りがある。豪華な—<sup>アンサンブル</sup>そろいはヴォルフ＝ペーター・シュヴァルツ Wolf-Peter Schwarz によってデザインされたものである（署名  極印）（図版10参照）〔注67〕。

80年代からディオール社製（パリ）の金メッキをした装身具用の鎖が評判になった。鎖は20個のがそれぞれに著しく様式化されていながらも、イチヨウ葉を思わせる、あざやかな波形模様の個別形態を示している。斜めに配列され、立体的に扇状に広がった葉のさまざまな要素に基づく光の効果によって、鎖がぐんとえるのである。

ホウライシダ (*Adiantum capillus-veneris*) は、イチヨウに似ているゆえ、同じく造形芸術のモチーフとして利用された。ホウライシダとイチヨウのモチーフは、3例（図解42—44）があるいは実証するように、相互に取り違えられることがある。イチヨウ葉は小枝 (Zweig) ないし (Kurztrieb) の材から発生するが、ホウライシダの「葉」は—植物学的に観察すれば—大きな複葉 (<sup>ふくよう</sup>zusammengesetztes Blatt)<sup>242</sup> を構成する小葉 (<sup>しょうよう</sup>Blättchen)<sup>243</sup> なのである。したがって、ホウライシダのモチーフはイチヨウのモチーフよりも可憐<sup>かれん</sup>である。ちなみに、ホウライシダには種子がない。

---

<sup>241</sup> 鍍金 : Etwas feuervergolden : あらかじめ10%の金を溶かしこんだ水銀(アマルガム)を塗布したのち、加熱によって水銀を蒸発させて表面に金の皮膜をつくる。鍍金(「めっき」または「と きん」)、metal plating にあたる。

<sup>242</sup> 葉身が二つ以上に分かれた葉(辞典)。

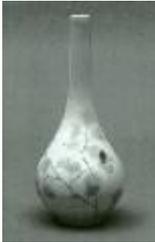
<sup>243</sup> 複葉を構成する部分(辞典)。



図解 42：ペンダント、金属、金メッキ、ユーгентシュティール。



図解 43：ランプの脚、E.ガレ、ナンシー、色被せガラス、アール・ヌーボー。



図解 44：花瓶、磁器、マイセン、ユーгентシュティール。

以上の概観によって、イチョウをモチーフとする装飾は、ユーгентシュティール時代にフランスとドイツで多種多様な形態に達したことがわかる。さまざまなフランスの例は、しばしばで優美な形式の枠内で、通常イチョウ葉の自然主義的な模写を大切にしている。これに対してドイツ、オーストリア、ボヘミア<sup>244</sup>では、いっそう多彩な変化とひとときわ強い様式化傾向がみられる。もっとも傑出した装身具は、宝石商会ロゼット&フィッシュマイスターのウィーン製イチョウ葉・首飾りである。

### 11-3 注釈と文献

- [1] Brief von Prof. Dr. Dietrich Seckel, Universität Heidelberg, an Prof. Dr. J. A. Schmoll gen. Eisenwerth, München vom 22. 11. 1993.
- [2] Japanisches Album mit Wappenmotiven. Hrsg. Nakao Genjiro. Yamamoto Verlag, Kyoto. 27. Aufl. 1952, Abb. S. 13.
- [3] J. A. Hillier (Hrsg.): Japanische Farbholzschnitte. Pawlak Verlag, Herrsching am Ammersee, o. J.

---

<sup>244</sup> チェコ西部の地方、ドイツ語ではベーメン(Böhmen)。

- [4] Die Landesfürsten (Daimyo) und die Ritter (Samurai) hatten das Recht und die Pflicht, zwei Schwerter zu führen, ein kurzes und ein langes. Auch der nächste Stand, die Bauern, behielten in der Tokugawa-Zeit (d. h. bis nach Mitte 19. Jahrhundert) ihr Schwert. Ihnen gleichgeachtet waren die Handwerker. So waren z. B. die Schwertschmiede hochgeachtete Künstler. Das Schmieden der Klinge galt als heilige Handlung, die im Feiertagsgewand vollzogen wurde. Die Vielzahl der Schwerter läßt die künstlerische Vielgestaltigkeit ihrer Zier ahnen. Siehe Werner Speiser: Die Kunst Ostasiens. Berlin 1956, S. 267 f., Kap. VIII „Das Zeitalter der Versenkung in Japan“ und Kap. X „Das Zeitalter der Durchformung in Japan“, S. 341 f.
- [5] Kat. Japanisches Ornament, Bd. 16 „Herbstpflanzen“. Staatliches Museum Tokyo 1988, Abb. S. 36.
- [6] Ausst. Kat. Japanische Keramik und Porzellan. Staatl. National-Museum Tokyo 1985, Abb. 273, S. 145.
- [7] Die diesbezüglichen Informationen verdanken wir Dr. Erasmus Hultzsch, Jena.
- [8] William Anderson: Japanese Wood Engravings, their History, Technique and Characteristics. London und New York 1895.
- [9] Sir Albert C. Seward: Plant Life through the Ages, a geological and botanical Retrospect. Cambridge, University Press 1931.
- [10] Ausst. Kat. Johannes Itten und die höhere Fachschule für textile Flächenkunst in Krefeld. Krefeld 1992, Nr. 53, Abb. VI. Druckstoff von Heinz Trökes, 1932–38, Motiv Ginkgoblatt, Spritzdruck (Schenkung Annelies Itten).
- [11] „textilkunst“, informationen für kreatives gestalten. Hannover, 14. Jg., 2, Juni 1986, Abb. „Druckcoupon mit Ginkgo-Blatt-Motiven“ von U. Dübel, Titelblatt-Abb.; ferner op.cit. Helene Blum-Spicker; Extravagante Mode-Textildrucke auf Seide von Ursula Dübel, S. 59f. m. Abb.– Katrin Paul; Ein Ginkgo-Blatt und die Folgen. Der Seidenmalerin und Textildesignerin Ursula Dübel aus Krefeld über die Schulter geschaut. In: Christ sein Heute. 99. Jg., Nr. 23, Witten, Juni 1992, S. 24f. m. Abb.
- [12] Kat. Kunst der Jahrhundertwende und der zwanziger Jahre. Sammlung Karl H. Brähan. Berlin, Bd. II, Teil I, 1976, S. 316 u. Kat. Nr. 445 m. Abb.
- [13] Nach B. Hakenjos u. E. Klinge — Ausst. Kat. Europäische Keramik des Jugendstils, Modern style, Art Nouveau. Hetjens Museum Düsseldorf 1974, Nr. 184 m. Abb. — gelang Wennerberg mit der Sgraffitotechnik, den naturalistisch gestalteten Dekoren auf schlichten, aber überzeugenden Gefäßformen, ein wesentlicher Beitrag zum schwedischen Jugendstil.

- [14] Ausst. Kat. Werke um 1900. Kunstgewerbemuseum Berlin. (Bearb. W. Scheffler), Berlin 1996, Kat. Nr. 92 m. Abb., Vase von Alf Wallander/Rörstrand 1897, mit grünem Frauenhaarfarn-Dekor in Unterglasurmalerei; Kat. Nr. 79 m. Abb. Vase in Flaschenform/Kgl. Kopenhagen 1897, mit Frauenhaarfarn in grau-grüner Unterglasurmalerei.
- [15] Weitere Namen für Ginkgo kamen in England und Deutschland auf, ohne sich durchsetzen zu können. So nannte J. F. Smith den Ginkgo „Salisburia adiantifolia“, nach dem Botaniker A. Salisbury und dem Farn „Adiantum“. Vgl. Hartwig Gäbler: Ginkgo biloba, Rückblick nach vorn. Dr. Willmar Schwabe, Karlsruhe 1988, S. 22.
- [16] Deutsche Kunst und Dekoration, Bd. 6, 1900, Abb. S. 102. — Dekorative Kunst III, Jg. 5, München Febr. 1900, Abb. S. 211. — Kat. Räume und Meisterwerke der Jugendstilsammlung. Museum für Kunst und Gewerbe Hamburg (Bearb. H. Spielmann), 1977, Kat. Nr. 32, Abb. S. 79. — Slg. Dr. P. Tauchner, München.
- [17] Als „Markenzeichen“ Dalpayrats galten seit 1892 seine unverwechselbaren charakteristischen geflammten Farben, dem „Rouge Dalpayrats“ mit grünen und blauen Flecken auf grauem Grund, wofür die „Hamburger Vase“ ein gutes Beispiel ist.
- [18] Walter Scheidig: Emile Gallé in Weimar. Keramos, Heft 59, Jan. 1973, S. 52f.
- [19] Thérèse Charpentier: Un Japonais à Nancy. In: Pays lorrain, T. I, Nancy 1979, S. 1–2.
- [20] T. Takasima u. Marouyama: Rapport sur la distribution naturelle des essences forestières au Japon. Tokyo 1878; u. La Lorraine Artiste 6, Nancy 1888 (8), S. 27.
- [21] Cat. spécial des plantes d'ornement exposées à l'Exposition Universelle de 1889 à Paris par le Jardin des Plantes attaché à l'Université de Tokio, Paris 1889.
- [22] E. Gallé war mit dem Sachgebiet des Pflanzenimports bestens vertraut, wie sein bereits 1880 verfaßter Katalog „des végétaux plus ou moins récemment introduits en Europe et présentés au Congrès Nationale Français de Géographie par la Société Centrale d'Horticulture de Nancy“, in: Bulletin Soc. Centrale d'Horticulture de Nancy 4, 1880 (4) S. 105–167 beweist.
- [23] Ein, um 1925 vom Gallé-Enkel, dem Naturwissenschaftler M. Jean Bourgogne Paris, gezeichneter Plan des Gartens in Nancy dokumentiert den alten Baumbestand.
- [24] Bei der 1986 im Deutschen Apotheken-Museum, Heidelberg, gezeigten Ausstellung „Die Mistel“ sowie im die Ausstellung begleitenden Buch von H. Becker/H. Schmollg. E., Wissenschaftliche Verlagsgesellschaft Stuttgart 1986, war auffällig,

daß neben den zahlreichen Exponaten mit Mistel-Dekoren aus der „Ecole de Nancy“ Emile Gallé fehlte, der doch zweifellos mit diesem Motiv allen vorangegangen sein mußte. Nach Ablauf der Ausstellung, als das Interesse für Mistel-Motive geweckt war, tauchten dann auch erstmals drei Frühwerke E. Gallés mit Mistel-Dekor auf (München, Privatbesitz), die vor allem der Manufaktur Daum/Nancy als Vorbilder für ihre zahlreichen Mistel-Dekore auf Vasen, Bechern, Schalen, Aschenbecher etc. gedient haben dürften.

- [25] Klaus Berger: Japonismus in der westlichen Malerei 1860–1920. München 1980, S. 111: Nach dem Triumph des dekorativen japanischen Kunsthandwerks auf der Weltausstellung Paris 1878 und der Krise des „direkten“ Japonismus 1889 im Absinken der Qualität, vermerkt Berger: „Nur eine Ausnahme muß zugegeben werden: Emile Gallé, der unermüdliche Erfinder moderner dekorativer Formen aus dem Geiste Japans!“
- [26] Gérard Klopp (Hrsg.): Nancy 1900. Rayonnement de l'art Nouveau. Thionville 1989, Abb. S. 139. — Francis Roussel: NANCY Architecture 1900, Inventaire général des monuments et des richesses artistiques de la France. Metz 1992, T. I, Abb. S. 53 oben.
- [27] Wilhelm Ahles: Der Ginkgo-Baum. In Westermanns Monatshefte, Bd. 46 (Hrsg. Friedr. Spielhagen), S. 206/207. Für das Zugänglichmachen des für seine Zeit sehr fundierten Aritkels bin ich Herrn Friedrich Werner, Weilheim, zu Dank verpflichtet.
- [28] Für den freundlichen Hinweis auf das bisher nicht publizierte „Maison Ginkgo biloba“ in Nancy und die fotografischen Aufnahmen danke ich Mme. Marie-France Jacops, conservateur du patrimoine Nancy, sehr herzlich.
- [29] Francis Roussel, op. cit. T. III. S. 40, Abb. S. 41 (Tür u. Detail mit Ginkgoranke).
- [30] Für Hinweis und fotografische Aufnahmen habe ich M.-F. Jacops, Nancy, und M.-Emanuelle Meyer, conservateur du Musée de la Princerie, Verdun, zu danken.
- [31] Francis Raussel, op. cit. T. III, S. 20–23, Abb. S. 22.
- [32] Kat. NANCY 1900. Jugendstil in Lothringen zwischen Historismus und Art Déco. (Keramik, Glas, Möbel, Gemälde, Plastik, Schmuck, Plakate) (Bearb. J. A. und Helga Schmoll gen. Eisenwerth). Münchner Stadtmuseum 1980/81, Nr. 510 m. Abb. — Helga Hilschenz-Mlynek u. Helmut Ricke: Glas. Historismus. Jugendstil. Art Déco. Bd. I, Frankreich. Die Slg. Hentrich im Kunstmuseum Düsseldorf. München 1985, Kat. Nr. 64 m. Abb.
- [33] Nach H. Hilschenz/Ricke, op. cit. ist die hier angebrachte Signatur identisch

- mit Kat. Nr. 61, d.h. die Vase m. blauem Ginkgodekor ist auf 1905 zu datieren.
- [34] Kat. NANCY 1900. op. cit. 1980/81, Kat. Nr. 595, Abb. S. 432.
- [35] Brigitte Klesse, Hans Mayr: Glas vom Jugendstil bis heute. Sammlung Gertrud und Dr. Karl Funke-Kaiser. Köln 1981, S. 72/73, Nr. 4 m. Abb.
- [36] Vgl. Ausst. Kat. Pariser Schmuck vom zweiten Kaiserreich zur Belle Epoque. Bayer. Nat. Museum München 1989/90 mit zahlreichen Beispielen der bekanntesten Pariser Schmuck-Designer.
- [37] Anzeiger des German. Nat. Mus. Nürnberg, 1968, S. 174, Abb. 15, S. 173. Ausst. Kat. Der Verschuß, eine künstlerische Aufgabe des Goldschmucks. Historische und zeitgenössische Beispiele. Hrsg. Bayer. Landesverband f. d. Gold- u. Silberschmiedehandwerk. Germ. Nat. Mus. Nürnberg 1981, Kat. Nr. 63, Abb. S. 21.
- [38] Ausst. Kat. Pariser Schmuck, op. cit., Kat. Nr. 78 m. Abb. (dort fälschlicherweise mit Brosche „Adlerköpfe“ bezeichnet).
- [39] Für freundliche Auskünfte und die fotografische Aufnahme bin ich Mme. Madeleine Huillier d'Istria, docteur ès lettres, Montauban, zu Dank verpflichtet.
- [40] Ausst. Kat. Friedrich Adler. Zwischen Jugendstil und Art Déco. Münchner Stadtmuseum und Forum für europäische Kunst und Kultur. Arnoldsche Verlagsanstalt Stuttgart 1994, Kap. Cl. Pese, S. 150 f., Kat. Nr. ME 54 m. Abb.
- [41] Ausst. Kat. Fr. Adler, op. cit. Kat. Nr. 53 m. Abb.
- [42] Kat. Werke um 1900. Kunstgewerbemuseum Berlin. (Bearb. W. Scheffler). Berlin 1966, Kat. Nr. 54 m. Abb.
- [43] Aukt. Kat. Schloß Ahlden. Aukt. 79/80, 20./21. Nov. 1992; Nr. 184 m. Abb.
- [44] Kat. Ginkgo biloba-Baum. Gesammelte Raritäten. 3. Aufl. Graz 1986, (Druck A. Bauer, Graz), Abb. S. 1, S. 18, S. 46, S. 20, S. 45, S. 42. Nicht alle hier abgebildeten Objekte sind „echte Ginkgo“-Dokumentationen: so handelt es sich b. d. Serviettenring S. 17 um Pinien mit Zapfen, Beim Messinguntersatz S. 23 um Blumendekor.
- [45] Zu Wiener Jugendstilschmuck vgl. u. a. Werner G. Schweiger, Wiener Werkstätte, Kunst und Handwerk 1903–1932. Wien 1982, S. 212–219, bes. S. 215 u. S. 219 (Anhänger mit Blättern).
- [46] Auf diese und weitere Arbeiten im Zusammenhang mit dem Thema „Ginkgo biloba“ machte mich seit Januar 1990 Christian Pixis/München–Berlin freundlicherweise aufmerksam, der u. a. ein Exemplar des Teeservices von W. Maas besitzt.
- [47] Albrecht Kurzwelly: Die Pflanze in ihrer dekorativen Verwertung. In: Kunstgewerbeblatt, N. F., Jg. XIV., Heft 7, Leipzig April 1903, Abb. D. 141.

- [48] Ausst. Kat. Stilkunst um 1900 in Deutschland. Berlin (Ost) 1972, Kat. Nr. 236 m. Abb.
- [49] Ausst. Kat. Burg Giebichenstein. Die Hallesche Kunstschule von den Anfängen bis zur Gegenwart. Staatliche Galerie Moritzburg, Halle, u. Badisches Landesmuseum Karlsruhe, 1993, S. 392 m. Abb.
- [50] Ausst. Kat. zum Künstlerwettbewerb Ginkgo biloba. Stadthalle Karlsruhe 1985. Dort 2 Varianten Kat. Nr. 76 und 77 mit Abb.
- [51] Ausst. Kat. Prager Jugendstil. Museum für Kunst und Kulturgeschichte der Stadt Dortmund. 1992; Kat. Nr. 130 m. Farbabb. auf d. Titelblatt.
- [52] Siehe Anm. 51, Kat. Nr. 147 m. Abb.
- [53] Siehe Anm. 51, Kat. Nr. 133 m. Abb.
- [54] Siehe Anm. 51, Kat. Nr. 145 m. Abb.
- [55] Siehe Anm. 51, Kat. Nr. 144 m. Abb.
- [56] Siehe Anm. 51, Kat. Nr. 108 m. Abb.
- [57] Siehe Anm. 51, Kat. Nr. 321 m. Abb.
- [58] Den freundlichen Hinweis auf diese Wiener Ginkgo-Brosche verdanke ich Herrn Dr. Graham Dry/München.
- [59] W. Fred: Modern Austrian Jewellery. In: Gabriel Mourey, Aymer Vallance u. a.: Art Nouveau Jewellery & Fans. New York 1973, S. 97f., bes. S. 100 u. Abb. S. 106.
- [60] Ausst. Kat. Jugendstil. Sammlung K. A. Citroen Amsterdam. Hessisches Lindesmuseum Darmstadt 1962, S. 48, Kat. Nr. 113 a-1, Abb. S. 49.
- [61] Fritz Falk: Europäischer Schmuck. Schmuckmuseum Pforzheim. Vom Historismus bis zum Jugendstil. Königsbach-Stein 1985, Kat. Nr. 164 m. Abb.
- [62] Siehe Anm. 61, Kat. Nr. 168 m. Abb.
- [63] Siehe Anm. 61, Kat. Nr. 172 m. Abb.
- [64] Ausst. Kat. Elisabeth Treskow. Goldschmiedekunst des 20. Jahrhunderts. Bearb. Rüdiger Joppien. Museum für angewandte Kunst, Köln, u. Deutsches Goldschmiedehaus, Hanau 1990, Kat. Nr. 108 m. Abb.
- [65] Ausst. Kat. Gestaltendes Handwerk. Preis des Landes Berlin für das Gestaltende Handwerk. Ausst. in Zusammenarbeit mit dem Kunstgewerbemuseum u. der Handwerkskammer Berlin in der Akademie der Künste, Berlin 1979, S. 30 m. Abb. u. Titelblatt.
- [66] Ausst. Kat. zum Künstlerwettbewerb Ginkgo biloba. Stadthalle Karlsruhe. Dr. Willmar Schwabe Karlsruhe 1985, S. 97 m. Abb.
- [67] Siehe Ehinger-Schwarz-Edition 1993. Herrn R. Leitner, Fa. Ehinger-Schwarz,

Schmuck-Ideen-Gestaltung, München, danken wir für die freundliche Erlaubnis zum Fotografieren.



## 12 モダニズムの文学と造形芸術にみるイチョウ

J. A. シュモル・ゲナント・アイゼンヴェルト

### 12-1 ゲーテ以後の文学証言

ゲーテがイチョウを彼の有名な詩で名づけるところによれば、「東方からきた高木」は、18世紀から19世紀初頭にかけてやっとヨーロッパに知れわたるようになった。いわゆる「原植物」<sup>245</sup>の理念的な原型を懸命に追いかけていた、自然科学者としてのゲーテが、明らかに「二分葉の」（「ビローバ」）象徴的と感じられた葉形だけを靈感として受けとめたいことを、わたしたちが少々不思議に思っても当然である。いずれにせよ、イチョウ葉の形態は、ゲーテにとって、詩才に恵まれたマリアンネ・フォン・ヴィレマーとの晩年のロマンスから深く身をもって体験することになる、「一にして二」、「二にして一」をあらわすであった〔注1〕。

当時まだ一部は実際に知られていなかった、問題の「原始高木」に関するさらに詳しい特徴は、ゲーテの興味をひかなかった。たとえば、扇状葉が針状葉脈や部分的な深い切れ込みによって一識者に一明らかにする、針葉樹との類縁関係とか、風変りな雌雄両性とか、奇妙な受精の仕方、極度に遅い成長発生、高木に水を蓄えさせて火に対する抵抗力をつちかう、特別な細胞組織などである。こうしたすべてのことを知り、植物学や、一般に生物学、特に初期発生理論への見解に生かすことができれば、きっとゲーテをとりこにしたことであろう。

ゲーテは「東方からきた高木」についてさほど正確な知識をもちあわせていなかったが、もしもゲーテの詩が存在しなければ、イチョウの木、とりわけ、ややハート形の扇状葉は、きっとドイツでこれほど注目されなかったであろう。ますますつよまるゲーテ崇拜は、詩人の作品や伝記から数限りない細目<sup>ディテール</sup>やモチーフをわたしたちに思い出させることになり、イチョウ葉をしおれさせずに、繰り返し光のなかに描きだしてみせた。たとえば、古典文献学者でミュンヘン大学教授として最後にバイエルン学士院院長までつとめた、オットー・クルージウス Otto Crusius (1857-1918) は、ゲーテの《ギンゴ ビローバ》にならって一編の詩を、おそらく2枚のイチョウ葉を十文字形にはりつけたゲーテ自筆の詩の清書（図版3参照）に触発されて、こうしたためている。

---

<sup>245</sup> Urpflanze : すべての植物の背後にあると想定された一つの典型的植物。J. W. von ゲーテ (1790) の提唱。彼は、現実の植物は原植物のさまざまな変態であるとみるべきことを主張した。原植物は原型の概念につながるものであり、なお、この場合の変態は今日の生物学でいう変態とは意味が異なり、個体発生的なものではなくむしろ系統発生的なものであり、あるいは全く理念的なものともみられる（辞典）。

二枚のイチョウ葉

夏に疲れたイチョウ葉が

ヤマキチョウ  
山黄蝶のごと輝きつつ

ベンチに舞い落ちて

ざわめき ささやく

「まだ覚えてる？」

「まだ思い出す？」—

すると<sup>ひとは</sup>一葉が歌う

複声で—「あの日々のこと

互いに求めあう二つの魂が

一心同体に行き着いたとき？

わたしをよく見て！

あなたの精神がわたしを創った

裂け目も境目もなく

柔らかく波線に縁どられて

心は <sup>ふたえ</sup>二重に溶けあった」

しかし別の複声が

わたしに耳打ちする

「おまえは思い出すか 灰色の

おまえたちを切り離れた運命の日々を？

わたしはあのような時代に育ったのだ

深く裂かれ もぎ離されて

半身が片割れから—しかし

わたしを見よ一分かちがたく

二つの心は結ばれたままだ」

夏に疲れたイチョウ葉が

ヤマキチョウ  
山黄蝶のごと輝きつつ

ベンチに舞い落ちて  
ざわめき ささやく  
「まだ覚えてる？」

クルージウスは、ミュンヘンに赴任するまえ、1898年から1903年までハイデルベルク大学の教授であった。ハイデルベルク城の庭園を訪れる多くの人びとと同じように、クルージウスもきっとゲーテのイチョウを思い描いたであろう。ところが、その木はたしかに1860年、マリアンネ・フォン・ヴィレマーが年老いて思い出の地を最後に訪ねたとき、まだ存在したらしいことは確認されるが、すでに1895年頃にはおそらくゲーテのイチョウはもはやそこにはなかった。事実がどうであれ、クルージウスは、ゲーテが好んですわったといわれる、庭園のベンチにも、その近くにあった1本のイチョウ樹にも敬意を表したのであろう。クルージウスの詩は、ゲーテのイチョウ葉体験にかかわる連想を集約し、倍加している。クルージウスは中国の民話『イチョウの精』も承知していたのであろうか？ 民話のなかでは、ひとりの少女がイチョウの木に変えられる一ダブネが月桂樹に変身するという古代ギリシャ神話の類話である〔注2〕。ともあれ、クルージウスは古典期の伝説や民話の研究者でもあった。

素材からみれば、ドイツの作家ハンス・フランク Hans Franck (1879-1964) のゲーテにまつわる小説『マリアンネ』(1953年作)が、ゲーテとマリアンネ・ヴィレマーの出会いやその詩的証言である《ギンゴ ビローバ》にいつそう緊密に結びついていることはいうまでもない。いわば伝記的・歴史的な著作のなかで、作者フランクは、ライヒスフライヘル・フォム・ウント・ツム・シュタイン Reichsfreiherr vom und zum Stein に、1815年、客として招いたゲーテのために真の「宇宙樹」—イチョウ—に関するメルヘンを話させる。フランクよる創作伝説は、ゲーテの思考をもう一度さらにつむぎだす話にほかならないが、東アジアの伝承によって一種の天地創造の物語へと変容しているかのように思われる(図解1参照)：—

「北欧のトネリコじゃなく、東方のイチョウこそ宇宙樹である。イチョウのうえで最初の人類は成長し、人びとは、イチョウ葉と同じように、下方でつながり、上方で分かっていた。男と女は、わたしがいま手のひらにのせているイチョウ葉のように、外見は一体をなすと同時に本質は対立している。…原初の状態が何によって変わったか、いかにしてヒトの二分割が実現したか、わたしにははっきりと伝えることができない。…宇宙樹を、その最後の根繊維までも震えだすほど、猛威をふるって揺さぶった、途方もない嵐<sup>あらし</sup>が原因だったにせよ、男女両性にもかかわらず合生するヒトがいたく、幸せの倦怠感<sup>けんたい</sup>あるいは強い体験願望に責めがあるにせよ、とにかく、その夜の終わりには、宇宙樹から振り落とされたか、それとも飛び降りたか、ヒトという生物はことごとく男と女となって地上にいた。男女の肉体の結びつきは断ち切れ、二人になった。いまや、たえず改めて互いに相手を

求めなければならない…人びとは、ますます住民であふれかえる地上で、愛憎にかりたてられ、和合と離別を繰り返し、男と女が、かつて一体であった事実または体裁を復元するために、のっぴきならないかのように、今日まで相手を追い求めきた。しかしイチョウ樹は、訴えるように裸の枝を天上にのぼしていった。すると、神は、宇宙樹にとって死にも等しかったであろう、その孤独をあわれみ、これまで樹上で暮らしていた、ヒトの代わりに、枝から葉を芽吹かせた。葉という葉は一わたしたちの眼前の木から何百回でも見られるように一人類の原始状態を永遠に具象化しているのである。それというのも、イチョウ葉は一下でつながり、上で分かれて一生き生きとした二一致（一心同体）<sup>246</sup>を、つまり、現世における神的な三位一体の似姿をかたどっているのだから」



図解1：ルイーゼ・ノイペルト Luise Neupert。1926年。シュメルン在住。

宇宙樹。フライヘル・フォム・ウント・ツム・シュタインによって語られる、イチョウにまつわるメルヘンの挿し絵。ハンス・フランク Hans Franck 編、マリアンネ、ゲーテ・小説（ダルムシュタット 1953年）に収録。

切り抜き絵一黒／白／暗灰色、64×45 cm。

上記の現代には、古代のイメージと、ゲーテがイチョウ葉から直感的に見抜いた、象徴的な意味内容が混じりあっている。

同時代のドイツの作家ペーター・ヘルトリング Peter Härtling（1933年ケムニッツ生まれ）は、自分が植えたイチョウ樹を次のような詩でたたえるとともに、その木に尋ねる：—

戸口のイチョウによせて

わたしは戸外へ  
出かけるたびに  
近寄って  
珍しい木を一  
わたしは一にして  
なのだという—

---

<sup>246</sup> Zweieinigkeit

わたしが数年前に  
植えた木を  
眺める  
イチョウを！  
（ザビーネL.の本で読んだ  
イチョウはニューヨークより長持ちすると  
あの大都会よりも）  
そしてわたしに尋ねる  
いやイチョウに尋ねる  
木よ  
なぜおまえは伸びないのか？  
木よ  
なぜ持ちこたえるのだ  
春を越えて？  
木よ  
なぜおまえはゆだねる  
夏を他のものたちに？  
木よ  
なぜ冬を越す  
おまえは  
わたしより楽に  
そしてわたしの  
詩を先取りする  
おまえはずるい  
木よ。

ゲーテ以後のドイツ詩人なら、「一にして二重であること」を考慮に入れないで、イチョウに呼びかけるはずがない。さらに、現代作家は、ダーウィン（1809－1882）の考え方にそって、イチョウ樹が「生きている化石」であることも知っている。また、ニューヨークのような巨大都市の排気ガスにさえ抵抗力をもっていることも一。そればかりか、遅い葉生え、秋の落葉、葉のない期間が長く、生長が遅いイチョウ特有のリズムを、多くの歳月と季節をかさねるうちに観察している。

イチョウ樹から葉が、特にみずみずしい緑の葉があらわれ、また秋に黄金色の葉が舞い落ちるたびに、イチョウの歴史全体が、太古もゲーテも抵抗力も、わたしたち現代人の心

に残らずよみがえってくる。たとえば、「イチョウ」という名前は、オーストリア詩人ペーター・ハントケ Peter Handke (1942 年生まれ) の散文作品で象徴的な断章にもなっている。ハントケの『うまくいった日についての試論』(1991/1994) では、記憶の断片を列挙するうちに、「『シネマ ラ パゴダ』の庭園にある岩塊上のイチョウ葉」についても言及される。それはハントケが住みついたフランスの第二の故郷からの「報告」であるが、極東の単語「イチョウ」と「パゴダ」<sup>247</sup>とが結びあい、フランスのまっただなかで中国・日本調の雰囲気をかもし断片的な幻想へと思わず知らずわれてゆくことになる。



図解 2: ブルク劇場ウィーン祝祭週間のポスター、1992 年、ペーター・ハントケ作『私たちがお互いになにも知らなかった時間』のために、長さ 140 cm。

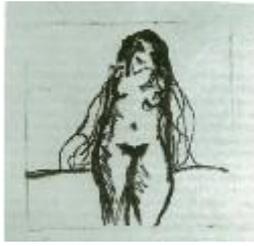
## 12-2 モダニズムの造形記録

モダニズム<sup>248</sup>におけるイチョウの造形美術に関する記録を話題にすれば、わたしたちはまずユーゲントシュティールで「イチョウ主義」の第一波があった事実を思い出さなければならない(寄稿論文「東アジアとヨーロッパの美術工芸にみるイチョウ」、本書 122 ページ以下参照)。その後、イチョウ・モチーフは両世界大戦の間にはめったに使われなかったが、「広島」のあとふたたび脚光をあびる。その理由は、原子爆弾炸裂<sup>さくれつ</sup>による惨事<sup>さいじ</sup>のあと、いくつかのイチョウ樹が破局後まっさきに焼け野原に新芽と緑の若葉を、すなわちほのかな希望の光と不滅らしい自然力の暗示を見せたことにある。ふたたびえはじめた、広島最初のイチョウ樹は、半ば焼け焦げた木であった(図版 7 参照)。この写真は全世界をかけめぐった。さながら戦場で両手両足に重傷を負った傷病兵のごとく、高木は清新な息吹<sup>いぶき</sup>に目ざめたのである。

---

<sup>247</sup> Pagode、(英) pagoda: ヨーロッパ人が東洋の仏塔などの高い塔状の宗教建造物を指示して呼んだ単語。原語は不明。

<sup>248</sup> Moderne: モダニズム、近代(あるいは現代)主義と訳される。伝統からの脱却を目指す傾向の総称。



図解3：ヨーアヒム・レーマン Joachim Lehmann。1935年。イエーナ近郊コスペダ在住。裸体画、1994年。モノタイプ、50×50 cm。



図解4：ヨーアヒム・レーマンの詩：

イチョウ葉—  
一つの扇は—  
誰に逆らい、誰のために  
冷却または防衛？

口にあてた  
イチョウ葉：  
言葉の扇—  
言葉の  
はがされた  
キスの解禁：—  
イチョウ葉

君のに  
落ちた  
イチョウ葉  
恥部の  
または開示：  
左へ向けた  
または右へ  
中央には：

## 善悪の知識

広島のみで奇跡のようなニュースは、中国と日本の神社仏閣の神木にまつわる、いにしへの伝説をあらためて記憶によみがえらせた。まもなくイチヨウ葉をモチーフとする美術工芸が、日本でもヨーロッパでも幅をきかせ、磁器の食器セット、銀やブロンズ製のナプキンリング、それにあらゆる種類の装身具なども、イチヨウ葉で飾られるようになる。さらに、薬品産業がイチヨウ葉エキスから医薬品を開発すると、イチヨウの木と葉の記録写真や様式化された描写を用いて新製品を宣伝する、コマーシャルまでもくわわった。これは装飾的な葉状モチーフの普及につながり、「イチヨウ葉」が、薬品広告を超えて、自然の恩恵に浴して生きのびられるチャンスをあらわす象徴になった。当時一流の<sup>アクション</sup>行為<sup>249</sup>と

<sup>コンセプト</sup>概念<sup>250</sup>の芸術家であった、ヨーゼフ・ボイス Joseph Beuys (1921 年クレーフェルト生まれ、1986 年没) が、多面的な神話の意味や自然の根原力の象徴として、イチヨウ葉にのめりこんでいったのも、なんら偶然ではない。クレーフェルト市にイチヨウの並木道が二か所ある事実も、創作上つねに伝記的要素が大きな比重をしめていた、ボイスのあるいは青少年期の印象を示唆するものとして指摘しておきたい。

イチヨウのをふたたびとりあげているごく新しい波は、あらかじめ下記のグループに分類することができる。

□ゲーテの詩とともに、そこに表現されている「一にして<sup>ふたえ</sup>二重」、つまり分離と合体をあらわすイチヨウ葉の象徴性との関連づけ—もっとも広い意味でも。

□小枝や種子をつけているか、あるいはつけていないイチヨウ葉の全般的な植物モチーフとしての使用—あるときは自然主義的に、あるときは自然に密着した挿し絵ふうに、またあるときにはむしろ装飾的に。

□広島の一ヨウ樹を基点にして、すなわち原子爆弾の<sup>さくれつ</sup>炸裂を記憶に呼び起こしながらイチヨウを警告として—たとえば「概念芸術」式造形として。

□イチヨウの極東の古里や葉と材の特殊構造を基点にしながら、地質学上の期間を参照指示して—つまりイチヨウを特別な自然力の象徴として。

このように分類される素因にしたがって、無邪気だが機知に富んだ、もともと色のあるエーバハルト・ディーチュ Eberhard Dietzsch のペン画にとりかかるとしよう (図解 5)。年

<sup>249</sup> 「行為」(Aktion) : 具体的には一回性の行為を中核とした表現形式を指している。1960年代に「ハプニング」を表現形態として活動した国際的芸術家集団「フルクサス」(Fluxus)に1963年に参加している。

<sup>250</sup> Konzeption : 後述の「概念芸術」参照。

老いた枢密顧問官ゲーテが、紺色のモーニングガウンを着て裸足<sup>はだし</sup>でひじ掛けいすにすわり、天井にうづくまっているハエか蚊を心配そうに眺めている。右手には、二またに分かれた独特の輪郭をもつ、巨大なイチヨウ葉をハエたたきがわりにもっている。ゲーテは、「二匹のハエを一度にたたきおとす」<sup>251</sup>ために、二匹目のハエを待っているのだろうか？ そうだとすれば、ゲーテの詩における「一にして<sup>ふたえ</sup>二重」のイチヨウ・「<sup>エロス</sup>恋の象徴」という陳腐な落ちになるであろう…



図解 5：エーバハルト・ディーチュ。1938 年。ゲーラ在住。1994 年制作。墨／ペン、グアッシュ、51.7×31.5 cm。

ゲルト・マッケンゼン Gerd Mackensen は、トランプの札<sup>カード</sup>「ジョーカー」—ポーカーでは幸運の札—をにし、彩色して補完した（図版 21 参照）。ただし、ハートの札に代えて、たしかにハート形も思い出させる、2 枚のイチヨウ葉がすみに—左上には暗緑色で大きい葉、右下にはいっそう暗い小型の葉が—配置されている。葉柄の先端はいずれも画面の内側を指している。札の主役は、男の顔だちをして横たわる女のである。胸まわりのみだらな輪郭はまたもやイチヨウ葉の形態を思わせる。『ドッペルコップフ<sup>252</sup>』と題するマッケンゼンの第二作は、ゲーテの「一のうちに二」（手短かにいえば）を連想させる。2 人のきゃしゃな人物—<sup>がいしょう</sup>街娼まがいの男—が、いわば 2 つの頭をもつシャム双生児にまとめられている。おまけに、横合いからさらに影のような身体が浮かびあがる。

「一のうちに二」は、ベーメンに生まれ、（旧）西ドイツで屈指の芸術勢力にのしあがった彫刻家兼画家兼デザイナー、オットー・ヘルベルト・ハイエク Otto Herbert Hajek の 4 色刷りシルクスクリーン印刷<sup>253</sup>でも座右の銘として描かれている（図版 24 参照）。ハイエ

<sup>251</sup> Zwei mit einer Klappe zu schlagen：ドイツで「一石二鳥」とか「一挙両得」という意味のとして使われる。

<sup>252</sup> Doppelkopf：字義どおりには「双頭」を意味するが、通常は 4 人または 5 人でおこなうドイツ独特のトランプ・ゲームを指す。

<sup>253</sup> シルクスクリーン印刷 (Serigraphie, silk screen printing)：型紙を利用する印刷法。印刷したい模

クは親しいカップルのために 1975 年に結婚式の広告として、薄い金色の枠でかこった銀に、女と男を象徴する色彩—青と赤—で型紙をつくった。新構成主義のブロック形式で、カップルがキスでもするかのように並置され、体の中心で互いに腕をのぼしてまじりあっている。この抽象的な形象描写は、ゲーテの象徴的な「一にして二重」にイチヨウを直接関連づけられない、一種の変形であるとみてよい。またロジェ・ボナール Roger Bonnard も、赤地を背景にして恋する男が影のようにしのびよる下方に、雲のような「白い裸体」を寝かせるとき、いわば衝動的な裸体描写の担う主要テーマを、鮮烈な色彩によって、「一のうちに二」なる象徴的な意味作用に結びつけているのである（図版 21 参照）。

自然のイチヨウ葉にごく近い絵もいくつかある。たとえばエルンスト・アウグスト・ツィンマーマン Ernst August Zimmermann の<sup>リトグラフ</sup>石版画『賢いイチヨウ』もその類である（図版 21 参照）。手すき紙に刷られた同作品（1993 年制作）は、布地に 1 枚のイチヨウ葉をうつしとった、自然そのものの<sup>なっせん</sup>捺染を組み入れている。葉のほのかな生彩が、素朴な現象のことも詩情を強調している。

ここで、カールスルーエのドクター・ヴィルマル・シュヴァーベ製薬会社が 1985 年に同地の市立ホールで開催した、展示会が思い出される。イチヨウを主題とする芸術表現のための展示会であった。同時代の芸術家たちが出品をうながされ、展示目録（バーデン芸術協会会長 A.フォヴィンケル Vowinkel 担当）には、種々さまざまな技法を用いた 112 点の作品、おもに絵画とグラフィックアートであるが、彫刻や概念芸術の実験的な作品も記録されている [注 3]。大多数の展示品は、明らかに<sup>ファンタジー</sup>想像を繰り返しかきたて刺激する、

イチヨウ葉の形態を基点にしていた。水彩画と油絵は、もちろん、きわめて自由奔放に自然形態を操作した作品が多く、変形の広がりも顕著であった。ただイチヨウ葉の主題をさまざまに扱う技法は今日まで変わっていない。その代表的なものをさらに数例あげておく。

イチヨウ樹とのいっふう変わった体験が、著名なオーストリアの彫刻家カール・プラントル Karl Prantl とその妻である女流画家とのあいだに生まれた娘、若いカタリーナ・プラントル Katharina Prantl の一連の水彩画を生むきっかけになった（図版 22 参照）。カタリーナは芸術家の<sup>いんとん</sup>隠遁講習会「<sup>めいそう</sup>瞑想 1987」に 7 年前に参加していた（彼女は当時 33 歳であった）。

その講習はスロヴェニア国境近くの東シュタイアーマルクのポッペンドルフ城で催された。カタリーナはこう書きとめている。「晩夏に魔法の城ポッペンドルフの庭に到着。長旅の

---

様を切り抜いて<sup>ステンシル</sup>型紙をつくり、枠に張った絹布に固定し、裏側からインキを押し出して紙、布、プラスチック、金属、ガラスなどに印刷する。現在では絹布に限らず合成繊維や金属線を使うことも多いため、単にスクリーン印刷(screen printing)、プロセス印刷(process printing)ともいう。

あと木陰の駐車場を探して、わたしは古い大木のまえにたどりつき、『中国産イチョウの木』とするされた表示板を見つけた…翌日、3週間滞在の予定で適当なアトリエ探し。ふたたび出発点にまいもどり、講習のあいだわたしのテーマであった、イチョウの木陰のテーブルで、ほとんどずっと絵を描いてすごした。グラーツにある修道院のフランシスコ会修道士たちのもとでつくられた作品の展示会がやってくる。友情がはぐくまれ、わたしたちは1年後にふたたびポッペンドルフ城で落ち合ったが、わたしのテーマ、あの古いイチョウ樹がなくなっていることに気づき、思わずぎょっとした」。カタリーナ・プラントルはさまざまな構造、イチョウ樹幹の樹皮やイチョウ葉の輪郭をとらえて、水彩画の構図をつくり、フィリピン紙に淡い秋らしい色彩で描いた一思い出のしるしを。

まったく異質の技法であるが、切紙絵の大家ハイデリス・ヤーコプ＝カレーネ Haidelis

Jacob-Kalähne は、グラフィックアート<sup>254</sup>の効果をねらって制作する。切りぬいた影<sup>シルエット</sup>絵の

古い伝統を復活させ、彼女は綿密に観察した草木や花や、動物や建築などの描写ばかりか、多層式のやや超現実的な幻想画にも転用した。イチョウのモチーフで、たとえば『イチョウ葉』（図解6）あるいは『高空飛行』（図解7）のように、ヤーコプ＝カレーネ女史は何度も大きな切紙絵を創作している。最初にあげた白黒の絵（図解6）では、イチョウ葉の葉柄が木の幹となり、樹冠はイチョウ葉そのものであり、葉のなかにさらに白ぬきのイチョウ葉が数枚みえる。ヤーコプ＝カレーネはこの切紙絵をアトリエの標章に選び、みずからこうしている。「好きなテーマは人間と自然です。植物学者として、わたしは植物を学術目的のためにスケッチし、芸術家として成長するうちに、うわべの自然現象を超えてその本質にわけいるようになりました。同時に、わたしはますます具象的なものから離れてゆき、構図にますます大きい形式上の比重を置き、構図の訴えようとする意味内容<sup>メッセージ</sup>をいっそう鮮明にしようと心がけました。自然の構成法則や内部構造に関するわたしの知識に基づいて、そこはかたない雰囲気をかもしだす、いくつかの段階<sup>レベル</sup>をもつ絵画空間で、いわば人間性と植物性とのあいだに橋をかけました。媒体の単純さからの安らぎが開けま

---

<sup>254</sup> Graphik : ①印刷術により図像を表現する視覚芸術の総称。版画・印刷本・写真・ポスターなど。

②線描画・書など、線を主とした芸術の総称（広辞苑）。



図解 6：ハイデリス・ヤーコプ＝カレーネ。1942 年。ジーケ＝ゲゼル在住。イチョウ葉。  
1988 年。切紙絵、34.5×45.5 cm。



図解 7：ハイデリス・ヤーコプ＝カレーネ。高空飛行。1994 年。切紙絵、70×50 cm。

ガブリエーレ・トリルハーゼ Gabriele Trillhase の皮革作品にもイチョウ・モチーフがあらわれる。1989 年以來、彼女は皮革装飾品あるいは皮革素材を用いた自由な創作品をつくっているが、このなかに独特な葉の輪郭をもつ『イチョウ 1』と題する絵がある (図解 8)。



図解 8：ガブリエーレ・トリルハーゼ。1950 年。ベルリン在住。イチョウ 1。皮革、80×80 cm。

種々の表現手段をとりまぜた混合技法のなかには、ギーゼラ・リヒター Gisela Richter のグアッシュ<sup>255</sup>で上塗りした独特な石版画<sup>リトグラフ</sup>も数えいられる。『ねえ、あんたなの?』と彼女がつけた画題によって、この上塗りされた印刷美術<sup>グラフィックアート</sup>は、ふたたびゲーテのイチョウがもつ象徴的意味に例の慣用句「一にして二重<sup>ふたえ</sup>」で軽くふれているのである (図版 21 参照)。

---

<sup>255</sup> グアッシュ (Gouache) とは、特に厚塗りや不透明な彩色に適した一種の水彩絵具、またはこれを用いて描いた絵のこと。不透明水彩ともいう。絵具の主成分は顔料、アラビアゴム、増粘剤、界面活性剤、湿

さらに強く装飾的なものへ導くのは、アルフレート・トラウゴット・メルシュテット Alfred Traugott Moerstedt のコラージュ<sup>256</sup>である。初秋に緑淡褐色に色づいている、2枚の本物のイチヨウ葉を主要モチーフとして、作者は水彩絵筆と墨で構成されたもののなかへ、細分化された製図の形式とか薄緑色のもぎ取られた申告用紙の断片とかともに組みこんでいる（図版 21 参照）。これに対して、水彩画とグアッシュ画との混合技法で 1992 年に制作された、メルシュテットの『道化連合』は、さしあたりわたしたちに謎<sup>なぞ</sup>をかけるが、ついには無秩序な愚行<sup>バグ</sup>を背景に、黒と赤二つの相反する複合体<sup>コンプレックス</sup>の結合であることが明らかになる。とそのとき、イチヨウ葉の象徴的意味が遠景から合図のように送られてくる。

ユタ・シュヴァルバッハ Jutta Schwalbach は、1985 年、先にふれたカールスルーエの「イチヨウ美術展覧会」に、『葉・イチヨウ・板』と名づける、彩色補筆した紙と木のコラージュを出品した（図版 20）。黄ばんだ背景にイチヨウ葉のくすんだレンガ色と黒やわずかな明色<sup>めいしよく</sup>の画筆構成によって生き生きと心に訴える、この絵は、葉の割れ目と左側の葉の半面にみられる黒い形状（後者は棺<sup>ひつぎ</sup>のような角材のまえでぼつきり折れた十字<sup>く</sup>の杭）を正當に解釈すれば、（原子爆弾による？）壊滅への注意を喚起する、ひとつの悲劇相を伝えている。

大型の装飾様式で、ホルスト・グレスカー Horst Gläsker は、1984 年から 1988 年にかけてフランクフルト・アム・マインの州立中央銀行受付ロビーに幅 10m、高さ 5m のモザイク（そのまえに水盤も横たわる）を創作した（図解 9）。施主は、金融機関の所在地フランクフルトを一市のもっとも偉大な子として一ゲートに関連づけることを望み、グレスカーにゲートの『ファウスト第二部』を指示した。そこに画家グレスカーは（かつてマックス・ベックマン Max Beckmann がファウストの挿し絵を描くうちに発見したように）制作のモットーを見いだした—「われわれが知る人生は、色とりどりの映像にすぎない」<sup>257</sup>。画家はさんぜんと輝く強大な太陽を中心の象徴として選ぶ（かつてエドヴァルド・ムンク Edvard Munch がオスロ大学の壁画でおこなったように）。生命を恵む太陽光線が画面全体にひろがる。光線のまえに、29 枚の様式化されたイチヨウ葉が、長い棒状の葉柄にリズムカルに分散配置されて浮かびあがる。葉面には 29 種類のさまざまなモチーフ—生命の形姿や象徴—が描かれている。たとえば宇宙的なもの、獣帯記号、地上的なもの、千変万化の神話的なもの、

---

潤剤。透明水彩と同様であるが、グアッシュの方がアラビアゴムの量が少なく、増粘剤が多い。

<sup>256</sup> コラージュ (Collage) : 「糊づけ」を意味するフランス語で、新聞、広告、写真などの切り張りを加えて画面を構成する、20 世紀にあらわれたシュールレアリスム美術の一技法、およびその作品（張りつけ絵）を指す。

<sup>257</sup> 『ファウスト』4727 行。

セイレーンたち<sup>258</sup>、グリフィンら<sup>259</sup>、神々、植物など。左手最上部には、イチヨウ葉そのものが内絵なしに、扇状構造をもつ原始高木葉としてあらわれる。モザイクについてわたしたちは、ゲーテのさらに別な言葉をモットーとしてかがげることができるかもしれない—「目がもし太陽のようでなければ、太陽を目にとめることはできないであろう」。またゲーテのこうしたファウスト的英知と結びつければ、これらの数多いイチヨウ葉は、ゲーテの詩《ギンゴ ビローバ》とともに、フランクフルトの詩人ゲーテの恋<sup>エロス</sup>の象徴も思い起こさせる [注4]。



図解9：ホルスト・グレスカー。1949年。デュッセルドルフ在住。  
フランクフルト・アム・マイン州立中央銀行の壁と泉のモザイク。1984—1988年。

ウルズラ・デュブル Ursula Dübel は、クレーフェルト専門単科大学で試験勉強のために（1986年頃）追い求めていた基本形をクレーフェルトのイチヨウ並木道で見つけると、そのまま装飾デザインの分野へすすんだ。すでに日本ではイチヨウ葉が着物の生地などのモチーフ<sup>〔文様の単位〕</sup>として江戸時代、すなわち18世紀から19世紀の初めにかけて使われていたが、デュブル女史はイチヨウ葉の図形をあしらった斬新<sup>ざんしん</sup>な布地の文様をレポートにスケッチしている（本書125ページ以下参照）。イチヨウ葉文様はすぐさま大きな共感を得て、種々の変形と異なった色彩による捺染<sup>なっせん</sup><sup>260</sup>で日の目をみた。デュブル女史は図柄によって、イチヨウ葉が原初の自然とその抵抗力の象徴として重んじられる、現代思潮の的を射たものと思われる。ドイツ〔元〕連邦大統領フォン・ヴァイツゼッカー von Weizsäcker の夫人さえもデュブル女史のイチヨウ・布地模様感激し、繊維産業は多彩な仕上げで女史のイチヨウ文様を生産したのである [注5]。

もともと女流繊維デザイナーをめざして教育をうけたドロテーア・リース＝ハイム Dorothea Reese-Heim は、「応用芸術」から自由芸術へ脱皮し、ほぼ10年来さまざまな素材

<sup>258</sup> Sirene：上半身は女で下半身は鳥の形をした、人を魅了する海の怪物。

<sup>259</sup> Greif：黄金の宝を守るとされる、体はライオンで頭と翼がワシの怪獣。

<sup>260</sup> 捺染 (Textildruck)：色糊で布地に文様を印刷する染色法。

を用いて自律的な芸術形象を創作している。その際に、イチョウ葉でつくった<sup>てす</sup>手漉きの紙も使い、イチョウ葉の基本形を用いて、おおむね中空状の空想体を成形している。それゆえにリース＝ハイムは空想体のことを「包被」あるいは「外被」とも名づけている（図版23参照）。これらの形成物は、器官のような構造からなり、ときには構成上針金でこしらえた構脚または骨格が入れられることもある。空想体はしばしば透明であり、要するに、半ば透けて見え、光線をとおすのである。1992年制作のインスタレーション<sup>261</sup>『包被の原理。外被—自然の鏡像』は、「イチョウ種の突然変異」つまりイチョウの葉系から、一俗な表現をすれば—相互に挿入されたイチョウ葉型の紙袋でできた、中空体のヤシ科植物に似たうろこ状の<sup>さび</sup>莖への変異とも名づけられるであろう。独特な表情をたたえる魅力的な室内装飾品である。作者自身は制作について下記のようにしている。

「変異—過程概念。包被、皮、、、袋は、自然の循環段階に—発芽、生育、生成および消滅のように—内在している。生長過程への帰属ならびに引き受けた防衛機能—包被の原理—は一連の連想を妨げない。

樹葉部分の基本形は、植物「ギンコ ビローバ」から導き出された。現生種のイチョウ、「ギンコ ビローバ」は、雌と雄、受動と能動、いわば古参樹木、生きている化石である。葉形は他と異なり、二分葉で、ほとんど並行してはしる、同じ厚さの葉脈をもつ。イチョウは友情のしるしとして東西文化の多様性と相互性を象徴している。

二分割はすでにヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテをとりこにした。ヴァイマルの自宅の庭に何本かイチョウがあり、詩人はマリアンネ・フォン・ヴィレマーに西東詩集の一編《ギンゴ ビローバ》を献呈した。中国人たちはイチョウ葉を本のページのあいだにはさみ、紙を食う害虫から守っていたのである」

イチョウの連想を活用したインスタレーションの分野で、ハイケ・シェーファーHeike Schaeferは、きわめて独創的な『イチョウ・ポート』を軽量の素材—鉄線、麻ひも、琥珀<sup>こはく</sup>ラッカー、シャンパーニュ産の白亜—を用いて制作した（図解10）。同じく鉄線と麻でこしらえた、『イチョウ葉の自然習作』が本作品に先行している。つまり、シェーファー女史

---

<sup>261</sup> インスタレーション installation(ものを据え付ける)という意味の言葉が美術に転用された用語。1960年代ころから、画廊や美術館といった屋内空間だけでなく野外の空間を変容させる試みとして複数の作品を配置したり、または可変的な配置構造をもつ作品の展示が行われるようになった。クリスト・アンド・ジャンヌ・クロードや川俣正の作品に典型的に見られるように、従来の彫刻の概念とは異なり、発表される作品は大部分が仮設的な性格をもっており、展示される空間に応じて変更が可能な場合が多い。また永続的な作品ではないため、記録としての写真の重要性が意味をもつようになった（マイペディア 97(C)株式会社日立デジタル平凡社）。

は習作からボートの腹案を展開させたのである。長さ 3.30m、幅 82 cmの『イチョウ・ボート』は、非常に軽く、おまけに「耐水性がよい」。イチョウ・ボートは「時代をわたる乗り物」として何億年にもおよぶイチョウの陸生期間を象徴し、同時に、「沈没からのがれて新たな岸边へこぎだすために」と作者が書きとめているように、事物によって具象的な方法で警告を発している。シェーファーはさらにこう言いそえる。「イチョウ葉はボートの先端を思い起こさせる。わたしは2枚の葉を対置させ、葉脈を力線のように相互につながりあわせた。鉄線の骨組みはイチョウ葉の構造原理にしたがっている。ボートの外板は麻ひもで織り、琥珀ワニスと白亜で水密にした」。ハイケ・シェーファーの並外れたインスタレーションは、ボートの船体に寄せる彼女の偏愛を知れば、いっそう理解しやすくなる。シェーファーはこれまでもいくつかのボートを、それも輸送用やスポーツ用の乗り物ではなく、象徴的なボートを設計していた。さらに、『イチョウ・ボート』は、18世紀と19世紀にオランダやイギリスの船がイチョウの苗木や種子を極東から海を越えて西洋へもちこんだ史実に照らしてみるかぎり、イチョウ樹のヨーロッパへの再移植を示す象徴にもしたいのであろう。



図解 10：ハイケ・シェーファー。1957年。ミュンヘン在住。

イチョウ・ボート。1933/4年。鉄線、麻ひも、琥珀ワニス、シャンパーニュ産の白亜。330×82×51 cm。

イチョウ葉—自然習作—。1993年。鉄線、麻。120×100 cm。

同様に意味深長なインスタレーションをシュテファニー・ウンルーStefanie Unruhが先ごろ完成させた(図版 23 参照)。彼女は解説する—「作品『1945年8月6日』の基点は、1945年8月6日、原子爆弾が広島に投下されたあと、壊滅した都市で木々のうち真っ先に発芽しはじめた、イチョウ樹の一件である。作品は126枚の金色に塗った紙製の葉からなる。63枚の葉には、原爆の投下とともに体験した、子供らの報告がタイプライターで打ち込まれている。報告は当日の子供らのふだんと変わらない朝の始まりを原爆投下の瞬間まで叙述している。残り63枚の葉には、伝統的な日本の家紋が鉛筆で描かれて、先の報告に対置される。子供らの報告はただ一定の視角から、それも一定の照明環境のもとでしか明瞭に見えず、判読することができない。この点で、まさに目に見えない原子光線、さらには、

米国と日本の政府が原爆の破壊能力について実際の規模を明らかにしない事実にも対応している。同じように、生き残った原爆犠牲者のなかに、職業上あるいはまた一身上の差別に対するもっともな恐れから、みずからの運命を口外しなかった人びとも多いのである。」

シュテファニー・ウンルーは 126 枚の金色の葉を、ほとんど一本の高木の葉のように（ただし、露骨にはイチョウ葉のように見せないで）壁に貼りつけた結果、すべての葉は、やや鱗<sup>うろこ</sup>状に重なりあって浮かびながら、びっしりと並べられ、たとえば樹冠のように、一体をなしている。強く訴えかける効果がある、はかない警告の記念碑である。

概念芸術<sup>262</sup>とインスタレーション・アートの芸術家として有名なベン・ヴァルギン Ben Wargin は、何度かイチョウ樹に取り組み、風変わりな故事来歴のある、「ミイラ化した」イチョウの樹冠が代表作になっている（図解 11）。1985 年ドイツ連邦造園展覧会のために、ヴァルギンはすでにかかなり高く伸びていたイチョウを植樹しようと思った。いざ行動の朝、イチョウ樹がばらばらに<sup>のごぎり</sup>鋸でひかれた、蛮行に気づく。ベン・ヴァルギンが別の場所に植えつけた、根の残片は、数年後にふたたび枝をだした。しかしベン・ヴァルギンは、首をはねられた樹冠を遺物と、いや、むしろ聖遺物と考え、ガーゼの包帯を巻きつけ、ミイ

---

<sup>262</sup> 「概念芸術」：コンセプチュアル・アート (Conceptual Art)、独 Konzeptkunst。「ネオ・ダダ、反芸術、ポップ・アートのあと、1960 年代半ばからほぼ 10 年間、欧米の美術で主流をなした傾向をいう。概念芸術の根本的な考え方は、従来のジャンル区分、制作概念を離れて、芸術を〈芸術という概念〉にまで極限化しようとするところにあった。そこから、何であれ〈芸術家がそれを芸術と呼べば、それが芸術である〉〈芸術とは芸術の定義である〉という考え方にまで至ることになる。実際の〈作品〉は、写真や映像、文字、音を素材に用いる。（世界大百科事典）

「1967 年、アメリカの作家ソル・ルウィット [1928-] が《概念芸術論》を発表し、ここから 1960 年代末以降の、作品の物質性よりも制作の契機となる観念に重きを置き、芸術の概念（コンセプト）そのものを問いかける傾向の美術を指すようになった。その起源はデュシャンにあるといわれ、文字などの非物質的な記号を使った表現、パフォーマンスやその記録として写真を用いる表現が含まれる。だが、コンセプトのない表現は存在しないという事実からすれば、少なからず奇妙な用語である。1970 年代に盛んになるこの傾向自体は美術の再定義の試みとして解釈できるが、個々の作家の活動内容は多岐にわたっており、形式的な定義はできない。言葉ともとの視覚の関係を問うジョゼフ・コッス、言葉への関心を示す英国と米国のアーティスト集団〈アート・アンド・ランゲージ〉、日常的な光景に唐突にストライプ・パターンを持ち込むダニエル・ビュレン、〈生きた彫刻〉という概念を打ち出し自らの身体を不動の彫刻的オブジェと化すパフォーマンスを行ったギルバート・アンド・ジョージ、自然や社会のシステムと芸術のシステムとの結びつきの間隙を突くハンス・ハーケ、年月日を白い文字で印しただけの日付絵画のシリーズを制作した河原温などが挙げられる。」（マイペディア 97(C)株式会社日立デジタル平凡社）

ラにして保存した（つまり、<sup>〔没<sup>263</sup>と香<sup>264</sup>を〕</sup>しみこませた包帯を巻いて保存した、エジプトのミイラ死体のように）。こうして、警告と理解できるミイラ化したイチョウの断片を、すなわち、崇拝といわないまでも、敬意がはらわれてしかるべき、イチョウのトルソーを作者は手に入れた。さらに、イチョウ樹がまれにしか自生しないという事実も、考慮に入れなければならない。イチョウは危険にさらされた種として、有害生物および環境有毒物質に対する高い抵抗性にもかかわらず、もっぱら栽培によって、つまりはヒトの手入れによってはじめて繁殖し保護される。こうした人類の使命をもベン・ヴァルギンのイチョウ・オブジェは想起させようとしている。



**図解 11**：ベン・ヴァルギン。1930 年。1955 年以来ベルリンに住む。ミイラ化したイチョウ。イチョウ・樹冠。ガーゼの包帯。高さ約 450 cm。

もしかすると女性の写真師(カメラマイスター)兼陶芸家モーニカ・フォン・ボッホ **Monika von Boch** が死後に残した、明色の焼いた陶土板にきざまれているイチョウ葉の<sup>こんせき</sup>痕跡も、同様に警告・想起と理解すべきなのかもしれない(図解 12)。ボッホは若いころから樹木に、なかんずくかつての大修道院、のちのヴィルロワ&ボッホ陶磁器工場のメトラッハ庭園にみられる、郷里のイチョウ樹に関心をいだき、もともと林学を研究したいと思っていた。ところが写真家となり、50 年代前衛派の「主観的写真術」の指導者オットー・シュタイナート **Otto Steinert** のもとで学び、工場専属写真家としても活動しながら、陶器に取り組んだ。主要な業績は実験的な写真シリーズにあった。視力が衰えると、高齢のモーニカ・フォン・ボッホは粘土のモデルを、あたかも手でふれて見る<sup>オブジェ</sup>対象のように形づくった。陶土の<sup>レリーフ</sup>浮彫に自然の複製を組み入れる手法を、彼女はよくカメラによる自然の複写にたとえている。<sup>そ</sup>

<sup>せい</sup>性粘土の遊離とたいていごく控えめな加工によって、美しく魅力にあふれ、いくつかは内

---

<sup>263</sup> <sup>もつやく</sup>没薬：ミルラともいう。アラビアやアフリカ産のカンラン科ミルラノキ属植物の樹皮から浸出するゴム質樹脂。古代エジプトではミイラ製造に利用された。

<sup>264</sup> <sup>にゅうこう</sup>乳香：紅海沿岸産のカンラン科植物の樹幹を傷つけて得られるゴム質を含んだ樹脂。没薬とともに古

容的にも意義のある、オブジェが創造された。たとえばイチョウ・板は、石化したもののなかにふくまれている化石の証言、したがって「太古の高木」の樹齢と人類によるイチョウの栽培保存の必要性を指示していると理解される [注 6]。



図解 12：モーニカ・フォン・ボッホ＝ガルハウ。1915－1992 年。イチョウ。1987 年頃。イチョウ葉を巻き込んだ陶土板、17×12 cm。

モーニカ・フォン・ボッホと同世代で、写真芸術家として一頭地を抜いていたのは、ペーター・ケートマン Peter Keetman である。ケートマンも同じく、グループ「フォトフォーム」やシュタイナートの「主観的写真術」のまわりにつどう、50/60 年代の前衛写真家のひとりに数えられる。ケートマンは画像鮮鋭にして精密な産業撮影も、実験的写真や構造写真も手がけて華々しい成功をおさめていたが、騒々しい広告界へは進出しなかった。

物静かな<sup>めいそう</sup>瞑想の芸術家にとどまりながら、彼は高い評価があたえられた（最近バイエル芸術院の通信会員となった）。ケートマンはここ数年間イチョウ葉を拾っては、多様な写真術を駆使して驚くべき感情移入と独自の創造力を発揮している（図解 14 と 15）。特別な照明操作によって、イチョウ葉の繊細な<sup>レリーフ</sup>浮彫をまるで石に彫りつけたように見せることにも成功する。葉脈の形態や構造がこうして写真撮影の芸術品になっている。類似のものはすでに「イチョウ」展で見られた（シュトゥットガルト美術大学のあるクラスの写真制作、ドクター・ヴィルマル・シュヴァーベ製薬会社主催、1987 年 [注 7]）—ただし、自然形態と抽象化する造形意思を白黒写真の媒体で濃密に表現している、ケートマンの写像とは、徹底性の点で比べものにならない。



---

代オリエント、エジプトの代表的香料で、<sup>くんこう</sup>薫香料として珍重された。

図解 13 : ゲルマ・ヴント。1928 年。フリーオルツハイム在住。イチョウ。1994 年。エッチング。



図解 14+15 : ペーター・ケートマン。1916 年。キームゼー湖畔ブライトブルン在住。イチョウ葉の白黒撮影。

第 642-22 番 葉（石化したよう）。

第 642-7 番 2 枚のイチョウ葉、十字に交差した葉柄、化石化（乾燥）したように見える。  
それぞれ 23×30.5 cm。

150 年以上の歴史をもつ写真術は、映画とかビデオ技術にとどまらず、特異な時流によって当世風の立体感をあたえるホログラフィー<sup>265</sup>にまでひろがった。有名な研究グループ「ヴィート・オラジェム Vito Ora $\square$ em とトーマス・リュック Thomas Lück」は、「ホログラフィー実験室オスナブリュック<sup>266</sup>」で、光波制御による「立体像」処理方式を用いて、視覚による情報伝達のために多数の新奇な作品を制作した。それらのなかに近ごろ、生長した形態の美を一言葉どおりの意味で一新たな光のなかへ移して立体的にみせる、イチョウ葉の三次元撮影も生まれている（図解 16）。

---

<sup>265</sup> ホログラフィー(Holographie) : 位相のそろったレーザー光を使い、レンズなしで 1 枚の写真で立体像を撮影・再現する方法。被写体にレーザー光をあて、その反射光に、光源からの投射光の一部を鏡によって重ね合わせ、直接写真乾板に感光させる。このとき自然光では不可能な干渉が起こり、写真には光の強弱だけでなく位相差も記録され、被写体とは似もつかない明暗の縞模様を生じる。この写真をホログラムという。ホログラムに直角にレーザー光をあて、光源と反対の側で、直射光が目に入らない位置から写真をのぞくと、干渉によって撮影時と同じ光束が再現されるので、被写体の虚像が三次元の立体として観察される。原理は 1947 年英国の D. ガボールが考案、1963 年米国ミシガン大学で成功。マイクロ波や音波を使ったホログラフィーも研究され、広範な用途が期待される。(マイペディア 97(C)株式会社日立デジタル平凡社)

<sup>266</sup> Osnabrück : ドイツ、ニーダーザクセン州の工業都市。



**図解 16:** ヴィート・オラジェム (1959 年生まれ) とトーマス・リュック (1964 年生まれ)、ホログラフィー実験室オスナブリュック。

ホログラムの人工的彩色が植物の自然形態に対立している、多色の透過ホログラムから再生されるインスタレーションを示す着想スケッチ。

絵の分野にとどまらず、芸術に役だつ現代技術は、音楽の領域にも拡大する。ペーター・フォーゲル Peter Vogel は物理学、芸術学、心理学を修めたあと、ほぼ 25 年前から電子音楽とさまざまなサイバネティクス<sup>267</sup>のモデルについて研究している。『調和と分裂』と題する「双方向型音響彫刻」によって、フォーゲルは、訪問者が影を投げる動きに反応して対応した音楽を送る、いわゆる情報伝達器具をつくった (図解 17)。同器具の聞き手であると同時に観察者は、音響に関する基本プログラミングの枠内で音声をみずから調整する、つまり、音声を強めたり弱めたりするばかりでなく、個別にリズムをつけることもできる。「イチョウ」はその際ただ「調和・分裂して響く」、要するに「一にして」という「ゲーテ・イチョウ・方程式」の合言葉にすぎない。



**図解 17:** ペーター・フォーゲル。1937 年。フライブルク・イム・ブライスガウ在住。

調和と分裂。1994 年。2 個の光電管と 2 個の拡声器をそなえた双方向型音響彫刻、14×91 cm。

2 個の光電管のスイッチが同時に切られると調和して響くが、電流の遮断が時間的にずれると分裂する、2 個の同一音響系列。

---

<sup>267</sup> Kybernetik: (「舵手」の意のギリシャ語に由来) 1947 年にアメリカの数学者 N. ウィーナーによって提唱された学問分野。厳密な定義はなく、一般に生物と機械における通信、制御、情報処理の問題を統一的に取り扱う総合科学とされている。ウィーナーは対象をある目的を達成するために構成されたシステムとしてとらえた。対象の挙動に注目する場合、対象がどのような物質で構成され、どのようなエネルギーを利用しているかは問題ではなく、情報をどのように伝送し、どのように処理し、その結果を用いてどのように制御しているかが重要である。したがって、対象が生物の場合でも機械の場合でも、通信、制御、情報処理という本質的な問題は同一であり、統一的な立場から研究すべきものであるとする。(世界大百科事典参照)。

以上の概観によって音楽分野にもふれたいま、ゲーテの詩《ギンゴ ビローバ》にモダンな曲がついている事実にも注意を喚起しておきたい。ヘルムート・チェッケル Helmut Tschöckell（以前ルードルシュタット、現在テューリンゲン州シュヴァルツヴァルト近くのウンターハイン在住）は、ヴィオラ＝ダモーレ<sup>268</sup>とギターによる伴奏で<sup>リードスコア</sup>歌曲総譜を作曲した。初演は1988年6月19日ライブツィヒの*でいわば室内楽の夕べ*といった雰囲気につつまれておこなわれ、日本の女性歌手桜井知子がソプラノ声部を歌った。1994年10月2日にはイエーナのロマンティカーハウスで再演された。

イチョウのテーマと芸術との対決は、かぎりなく形態が多様なように思われると同時に、将来もなお創造的な可能性をやどす斬新な切り口でひきつづき実り多いものと期待される。



**図解 18**：ウリ・ヴィティヒ＝グロースクルト Ulli Wittich-Großkurth。1932年。イエーナ在住。

メダル『温かい出会い』。1974年。ベットガー<sup>せつき</sup>焔器、マイセン磁器製造所。φ4 cm。文字：レナーテ・ジーモン Renate Simon、ヴァイマル。



**図解 19**：イチョウ葉とギンナンが描かれた絵はがき。1925年頃。

### 12-3 文献と注

[1] Günther Debon: Das Blatt von Osten — Gedanken zum Ginkgo-biloba-Gedicht. Euphorion 73, 227–236 (1979). — Ders.: Goethes Begegnung mit Heidelberg. 23 Studien und Miniaturen. Heidelberg 1992.

<sup>268</sup> viola d' amore : 17～18世紀にヨーロッパで用いられた擦弦楽器。形はビオラ・ダ・ガンバに似るが、フレットはない。6～7本の主弦の下に同数の共鳴弦があり、余韻のある音を出す。バイオリンのように肩に当てて奏する（広辞苑）。

- [2] Die Ginkgofee. Acht chinesische Volksmärchen aus der Provinz Schandung, übertragen und herausgegeben von Rainer Schwarz. Insel-Verlag, Leipzig 1978.
- [3] Ausst. Kat. zum Künstlerwettbewerb Ginkgo biloba. Stadthalle Karlsruhe 1985.
- [4] Vgl. Elke Trappschuh: „Am farbigen Abglanz haben wir das Leben“ — zu Horst Gläskers Mosaik in der Frankfurter Landeszentralbank. Handelsblatt-Magazin, Juni 1988.
- [5] Vgl. : „Design in Krefeld“, Entwürfe von Studierenden der Krefelder Fachhochschule 1987, S. 52f. — Katrin Paul: Ein Ginkgo-Blatt und die Folgen — Der Seidenmalerin und Textildesignerin Ursula Dübel aus Krefeld über die Schulter geschaut. In: Christ sein, Zeitschrift für Gemeinde und Familie, 99. Jg. Nr.23 v. 7. 6. 1992, S. 24–26.
- [6] J. A. Schmoll gen. Eisenwerth: Monika von Boch — Das fotografische Werk 1950 – 1980 . . . Dillingen/Saar 1982.
- [7] Ausst. Kat. Ginkgo. Stadthalle Karlsruhe 1987.



## ギンゴ ビローバ

東方からわたしの庭にゆだねられた  
このイチョウの葉は  
秘密の意味を味わわせ  
知者の心を高めもする。

みずからのなかで二またに分かれた  
この葉は一個の生き物なのか  
一心同体と認められるほど  
互いに選りすぐった二つのものなのか

このような謎を解こうとして  
正しい意味が見つかった—  
わが歌集にふれてきみは感じないか  
わたしは一にして二重<sup>ふたえ</sup>なのだ  
ゲーテ

「イチョウ」の魅惑：イチョウ樹は2億8千万歳の植物類最後の代表であり、みずから  
〔現生種ギンゴ  
ビローバを指す〕もひょっとすると6千万年前から存在しているかもしれない—「生きている化石」として。広島では原子爆弾に堪えて生き残り、わたしたちの町の公園でも大気汚染に堪えている。

愛しあう人たちの木：ゲーテ以来、イチョウ葉は愛の象徴である。この葉は「一にして二重<sup>ふたえ</sup>」  
という見かけの矛盾をもっとも完璧<sup>かんぺき</sup>に体現している。芸術家はその美しい魅力によって繰  
り返し靈感をうけてきた。

困ったときの助け船：イチョウ樹は日本で何世紀ものあいだ民衆の崇拝をうけている。  
今日ではモダンな植物療法がイチョウ葉エキスのさまざまな治癒力を現に利用しているの  
である。